上峰町文化財調査報告書　第22集

船石南遺跡Ⅱ

昭和60年度佐賀県農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002年３月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書　第22集

船石南遺跡Ⅱ

ふないしみなみ

昭和60年度佐賀県農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002年3月

上峰町教育委員会

序

従来、上峰町は「遺跡の宝庫」と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化に富んだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整に努めてまいりました。

上峰町では、町北部の大字堤地区を対象とした上峰北部県営農業基盤整備事業が昭和60年度より平成９年度まで実施されました。

この報告書は、県営農業基盤整備事業に伴い昭和60年度に実施した船石南遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。同遺跡の調査では、弥生時代の集落跡や甕棺墓をはじめとする墳墓100基以上をはじめ住居跡や土壙などが多数検出され、弥生時代の墓制や墳墓の変遷のみならず、当時の集落と墓域のあり方を考える上で貴重な資料となっております。

この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力をいただきました文化庁、佐賀県教育委員会文化課、佐賀県農林部をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成14年３月

上峰町教育委員会

教育長　八　谷　日出夫

例　言

1．本書は、昭和60年度の佐賀県営農業基盤整備事業に伴い、上峰町教育委員会が佐賀県農林部の委託事業により発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本谷に所在する船石南遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は、平成13年度佐賀県営農林業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査事業として、佐賀県農林部の委託事業により上峰町教育委員会が作成、刊行したものである。

3．発掘調査は、昭和60年度の佐賀県営農業基盤整備事業に伴う圃場基盤造成工事及び用排水路工事の施工により地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ部分について、便宜的に調査区域を設定し、上峰町教育委員会が実施した。

4．調査遺跡名・調査地区名・調査面積・調査期間は、以下のとおりである。

年　度	遺跡名	調査地区名	調査面積	調査期間
昭和60年度	船石南遺跡	3・4・5区	4,500㎡	昭和60年5月27日 ～ 昭和61年1月31日

5．現場での遺構実測作業は、新九州測量設計株式会社に委託した。

6．遺構の個別写真撮影は、鶴田浩二が行った。気球による遺跡の全景などの空中写真撮影については、有限会社空中写真企画に委託した。また、出土遺物の写真撮影は、原田大介（上峰町教育委員会教育課文化係）が行った。

7．調査後の出土遺物、記録類の整理作業は、上峰町文化財整理事務所にて実施した。

8．本書中の挿図・実測図作成、拓本、トレース作業などは、原田の指示により、製図作業員が行った。

9．本書の執筆・編集は、原田が行った。

10．本報告書に係る発掘調査で出土した全ての遺物、及び図面・写真・その他の記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　例

1．船石南遺跡の略号は、「FIM」であり、調査区略号は、それぞれ「FIM-3」、「FIM-4」、「FIM-5」とした。

2．遺構番号は、調査区の略号、遺構の種別を表す2文字のアルファベットに続き、現地で付した001、002などの3桁の番号（5区の遺構については800番代）を組み合わせて表記した。

SJ……甕棺墓　SP……土壙墓　SH……竪穴式住居址　SB……掘立柱建物址

SK……土壙　SX……性格不明遺構・その他

例）SH-500　500号竪穴式住居址

3．本文・挿図中の方位については、全て座標北を基準としている。

4．表中の数値に付した記号について、（　）は推定値を、※は部分値・残存部値をそれぞれ表している。

5．土器実測図の縮尺は、原則として1／4である。土器拓影など、同一図版内で縮尺が異なるものについては、遺物報告番号の後に続けてその縮尺を特記している。

6．遺物実測図の遺物報告番号は、一連の番号を付した。また、この番号は、遺物写真図版に付した遺物報告番号と一致する。

7．上峰村は、平成元年11月1日に町制を施行した。村・町の表記における煩雑さを考慮し、本書では「上峰町」に統一する。

調査組織

調査事務局	総　括	重松守男	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	中島みさ枝	〃	教育課長（～昭和60年10月31日）
		浜田小夜子	〃	教育課長（昭和60年11月１日～）
	経費執行	吉田　忠	〃	社会教育係長
		岡　義行	〃	社会教育係
		鶴田浩二	〃	社会教育係
調査組織	調査員	鶴田浩二	上峰町教育委員会	社会教育係
調査指導		佐賀県教育委員会	文化課	

発掘作業参加者

秋山　巌、秋山ユキエ、荒木　實、荒木三好、石橋テル、石丸　利、石丸ミチエ、大坪ケサグイ、大坪　一、大坪光代、岡　美代子、川原スミ子、川原ツヤ、川原正美、北島八重子、楠川カメ子、黒石明美、執行美津子、島　四郎、島　美保子、田中ミスエ、千々岩恵美子、堤　イシ、堤　千恵子、堤　ユキ、堤　禮子、鶴田　馨、鶴田キヨ子、鶴田サヨ子、鶴田ヒロ、鶴田八重子、鶴田義雄、城野ハルコ、八谷直子、檜枝　茂、真子久芳、馬原喜美子、三好スエ、森園テル子、矢動丸啓子、山口ミヨ子、山下孝子、矢動丸五十三、矢動丸敏子、米倉　保(発掘作業員)

整理作業参加者

秋山　巌、秋山キミ、秋山ユキエ、石橋テル、石橋トシエ、石丸富雄、江口照代、江越嘉蔵、江越　晋、緒方ツタエ、川原ミヨ、北島光男、後藤セツ子、執行一水、執行ミハル、高尾幸子、高島蔦枝、高島　昇、田中静雄、松尾トシエ、馬原喜美子、宮地礼子、矢動丸五十三、矢動丸喜三、山下高人、吉田英子、吉富哲二(発掘作業員)
岩下貴子、島　美保子、早田美智子、田尻祐子（製図作業員）

目　次

序

例言・凡例

調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1

1．船石南遺跡の位置 …… 1

2．歴史的環境 …… 1

Ⅱ．調査に至る経緯 …… 7

1．調査に至る経緯 …… 7

2．調査の経過 …… 7

Ⅲ．調　査 …… 9

1．調査区と調査の概要 …… 9

2．遺構 …… 9

(1)　甕棺墓 …… 9

(2)　土壙墓 …… 25

(3)　竪穴式住居址 …… 28

(4)　掘立柱建物址 …… 48

(5)　土壙 …… 50

(6)　祭祀遺構 …… 57

(7)　古墳 …… 58

3．遺物 …… 61

(1)　甕棺 …… 61

(2)　その他の遺構出土遺物 …… 61

Ⅳ．まとめ …… 81

挿図目次

Fig. 1　上峰町北部地形概略図（1/10,000）……2

2　船石南遺跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000）……4

3　船石南遺跡周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000）……10

4　船石南遺跡3・4・5区　遺構配置図（1/250）……11・12

5　甕棺墓実測図(1)　SJ-363・SJ-364・SJ-366・SP-386・SJ-367・SJ-384・SJ-385・SJ-388・SJ-393・SJ-395・SJ-398・SJ-400・SJ-401・SJ-402・SJ-404（1/50）……18

6　甕棺墓実測図(2)　SJ-405～SJ-407・SJ-409～SJ-411・SJ-413・SJ-417～SJ-419・SJ-432・SJ-440（1/50）……19

7　甕棺墓実測図(3)　SJ-442・SJ-451B・SJ-453・SJ-454・SJ-456～SJ-461・SP-462・SJ-463・SJ-464（1/50）……20

8　甕棺墓実測図(4)　SJ-467～SJ-476・SK-477・SJ-478・SJ-479（1/50）……21

9　甕棺墓実測図(5)　SJ-480～SJ-484・SJ-488・SJ-495・SJ-497～SJ-500（1/50）……22

10　甕棺墓実測図(6)　SJ-510～SJ-513・SJ-521・SJ-528・SJ-529・SJ-535・SP-536・SJ-597・SJ-675（1/50）……23

11　甕棺墓実測図(7)　SJ-679・SJ-687・SJ-694～SJ-698・SJ-700・SJ-703・SJ-705・SJ-709・SP-505・SK-532・SJ-846・SJ-847（1/50）……24

12　土壙墓実測図(1)　SP-399・SP-441・SP-443～SP-445・SP-455・SP-496・SP-503（1/50）……26

13　土壙墓実測図(2)　SP-504・SP-516・SP-534・SP-647・SP-690・SP-691・SP-699・SK-704（1/50）……27

14　竪穴式住居址実測図(1)　SH-383・SH-423～SH-425（1/80）……38

15　竪穴式住居址実測図(2)　SH-502・SH-593・SH-594・SH-603・SH-604（1/80）……39

16　竪穴式住居址実測図(3)　SH-605～SH-608（1/80）……40

17　竪穴式住居址実測図(4)　SH-609・SH-610・SH-612（1/80）……41

18　竪穴式住居址実測図(5)　SH-613～SH-617（1/80）……42

19　竪穴式住居址実測図(6)　SH-618・SH-659・SH-660・SH-663・SH-802・SH-807（1/80）……43

20　竪穴式住居址実測図(7)　SH-815・SH-818～SH-821（1/80）……44

21　竪穴式住居址実測図(8)　SH-822・SH-824・SH-825・SH-837・SH-839（1/80）……45

22　竪穴式住居址実測図(9)　SH-840・SH-851～SH-853（1/80）……46

23　竪穴式住居址実測図(10)　SH-854～SH-857・SH-864（1/80）……47

24　竪穴式住居址実測図(11)　SH-867・SH-871（1/80）……48

25　掘立柱建物址実測図(1)　SB-656・SB-662（1/80）……49

26　掘立柱建物址実測図(2)　SB-714・SB-869（1/80）……50

27　土壙実測図(1)　SK-397・SK-416・SK-427～SK-431・SK-446・SK-506・SK-507・SK-514・SK-515・SK-517・SK-518（1/60）……51

28　土壙実測図(2)　SK-520・SK-619・SK-621・SK-622・SK-642～SK-644・SK-661・SK-664・

SK-800・SK-801・SK-803（1/60）……52
29 土壙実測図(3) SK-806・SK-808～SK-812・SK-816・SK-817・SK-826・SK-827（1/60）……53
30 土壙実測図(4) SK-828～SK-830・SK-832～SK-836・SK-838・SK-849・SK-859・SK-861（1/60）……54
31 土壙実測図(5) SK-862・SK-863・SK-868・SK-870（1/60）……55
32 祭祀遺構実測図(1) SX-576・SX-611・SX-858（1/80）……59
33 祭祀遺構実測図(2) SX-866（1/80）・古墳実測図 ST-676（1/20）……60
34 甕棺口縁部実測図(1) SJ-384・SJ-395・SJ-405・SJ-409・SJ-417・SJ-419・SJ-442・SJ-456・SJ-457・SJ-459（1/4）……62
35 甕棺口縁部実測図(2) SJ-471・SJ-474・SJ-478・SJ-479・SJ-495・SJ-497～SJ-499・SJ-511・SJ-529（1/4）……63
36 甕棺口縁部実測図(3) SJ-535・SJ-676・SJ-703・SJ-706（1/4）……64
37 出土遺物実測図(1) （1/4）……70
38 出土遺物実測図(2) （1/4）……71
39 出土遺物実測図(3) （1/4）……72
40 出土遺物実測図(4) （1/4）……73
41 出土遺物実測図(5) （1/4）……74
42 出土遺物実測図(6) （1/4）……75
43 出土遺物実測図(7) （1/4）……76
44 出土遺物実測図(8) （1/4）……77
45 出土遺物実測図(9) （1/4）……78
46 出土遺物実測図(10) （1/4）……79
47 出土遺物実測図(11) （1/4）……80

表 目 次

Tab. 1 船石南遺跡3・4・5区出土甕棺組合せ分類集計表……14
2 船石南遺跡3・4・5区出土甕棺墓一覧表……15
3 船石南遺跡3・4・5区出土土壙墓一覧表……25
4 船石南遺跡3・4・5区出土竪穴式住居址一覧表……36
5 船石南遺跡3・4・5区出土掘立柱建物址一覧表……50
6 船石南遺跡3・4・5区出土土壙一覧表……55
7 船石南遺跡3・4・5区出土祭祀遺構一覧表……57
8 船石南遺跡3・4・5区出土鉄製品・土製品・石器一覧表……80
9 船石南遺跡3・4・5区甕棺墓・土壙墓出土位置一覧表……83
報告書抄録

図版目次

PL. 1　船石南遺跡全景
2　船石南遺跡３・４区全景（１区調査中）
3　船石南遺跡４区全景
4　船石南遺跡５区全景
5　甕棺墓(1)
6　甕棺墓(2)
7　甕棺墓(3)
8　甕棺墓(4)
9　甕棺墓(5)
10　甕棺墓(6)
11　甕棺墓(7)
12　甕棺墓(8)
13　甕棺墓(9)
14　甕棺墓(10)
15　甕棺墓(11)
16　甕棺墓(12)・土壙墓(1)
17　土壙墓(2)
18　土壙墓(3)
19　竪穴式住居址(1)
20　竪穴式住居址(2)
21　竪穴式住居址(3)
22　竪穴式住居址(4)
23　竪穴式住居址(5)
24　竪穴式住居址(6)
25　竪穴式住居址(7)
26　竪穴式住居址(8)
27　竪穴式住居址(9)
28　竪穴式住居址(10)
29　竪穴式住居址(11)
30　竪穴式住居址(12)・掘立柱建物址(1)
31　掘立柱建物址(2)
32　土壙(1)
33　土壙(2)
34　祭祀遺構・古墳
35　遺物(1)

36　遺物(2)

37　遺物(3)

38　遺物(4)

39　遺物(5)

40　遺物(6)

41　遺物(7)

42　遺物(8)

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．船石南遺跡の位置（Fig. 1、2）

船石南遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町と、南部は同郡三根町と、西部は神埼郡東脊振村・三田川町と境を接している。また、この神埼郡との境界は、旧来の三根郡との郡界を踏襲しており、現在も町のほぼ中央を東西に横断する国道34号線付近の三田川町と接する地区は郡境と呼称されている。

鳥栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部に背振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部には有明海へと続く沖積平野が展開するという、変化に富んだ地形が発達している。なかでも、山麓部から沖積平野部へ移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって浸食され北から南へ延びる舌状を呈した段丘を数多く形成している。そして、これらの段丘は古くから人々の生活の場として利用され、段丘上には数多くの遺跡が分布し、遺跡数、内容ともに県内でも有数の地域となっている。

そのようななか、南北に細長い町域をもつ上峰町においても、北部に山麓部、中央部に洪積世丘陵部、南部に沖積平野部と、この佐賀県東部の特徴的な地形が展開しており、とくに中央部に発達する洪積世丘陵地域を中心に遺跡の分布が知られ、古くから「遺跡の宝庫」と呼ばれてきた。

今回調査を行った船石南遺跡が所在する町北部の大字堤地区は、中央を北部の鎮西山山麓に源を発する切通川本流が小さく蛇行しながら南流し、これに幾条かの小河川が流入し支流を形成している。これら切通川本支流の浸食作用によって形成された谷底平野を境界として、堤地区には大小の南北に延びる舌状丘陵が発達している。

船石南遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本谷、四本杉に位置し、北方の脊振山系に源を発する切通川東岸に広がる「船石丘陵」と呼称する洪積世段丘の先端付近からさらに南東へ派生する支丘（標高14m～17m付近）上に位置する。遺跡は、弥生時代前期末葉から後期にかけて営まれた甕棺墓、土壙墓、石棺墓を主体とする墳墓遺跡で、地元では、以前この付近一帯を「千人塚」と呼称し、耕地には大甕の破片が散見され、耕作中に甕棺が開口することも少なくなかったといわれている。

本遺跡の周辺では、遺跡の東を南流する船石川の東方に位置する船石工業団地内においても工場の建設に伴い多数の甕棺墓が出土したといわれており、一帯に一大墓域を形成していたものと考えられる。一方、船石丘陵本体上に広がる船石遺跡は、佐賀平野東部の弥生時代の大規模集落遺跡として知られ、この地域における弥生時代の集落と墓域のあり方を考える上で、貴重な遺跡といえる。

2．歴史的環境（Fig. 2）

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述のとおり、山麓部から洪積世丘陵部におよぶ一帯が古くから人々の生活の舞台となっており、山麓部及び各段丘上には、現在、遺跡の存在が知られ、県内においてもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の分布密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵部のほとんどが、各時代の集落あるいは墓域として占有され、とりわけ、弥生時代以降の遺跡を縄文時代以前の遺跡と比較すると、量的にも、質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡[1]、約400基の甕棺墓が検出された中原町姫方遺跡[2]、埋納された12本の銅矛を出土した北茂安町検見谷遺跡[3]、甕棺墓から舶載鏡を出土した神埼郡東脊振村三津永田遺跡[4]、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構、遺物が検出された神埼郡の神埼・三田川・東脊振の２町１村にまたがる吉野ケ里遺跡[5]など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ弥生時代の「ク

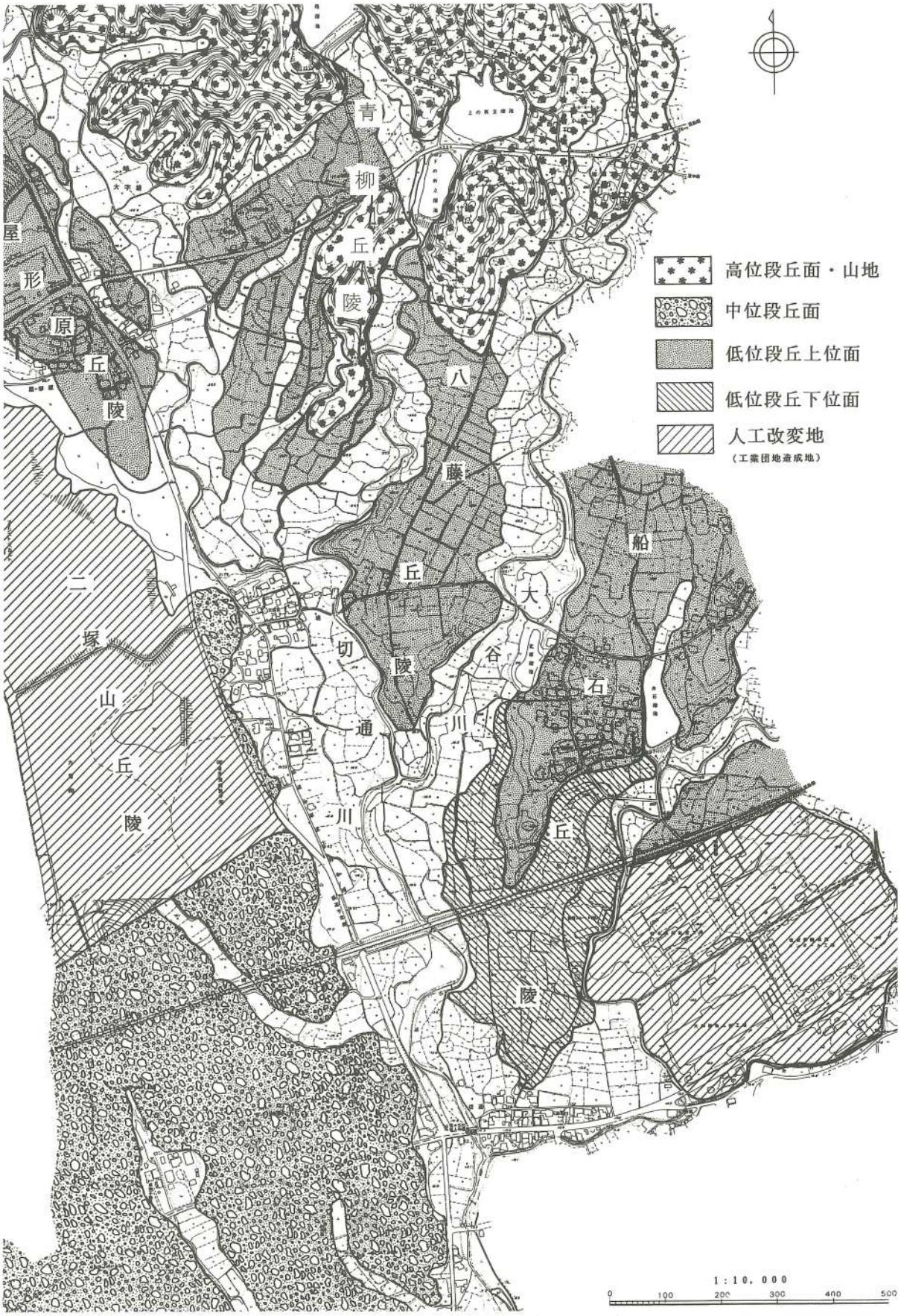


Fig. 1　上峰町北部地形概略図（1/10,000）

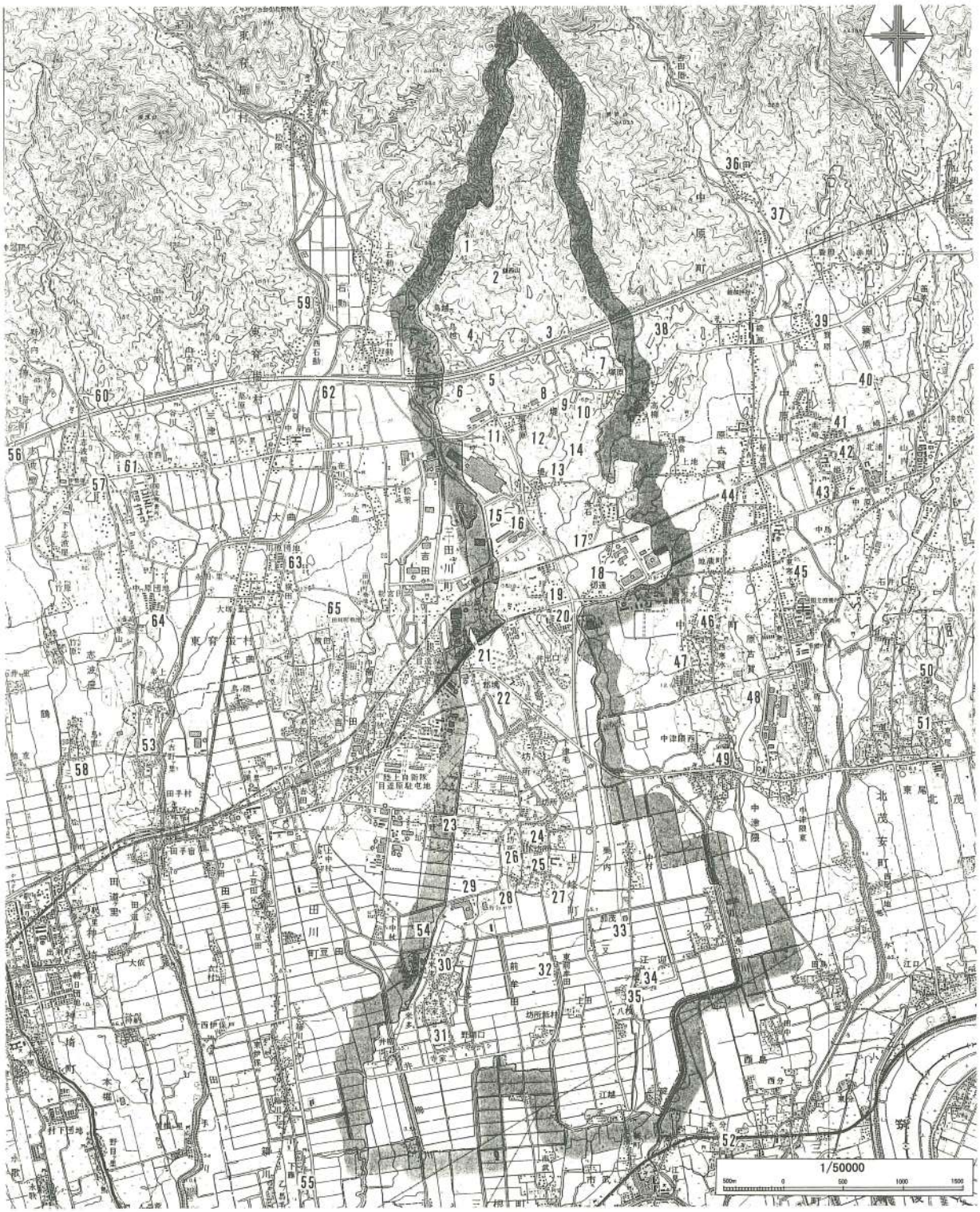
ニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。このようななか、南北約12km、東西約３kmと南北に細長い町域を持つ本町においても同様に、町の北部から中央部を占める洪積世段丘上に弥生時代を中心に各時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡についてみると、各段丘により層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土、採取にとどまっている。町内では、平成４年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃１点とこの時期のものと考えられる石器類が少量出土しているが、これが発掘調査における主な出土例である[6]。周辺地域では、神埼郡三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器の採取例が報告されている[7]。また、平成５年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡下層における阿蘇４火砕流跡と埋没林に係る調査において、先土器時代の年代示標となっている姶良-Tn火山灰（AT）の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査において遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最上部付近のアカホヤ含有層のやや下部にて検出されている[8]。

縄文時代になると、中原町香田遺跡[9]や東脊振村戦場ヶ谷遺跡[10]などが出現する。町内においても、これまでも町北部の丘陵部から土器や石器が、耕作や先覚者の遺跡の表面観察などによって断片的に出土、採取されていたが、この度の上峰北部農業基盤整備事業に伴う発掘調査の結果、平成元年度の船石遺跡11区[11]、平成２年度から５年度にわたり実施した八藤丘陵の調査[12]において、遺構や遺物がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数や規模、その内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから『魏志倭人伝』の「弥奴国」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に所属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町の南部や中央部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中世以降集落として発達し、早くから宅地化が進み、本格的な発掘調査の例に乏しく、わずかに再開発に伴い部分的に小規模の発掘調査が行われているに過ぎず、遺跡の詳細について把握できていないのが現状である。これに対して、町北部の大字堤地区では、近年の工業団地建設や農業基盤整備事業など大型開発に伴い広範囲かつ大規模な発掘調査が実施され、各遺跡から当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的な遺跡としては、甕棺墓から細形銅剣や貝釧を出土した切通遺跡[13]、神埼郡東脊振村、三田川町にまたがる、佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い甕棺墓、土壙墓など約300基が調査され、舶載鏡、小型仿製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡[14]、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡[15]、地区運動公園整備に伴う調査で５世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の甕棺墓が検出された船石遺跡[16]などが知られている。また、この度の県営農業基盤整備事業などに伴う調査においても、今回報告する船石南遺跡を含めて[17]、船石遺跡[18]、八藤遺跡[19]から住居址や甕棺墓などが多数検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中原町姫方原遺跡[20]、上峰町五本谷遺跡[21]などにおいて方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から佐賀郡大和町に至る山麓や丘陵部に大型の前方後円墳が出現する。鳥栖市剣塚古墳[22]、中原町姫方古墳[23]、上峰町西南部から神埼郡三田川町にまたがる目達原古墳群[24]、神埼郡神埼町伊勢塚古墳[25]、佐賀市銚子塚古墳[26]、佐賀郡大和町船塚古墳[27]など佐賀県東部の代表的な古墳が築かれるようになる。さらに後期になると、現在長崎自動車道や県道佐賀川久保－鳥栖線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが山麓部の尾根や谷あるいは丘陵を単位として後期古墳群を形成している。



上峰町
1 奥の院古墳群
2 鎮西山山城
3 二本柳古墳群
4 鎮西山南麓古墳群
5 堤三本松遺跡
6 屋形原古墳群
7 谷渡古墳群
8 堤三本柳遺跡
9 青柳古墳群
10 新立古墳群
11 屋形原遺跡
12 堤六本谷遺跡
13 堤土塁跡
14 八藤遺跡
15 二塚山遺跡
16 五本谷遺跡
17 船石遺跡
18 **船石南遺跡**
19 切通遺跡
20 一本谷遺跡
21 坊所一本谷遺跡
22 上のびゅう塚古墳
23 目達原古墳群
24 坊所城跡
25 樫寺遺跡
26 杉寺遺跡
27 坊所二本松遺跡
28 坊所三本松遺跡
29 塔の塚廃寺跡
30 上米多貝塚
31 米多城跡
32 前牟田城跡
33 加茂環濠集落跡
34 江迎城跡
35 一ノ橋環濠集落跡
中原町
36 山田蔵骨器出土地
37 山田古墳群
38 大塚古墳
39 八幡社遺跡
40 簑原遺跡
41 姫方遺跡
42 姫方前方後円墳
43 姫方原遺跡
44 ドンドン落遺跡
45 町南遺跡
46 天神遺跡
47 西寒水遺跡
北茂安町
48 宝満谷遺跡
49 宝満宮前方後円墳
50 大塚古墳
51 東尾銅剣出土遺跡
三根町
52 本分貝塚
三田川町
53 吉野ヶ里丘陵遺跡群
54 下中杖遺跡
55 下藤貝塚
神埼町
56 志波屋六本松遺跡
57 伊勢塚前方後円墳
58 馬郡遺跡
東脊振村
59 西石動古墳群
60 戦場ヶ谷遺跡
61 三津永田遺跡
62 西石動遺跡
63 松原遺跡
64 辛上廃寺跡
65 横田遺跡

Fig. 2　船石南遺跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000）

後の『肥前風土記』にみえる三根郡綾部（あやべ）・米多（めた）郷に属する当時の上峰町一帯は、『古事記』、『国造本紀』などの記事によれば応神天皇の曾孫にあたる「都紀女加（つきめか）」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南西部の坊所・米多地区から神埼郡三田川町東部の目達原（めたばる）一帯にあったと推定されている。町内の主要な古墳としては、都紀女加を始祖とする米多国造一族の墳墓として、５世紀代後半に形成されたと考えられる上のびゅう塚（現在、陵墓参考地「都紀女加王墓」宮内庁管轄）はじめ無名塚、大塚、稲荷塚などの前方後円墳６基ほか古稲荷塚など円墳数基からなる目達原古墳群[28]が知られていたが、戦前の陸軍飛行場建設の際に、唯一上のびゅう塚を残し他の古墳は簡単な発掘調査後破壊されている。また町の北部の古墳としては、同じく５世紀代の古墳で、蛇行状鉄剣、蛇行状鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳１～３号墳[29]が知られている。古墳時代後期の古墳としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部から高位段丘上にかけて、小円墳を主体とする谷渡、青柳、新立、奥の院、鎮西山南麓、屋形原などの古墳群が点在している。

一方、この時期の集落は、神埼郡三田川町下中杖遺跡[30]、同郡東脊振村下石動遺跡[31]などが知られているが、弥生時代集落に比べ、遺跡そのものの数も少なく、調査例も少なくいまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の坊所・米多地区周辺における本格的な発掘調査の例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中杖遺跡、東脊振村辛上廃寺跡[32]、霊仙寺跡[33]などが著名であるが、この時期の遺跡についてもまとまった調査例が少なく、実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。また、大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土塁跡[34]や塔の塚廃寺跡[35]などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間の谷底平野を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設＝「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、灌漑用水確保のための溜池の堤防であるとする説など議論がなされてきたが、平成２年度からの土塁の東方に接する八藤丘陵の調査において、土塁東端から一直線に八藤丘陵を東方へ横断する道路側溝状の遺構が検出され[36]、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されることとなった。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚廃寺跡は、百済系単弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。また、町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査や近年の大規模小売店舗建設に先立つ坊所一本谷遺跡[37]の調査などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、町南部の平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られていた[38]。しかし、昭和40年代後半からの圃場整備事業によって、これら平野部の遺構は、原状がほとんど失われてしまった。そのようななかで、町の親水公園として整備された江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が建物跡ともに出土し、また、坊所城跡では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している[39]。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶにふさわしい地域といえる。

註

1）藤瀬禎博・石橋新次　『柚比遺跡群範囲確認調査第３年次概要報告書』　鳥栖市文化財調査報告書第30集　鳥栖市教育委員会　1980
2）木下　巧・天本洋一　『姫方遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第30集　佐賀県教育委員会　1974
3）七田忠昭　『検見谷遺跡』　北茂安町文化財調査報告書第２集　北茂安町教育委員会　1986
4）金関丈夫・坪井清足・金　関恕　「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』　日本考古学協会　1961
5）七田忠昭他　『吉野ヶ里』　佐賀県文化財調査報告書第113集　佐賀県教育委員会　1992
6）原田大介　『八藤遺跡Ⅲ』　上峰町文化財調査報告書第16集　上峰町教育委員会　1999
7）七田忠志　「原始」『上峰村史』　上峰村　1979
8）下山正一・西田民雄　「Ⅱ．佐賀県上峰町周辺の地形と地質」『佐賀平野の阿蘇４火砕流と埋没林』　上峰町文化財調査報告書第11集　上峰町教育委員会　1994
9）高瀬哲郎・堤　安信・久保伸洋　「香田遺跡」『香田遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書２　佐賀県文化財調査報告書第57集　佐賀県教育委員会　1981
10）七田忠志　「佐賀県戦場ケ谷遺跡」『史前学雑誌』　６－２・４　1934
11）原田大介　『船石遺跡Ⅴ』　上峰町文化財調査報告書第12集　上峰町教育委員会　1995
12）原田大介　『八藤遺跡Ⅱ・堤土塁跡Ⅱ』　上峰町文化財調査報告書第14集　上峰町教育委員会　1998
前出(6)
13）金関丈夫・金　関恕・原口正三　「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』　日本考古学協会　1961
14）高島忠平・七田忠昭他　「二塚山遺跡」『二塚山』　佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979
15）七田忠昭　『一本谷遺跡』　上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
16）七田忠昭　『船石遺跡』　上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
17）平成11年度県営かんがい排水事業に伴い上峰村教育委員会調査、整理中
18）鶴田浩二・原田大介　『船石遺跡Ⅱ図録編』　上峰村文化財調査報告書第６集　上峰村教育委員会　1988
鶴田浩二・原田大介　『船石遺跡Ⅱ本文編』　上峰村文化財調査報告書第７集　上峰村教育委員会　1989
19）原田大介　『八藤遺跡Ⅰ』　上峰町文化財調査報告書第13集　上峰町教育委員会　1997
20）木下巧他　『姫方原遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第33集　佐賀県教育委員会　1976
21）木下　巧・七田忠昭　「五本谷遺跡」『二塚山』　佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979
22）石橋新次　『剣塚前方後円墳』　鳥栖市文化財調査報告書第22集　鳥栖市教育委員会　1984
23）前出(2)
24）松尾禎作　「目達原古墳群調査報告」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』　第９輯　佐賀県教育委員会　1950
25）木下之治　「古代国家の形成」『佐賀県史』　佐賀県　1968
26）木下之治編　『銚子塚』　佐賀市教育委員会　1976
27）松尾禎作　『佐賀県考古大観』　祐徳博物館　1959
28）前出(24)
29）前出(16)
30）七田忠昭・高山久美子・西田和己　『下中杖遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第54集　佐賀県教育委員会　1980
31）高瀬哲郎他　「下石動遺跡」『下石動遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6)　佐賀県文化財調査報告書第86集　佐賀県教育委員会　1987
32）松尾禎作　「東脊振村辛上廃寺跡の調査」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』　第５輯　佐賀県　1936
33）田平徳栄他　『雲仙寺跡』　東脊振村文化財調査報告書第４集　東脊振村教育委員会　1980
34）高島忠平・柾　一義　『堤土塁跡』　上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1978
35）松尾禎作　「塔の塚廃寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』　第７輯　佐賀県　1940
36）前出(28)
原田大介　『八藤遺跡Ⅲ』　上峰町文化財調査報告書第16集　上峰町教育委員会　1999
37）平成５、６年度、上峰町教育委員会調査、整理中
38）米倉二郎　「中世」『上峰村史』　上峰村　1979
39）原田大介　『坊所城跡』　上峰町文化財調査報告書第10集　上峰町教育委員会　1992

Ⅱ．調査に至る経緯

1．調査に至る経緯

上峰町は、昭和30年代までは純農村として、近世以来の水田耕作を主とした農業経営が連綿として行われてきた。しかし、戦後の激変する社会・産業の構造は、労働力の都市部への流出などを招き、旧来の農業経営による農家経済を圧迫する事態となった。この農家経済の行き詰まり打開のためには、近代的な大型圃場と農地の集団化を併せ行い、高度の農業生産技術と大型機械の一貫作業体系の導入により、労働生産性の向上と農業経営の合理化による農家所得の増大を図る必要があった。佐賀県では、昭和38年度より県営農業基盤整備事業の計画が策定され、昭和41年度より事業が開始された。上峰町においても、昭和42年度にモデル事業として町南部の碇地区を対象に事業が実施され、昭和46年度以後国道34号線以南の町南部の圃場を対象に事業が実施された。

一方、国道34号線以北の大字堤地区の耕地は、洪積世丘陵と切通川本支流の浸食谷底平野からなっており、地区の１戸当たりの平均耕地面積は約0.6haと県平均を下回り、用水には河川、溜池があてられていたが、いずれも用水確保が不十分であり、慢性的な用水不足を来していた。また、圃場は不整形で散在し、道路は狭く未整備で機械導入も困難で圃場条件は極めて悪かった。このため、昭和58年度より、堤地区を対象とした上峰北部農業基盤整備事業の実施に向けた調査計画が開始され、昭和60年度より事業が実施されるに至った。

しかし、地形的制約の上に成り立ってきた従来の耕地の集団化、道路・用排水路の整備を目的とした農業基盤整備事業の実施は、一方では土地の大規模な改変を必要とし、ひいては地下の埋蔵文化財に工事の影響を及ぼすことが予想され、今日的要求と埋蔵文化財の保護との調整という問題が文化財保護行政の大きな課題となった。そこで、佐賀県においては、農業基盤整備事業とこれに伴う埋蔵文化財の保護との調整について、県農林部と県教育委員会との間で「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」（昭和53年４月締結、昭和59年４月一部改正。）という覚書を交わし、現在この確認事項に基づき、県農林部、県教育委員会、市町村土地改良担当課、市町村教育委員会の関係機関四者により協議が行われ、調整が行われている。

上峰北部農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する協議調整は、昭和59年９月に、県事業担当部局から県教育委員会に昭和60年度農業基盤整備事業施工計画が提出され、JR 長崎本線以南の埋蔵文化財の取扱について協議されたことに始まる。

今回の船石南遺跡の調査区を含む船石地区一帯の埋蔵文化財の取扱についての四者協議会は、昭和59年10月に行われた「昭和60年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」が最初であった。この席上では、JR 長崎本線以南の船石遺跡（昭和61年度調査）、船石南遺跡の取扱いについて協議を行った。昭和60年度農業基盤整備事業として、船石地区と JR 長崎本線の間の区域を対象とした事業計画が提示された。当該区域内にはほぼ全域にわたり船石遺跡、船石南遺跡の広がりが確認されていたため、埋蔵文化財の取扱いについて、事業の設計変更による調査面積の縮小など文化財の保護に関する調整を進めていった。その結果、船石南遺跡内で、水田基盤造成工事、水路掘削工事などで地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲4,500㎡について事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することになった。

2．調査の経過

船石南遺跡のうち、昭和60年度の農業基盤整備事業に伴い埋蔵文化財発掘調査事業の対象となった区域は、大字堤字一本谷付近の船石丘陵から派生する支丘の基部付近（３・４区　標高16m付近）及び西縁辺部（５区　標

高14m～16m付近）にあたり、農業基盤整備事業により面的に削平を受ける部分4,500㎡について、船石南遺跡3区～5区の名称を冠して、昭和60年5月から翌昭和61年1月末までの予定で発掘調査を実施することとなった。

昭和60年度の調査は、5月27日に、3区から表土除去作業に着手、その後、発掘作業員による遺構検出作業を始めると、3区の北東部において、作業開始直後から、高い密度で甕棺墓などの墓壙と考えられる掘り方が続々と検出された。これらの墳墓群の調査は、あるときは、甕棺墓の下部から新たな甕棺墓が検出され、またあるときは、古い甕棺を破壊して新たな甕棺墓が営まれた状態で検出されたため、難航を極めた。以後、逐次、検出された甕棺墓などの遺構について発掘作業と実測作業、写真撮影を併せ行い、調査を進めていった。

その後も、一方では表土剥ぎの対象範囲を4区からさらに5区へと拡大し、3区の墳墓群の調査と並行して、遺構の掘り下げ作業、調査を進めた。この4区・5区においては、3区とは対照的に住居址や土壙などが切り合った状態で多数検出され、逆に甕棺墓などの墳墓の数は極端に僅かであった。

さらに、当初の調査予定範囲4,500㎡について遺構検出作業を終了した時点で、100基を超える数の甕棺墓などの墳墓群やその他多数の住居址、土壙などの生活遺構の存在が確認され、事業期間内の発掘作業完了が困難な見通しとなったため、12月3日付けで、人件費の増額を主とする事業の変更承認申請を行い、作業員の増員により調査の進捗を図ることとなった。

このような多数の甕棺墓、住居址などについての現地での調査は、予定通り、翌昭和61年1月末まで実施し、最終的に、甕棺墓105基、土壙墓20基の墳墓合計125基、竪穴式住居址51軒、掘立柱建物址4棟、土壙等55基、祭祀遺構と考えられる周溝状遺構4基、古墳1基について調査を実施した。

その後、現場で作成した遺構実測図などの記録類、出土遺物などを整理事務所に移し、年度末まで、図面整理、出土遺物の水洗いなど簡単な整理作業を実施し、昭和60年度の事業を終了した。

Ⅲ．調　　査

1．調査区と調査の概要（Fig. 3、4・PL. 1～4）

船石南遺跡は、前述のごとく、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本谷、四本杉に位置し、北方の脊振山系に源を発する切通川東岸に広がる「船石丘陵」と呼称する洪積世段丘の先端付近からさらに南東へ派生する支丘（標高14m～17m付近）上に位置する。遺跡は、弥生時代前期末葉から後期にかけて営まれた甕棺墓、土壙墓、石棺墓を主体とする墳墓遺跡で、地元では、以前この付近一帯を「千人塚」と呼称し、耕地には大甕の破片が散見され、耕作中に甕棺が開口することも少なくなかったといわれている。

船石南遺跡のうち今回報告する調査対象区域は、上峰町大字堤字一本谷付近位置し、3区は遺跡が立地する丘陵の南側縁辺部、4区が丘陵の中央部にあたり、南西に離れた5区は丘陵の西側縁辺部にあたる。いずれも現在は水田あるいは畑地として利用されている。また、調査区域の土層は、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、耕作土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

昭和60年度の発掘調査は、同時に農家負担相当分として上峰町の事業として実施した丘陵基部付近の調査対象区域（船石南遺跡1区・2区）の南側に隣接する部分を3区、西側に隣接する部分を4区、さらに4区から南西に離れた部分を5区として調査を行った。

調査は、調査対象区域全域にまたがる部分に座標北を基準とする8m×8mグリッドを東西列東から5～21の17列（東西列の第14列のみが、東西3m×南北8mの変則的なグリッドとなっている。）、南北列北からB～Sの19列を設定し、これを基準に実施した。

今回の船石南遺跡3区～5区の調査で検出された遺構は、弥生時代前期末から後期に及ぶ甕棺墓105基、土壙墓20基の墳墓合計125基、祭祀遺構と考えられる周溝状遺構4基および弥生時代から奈良時代に及ぶ竪穴式住居址51軒、掘立柱建物址4棟、土壙等55基、古墳1基、その他ピットなどであった。また、これらの遺構に伴い、弥生式土器、石器類、土師器、須恵器などの遺物が出土している。

今回の船石南遺跡の調査では、3区北東部において甕棺墓をはじめとする弥生時代の墳墓群が集中して検出され、墓域の一部であることが確認された。これに対して、3区南部・4区・5区においては検出された遺構のほとんどが竪穴式住居址や土壙などの生活遺構であった。このようなことから今回の調査区の3区と4区・5区の間で検出された遺構密度の低い部分が弥生時代の一集落内における居住域と墓域の境界であったことが確認された。

2．遺　構（Fig. 4～33・PL. 1～34・Tab. 1～8）

上述のとおり今回の調査で検出された遺構は、弥生時代前期末から後期に及ぶ甕棺墓105基、土壙墓20基、の墳墓合計125基、祭祀遺構と考えられる周溝状遺構4基、竪穴式住居址51軒、掘立柱建物址4棟、古墳1基、土壙等55基などであった。以下、それぞれの遺構について報告したい。

(1) 甕棺墓（Fig. 4～11・PL. 5～16・Tab. 1、2、8）

甕棺墓は、105基が検出された。甕棺墓の分布域は、3区の北東部に集中し、遺跡が立地する丘陵の南東部の緩斜面に集中して営まれている。これらの甕棺墓には、比較的早い段階での主要な甕棺墓については主軸の方向などから列埋葬の意図が見えるものの、次第に墓域という限られた範囲内での埋葬が度重なり、埋葬の規制が薄れていくといった傾向が看取できる。

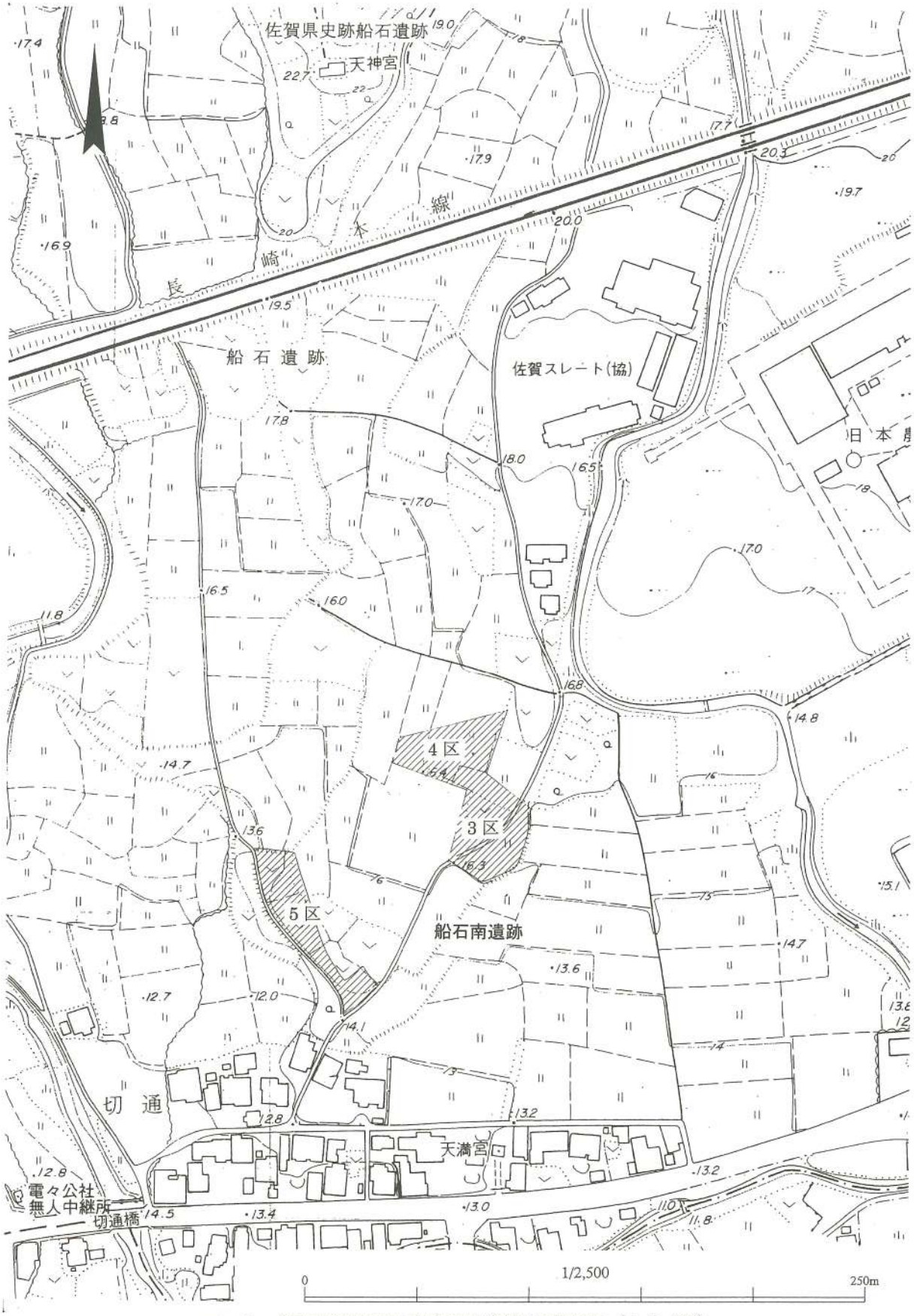


Fig. 3　船石南遺跡周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000）

Fig. 4　船石南遺跡３・４・５区遺構配置図（1/250）

後世の耕作などにより削平を受け、わずかに墓壙や棺体の一部のみを残すものもあるが、墓壙が深く完全な形で出土した甕棺墓もかなりの数に上る。しかし、埋納されている周囲の土壌の関係か、人骨が遺存しているものは皆無であった。

また、今回の調査で甕棺墓から出土した遺物は、墓壙内から土器片等が散見されているが、副葬品として埋納されたものは皆無であった。

次に、甕棺墓の型式については、105基のうち、後世の破壊などによって遺存状態が劣悪で型式が不明な17基を除く88基についてみると、上下または上中下の甕を組み合わせた複式棺と考えられるものが圧倒的に多く83基、単独の甕を用いた単棺式と考えられるもの５基であった。さらに複式棺のうち、口径がほぼ等しい上下の甕の口縁を合わせた接口式が66基、下甕より口径が大きい上甕をかぶせた覆口式10基、下甕より口径が小さい上甕を入れ込んだ挿入式６基、一方、単式棺についてみると、本来蓋のないものまたは木製の蓋などが失われたと考えられるものが５基であった。

これらを被葬者別にみると、105基のうち、小破片のみが残り、成人用、小児用の区別が不明な２基を除く103基については、大型の甕や鉢を用いた成人用と考えられるものが48基、中型甕、小型の甕や壺を用いた小児用と考えられるものは55基であった。これらを甕棺墓の型式別にみると、成人用甕棺墓48基のうち、複式棺が、接口式33基、覆口式４基、挿入式３基の計40基、単棺式が、無蓋のもの３基、遺存状態が悪く型式不明のもの５基に分類される。また、小児用甕棺墓では55基のうち、複式棺が上下の甕を組み合わせた接口式33基、覆口式６基、挿入式３基の計42基、上中下と３個の甕を組み合わせた３連式のものが１基、単棺式が無蓋のもの２基、遺存状態が悪く型式不明のもの10基に分類される。

また、棺体として使用されている土器は、成人用と考えられる大型甕や大型鉢などから、小児用と考えられる中形または小型の甕、鉢、壺などバラエティーに富んでいる。被葬者別、甕棺型式別に使用されている土器の組み合わせをみると、以下のとおりで分類できる[註]。

成人棺では、組合せまたは単独で使用されている土器の形態が判別できないもの６基を除くと、以下のとおりであった。

①大型の甕を上下組み合わせた接口式もの　24基
②大型の甕を上下組み合わせた覆口式もの　４基
③大型の甕を上下組み合わせた挿入式もの　３基
④上甕に大型の鉢を下甕に大型の甕を組み合わせた接口式もの　８基
⑤大型の甕が単独で使用された無蓋のもの　２基
⑥大型の甕を単独で倒置したもの　１基

また、小児棺では、組合せまたは単独で使用されている土器の形態が判別できないもの10基を除くと、以下のとおりであった。

①小型の甕を上下組み合わせた接口式もの　29基
②小型の甕を上下組み合わせた覆口式もの　１基
③小型の甕を上下組み合わせた挿入式もの　２基
④上甕に小型の壺を下甕に小型の甕を組み合わせた接口式もの　２基
⑤小型の壺を上下組み合わせた覆口式もの　２基
⑥小型の壺を上下組み合わせた挿入式もの　１基

⑦上甕に小型の鉢を下甕に小型の甕を組み合わせた接口式もの　2基

⑧上甕に小型の鉢を下甕に小型の壺を組み合わせた覆口式もの　2基

⑨上甕に打ち欠いた大型の鉢を下甕に小型の甕を組み合わせた覆口式もの　1基

⑩小型の甕を3個体連結した3連式のもの　1基

⑪小型の甕が単独で使用され無蓋のもの　1基

⑫小型の甕を単独で倒置したもの　1基

Tab. 1　船石南遺跡3・4・5区出土甕棺組合せ分類集計表

型式 / 被葬者	組合せ	複式棺				単式棺			不明	合計
	上甕　下甕	接口式	覆口式	挿入式	計	石蓋	無蓋	計		
成人棺	大甕 ＋ 大甕	24	4	3	31					31
	大鉢 ＋ 大甕	8			8					8
	大甕　—						1	1		1
	—　大甕						2	2		2
	計	32	4	3	39		3	3	6	48
小児棺	小甕 ＋ 小甕	29	1	2	32					32
	壺 ＋ 小甕	2			2					2
	壺 ＋ 壺		2	1	3					3
	小鉢 ＋ 小甕	2	2		4					4
	大鉢 ＋ 小甕		1		1					1
	小甕+小甕+小甕			1	1					1
	—　小甕						1	1		1
	小甕　—						1	1		1
	計	33	6	4	43		2	2	10	55
不明									2	2
合計		55	10	7	82		5	5	18	105

以下、比較的遺存状態が良好なもの、特徴的なものを実測図、写真図版で示し、法量などは一覧表にまとめ、報告する。

註

本来ならば、ここで、甕棺として使用されたこれらの土器の形態分類や時期についてもここで検討すべきであるが、その余裕がないので、本遺跡の西を南流する切通川の西岸に位置する二塚山丘陵に立地し、先年の佐賀東部工業団地造成に伴い発掘調査が実施され多数の甕棺墓を出土した二塚山遺跡、五本谷遺跡、松葉遺跡出土の甕棺群について、『二塚山』報文で七田忠昭氏が詳しく検討されているので、ここではその分類に従って、報告したい。

高島忠平・七田忠昭他　『二塚山』　佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979

Tab. 2　船石南遺跡３・４・５区出土甕棺墓一覧表

凡　例　・墓壙規模　上段：一次墓壙　下段：二次墓壙
一次・二次の区別がないもの、二次墓壙のみ遺存しているものについては一段書きとした。「？」は不明。「-」該当するデータがないもの。
・甕棺法量・器種・甕棺形態　上段：上甕　下段：下甕
「？」は不明。「-」該当するデータがないもの。
・器種の表示　大甕……LJ　小甕……SJ　大鉢……LB　小鉢……SB　蓋……C　壺……P　とし、これに『二塚山』報文の「B１」などの形態分類の記号を加えて表記した。
例)「LB-B１」は、『二塚山』報文の「大甕B１」にあたる。
・凸帯の表示　甕、鉢類の口縁下部と胴部の凸帯の数について、２桁の数字で表した。数字の前の「三」、「コ」は、凸帯の断面形態。それぞれ、三角形、コの字形
例)「三10」は口縁下部に断面三角形凸帯が１条、胴部に凸帯がないもの。その部位が失われており凸帯の有無が不明の場合は「-」とした。
壺類の凸帯については、部位）断面形態、数で表記した。例)「肩）三２」は肩部に断面三角形凸帯を２条持つ
・時期の表示　「Ⅰ」：前期末～中期初頭の時期。
「Ⅱ」：中期前半～中期中葉の時期。

甕棺墓番号	甕棺形式	成人・小児用の別	墓壙規模(m)			甕棺法量(cm)		甕棺形態				方位	傾斜	時期	備考
			長さ	幅	深さ	口径	器高	器種	器体	口縁断面	突帯など				
SJ-363	接口式	成人用	1.39	1.02	0.40	-	※46	LJ-B1	砲弾形	打ち欠き	0-	N-72°-E	39°	Ⅱ	
			1.03	1.02	0.80	80	78	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-364	覆口式	小児用	0.68	0.43	0.26	39	25	LB-A1	鉢形	逆L字形	三10	N-74°-E	4°	Ⅱ	
						33	42	LJ-E2	截頭卵形	逆L字形	三02				
SJ-366	接口式	成人用	2.32	1.44	0.45	80	90	LJ-B1	砲弾形	T字形	00	N-118°-W	-5°	Ⅱ	
			1.88	0.88	0.60	81	90	LJ-B1	砲弾形	T字形	00				
SJ-367	接口式	成人用	1.99	1.46	0.36	75	※56	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01	N-143°-W	33°	Ⅱ	
			1.32	0.80	0.89	75	86	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-369	?	成人用	0.53	?	0.25	-	-	-	-	-	--	N-126°-W	59°	Ⅱ	下甕のみ
						-	※40	LJ-B1	砲弾形	-	--				
SJ-384	挿入式	小児用	1.20	1.25	0.51	-	※40	SJ-A1	砲弾形	打ち欠き	00	N-19°-W	40°	Ⅱ	
			0.49	0.43	0.70	45	46	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00				
SJ-385	接口式	成人用	※1.5	1.35	0.45	-	※72	LJ-B1	砲弾形	打ち欠き	-0	N-77°-W	?	Ⅱ	
			※1.5	?	0.70	72	80	LJ-B1	砲弾形	T字形	00				
SJ-387	?	成人用	1.22	0.72	0.18	-	-	-	-	-	--	N-45°-E	25°	Ⅱ	下甕のみ
			0.74	0.60	0.31	-	※65	LJ-B1	砲弾形	-	--				
SJ-388	接口式	成人用	※1.5	※1.2	0.34	75	※78	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02	N-22°-W	29°	Ⅱ	
			(1.4)	(0.7)	0.75	75	103	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-389	?	成人用	※1.7	0.89	0.44	-	-	-	-	-	--	N-96°-E	57°	Ⅱ	下甕のみ
			0.94	0.75	0.71	-	※70	LJ-B1	砲弾形	-	三-2				
SJ-390	?	小児用	0.78	0.54	0.17	-	-	-	-	-	--	N-40°-W	29°	Ⅱ	下甕のみ
						-	※64	LJ-E2	截頭卵形	-	三02				
SJ-393	?	小児用	1.48	1.02	0.15	-	-	-	-	-	--	N-66°-E	?	Ⅱ	
			0.90	(0.5)	0.29	-	73	LJ-E2	截頭卵形	逆L字形	三01				
SJ-394	?	小児用？	0.49	0.55	0.13	-	-	-	-	-	--	N-35°-W	?	?	小破片
						?	?	?	?	?	?				
SJ-395	接口式	小児用	1.11	0.93	0.14	-	19	SB-A1	鉢形	逆L字形	三10	N-145°-E	3°	Ⅱ	
			1.00	0.66	0.42	40	68	LJ-E1	截頭卵形	逆L字形	三02				
SJ-396	?	小児用	0.56	0.39	0.21	-	-	-	-	-	--	N-93°-E	35°	Ⅱ	
						-	49	SJ-A2	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-398	接口式	小児用	1.14	1.06	0.11	37	※34	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00	N-43°-W	17°	Ⅱ	
			0.88	0.46	0.31	35	35	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00				
SJ-400	接口式	成人用	1.04	0.77	0.27	?	※10	LJ-B1	砲弾形	T字形	--	N-86°-W	46°	Ⅱ	
			0.74	0.77	0.50	?	90	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-401	接口式	小児用	※0.7	※0.6	0.21	40	※29	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10	N-173°-W	43°	Ⅱ	
			0.67	0.75	0.64	41	41	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-402	接口式	小児用	0.86	0.46	0.31	42	※27	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10	N-95°-E	20°	Ⅱ	
						42	55	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三20				
SJ-403	接口式	小児用	0.55	0.35	0.16	?	※16	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三0-	N-100°-E	24°	Ⅱ	
						?	42	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三00				
SJ-404	接口式	小児用	0.80	0.45	0.11	-	※23	P-?	壺形	打ち欠き	胴)三1	N-15°-W	0°	Ⅱ	
						?	54	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-405	接口式	成人用	1.22	1.09	0.12	65	※62	LJ-B1	砲弾形	T字形	三0-	N-177°-E	34°	Ⅱ	
			(1.4)	(0.6)	0.73	67	80	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-406	接口式	成人用	1.48	1.02	0.40	69	※55	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02	N-64°-E	39°	Ⅱ	粘土目張り
			1.08	※0.8	0.67	69	87	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-407	覆口式	小児用	1.19	0.92	0.62	30	23	SB-A1	鉢形	逆L字形	三10	N-150°-W	38°	Ⅱ	粘土目張り 下甕頚部以上打ち欠き
			0.70	0.58	0.86	-	※36	P-A	壺形	打ち欠き	胴)三1				
SJ-408	?	小児用	0.60	0.47	0.09	-	-	-	-	-	-	N-30°-E	30°	Ⅱ	下甕のみ
						-	※34	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-409	接口式	成人用	1.79	2.04	0.53	(70)	79	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01	N-152°-W	-6°	Ⅱ	粘土目張り
			1.61	0.78	0.72	(70)	81	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-410	接口式	成人用	1.35	0.65	0.22	?	※54	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02	N-94°-E	?	Ⅱ	粘土目張り
						?	※77	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-411	覆口式	成人用	1.51	0.83	0.27	?	※56	LJ-B1	砲弾形	打ち欠き	三-1	N-118°-E	0°	Ⅱ	
						?	※77	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-412	単棺？	成人用	1.37	1.32	0.40	-	-	-	-	-	-	N-60°-W	26°	Ⅱ	
			1.19	0.71	0.78	?	93	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-413	接口式	小児用	1.19	0.71	0.16	36	37	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10	N-128°-W	0°	Ⅱ	
			0.82	0.47	0.27	66	86	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-414	接口式	小児用	※0.4	0.78	0.91	?	※7	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三1-	N-51°-W	44°	Ⅱ	
			0.64	0.43	1.11	?	51	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-415	?	小児用	0.61	0.57	0.37	?	※20	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10	N-101°-E	38°	Ⅱ	
						?	※45	SJ-A1	砲弾形	打ち欠き？	三10？				

甕棺墓番号	甕棺形式	成人・小児用の別	墓壙規模(m)			甕棺法量(cm)		甕棺形態				方位	傾斜	時期	備考
			長さ	幅	深さ	口径	器高	器種	器体	口縁断面	突帯など				
SJ-417	接口式	成人用	1.80	1.29	0.46	62	83	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01	N-48°-W	27°	Ⅱ	
			1.53	0.76	0.96	70	89	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-418	挿入式	成人用	(2.1)	1.22	0.27	-	※66	LJ-B1	砲弾形	打ち欠き	三01	N-113°-E	-4°	Ⅱ	上甕胴部上位以上打ち欠き
			1.20	0.60	0.47	70	89	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-419	接口式	成人用	1.80	1.33	0.38	73	99	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01	N-114°-E	2°	Ⅱ	
			1.91	0.82	0.54	73	102	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-432	単棺？	小児用	1.76	1.42	0.53	-	-	-	-	-	-	N-64°-W	43°	Ⅱ	下甕のみ
			0.47	0.45	0.54	38	45	SJ-B1	イチジク形	逆L字形	三10				
SJ-433	接口式	小児用	1.14	0.68	0.18	31	※26	SJ-B1	イチジク形	逆L字形	00	N-58°-W	32°	Ⅱ	
			0.68	0.49	0.35	27	33	SJ-B1	イチジク形	逆L字形	三10				
SJ-440	？	小児用	1.34	※0.9	0.20	-	-	-	-	-	-	N-130°-E	7°	Ⅱ	
			0.57	(0.4)	0.27	?	70	LJ-E1	截頭卵形	逆L字形	三02				
SJ-442	接口式	成人用	1.85	1.25	0.45	86	※88	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02	N-86°-W	9°	Ⅱ	
			1.92	0.65	0.54	84	92	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-451B	接口式	成人用	1.75	1.09	0.48	?	※27	LB-A2	鉢形	T字形	三20	N-96°-W	24°	Ⅱ	
			1.50	0.95	0.91	?	115	LJ-B2	砲弾形	T字形	三22				
SJ-452	接口式	小児用	0.85	0.40	0.17	?	※18	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	0-	N-95°-W	15°	Ⅱ	
						?	40	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00				
SJ-453	接口式	小児用	1.49	0.82	0.65	41	※45	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三01	N-35°-W	29°	Ⅱ	
			1.05	0.61	0.90	41	53	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三01				
SJ-454	接口式	小児用	0.75	0.76	0.19	39	42	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00	N-42°-W	24°	Ⅱ	
			0.70	0.40	0.44	40	37	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00				
SJ-456	接口式	小児用	1.45	1.06	0.49	34	37	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00	N-71°-W	23°	Ⅱ	
			0.83	0.45	0.74	35	37	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00				
SJ-457	接口式	成人用	1.73	1.18	0.63	72	※70	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02	N-104°-W	38°	Ⅱ	
			1.13	0.78	0.97	77	103	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-458	接口式	小児用	1.00	0.81	0.63	40	43	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三02	N-82°-W	-5°	Ⅱ	粘土目張り
			0.80	0.50	0.71	35	47	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三11				
SJ-459	接口式	成人用	※1.3	1.01	0.33	?	※20	LB-A1	鉢形	T字形	00	N-120°-E	11°	Ⅱ	
			1.13	0.79	0.40	?	108	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-460	接口式	小児用	1.07	0.69	0.19	38	41	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10	N-147°-W	6°	Ⅱ	
			0.82	0.48	0.35	35	44	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-461	接口式	成人用	1.92	1.31	0.81	68	93	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02	N-116°-E	29°	Ⅱ	
			1.59	0.81	1.21	66	88	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-463	接口式	小児用	0.95	0.51	0.39	33	35	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00	N-95°-E	-6°	Ⅱ	
			0.80	0.40	0.51	32	35	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00				
SJ-464	接口式	小児用	※0.8	0.89	0.37	35	39	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10	N-103°-E	0°	Ⅱ	
			※0.5	0.60	0.43	36	43	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-467	挿入式？	小児用	1.40	1.09	0.56	-	37	P-A	壺形	打ち欠き	胴)三1	N-86°-W	22°	Ⅱ	上下甕頸部以上打ち欠き
			0.73	0.53	0.75	-	41	P-A	壺形	打ち欠き	胴)三1				
SJ-468	単棺	成人用	1.29	※1.2	0.64	72	※80	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02	N-68°-E	71°	Ⅱ	
			0.71	0.75	0.88	-	-	-	-	-	-				
SJ-469	覆口式	成人用	1.58	1.01	0.37	-	※20	LJ-？	砲弾形	-	--	N-159°-W	46°	Ⅱ	上甕胴部上位以上打ち欠き
			0.95	0.70	0.82	53	72	LJ-E1	截頭卵形	T字形	三01				
SJ-470	単棺	成人用	1.45	1.38	0.43	71	※56	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02	N-66°-W	85°	Ⅱ	
			0.80	0.82	0.88	-	-	-	-	-	-				
SJ-471	接口式	成人用	2.53	1.22	0.55	72	90	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01	N-61°-W	2°	Ⅱ	
			1.80	0.76	0.70	70	85	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-472	接口式	成人用	2.32	1.25	0.50	84	93	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01	N-135°-E	5°	Ⅱ	
			2.09	0.99	0.75	85	106	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-473	覆口式	小児用	1.85	※0.7	0.52	-	※19	P-A	壺形	打ち欠き	胴)三2	N-173°-E	66°	Ⅱ	上甕頸部以上打ち欠き 下甕肩部以上打ち欠き
			0.73	0.48	1.06	-	※38	P-A	壺形	打ち欠き	胴)三1				
SJ-474	接口式	小児用	1.60	1.70	0.37	43	40	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00	N-81°-E	21°	Ⅱ	
			1.06	0.60	0.57	47	65	LJ-E1	截頭卵形	T字形	三02				
SJ-475	接口式？	小児用	1.28	1.35	0.19	40	※40	SJ-A2	砲弾形	逆L字形	三20	N-105°-E	50°	Ⅱ	
			0.50	0.62	0.66	35	40	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-476	接口式	小児用	1.09	0.87	0.10	37	42	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00	N-93°-W	8°	Ⅱ	
			0.99	0.59	0.34	41	41	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-478	接口式	小児用	1.20	0.82	0.48	31	39	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00	N-105°-E	-1°	Ⅱ	
			0.73	0.35	0.57	32	38	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00				
SJ-479	挿入式	成人用	1.70	1.24	0.77	-	72	LJ-E1	截頭卵形	T字形	三01	N-171°-W	6°	Ⅱ	
			1.35	0.78	0.94	71	87	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-480	覆口式	小児用	0.90	1.13	0.33	43	※26	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10	N-80°-W	74°	Ⅱ	
			0.43	0.48	0.67	36	48	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-481	接口式	小児用	0.81	0.85	0.56	30	34	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三00	N-50°-W	65°	Ⅱ	下甕口縁部打ち欠き
			0.29	0.30	0.66	-	※27	SJ-A1	砲弾形	打ち欠き	三00				
SJ-482	覆口式	成人用	1.41	1.11	0.42	-	※52	LJ-B?	砲弾形	打ち欠き	三-1	N-62°-W	67°	Ⅱ	粘土目張り
			0.81	0.84	0.93	-	※64	LJ-B?	砲弾形	打ち欠き	三-2				
SJ-483	接口式	小児用	1.04	0.67	0.35	28	37	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00	N-81°-E	36°	Ⅱ	
			0.43	0.38	0.48	28	34	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00				
SJ-484	接口式	小児用	1.17	0.83	0.14	40	※38	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00	N-48°-W	-2°	Ⅱ	
			0.83	0.43	0.20	40	37	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00				
SJ-488	接口式？	成人用	1.36	1.25	0.30	?	-	-	-	-	--	N-164°-E	76°	Ⅱ	上甕口縁の一部のみ遺存 下甕底部に2ヶ所穿孔
			0.98	1.19	0.76	?	37	LJ-E1	截頭卵形	T字形	三01				
SJ-495	接口式	成人用	1.36	(1.2)	0.56	73	※30	LB-A2	鉢形	T字形	00	N-153°-W	7°	Ⅱ	
			1.52	0.80	0.78	78	107	LJ-B2	砲弾形	T字形	三02				

甕棺墓番号	甕棺形式	成人・小児用の別	墓壙規模(m)			甕棺法量(cm)		甕棺形態				方位	傾斜	時期	備考
			長さ	幅	深さ	口径	器高	器種	器体	口縁断面	突帯など				
SJ-497	接口式	小児用	1.72	0.80	0.70	40	45	SJ-A 1	砲弾形	逆L字形	三10	N-75°-E	-2°	Ⅱ	
						50	40	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-498	接口式	成人用	2.26	1.60	0.77	69	90	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01	N-115°-E	3°	Ⅱ	粘土目張り
			1.90	0.87	1.19	71	92	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-499	接口式	成人用	2.69	※1.1	0.40	?	※27	LB-A2	鉢形	T字形	00	N-130°-E	18°	Ⅱ	
			1.52	0.98	0.91	?	116	LJ-B2	砲弾形	T字形	三02				
SJ-500	接口式	成人用	2.06	1.24	0.47	79	※51	LB-A2	鉢形	T字形	三20	N-117°-E	25°	Ⅱ	
			1.37	0.98	0.91	99	81	LJ-B2	砲弾形	T字形	三22				
SJ-501	接口式	小児用	-	-	-	-	※17	SB-A1	鉢形	逆L字形	三10	N-114°-E	34°	Ⅱ	
						-	45	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-510	接口式	小児用	1.31	0.88	0.35	?	43	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10	N-54°-W	7°	Ⅱ	
						46	50	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-511	接口式	成人用	2.10	1.39	0.75	77	※55	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02	N-88°-W	27°	Ⅱ	
			1.47	0.83	1.07	79	93	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-512	接口式	成人用	2.48	1.35	0.90	85	※100	LJ-B1	砲弾形	T字形	00	N-101°-E	33°	Ⅱ	
			1.23	0.89	1.21	83	94	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-513	3連式?	小児用	2.95	※0.9	0.53	-	※24	?	?	打ち欠き	--	N-40°-W	?	Ⅱ	上甕胴部以上打ち欠き 中甕底部打ち欠き 下甕口縁部打ち欠き
						40	※51	LJ-E1	截頭卵形	逆L字形	三02				
			1.13	?	0.66	-	※56	LJ-E?	截頭卵形	打ち欠き	三-2				
SJ-521	接口式	成人用	0.82	0.51	0.21	-	26	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三0-	N-112°-E	29°	Ⅱ	
						46	47	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-528	接口式	成人用	1.87	1.09	0.17	62	※35	LB-A2	鉢形	T字形	三10	N-122°-E	25°	Ⅱ	
			1.47	1.02	0.50	68	95	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-529	接口式	成人用	1.93	1.10	0.42	?	※28	LB-A1	鉢形	逆L字形	--	N-104°-W	1°	Ⅱ	
						?	113	LJ-B2	砲弾形	T字形	三02				
SJ-530	接口式	成人用?	1.33	0.64	0.41	?	※10	LB-?	鉢形?	逆L字形	三10	N-7°-E	42°	Ⅱ	
			0.68	0.53	0.59	?	58	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-535	接口式	小児用	1.10	0.83	0.74	47	35	SJ-A?	砲弾形?	逆L字形	三01	N-48°-W	0°	Ⅱ	
						48	50	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-597	?	小児用	0.53	0.39	0.41	-	-	-	-	-	-	N-85°-W	26°	Ⅱ	下甕のみ
						34	36	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-598	?	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	小破片
SJ-675	挿入式	成人用	1.54	1.00	0.48	-	※62	LJ-B1	砲弾形	打ち欠き	三02	N-47°-W	0°	Ⅱ	上甕胴部以上打ち欠き
			1.60			77	95	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-677	?	成人用	※1.1	1.61	0.31	-	-	-	-	-	-	N-78°-W	23°	Ⅱ	下甕底部のみ
						-	※63	LJ-B?	砲弾形	-	三-2				
SJ-678	接口式	小児用	1.15	0.69	0.24	?	※21	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00	N-117°-W	15°	Ⅱ	
			0.60	0.39	0.37	?	37	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00				
SJ-679	接口式	成人用	1.15	1.28	0.75	-	※48	LJ-B1	砲弾形	打ち欠き	三-2	N-123°-E	20°	Ⅱ	上甕胴部以上打ち欠き
			1.12	0.82	0.87	76	82	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-680	?	小児用	0.72	0.65	0.17	-	-	-	-	-	--	N-95°-W	34°	Ⅱ	下甕胴部下位のみ
			0.52	0.32	0.25	-	※39	SJ-A1	砲弾形	-	-0				
SJ-687	?	成人用	1.75	1.30	0.51	-	-	-	-	-	--	N-96°-E	2°	Ⅱ	下甕のみ
			0.70	0.57	0.55	57	76	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-694	接口式	成人用	1.20	0.95	0.80	66	※44	LJ-B1	砲弾形	T字形	三0-	N-79°-W	37°	Ⅱ	
						70	100	LJ-B1	砲弾形	T字形	三02				
SJ-695	接口式	小児用	0.50	0.35	0.26	-	※25	P-A	壺形	-		N-58°-W	53°	Ⅱ	
						?	33	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00				
SJ-696	接口式	小児用	0.99	0.73	0.32	40	43	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10	N-17°-E	20°	Ⅱ	
			0.88	0.42	0.52	41	47	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-697	覆口式	成人用	1.10	1.05	0.36	-	※40	LJ-B1	砲弾形	打ち欠き	--	N-145°-E	18°	Ⅱ	上下甕口縁部打ち欠き
						-	※74	LJ-B1	砲弾形	打ち欠き	--				
SJ-698	挿入式	小児用	1.00	0.55	0.44	-	※29	SJ-A1	砲弾形	打ち欠き	三-0	N-128°-E	46°	Ⅱ	
			0.53	0.33	0.74	34	39	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-700	接口式	小児用	1.37	1.00	0.58	?	52	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10	N-129°-E	34°	Ⅱ	
			0.70	0.48	0.78	46	52	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10				
SJ-703	接口式	小児用	1.37	0.92	0.76	35	37	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00	N-46°-W	12°	Ⅱ	
			0.77	0.44	0.94	35	38	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	00				
SJ-705	接口式	成人用	※1.8	1.65	0.10	68	※62	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01	N-59°-W	55°	Ⅱ	
			1.79	1.20	1.58	68	87	LJ-B1	砲弾形	T字形	三01				
SJ-709	?	小児用	※0.6	0.83	0.45	-	-	-	-	-	-	N-116°-E	15°	Ⅱ	下甕のみ
						61	73	LJ-E?	截頭卵形	-	三-2				
SJ-845	単棺式	小児用	0.65	0.65	0.10	?	※9	SJ-A1	砲弾形	逆L字形	三10	-	90°	Ⅱ	上甕のみを倒置
			0.50	0.52	0.22										
SJ-846	覆口式	小児用	1.20	0.77	0.17	?	※30	P-?	壺形	打ち欠き		N-75°-W	28°	Ⅱ	上下甕口縁部打ち欠き
			0.72	0.58	0.34	?	※47	P-?	壺形?	打ち欠き					
SJ-847	覆口式	小児用	0.67	0.81	0.08	36	19	SB-A2	鉢形	逆L字形	三10	N-28°-E	54°	Ⅱ	
			0.48	0.45	0.24	?	45	P-A	壺形		三01				
SJ-848	?	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	小破片

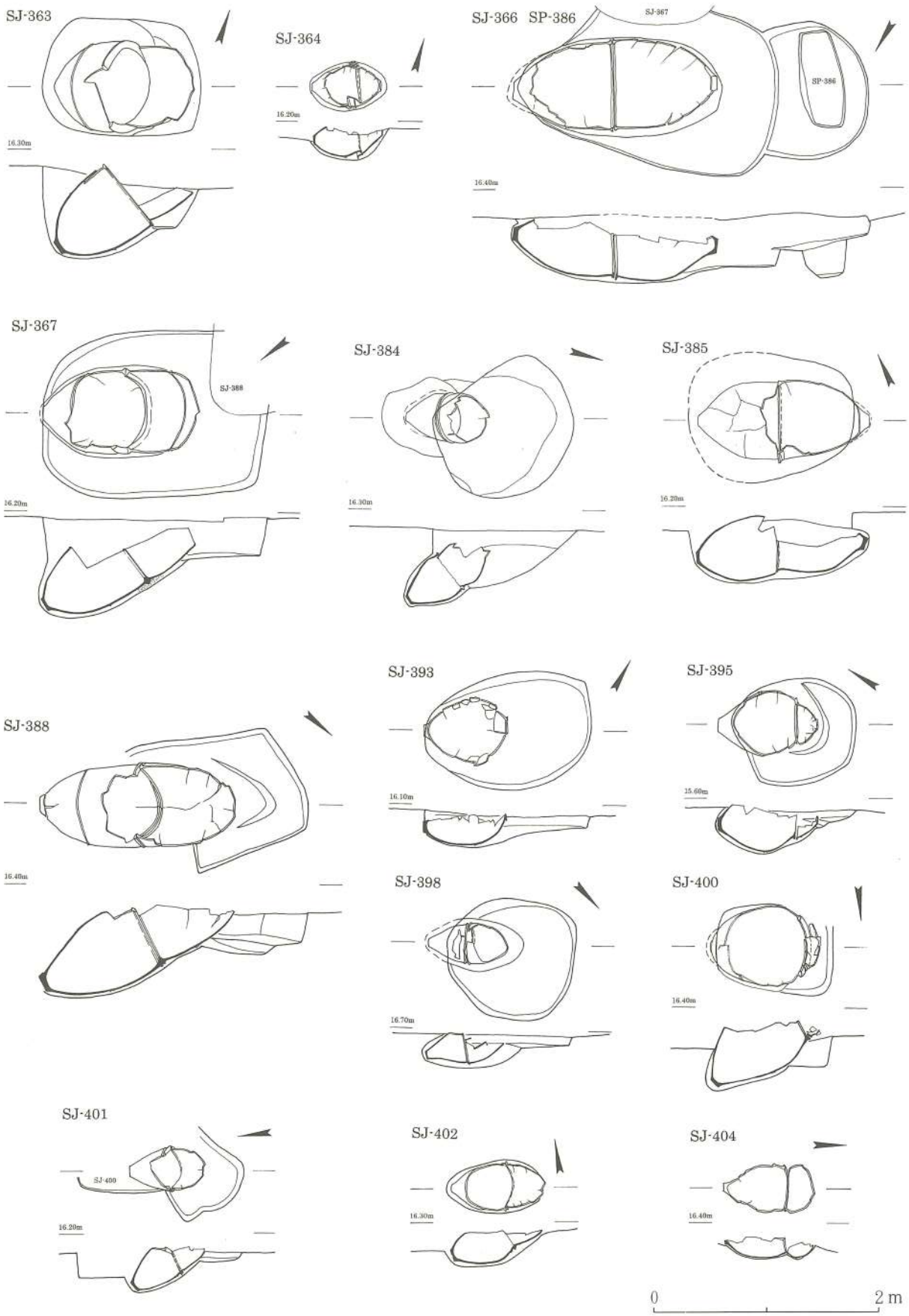


Fig. 5　甕棺墓実測図(1)　SJ-363・SJ-364・SJ-366・SP-386・SJ-367・SJ-384・SJ-385・SJ-388・SJ-393・SJ-395・SJ-398・SJ-400・SJ-401・SJ-402・SJ-404（1/50）

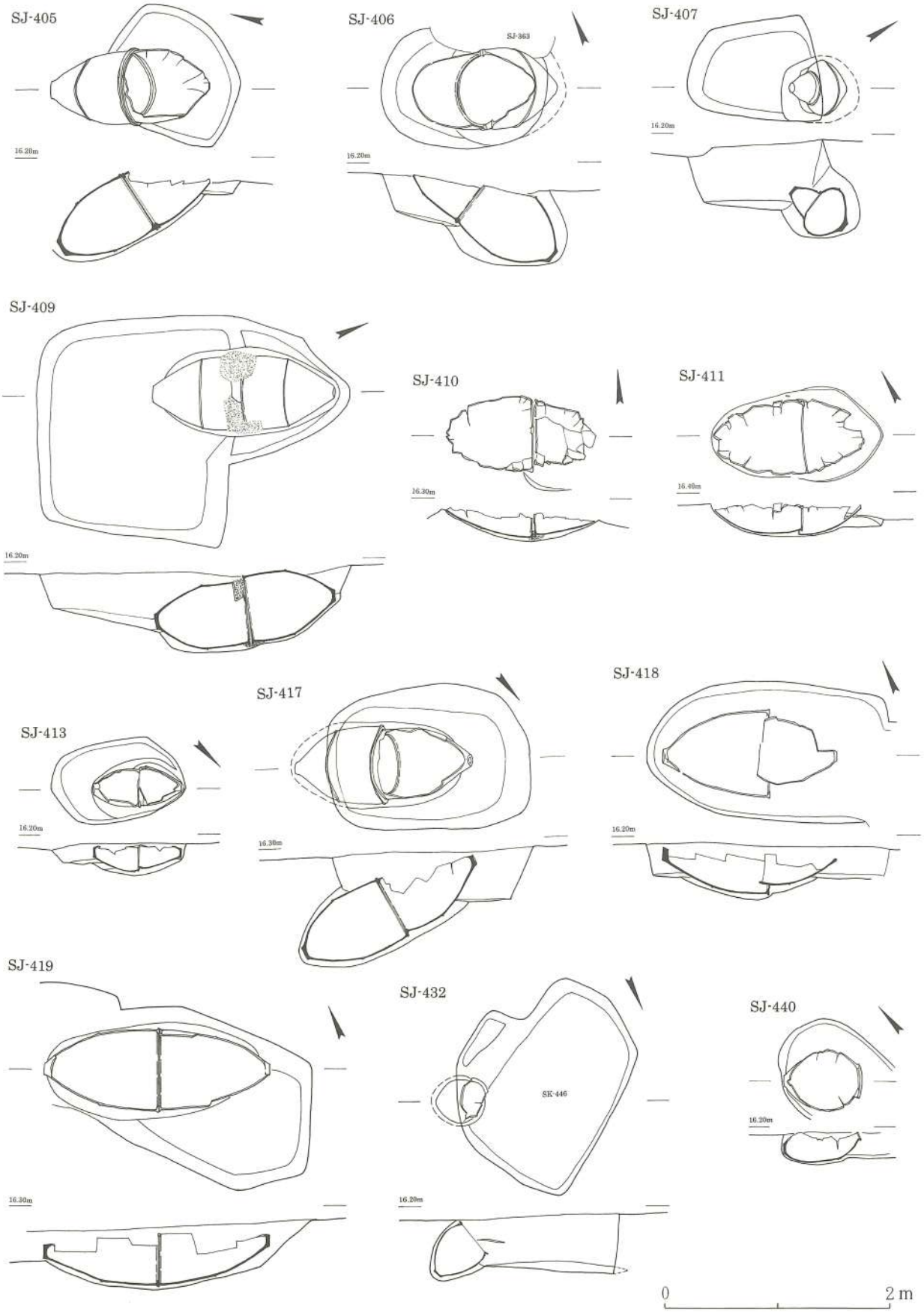


Fig. 6　甕棺墓実測図(2)　SJ-405～SJ-407・SJ-409～SJ-411・SJ-413・SJ-417～SJ-419・SJ-432・SJ-440（1/50）

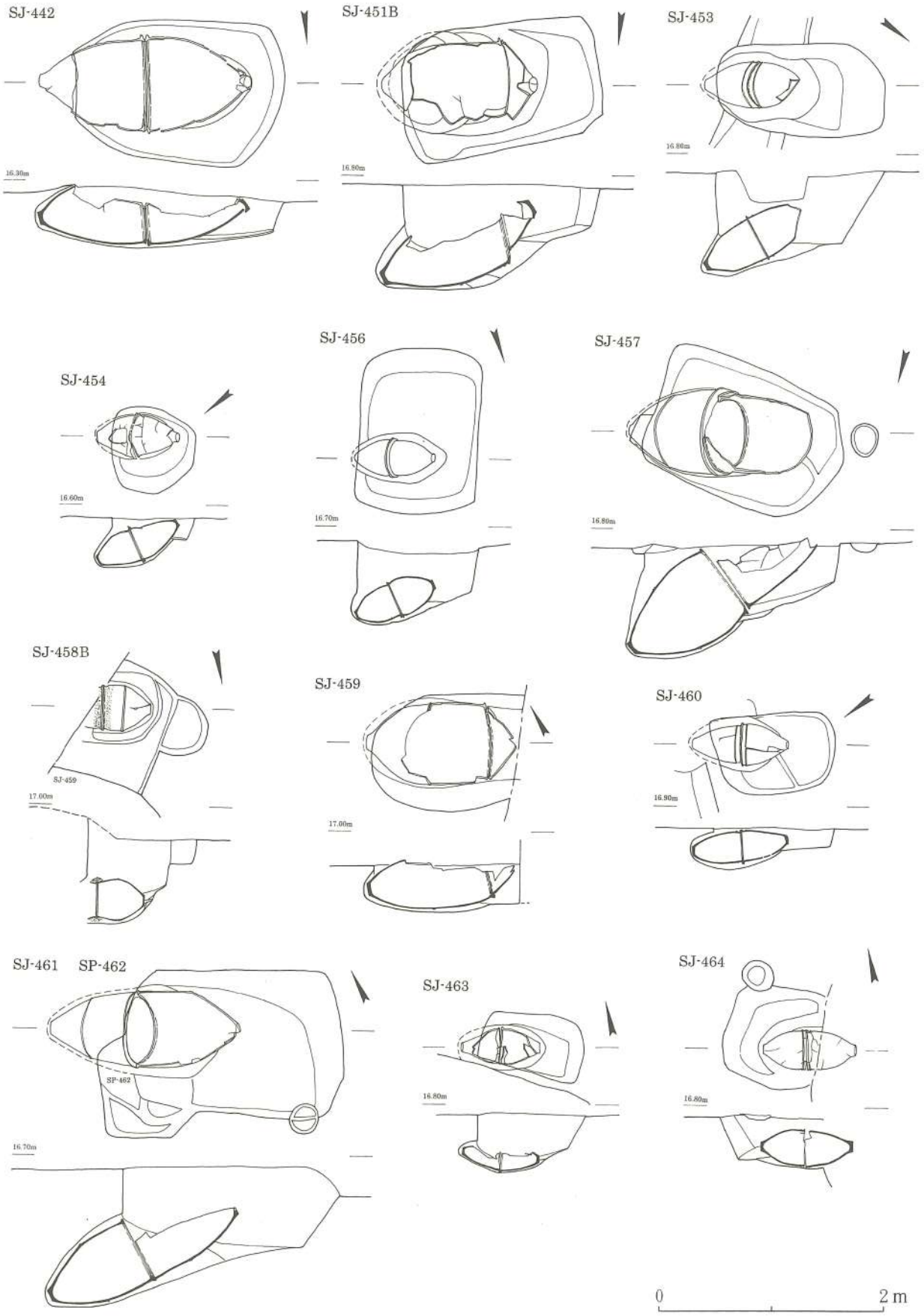


Fig. 7　甕棺墓実測図(3)　SJ-442・SJ-451B・SJ-453・SJ-454・SJ-456～SJ-461・SP-462・SJ-463・SJ-464（1/50）

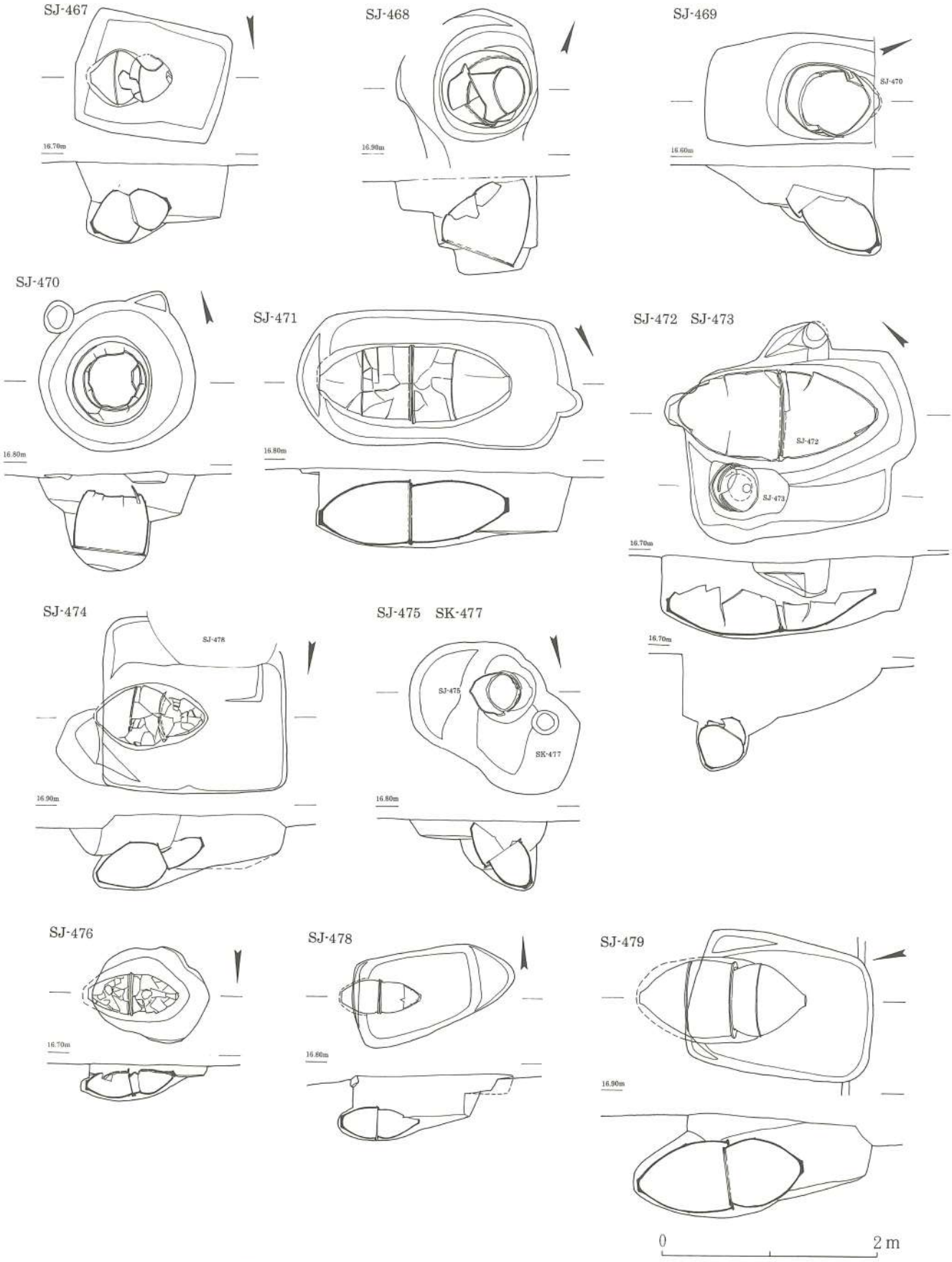


Fig. 8　甕棺墓実測図(4)　SJ-467～SJ-476・SK-477・SJ-478・SJ-479（1/50）

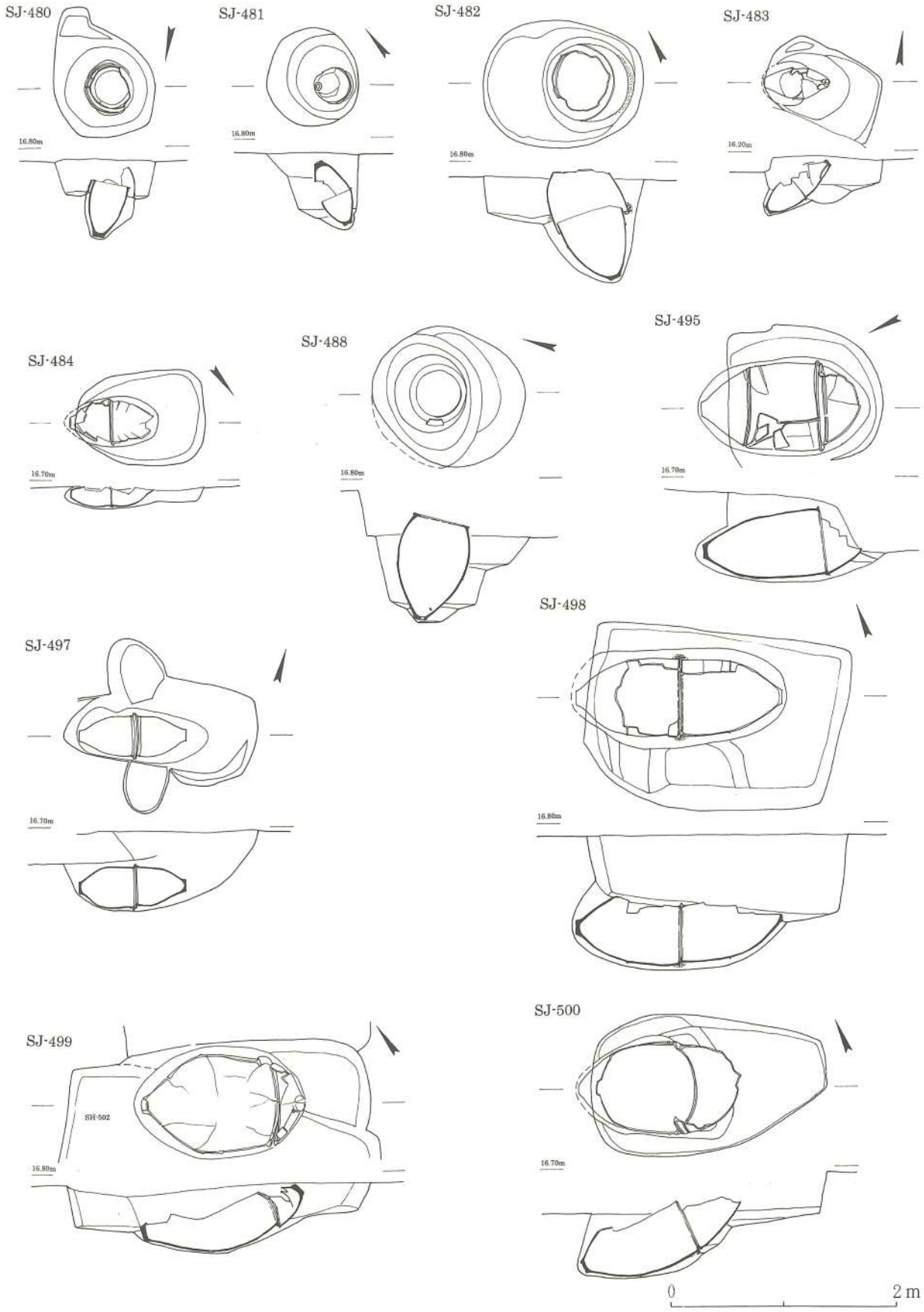


Fig. 9　甕棺墓実測図(5)　SJ-480～SJ-484・SJ-488・SJ-495・SJ-497～SJ-500（1/50）

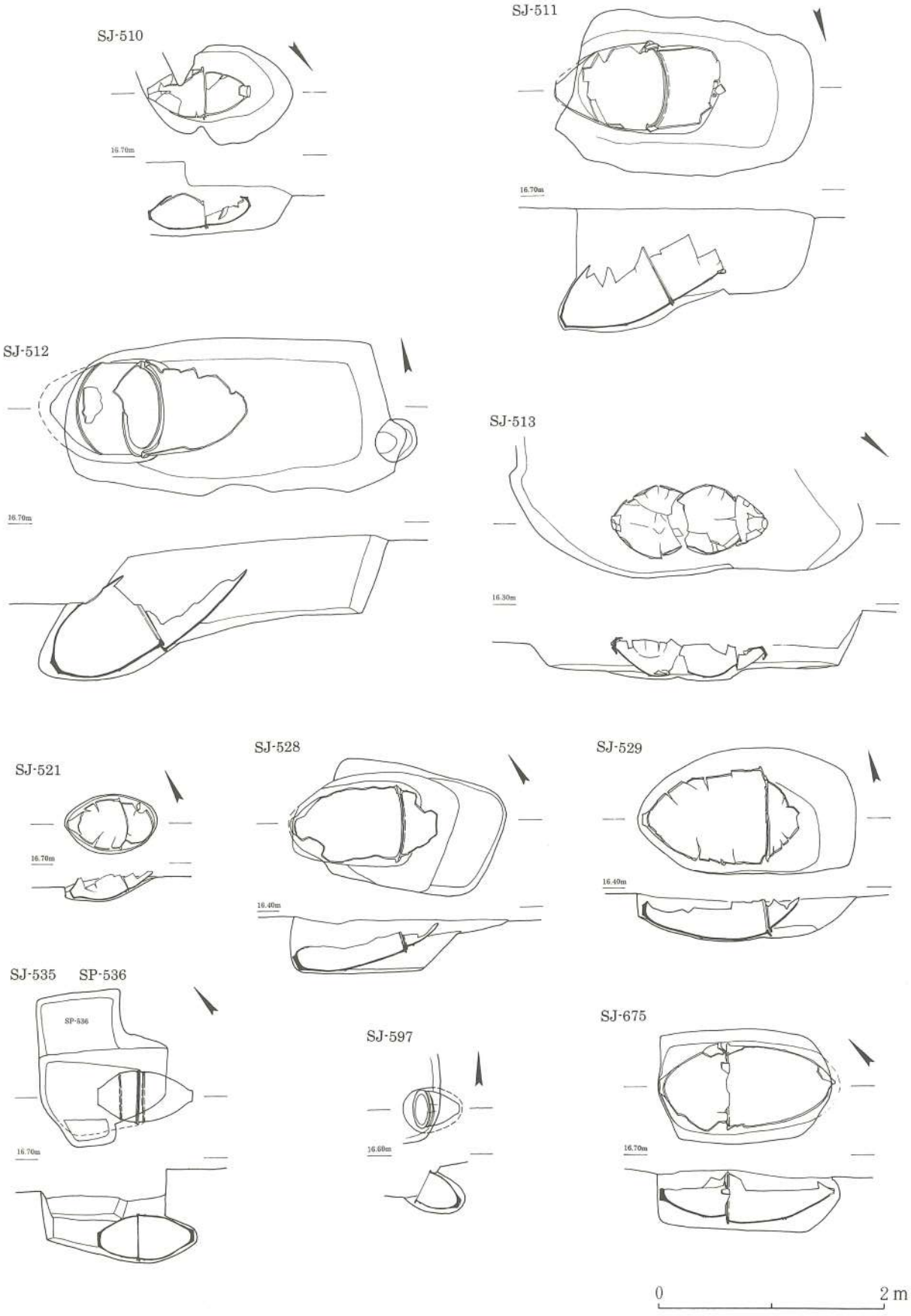


Fig. 10　甕棺墓実測図(6)　SJ-510～SJ-513・SJ-521・SJ-528・SJ-529・SJ-535・SP-536・SJ-597・SJ-675（1/50）

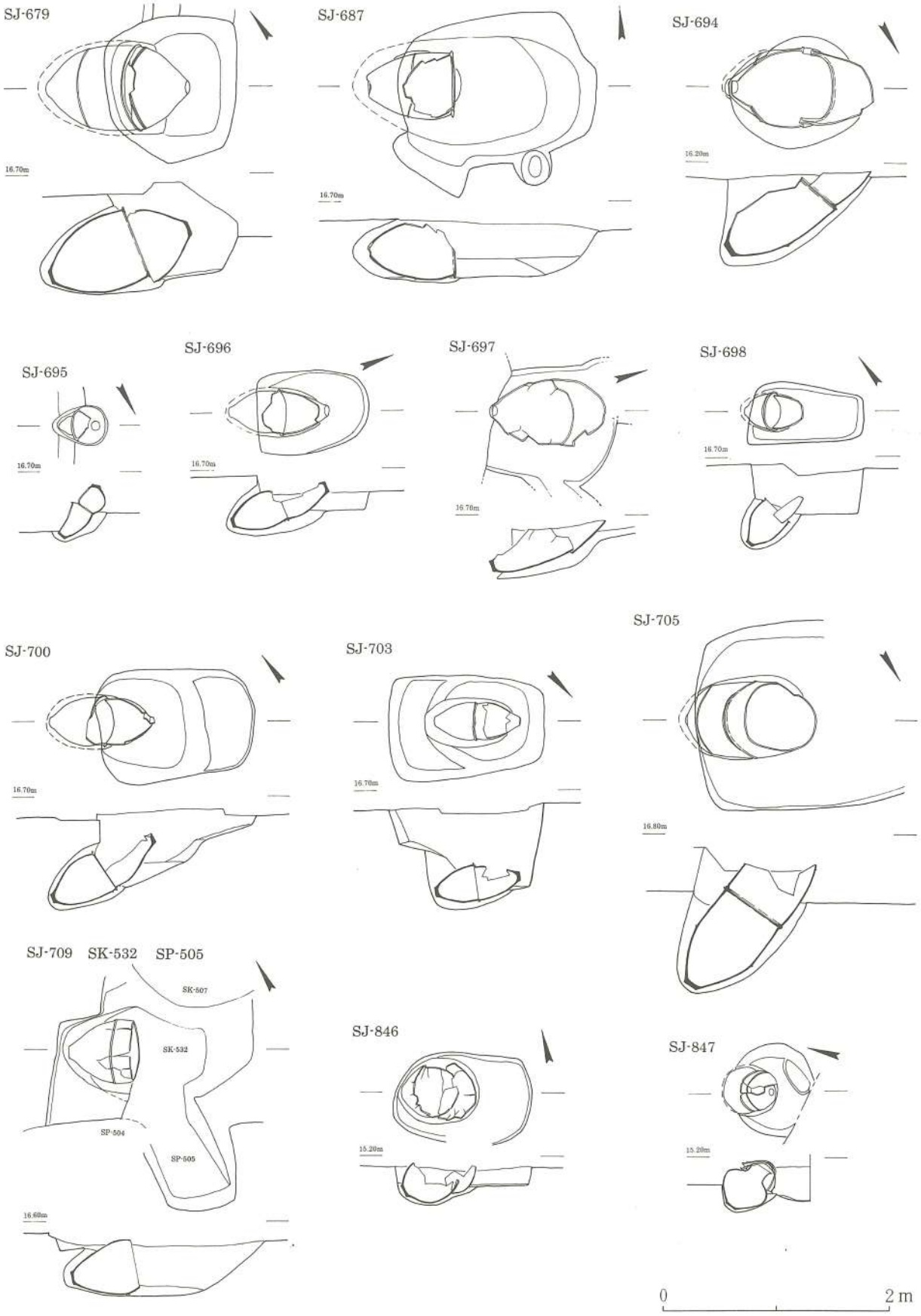


Fig. 11　甕棺墓実測図(7)　SJ-679・SJ-687・SJ-694～SJ-698・SJ-700・SJ-703・SJ-705・SJ-709・SP-505・SK-532・SJ-846・SJ-847（1/50）

(2) **土壙墓**（Fig. 4 、12、13・PL. 16～18・Tab. 3 、 8）

今回の調査で土壙墓として調査を行った遺構は、20基であった。これら土壙墓は、甕棺墓とほぼ同じ区域にて検出された。分布が甕棺墓群と重複しており、通例ならば、甕棺墓より新しいとされる土壙墓も、甕棺墓の墓壙と複雑に切りあっていたため、本来の形状を把握できなかったものも少なくない。

土壙墓の平面形態をみると、20基のうち、判別できないもの３基を除くと、方形を基調とするものが多い。また、内部主体や施設などが確認できたものは、石蓋をもつものがSP-441、SP-445の２基、SP-674が木棺の痕跡を残している。

また、今回の調査で土壙墓から出土した遺物は、墓壙内から土器片等が散見されているが、副葬品あるいは供献用として埋納された可能性があるものはSP-503から出土した小型甕と高坏のみであった。

ここでは、土壙墓については、比較的良好な状態で検出できた16基について図示し、法量、特徴などを一覧表にまとめ報告する。

Tab. 3　船石南遺跡３・４・５区出土土壙墓一覧表
※全体の形状、規模などが把握できないものについては空欄とした。

番　号	型　式	墓　　壙		主　体　部 長さ×幅×深さ	方　位	備　　考
		平面形態	長さ×幅×深さ			
SP-386	——	——	——	——	——	
SP-399	——	不整長方形	1.46×0.96×0.26	0.82×0.64×0.64	N-54°-W	
SP-441	石蓋	隅丸長方形	1.44×※1.3×0.22	0.83×0.64×0.42	N-67°-W	
SP-443	——	長方形	※1.3×0.70×0.35	——	N-37°-W	二次墓壙のみ
SP-444	——	不整楕円形	1.50×0.97×0.61	0.87×0.97×0.98	N-46°-W	
SP-445	石蓋	不整方形	1.55×1.46×0.57	——	N-82°-E	二次墓壙のみ、両木口に板石
SP-455	——	不整長方形	1.34×(1.0)×0.66	1.28×0.80×0.30	N-87°-E	
SP-462	——	——	——	——	–	Fig. 7 SJ-461参照
SP-496	——	隅丸方形	0.96×0.78×0.25	0.62×0.46×0.49	N-12°-E	
SP-503	——	不整長方形	1.59×0.84×0.33	—	N-60°-E	二次墓壙のみ 弥生式土器小型甕、高坏
SP-504	——	隅丸長方形	1.44×0.72×0.47	0.94×0.72×0.70	N-79°-W	足元掘り込み
SP-505	——	——	——	——	–	
SP-516	——	隅丸方形	1.42×1.22×0.20	1.20×0.74×0.49	N-87°-W	
SP-534	——	不整円形	1.24×1.15×0.39	0.70×0.48×0.56	N-51°-W	
SP-536	——	長方形？	1.35×0.74×0.21	——	N-35°-E	
SP-674	——	隅丸長方形	1.40×1.12×0.56	0.78×0.33×0.79	N-70°-E	内部主体木棺の痕跡を残す。
SP-690	——	不整長方形	1.36×0.90×0.43	1.08×0.54×0.46	N-131°-E	
SP-691	——	不整方形	※0.8×※1.2×0.09	※0.8×※0.9×0.29	N-56°-W	
SP-699	——	不整長方形	1.40×(0.9)×0.21	1.12×0.59×0.40	N-57°-W	
SP-704	——	不整長方形	1.75×1.18×0.54	——	N-108°-E	二次墓壙のみ、足元掘り込み

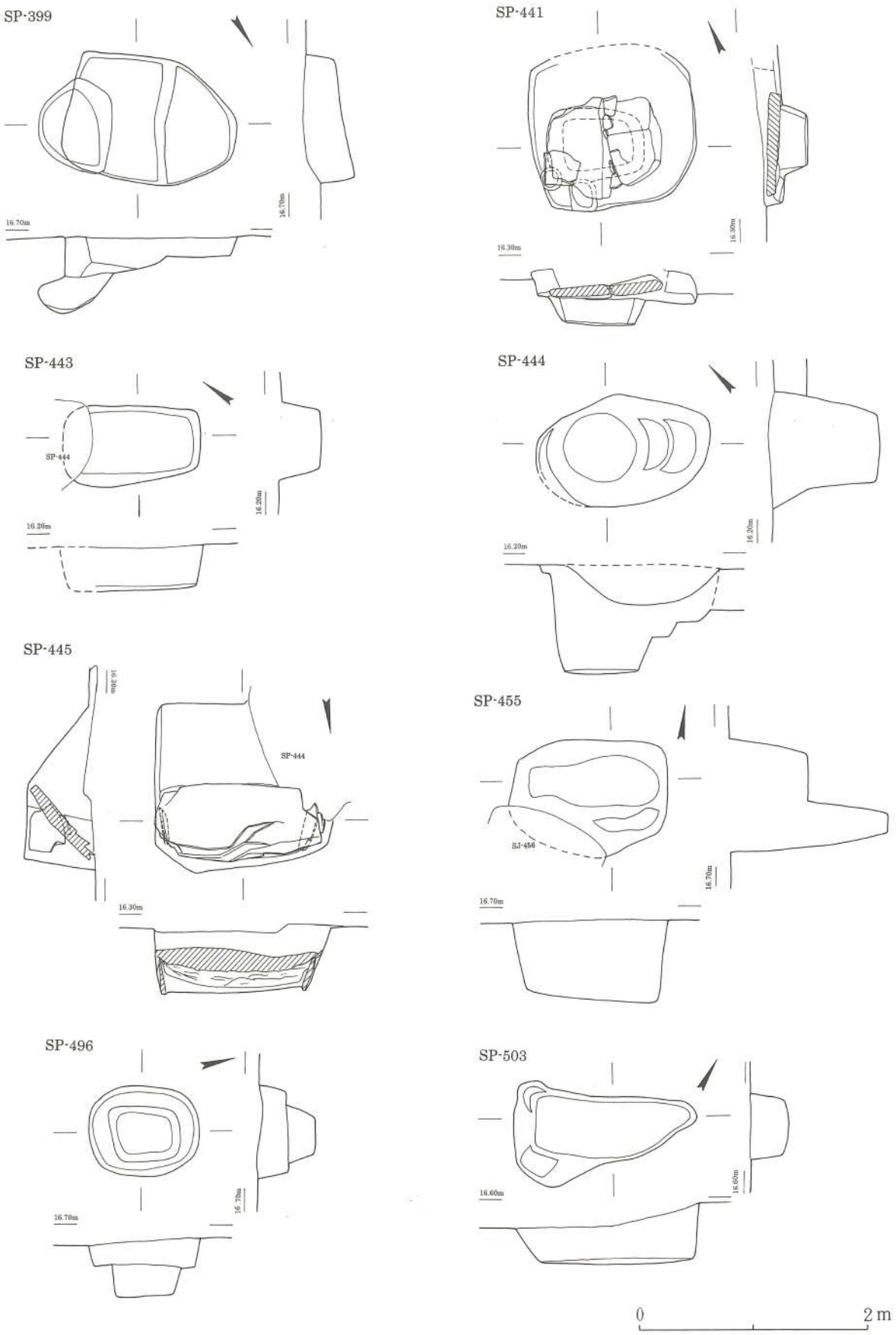


Fig. 12　土壙墓実測図(1)　SP-399・SP-441・SP-443～SP-445・SP-455・SP-496・SP-503（1/50）

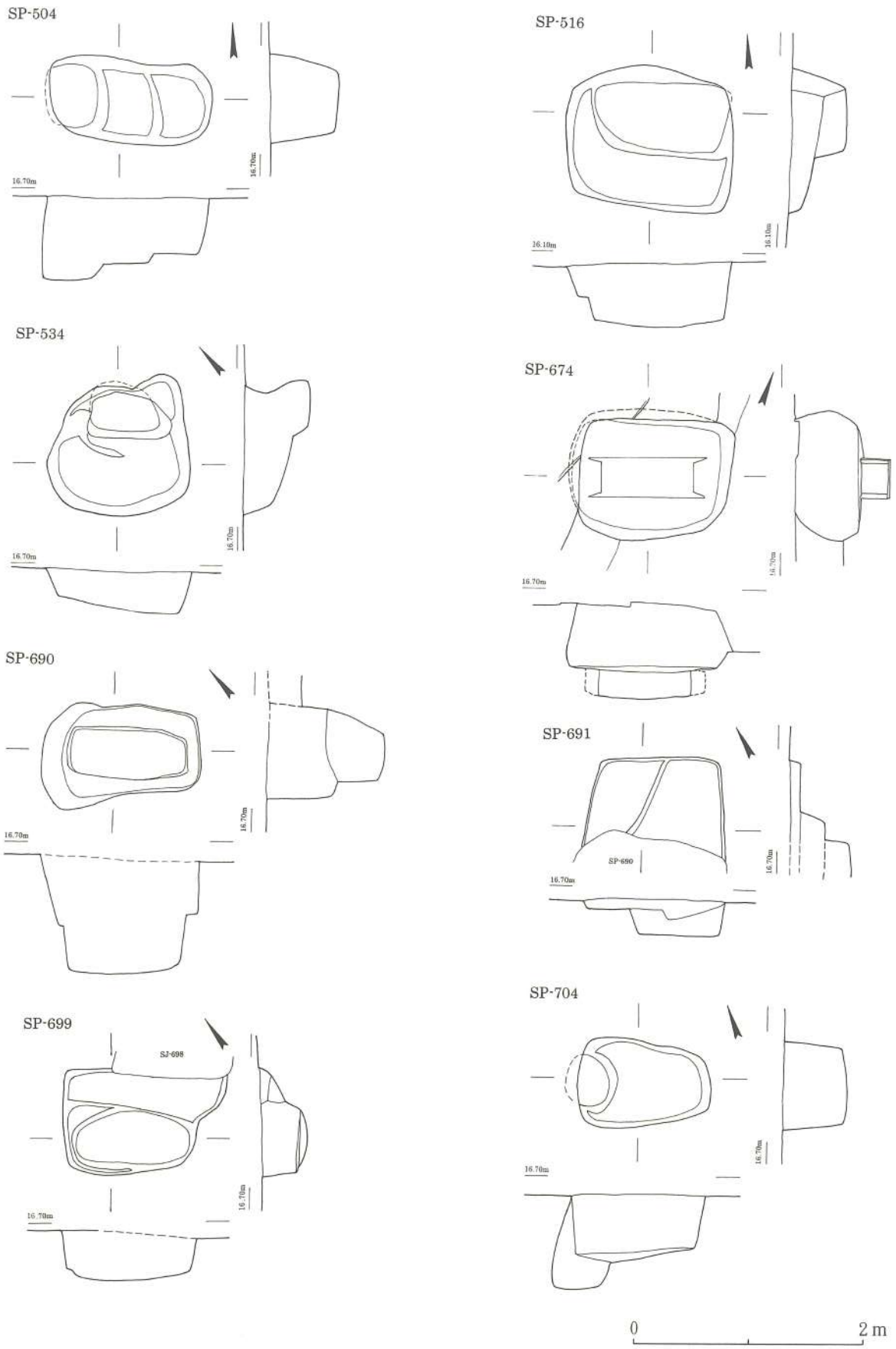


Fig. 13　土壙墓実測図(2)　SP-504・SP-516・SP-534・SP-647・SP-690・SP-691・SP-699・SK-704（1/50）

(3) **竪穴式住居址**（Fig. 4、14～24・PL. 19～30・Tab. 4）

今回の調査で検出された竪穴式住居址と考えられる遺構は、51軒であった。各住居址は、3区の南部、4区の北部および5区に集中して検出された。3区の墓域内に位置するSH-502を除くと、いずれの住居址も3区北部の甕棺墓・土壙墓が集中して営まれている墓域とは、ある程度のスペースをもって分布しており、集落内において居住区域と墓域が厳格に区分されていたものと考えられる。

また、各住居の年代は、住居の形態、出土遺物などからSH-603、SH-815の円形住居址2軒が弥生時代中期前半、SH-502・SH-815・SH-818・SH-820・SH-839・SH-842・SH-843・SH-853・SH-857・SH-864など11軒が中期、平面プランが長方形を基調とし、住居内にベッド状遺構をもつSH-593・SH-604・SH-605・SH-607・SH-609・SH-610・SH-613・SH-614・SH-615・SH-660・SH-663・SH-824・SH-825・SH-837などおよびSH-423・SH-612・SH-616・SH-618・SH-840・SH-852・SH-856など20軒は後期の所産になるものと考えられる。また土師器・須恵器などを出土したSH-424・SH-821など2軒は古墳時代の、SH-606・SH-608・SH-851・SH-855など4軒は奈良時代の所産になるものと考えられる。

とくにこれらの住居址の中で弥生時代後期の住居址と考えられるSH-423・SH-593・SH-604・SH-605・SH-607・SH-610・SH-613・SH-614・SH-615・SH-616・SH-617・SH-618・SH-633・SH-821・SH-825・SH-837などの平面プランが長方形を呈す住居址は、主柱穴の数、ベッド状遺構、壁際の貯蔵穴など住居ごとに各施設の有無などの点で差異はあるものの、規模をほぼ同じくし、住居の主軸が、ほぼ東西又はこれに直行する南北を採っていることなどから、ある同一の規制の中で営まれたものと推定される。

以下、主要な住居址について図示し報告する。

SH-383（Fig. 14・PL. 19）

SH-383は、3区J-8Gr.で検出された長方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約4.7m、短辺約3.5m、床面積は14.6㎡。主柱穴は不明、床面中央に炉状土壙をもつ。住居東隅北東壁際及び南隅床面に2ヶ所貯蔵穴状の土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは5㎝。主軸は、長軸を基準にするとN－46°－W。

SH-423（Fig. 14・PL. 19）

SH-423は、3区K-9Gr.で検出された長方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約7.0m、短辺5.5m、床面積は36.2㎡。主柱穴は住居長軸方向に2本。床面中央に方形の炉状土壙をもつ。幅30～40㎝の壁周溝が住居全周に巡る。南北両壁際中央部分にそれぞれ貯蔵穴と考えられる浅い土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは15㎝程度。主軸は、長軸を基準にするとN－70°－E。

SH-424（Fig. 14・PL. 19）

SH-424は、3区K-8Gr.で検出されたやや不整な方形の竪穴式住居址。後世の削平により住居の南東側1／2弱を失っている。規模は、推定で長辺約4.4m、短辺3.6m、床面積は遺存部分で9.4㎡。主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは15㎝程度。主軸は、推定長軸を基準にするとN－65°－W。

SH-425（Fig. 14・PL. 20）

SH-425は、3区L-9Gr.で検出された方形の竪穴式住居址。住居の南西部分は調査区外に、また住居の南東部

分が後世の削平により失われている。規模は、遺存部分で長辺5.2m以上、短辺4.0m以上、床面積は遺存部分で15.7㎡。主柱穴は不明。住居の遺存部分に幅20cm前後の壁周溝がめぐる。床面までの掘り込みの深さは35cm程度。主軸は、住居北東辺を基準にするとN－31°－W。

SH-502（Fig.15・PL.20）

SH-502は、3区H-7Gr.で検出されたやや不整な長方形の竪穴式住居址。今回の調査で墓域内にて検出された唯一の住居址である。重複して検出されたSJ-488、SJ-500を破壊し、SJ-451B、SJ-499、SJ-501に切られている。規模は、長辺約4.7m×短辺約3.0m、床面積は推定で14.1㎡。主柱穴は不明。床面中央に炉状土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは35cm程度。主軸は、長軸を基準にするとN－60°－E。

SH-593（Fig.15・PL.20）

SH-593は、4区F-8Gr.で検出された長方形の竪穴式住居址。SK-664と重複しており、南側壁の一部を、また後世の削平によって住居の南西隅部分を失っている。規模は、長辺約6.4m、短辺約4.4m、床面積は推定で25.4㎡。主柱穴は不明。床面中央に炉状土壙を、南壁際中央に貯蔵穴と考えられる土壙をもつ。また住居の南東隅には2.0m×1.2m、高さ5cm程度のベッド状遺構をもつ。床面までの掘り込みの深さは12cm程度。主軸は、長軸を基準にするとN－78°－E。

SH-594（Fig.15・PL.21）

SH-594は、4区D-8Gr.で検出された方形の竪穴式住居址。住居の大半を後世の削平により失っており北西隅部分のみが遺存する。規模は、遺存部で東西長約2.8m、南北長約3.4m、床面積は遺存部で4.7㎡。主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは5cm程度。主軸は、住居北辺を基準にするとN－23°－E。

SH-603（Fig.15・PL.21）

SH-603は、4区B-8Gr.の調査区北限で検出された円形の竪穴式住居址。住居の1／2ほどが北の調査区外に位置している。規模は、遺存部から推定すると径5.0m程度、床面積は調査部分で10.4㎡。床面に円弧状に並ぶ数本の柱穴が主柱穴と考えられるが総数は不明。調査区境界部分に炉状土壙と思われる掘り込みがみえる。床面までの掘り込みの深さは25cm程度。

SH-604（Fig.15・PL.21）

SH-604は、4区C-8Gr.の調査区北限で検出されたやや不整な長方形の竪穴式住居址。住居の1／2以上が北の調査区外に位置している。規模は、調査区内で東西長6.5m以上、南北長3.3m以上、床面積は調査部分で13.0㎡。主柱穴は不明。南壁際に貯蔵穴と考えられる土壙を2ヶ所もつ。また住居の東壁から2.5mの範囲に高さ10cm程ベッド状遺構をもつ。床面までの掘り込みの深さは20cm程度。主軸は、住居南辺を基準にするとN－82°－W。

SH-605（Fig.16・PL.22）

SH-605は、4区C-9Gr.で検出されたやや不整な長方形の竪穴式住居址。住居の西壁の一部及び南西隅部分をSX-611に切られ失っている。規模は、長辺7.6m、短辺4.7m、床面積は推定で34.0㎡程度。主柱穴は不明。住

居の南壁際に貯蔵穴と考えられる土壙を２ヶ所もつ。また住居の東壁から2.5mの範囲に高さ10cm程のベッド状遺構が作り出されている。床面までの掘り込みの深さは20cm強。主軸は、住居南辺を基準にするとN－80°－W。

SH-606（Fig. 16・PL. 22）

SH-606は、４区C-８Gr.で検出されたやや不整な方形を呈す小型の竪穴式住居址。規模は、長辺3.1m、短辺2.7m、床面積は7.2㎡。主柱穴は不明。住居の北西隅に貯蔵穴と考えられる土壙をもつ。また住居の東壁中央に馬蹄形の突出部をもち、カマドの跡かと考えられる。床面までの掘り込みの深さは20cm強。主軸は、長軸を基準にするとN－74°－W。

SH-607（Fig. 16・PL. 22）

SH-607は、４区D-９Gr.で検出されたやや不整な長方形の竪穴式住居址。規模は、長辺6.2m、短辺4.9m、床面積は29.0㎡。主柱穴は不明。住居の東西壁際に沿ってそれぞれ幅1.1m、1.2m、高さ10cm程のベッド状遺構を２ヶ所もつ。床面壁際には一部を除いて幅10～20cmの周溝がめぐる。また床面南東隅には貯蔵穴と考えられる土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは20cm弱。主軸は、長軸を基準にするとN－87°－W。

SH-608（Fig. 16・PL. 23）

SH-608は、４区D-９Gr.で検出されたやや不整な方形を呈す小型の竪穴式住居址。規模は、長辺3.2m以上、短辺3.1m、床面積は9.0㎡以上。主柱穴は不明。住居の北壁中央よりやや東によった位置に馬蹄形の突出部をもち焼土が堆積しており、カマドの跡かと考えられる。床面までの掘り込みの深さは10cm弱。主軸は、長軸を基準にするとN－９°－E。

SH-609（Fig. 17・PL. 23）

SH-609は、４区D-９Gr.で検出されたやや不整な長方形の竪穴式住居址。住居の北西部分をSH-607に切られている。規模は、長辺5.7m、短辺4.6m、床面積は推定で24.4㎡。主柱穴は２本。床面中央に炉状土壙をもち、住居の南西隅に2.4m×1.2m、高さ10cm弱のベッド状遺構が作り出されている。また、ベッド状遺構とその北側に２ヶ所に貯蔵穴状の土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは10cm強。主軸は、長軸を基準にするとN－75°－W。

SH-610（Fig. 17・PL. 23）

SH-610は、４区E-９Gr.で検出されたやや不整な方形の竪穴式住居址。住居の北東部分をSH-609に切られ、また南東部分を後世の削平により失っている。規模は、長辺4.6m、短辺3.9m、床面積は推定で17.4㎡。主柱穴は住居全体とはやや軸を異にするが、２本と考えられる。床面中央に方形の炉状土壙をもち、住居の西壁に沿って幅1.1m、高さ５cm程度のベッド状遺構が作り出されている。また、住居南壁際に貯蔵穴状の土壙をもつ。床面中央に炭化材、焼土が堆積しており、焼失住居かと推定される。床面までの掘り込みの深さは10cm強。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－90°－E。

SH-612（Fig. 17・PL. 24）

SH-612は、4区D-10Gr.で検出された不整な長方形の竪穴式住居址。後世の削平により住居の壁の立ち上がり以上を失い、床面の一部と住居の掘り方を残す状態で検出された。住居の北東部分をSX-611に切られている。規模は、長辺5.4m、短辺4.1m、床面積は推定で21.0㎡。主柱穴は2本。住居南壁際に貯蔵穴状の土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは0㎝、掘り方が深い部分で25㎝程度。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－85°－E。

SH-613（Fig. 18・PL. 24）

SH-613は、4区E-11Gr.で検出された長方形の竪穴式住居址。住居の北西部分をSH-614に切られている。規模は、長辺6.6m、短辺4.2m、床面積は推定で26.3㎡。主柱穴は2本。床面中央に方形の炉状土壙をもつ。遺存する住居のコーナーにそれぞれベッド状遺構をもち、住居南壁際に貯蔵穴状の土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは35㎝弱。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－78°－W。

SH-614（Fig. 18・PL. 24）

SH-614は、4区D-11Gr.で検出された長方形の竪穴式住居址。規模は、長辺5.6m、短辺4.5m、床面積は24.7㎡。主柱穴は2本。床面中央に炉状土壙をもつ。住居の南東部分を除きそれぞれの壁沿いにベッド状遺構が作り出されている。床面までの掘り込みの深さは25㎝弱。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－81°－W。

SH-615（Fig. 18・PL. 24）

SH-615は、4区D-12Gr.の調査区北限で検出された長方形の竪穴式住居址。住居の北西壁部分が北の調査区外に位置している。規模は、長辺6.1m、短辺3.6m以上、床面積は調査部分で17.5㎡。主柱穴は不明。住居の北東壁沿いの部分がベッド状遺構とは逆に1.1mの幅で浅く掘りくぼめられている。床面までの掘り込みの深さは25㎝弱。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－57°－E。

SH-616（Fig. 18・PL. 25）

SH-616は、4区E-11Gr.で検出された長方形の竪穴式住居址。ほぼ同じ位置に重複して営まれた住居SH-617を切っている。規模は、長辺6.3m、短辺4.1m、床面積は23.7㎡。主柱穴は2本。床面中央に炉状土壙をもち、南東壁際の中央に貯蔵穴状の土壙をもつ。また、住居の西隅及び南東壁際の一部に幅10㎝内外の周溝がみえる。床面までの掘り込みの深さは15㎝程度。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－65°－E。

SH-617（Fig. 18・PL. 25）

SH-617は、4区E-11Gr.で検出された長方形の竪穴式住居址。ほぼ同じ位置に重複して営まれた住居SH-616に切られ住居の大半が、後世の削平により南隅部分が失われている。規模は、長辺6.3m、短辺4.7m、床面積は推定で27.4㎡程度。主柱穴は2本。床面中央に炉状土壙をもち、南東壁際の中央に貯蔵穴状の土壙をもつ。また、住居の南東壁際の一部に幅10㎝程の周溝がみえる。床面までの掘り込みの深さは10㎝強。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－65°－E。

SH-618（Fig. 19・PL. 25）

SH-618は、４区 E-12Gr. で検出された長方形の竪穴式住居址。地山の傾斜により住居西側の壁の立上がりは一部を残し失われている。規模は、長辺6.0m、短辺4.5m、床面積は推定で25.3㎡程度。主柱穴は２本。床面中央に炉状土壙をもち、東壁際の中央に貯蔵穴状の土壙をもつ。また、住居の南壁際の一部に幅10㎝程の周溝がみえる。床面までの掘り込みの深さは住居東側の深いところで５㎝弱。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－２°－E。

SH-659（Fig. 19）

SH-659は、４区 C-８Gr. で検出された不正な方形の竪穴式住居址。住居南側の壁の立上がりが地山の傾斜により失われ、西側部分は、重複して営まれた住居 SH-606に切られている。規模は、遺存部で長辺2.5m、短辺2.3m、床面積は6.6㎡程度。主柱穴は不明。住居の南東隅壁際に幅10㎝程の周溝がみえる。床面までの掘り込みの深さは住居北側の深いところで10㎝弱。主軸は、住居の長軸から推定するとN－62°－W。

SH-660（Fig. 19・PL. 25）

SH-660は、４区 C-９Gr. の調査区北限で検出された方形と推定される竪穴式住居址。住居の南東隅部分のみが検出され、大半は北の調査区外に位置している。規模は、調査部分で壁の延長が1.8m×1.3m、面積は1.3㎡程度。主柱穴は不明。住居の東壁沿いに幅0.9㎝程、高さ５㎝程度のベッド状遺構をもつ。床面までの掘り込みの深さは25㎝弱。主軸は、住居の南壁を基準にするとN－81°－W。

SH-663（Fig. 19・PL. 24）

SH-663は、４区 D-11Gr. で検出された方形と推定される竪穴式住居址。重複して検出された住居 SH-613、SH-614に切られ住居の大半が失われ、北東隅部分のみが遺存している。規模は、遺存部分で東西長が3.5m、南北長が1.2m、面積は3.3㎡程度。主柱穴は不明。住居の東壁沿いに幅1.6㎝程、高さ10㎝程度のベッド状遺構をもつ。床面までの掘り込みの深さは15㎝弱。主軸は、住居の北壁を基準にするとN－80°－W。

SH-802（Fig. 19・PL. 26）

SH-802は、５区 K-20Gr. で検出された長方形の竪穴式住居址。住居の北隅及び南隅部分が重複して検出された土壙 SK-826などに切られ、失われている。規模は、長辺が4.9m、短辺が3.1m、面積は推定で13.3㎡程度。主柱穴は不明。床面中央に炉状土壙をもち、住居の西隅に方形の貯蔵穴かと考えられる土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは15㎝弱。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－48°－E。

SH-807（Fig. 19・PL. 26）

SH-807は、５区 L-19Gr. の調査区東限で検出された方形と推定される竪穴式住居址。住居の南西隅部分のみが検出され、大半は東側の調査区外に位置している。規模は、調査部分で南北長が3.0m、東西長が1.5m、面積は4.5㎡。主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは20㎝強。主軸は、住居の西壁を基準にするとN－５°－W。

SH-815（Fig. 20・PL. 27）

SH-815は、５区 M-20Gr. で検出された円形の竪穴式住居址。規模は、長径4.5m、短径4.2m、面積は13.3㎡。主柱穴は４本床面中央に炉状土壙をもち、住居北西隅に貯蔵穴と考えられる土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは15㎝程度。

SH-818（Fig. 20・PL. 27）

SH-818は、５区 M-20Gr. で検出されたやや不整な長方形の竪穴式住居址。地山の傾斜により住居の西壁部分は壁の立上りをほとんど失っている。規模は、長辺が4.6m、短辺が3.6m、面積は15.2㎡。主柱穴は不明。住居の壁が遺存する部分には周溝が巡る。床面までの掘り込みの深さは、東側の深いところで20㎝程度。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－57°－E。

SH-819（Fig. 20）

SH-819は、５区 M-19Gr. の調査区東限で検出されたやや不整な方形の竪穴式住居址。住居の北東壁部分が調査区外に位置している。住居の南および西隅部分をそれぞれ重複する住居址 SH-820、SH-821に切られ失っている。規模は、確認できる部分で長辺が3.4m、短辺が3.2m程度、面積は推定で10.6㎡程度。主柱穴は不明。住居の東隅および西隅に貯蔵穴かと思われる土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは、10㎝程度。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－34°－W。

SH-820（Fig. 20）

SH-820は、５区 N-19Gr. で検出された小型のやや不整な長方形の竪穴式住居址。住居の東隅部分が後世の削平により失われている。規模は、長辺が3.3m、短辺が2.6m、面積は推定で9.0㎡程度。主柱穴は不明。住居の西隅に貯蔵穴かと思われる土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは、20㎝程度。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－41°－E。

SH-821（Fig. 20）

SH-821は、５区 N-19Gr. で検出されたやや不整な長方形の竪穴式住居址。住居の南東部分が一部重複する住居址 SH-822により切られ失われている。規模は、長辺が6.8m、短辺が4.7m、面積は推定で28.9㎡程度。主柱穴は２本。住居の西壁際中央および東側に貯蔵穴かと思われる土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは、15㎝程度。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－３°－E。

SH-822（Fig. 21）

SH-822は、５区 N-19Gr. で検出されたやや方形の竪穴式住居址。地山の傾斜により住居の南側は約１／３の部分の壁の立上りをほとんど失っている。規模は、一辺が4.6m、面積は推定で19.6㎡程度。主柱穴は不明。住居の中央に炉状土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは、住居北部の深いところで35㎝程度。主軸は、住居の北東壁を基準にするとN－42°－W。

SH-824（Fig.21・PL.27）

SH-824は、５区O-19Gr.の調査区西限で検出された長方形と推定される竪穴式住居址。住居の北側部分は重複する住居址SH-871に切られており、住居の一部分3.2m×2.2mのみが検出された。規模は不明。調査部分でベッド状遺構が確認された。床面までの掘り込みの深さは、30cm程度。主軸は、住居の北東壁を基準にするとN－22°－W。

SH-825（Fig.21）

SH-821は、５区O-19Gr.の調査区西限で住居の北側１／２強の部分が検出された竪穴式住居址。平面プランは、やや不整な長方形と推定される。規模は、確認できる部分で長辺が3.4m以上、短辺が4.0m、面積は11.8m²以上。調査区境界付近に炉状土壙をもち、２本と推定される主柱穴のうち北側の１本が確認された。住居の北東隅に1.8m×1.2m、高さ10cmの不正な方形のベッド状遺構をもつ。床面までの掘り込みの深さは、北側の深い部分で30cm程度。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－25°－E。

SH-837（Fig.21・PL.28）

SH-837は、５区P-18Gr.で検出された長方形と考えられる竪穴式住居址。調査区の最も狭小な区域で住居中央の床面とベッド状遺構の一部が検出され、住居の北東および南西隅部分は調査区外に位置している。規模は推定で、長辺が7.2m、短辺が5.4m、面積は37.6m²程度。主柱穴は２本。住居の中央に炉状土壙をもち、南壁際中央に貯蔵穴かと思われる土壙をもつ。住居東壁沿いに幅1.1m、高さ10cmのベッド状遺構が確認された。床面までの掘り込みの深さは、深いところで15cm程度。主軸は、主柱穴を基準にするとN－87°－W。

SH-839（Fig.21）

SH-839は、５区N-19Gr.で住居の北側部分が一部検出された小型の方形竪穴式住居址。住居の南側大半はSK-870により切られ失われている。規模は、確認できる部分で東西長が2.2m、南北長が1.2m以上、面積は確認部分で1.6m²程度。主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは、10cm弱。主軸は、遺存する住居北壁を基準にするとN－16°－W。

SH-840（Fig.22）

SH-840は、５区N-18Gr.で検出された長方形の竪穴式住居址。住居の南西部分が一部重複する周溝状遺構SX-866により切られ失われ、住居の北西隅部分が調査区外に位置している。規模は、長辺が5.9m、短辺が3.6m、面積は推定で18.3m²程度。主柱穴は不明。住居の中央やや南よりに炉状土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは20cm程度。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－１°－E。

SH-851（Fig.22・PL.28）

SH-851は、５区R-17Gr.で検出されたやや不整な方形の竪穴式住居址。住居の北隅部分が調査区外に位置している。規模は、長辺が4.8m、短辺が4.6m、面積は推定で21.4m²程度。主柱穴は不明。住居の北西壁中央やや西よりに山砂や焼土が堆積しており、ここにカマドが設けられていたものと考えられる。床面までの掘り込みの深さは20cm程度。主軸は、住居のカマドの軸を基準にするとN－44°－W。

SH-852（Fig. 22・PL. 29）

SH-852は、５区 R-16Gr. で検出された長方形と考えられる竪穴式住居址。住居の西側部分が一部重複する住居址 SH-851により切られ失われ、住居の南部分が全体の１／３程度確認された。規模は、長辺が2.0m以上、短辺が3.5m、面積は確認部分で6.0㎡程度。主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは深いところで10㎝弱。主軸は、住居の長軸を基準にすると N－12°－W。

SH-853（Fig. 22・PL. 29）

SH-853は、５区 R-16Gr. で検出された不正な長方形の竪穴式住居址。住居の北西部分が一部重複する住居址 SH-852により切られ失われている。規模は、長辺が5.8m以上、短辺が3.6m、面積は推定で17.7㎡程度。住居内にピットが多数見られるが主柱穴は不明。住居の中央に炉状土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは20㎝程度。主軸は、住居の長軸を基準にすると N－51°－W。

SH-854（Fig. 23・PL. 29）

SH-854は、５区 R-16Gr. で検出された方形の竪穴式住居址。住居の南壁部分が一部確認された。規模は、確認できる南壁部分で一辺が4.3m。主柱穴は不明。住居の中央に炉状土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは深いところで10㎝弱。主軸は、住居の南壁を基準にすると N－53°－E。

SH-855（Fig. 23・PL. 29）

SH-855は、５区 S-16Gr. で住居の北西隅部分が検出された隅丸長方形と考えられる竪穴式住居址。住居の大部分が調査区外に位置する。規模は、確認長で3.3m×1.8m、確認部分の面積は4.4㎡。主柱穴は不明。住居の中央に炉状土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは35㎝程度。主軸は、住居の長軸を基準にすると N－25°－E。

SH-856（Fig. 23・PL. 30）

SH-856は、５区 R-16Gr. で検出された長方形の竪穴式住居址。住居の南西部分が一部重複する住居址 SH-853により切られ失われ、住居の北西部分が調査区外に位置している。規模は、長辺が5.0m以上、短辺が4.6m、面積は確認部分で24.6㎡。主柱穴は２本。床面までの掘り込みの深さは20㎝弱。主軸は、住居の長軸を基準にすると N－36°－W。

SH-857（Fig. 23・PL. 30）

SH-857は、５区 R-15Gr. で住居の北西部分が一部検出された隅丸方形の小型住居と考えられる竪穴式住居址。住居の大半が調査区外に位置している。北西部分が一部重複する住居址 SH-852により切られ失われている。規模は、確認部分で長辺が3.1m以上、短辺が1.2m以上、面積は確認部分で3.7㎡。主柱穴などの施設は不明。床面までの掘り込みの深さは25㎝程度。主軸は、住居の北西壁を基準にすると N－46°－E。

SH-864（Fig. 23）

SH-864は、５区 R-17Gr. の調査区西限で住居の北東側１／２強の部分が検出された不正な方形の竪穴式住居址。住居の北西部分が一部重複する住居址 SH-852により切られ失われている。規模は、長辺が4.2m、短辺が2.5m

以上、面積は確認部分で9.1㎡程度。主柱穴などの施設は不明。床面までの掘り込みの深さは10cm程度。主軸は、住居の長軸を基準にするとN－36°－W。

SH-867（Fig. 24）

SH-867は、５区P-19Gr.の調査区西限で住居の北東側１／２強の部分が検出された隅丸方形の竪穴式住居址。住居の西部分が一部重複する住居址SH-825により切られ失われている。規模は、長辺が3.6m以上、短辺が2.6m以上、面積は確認部分で8.1㎡程度。主柱穴などの施設は不明。床面までの掘り込みの深さは25cm弱。主軸は、住居の北東壁を基準にするとN－37°－W。

SH-871（Fig. 24）

SH-871は、５区O-19Gr.で検出されたやや不正な長方形の竪穴式住居址。住居の南東隅を中心に東壁及び南壁のそれぞれ一部が確認された。住居の西側部分は調査区外に位置している。規模は確認長で、東壁が4.6m以上、南壁が4.8m以上、面積は確認部分で20.8㎡程度。主柱穴などの施設は不明。床面までの掘り込みの深さは30cm弱。主軸は、住居の長軸と考えられる南壁を基準にするとN－76°－E。

Tab. 4　船石南遺跡３・４・５区出土竪穴式住居址一覧表

住居址番号	平面形態	規模（m・㎡）				棟方向	屋内施設				出土遺物	備考
		長辺	短辺	深さ	床面積		主柱穴	溝	炉・焼土など	その他		
SH-383	長方形	4.7	3.5	0.05	14.6	N-46°-W			貯蔵穴２			
SH-423	長方形	7.0	5.5	0.15	※36.2	N-70°-E	２本	○	炉状土壙 貯蔵穴２		弥生式土器壺	
SH-424	方形	(4.4)	(3.6)	0.15	※9.4	N-65°-W					土師器甕 須恵器壺	
SH-452	方形	※5.2	※4.0	0.35	※15.7	N-31°-W		○				
SH-502	長方形	4.7	3.0	0.35	(14.1)	N-42°-E			炉状土壙		弥生式土器甕	
SH-593	長方形	6.4	4.4	0.28	(25.4)	N-78°-E			炉状土壙 貯蔵穴	ベッド	弥生式土器甕、壺、ミニチュア	
SH-594	方形	※2.8	※3.4	0.05	※4.7	N-23°-E						
SH-603	円形	(5.0)		0.25	※10.4	—					弥生式土器鉢	
SH-604	長方形	※6.5	※3.3	0.20	※13.0	N-82°-W			貯蔵穴２	ベッド		
SH-605	長方形	7.7	4.7	0.22	34.0	N-80°-W				ベッド	弥生式土器甕、壺、石包丁、土弾	
SH-606	方形	3.1	2.7	0.21	7.2	N-74°-W			カマド？ 貯蔵穴		土師器甕、皿	
SH-607	長方形	6.2	4.9	0.19	29.0	N-87°-W		○	貯蔵穴	ベッド	弥生式土器甕、高坏？	
SH-608	方形	※3.2	3.1	0.09	※9.0	N-9°-E			カマド			
SH-609	長方形	5.7	4.6	0.12	(24.4)	N-75°-W	２本		炉状土壙 貯蔵穴２	ベッド		
SH-610	方形	4.6	3.9	0.12	(17.4)	N-90°-E	２本		炉状土壙 貯蔵穴	ベッド		焼失住居
SH-612	長方形	5.4	4.1	—	(21.0)	N-85°-E	２本		貯蔵穴		弥生式土器甕	
SH-613	長方形	6.6	4.2	0.33	(26.3)	N-78°-W	２本		炉状土壙 貯蔵穴	ベッド	弥生式土器甕、壺、碗、鉢）	
SH-614	長方形	5.6	4.5	0.24	24.7	N-81°-W	２本		炉状土壙	ベッド	弥生式土器甕、碗、器台、鉢、石包丁	
SH-615	長方形	6.1	※3.6	0.23	※17.5	N-57°-E					弥生式土器甕、鉢	

住居址番号	平面形態	規模（m・m²）				棟方向	屋内施設				出土遺物	備考
		長辺	短辺	深さ	床面積		主柱穴	溝	炉・焼土など	その他		
SH-616	長方形	6.3	4.1	0.15	23.7	N-65°-E	2本	○	炉状土壙 貯蔵穴		弥生式土器甕、壺、碗、鉢、石包丁	
SH-617	長方形	6.3	4.7	0.12	(27.4)	N-65°-E	2本	○	炉状土壙 貯蔵穴		石包丁	
SH-618	長方形	6.0	4.5	0.05	(25.3)	N-2°-E	2本	○	炉状土壙 貯蔵穴		弥生式土器甕、鉢、ミニチュア	
SH-659	方形	※2.5	※2.5	0.08	※6.6	N-62°-W		○				
SH-660	方形	※1.8	※1.3	0.23	※1.3	N-81°-W				ベッド		
SH-663	方形	※3.5	※1.2	0.14	※3.3	N-80°-W				ベッド		
SH-802	長方形	4.6	3.1	0.14	(13.3)	N-48°-E			炉状土壙 貯蔵穴？			
SH-807	方形	※3.0	※1.5	0.22	※4.5	N-5°-W						
SH-815	円形	4.5	4.2	0.14	13.3	—	4本		炉状土壙 貯蔵穴		縄文式土器鉢、土師器？高坏	
SH-818	長方形	4.6	3.6	0.20	15.2	N-57°-E		○			弥生式土器甕、壺	
SH-819	方形	3.4	(3.2)	0.11	(10.6)	N-34°-W			貯蔵穴			
SH-820	長方形	3.3	2.6	0.20	(9.0)	N-41°-E			貯蔵穴		弥生式土器鉢、高坏、器台、砥石	
SH-821	長方形	6.8	4.7	0.16	(28.9)	N-3°-E	2本		貯蔵穴		須恵器坏蓋	
SH-822	長方形	4.6	4.5	0.36	(19.6)	N-42°-W			炉状土壙		土師器甕	
SH-824	長方形	※3.2	※2.2	0.29	※3.4	N-22°-W				ベッド		
SH-825	不整長方形	※3.4	4.0	0.32	※11.8	N-25°-E	2本		炉状土壙	ベッド	弥生式土器甕、高坏、碗、器台、ミニチュア	
SH-837	長方形	(7.2)	(5.4)	0.15	(37.6)	N-87°-W	2本		炉状土壙 貯蔵穴	ベッド	弥生式土器甕	
SH-839	方形	2.2	※1.2	0.08	※1.6	N-16°-W					弥生式土器甕、碗、壺	
SH-840	長方形	5.9	3.6	0.19	(18.3)	N-1°-E			炉状土壙		弥生式土器甕、壺、高坏、甑	
SH-842	長方形？	※3.6	※1.2	0.25	※3.2	—					弥生式土器甕、壺、高坏、鉄剣	
SH-843	長方形？	※1.9	※1.3	—	※6.0	—					弥生式土器甕、壺	
SH-851	不整方形	4.8	4.6	0.23	(21.4)	N-44°-W			カマド		土師器甕、甑 須恵器坏、甕？	
SH-852	長方形	※2.0	3.5	0.09	※6.0	N-12°-W					弥生式土器甕、碗	
SH-853	不整長方形	※5.8	3.6	0.23	(17.7)	N-51°-W			炉状土壙		弥生式土器甕	
SH-854	方形？	(4.3)	—	0.08	—	N-53°-E						
SH-855	不整長方形	※3.3	※1.8	0.34	※4.4	N-25°-E					土師器甕	
SH-856	長方形	※5.0	4.6	0.17	※24.6	N-36°-W	2本				弥生式土器甕、碗、甑	
SH-857	隅丸方形？	※3.1	※1.2	0.24	※5.8	N-46°-E					弥生式土器甕	
SH-864	不整方形	4.2	※2.5	0.10	※9.1	N-36°-W					弥生式土器甕	
SH-867	不整長方形	3.6	※2.6	0.23	※8.1	N-37°-W						
SH-871	長方形	※4.8	4.6	0.28	※20.8	N-76°-E						
SH-872	長方形？	※1.8	※1.0	—	—	—						

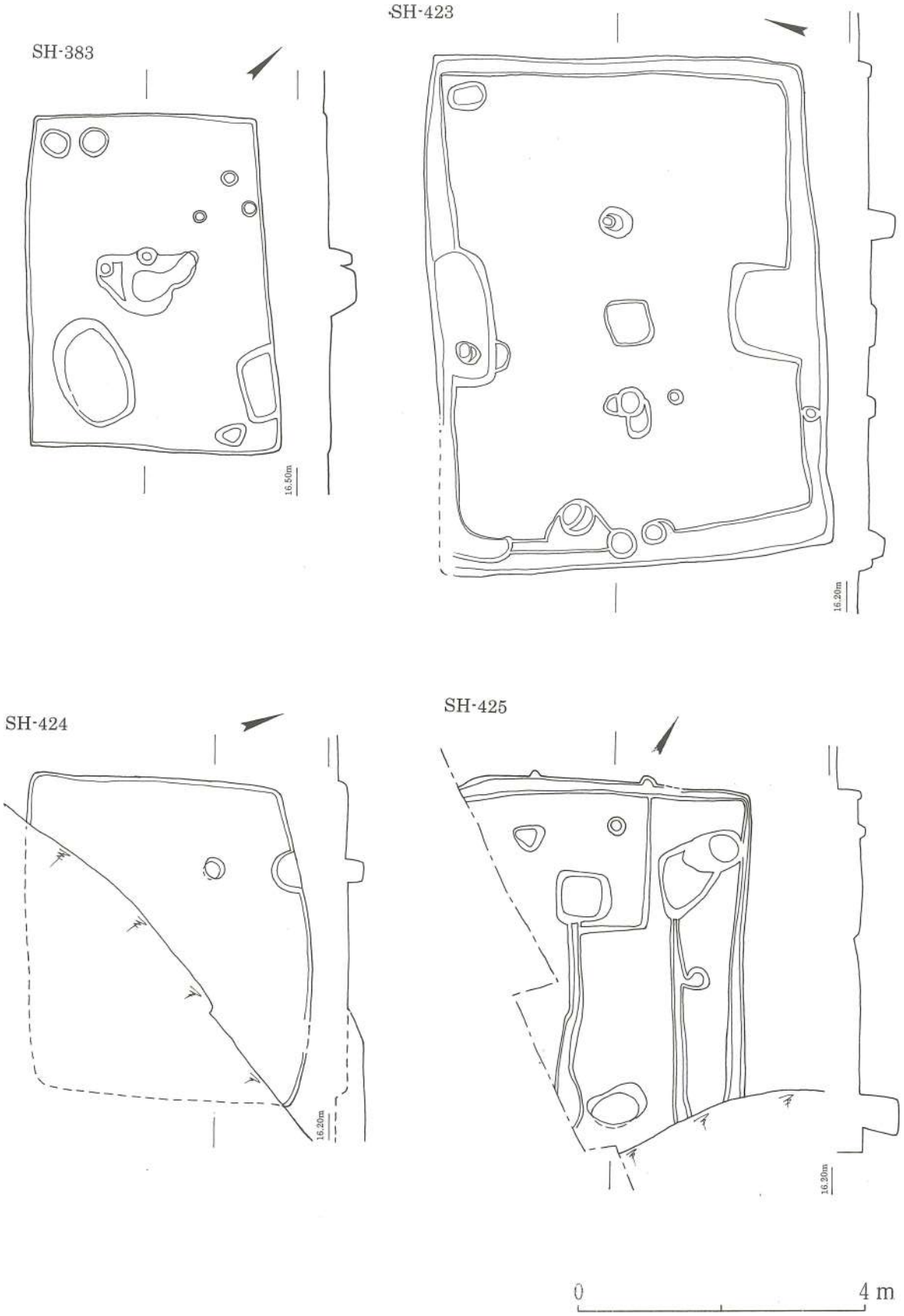


Fig. 14　竪穴式住居址実測図(1)　SH-383・SH-423～SH-425（1/80）

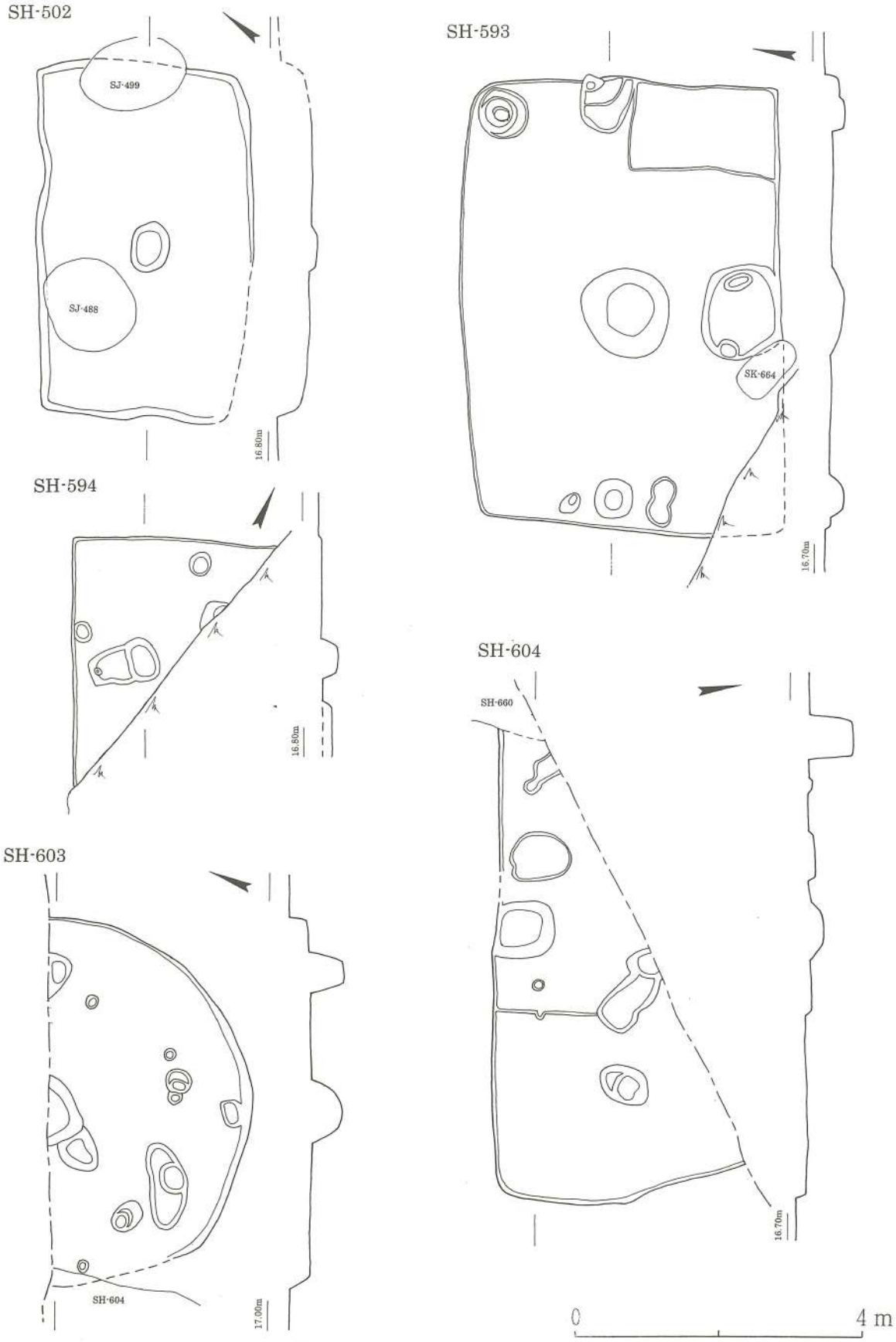


Fig. 15　竪穴式住居址実測図(2)　SH-502・SH-593・SH-594・SH-603・SH-604（1/80）

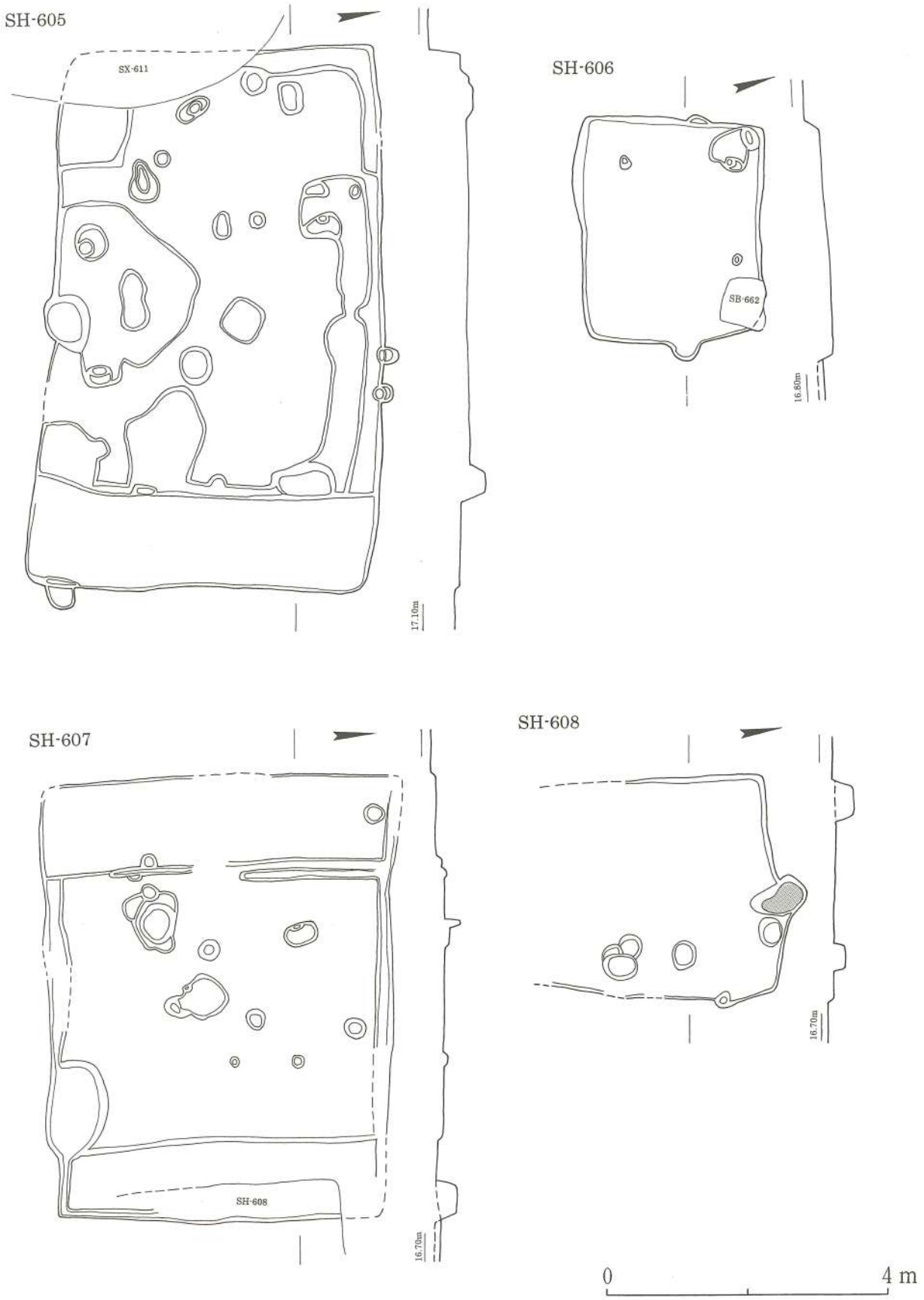


Fig. 16　竪穴式住居址実測図(3)　SH-605～SH-608（1/80）

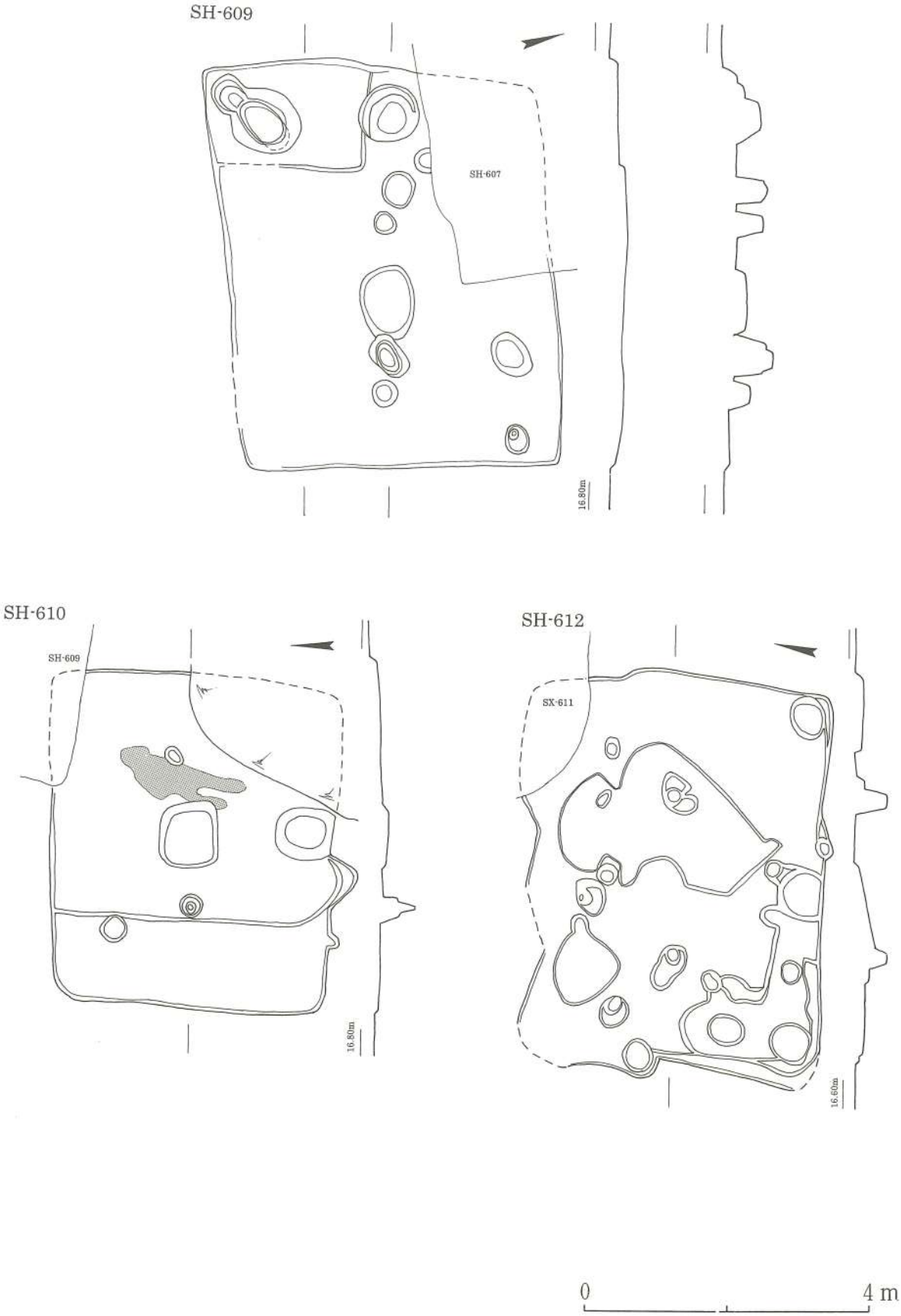


Fig. 17　竪穴式住居址実測図(4)　SH-609・SH-610・SH-612（1/80）

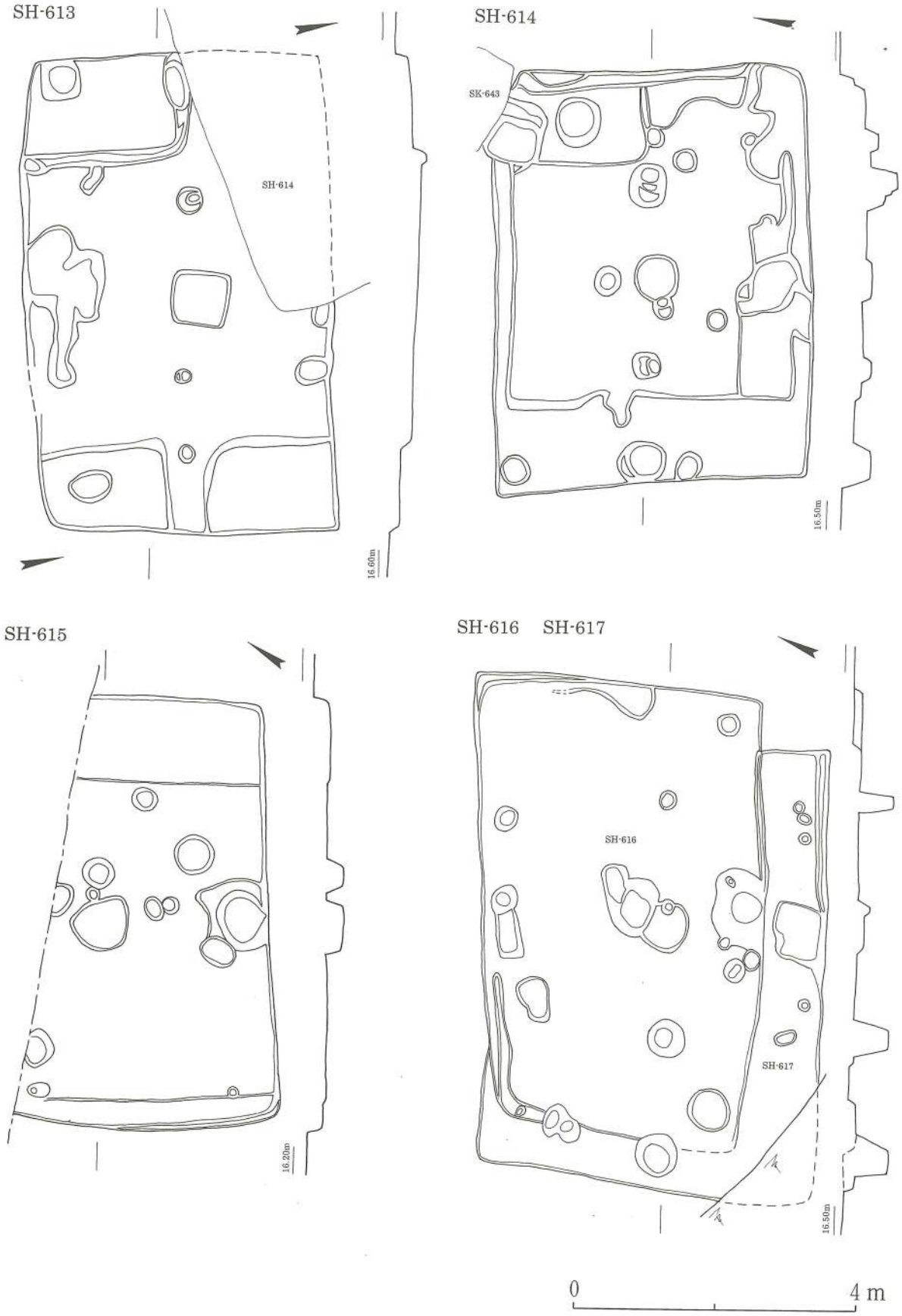


Fig. 18　竪穴式住居址実測図(5)　SH-613～SH-617（1/80）

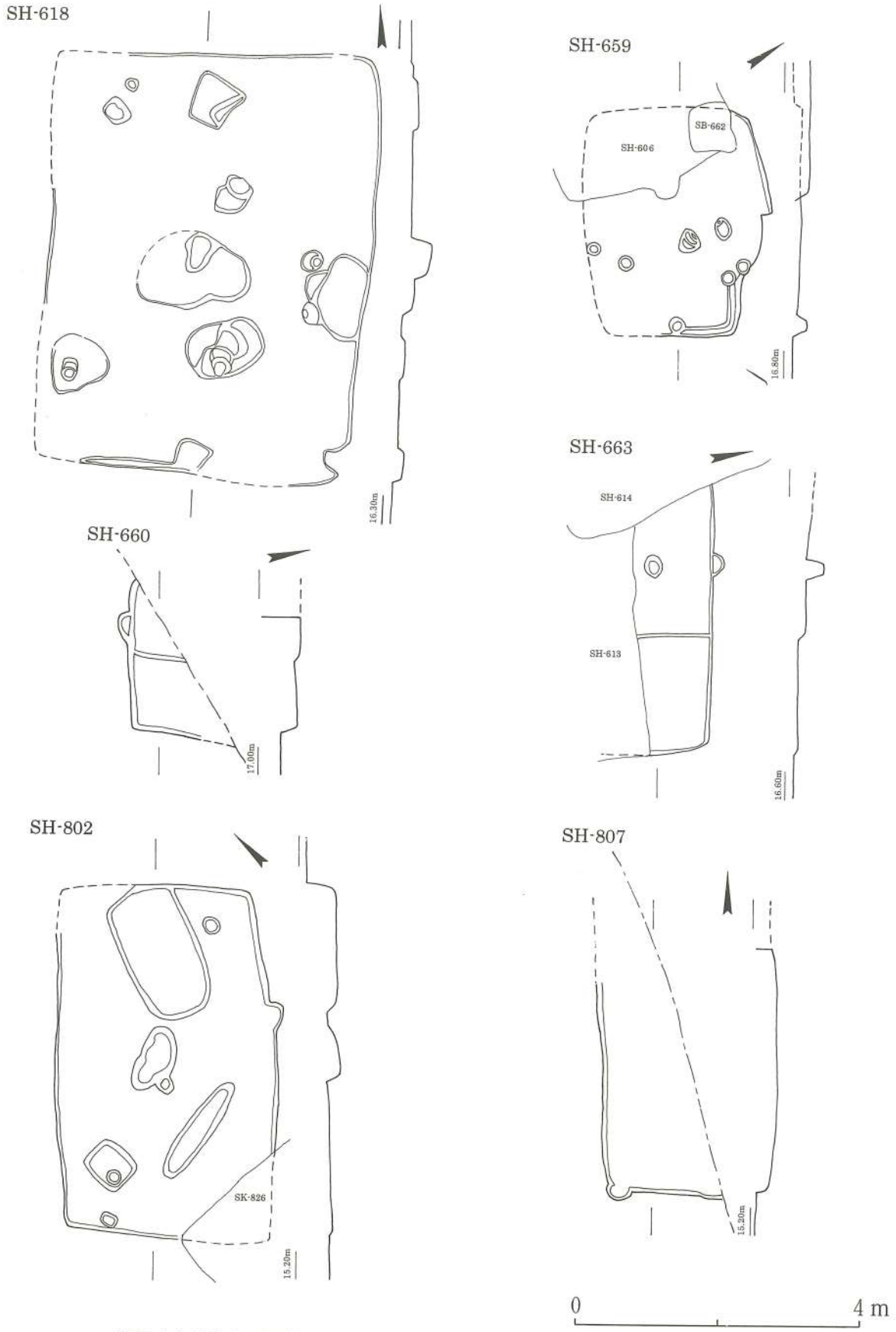


Fig. 19　竪穴式住居址実測図(6)　SH-618・SH-659・SH-660・SH-663・SH-802・SH-807（1/80）

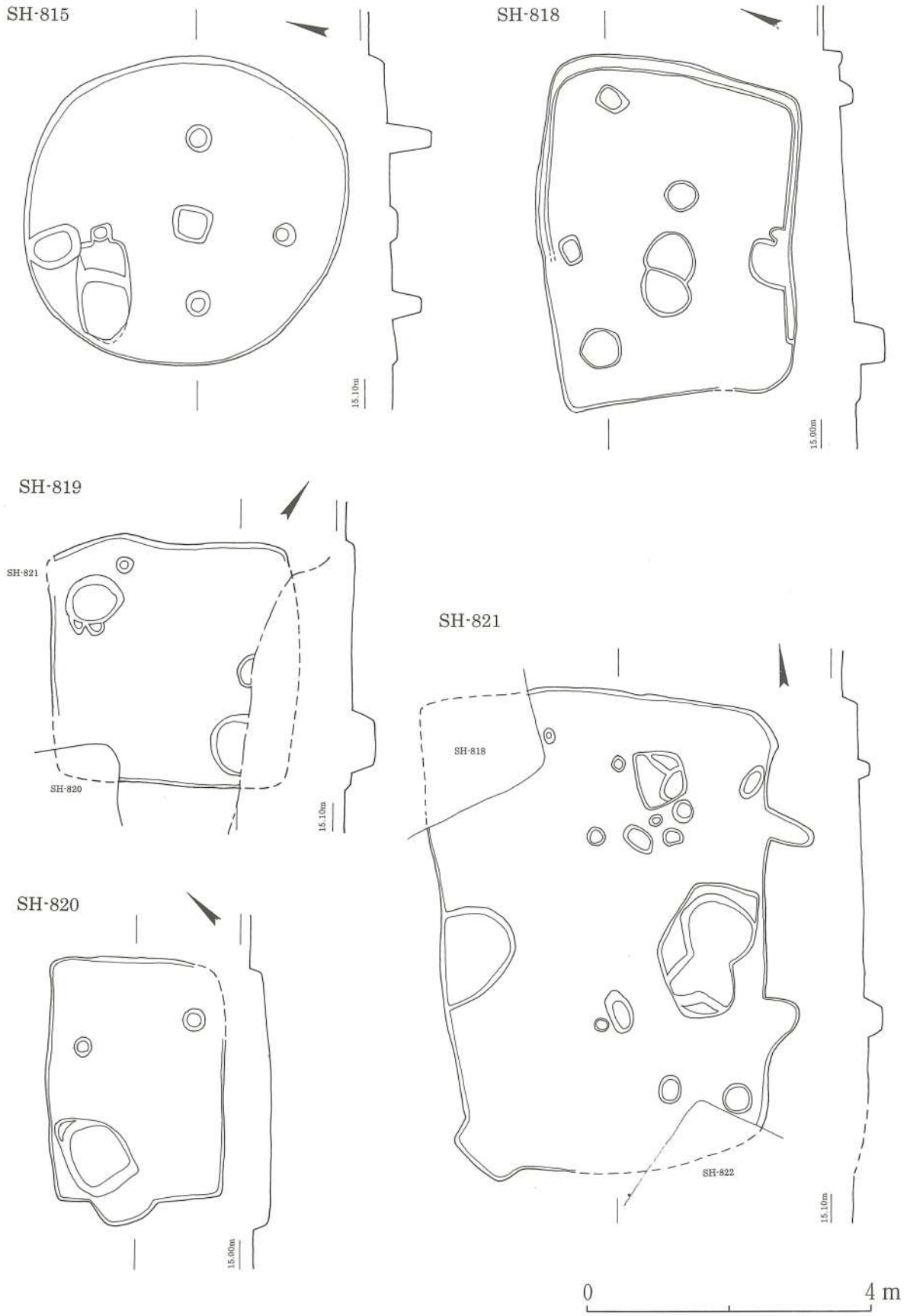


Fig. 20　竪穴式住居址実測図(7)　SH-815・SH-818～SH-821（1/80）

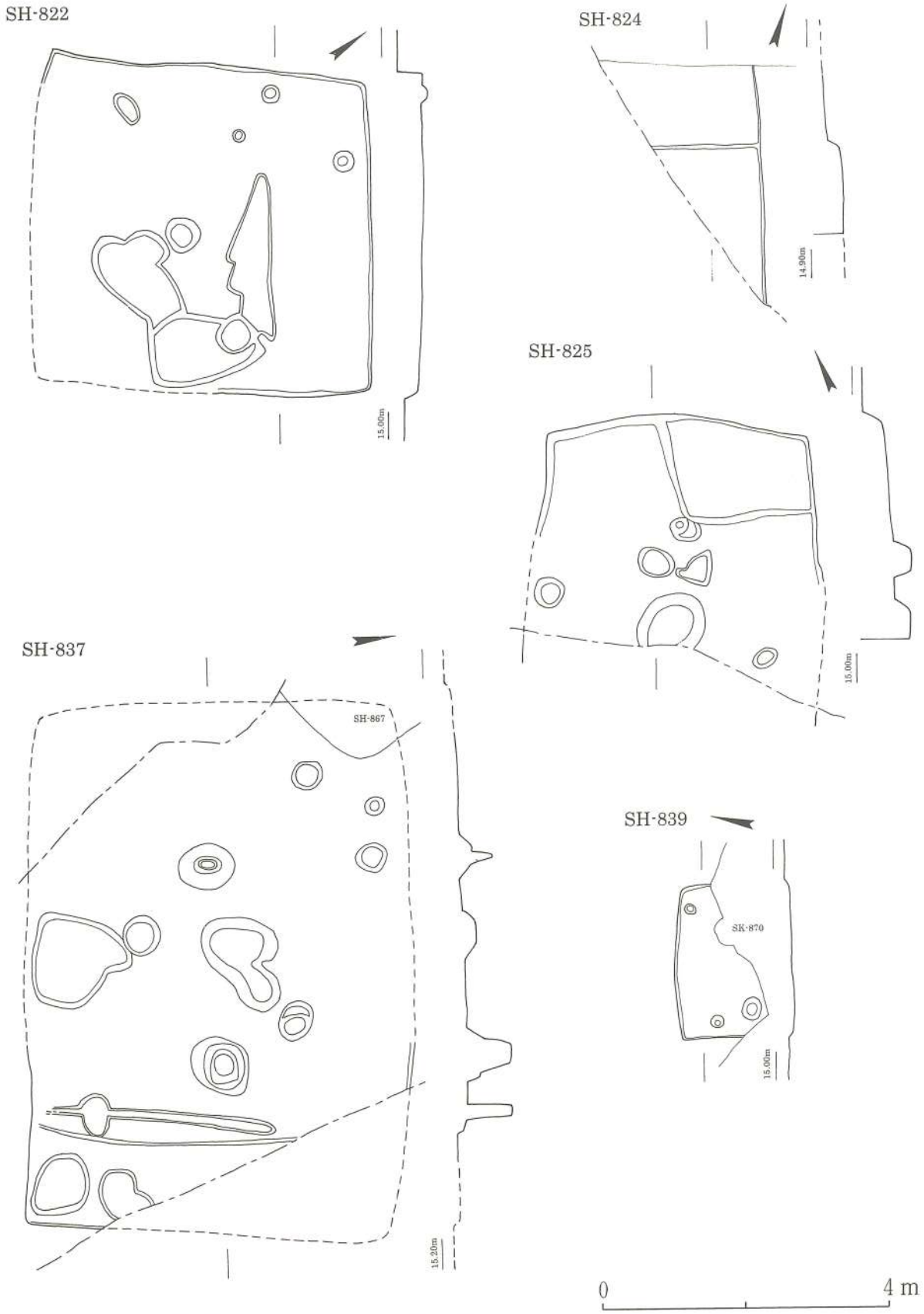


Fig. 21　竪穴式住居址実測図(8)　SH-822・SH-824・SH-825・SH-837・SH-839（1/80）

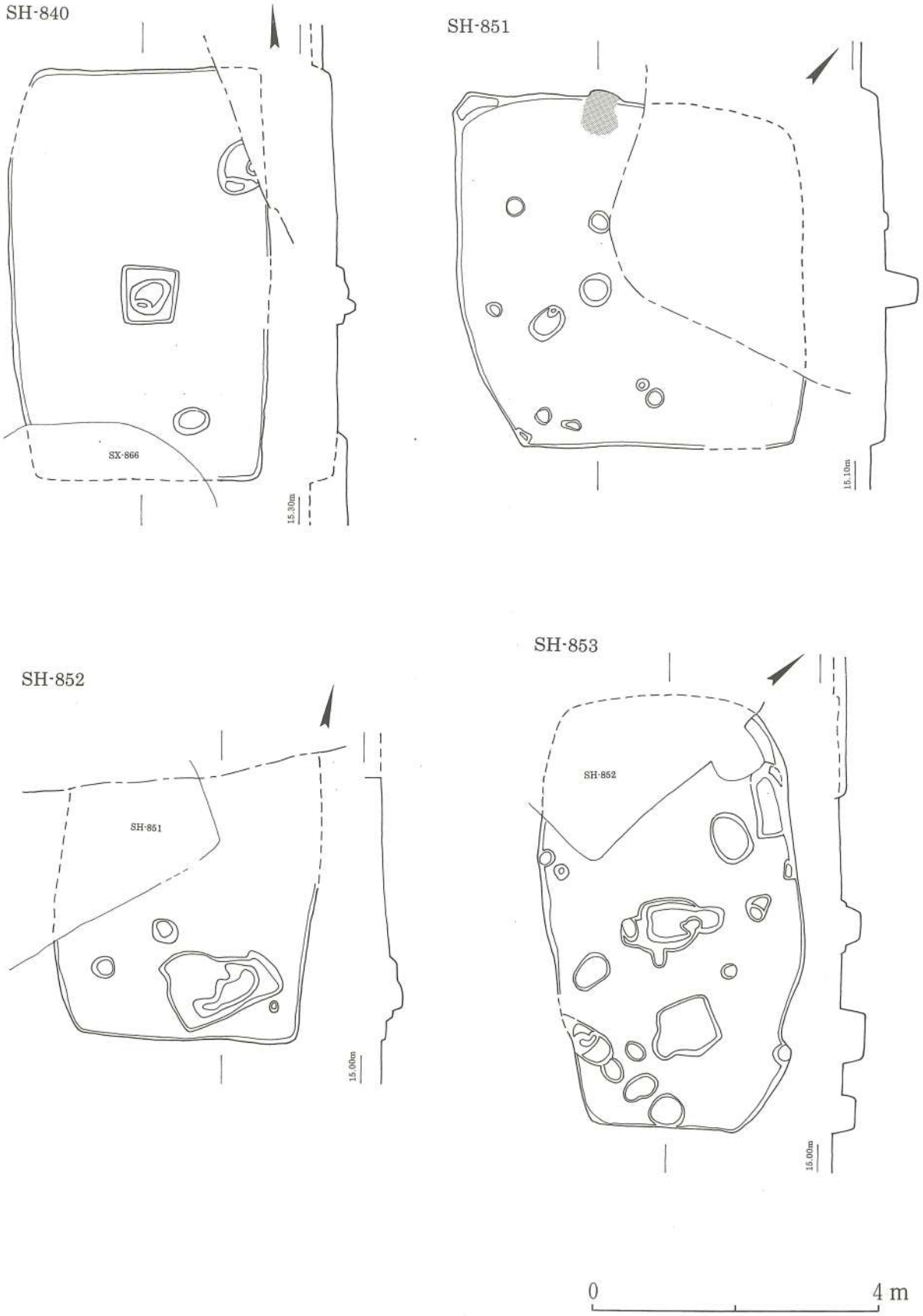


Fig. 22　竪穴式住居址実測図(9)　SH-840・SH-851～SH-853（1/80）

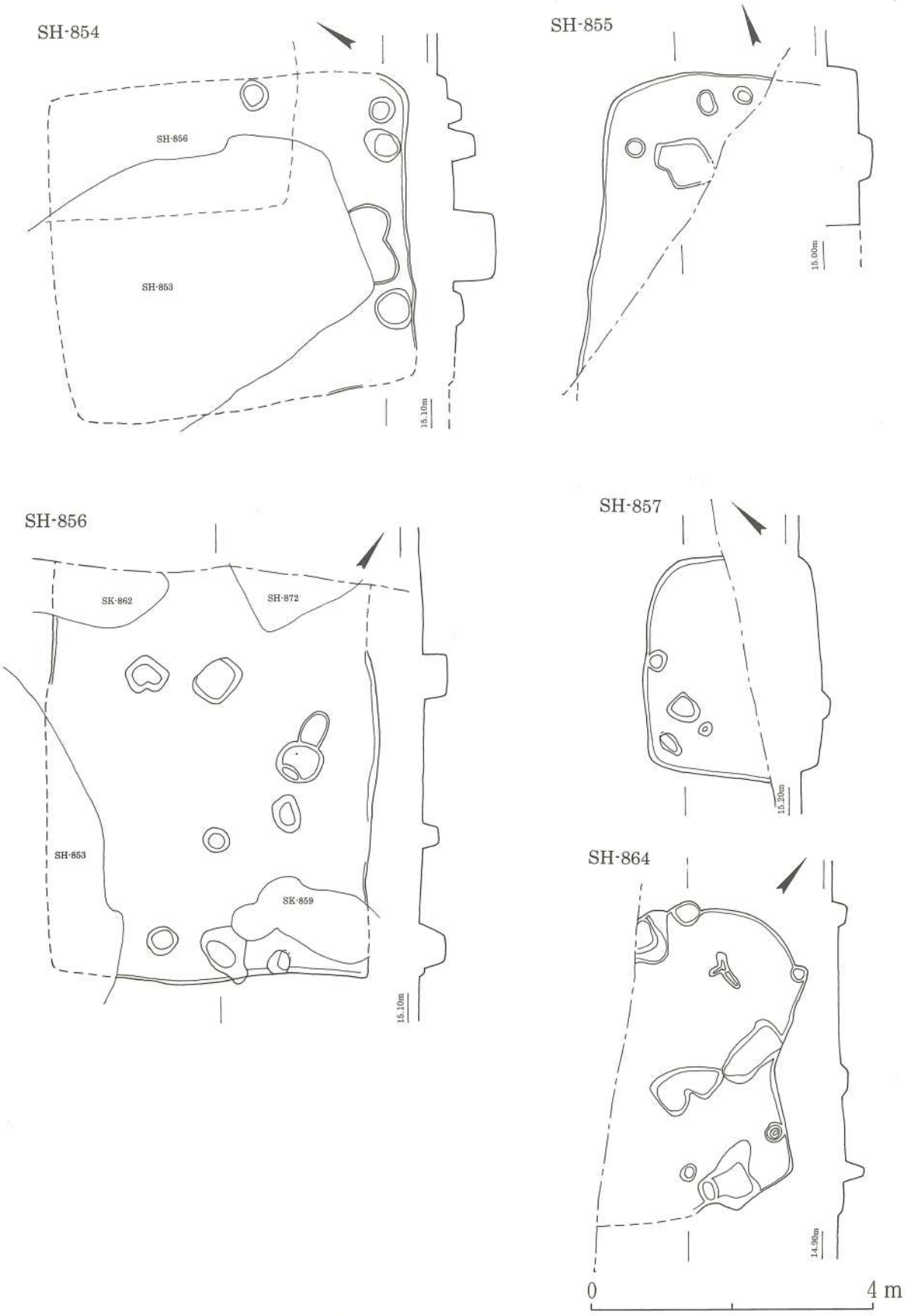


Fig. 23　竪穴式住居址実測図(10)　SH-854～SH-857・SH-864（1/80）

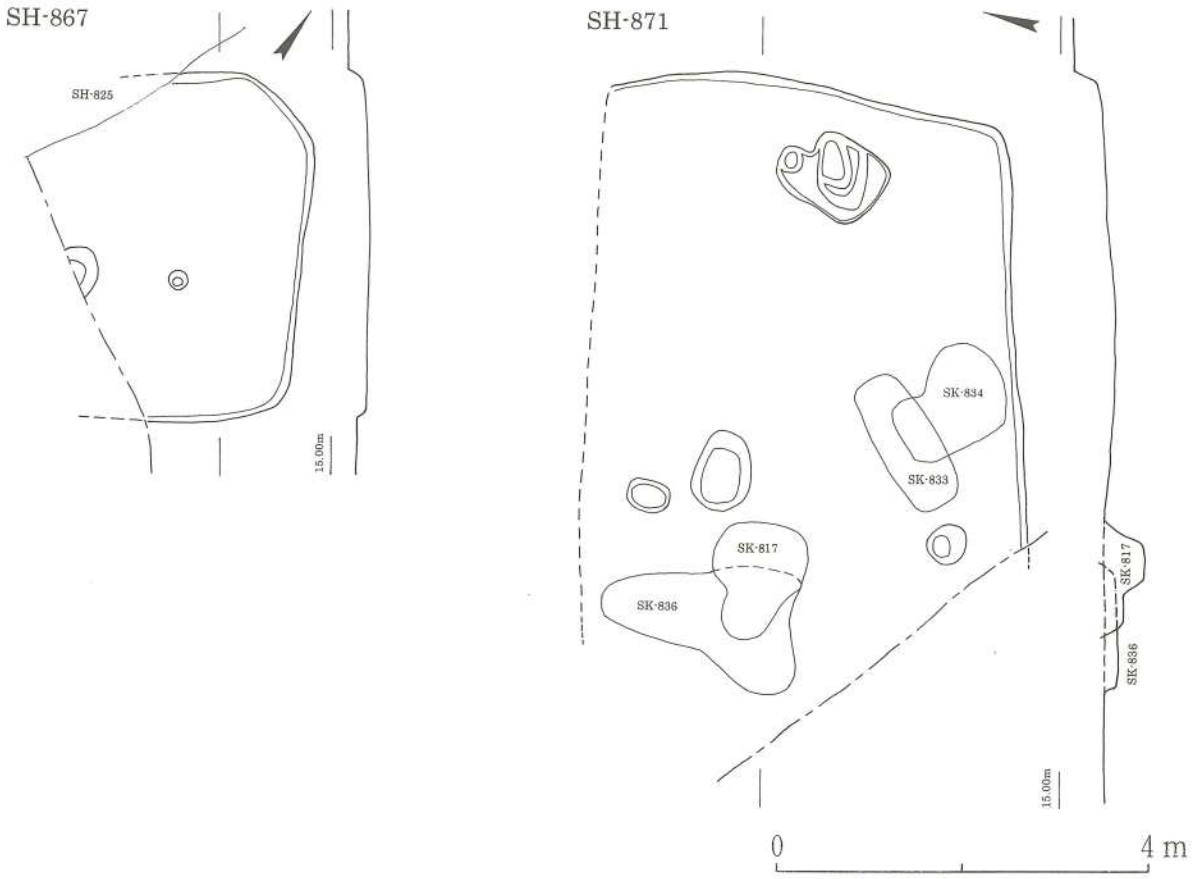


Fig. 24　竪穴式住居址実測図(11)　SH-867・SH-871（1/80）

(4)　**掘立柱建物址**（Fig. 4、25、26・PL. 30、31・Tab. 5）

今回の調査で検出された掘立柱建物址と考えられる遺構は、SB-656・SB-662・SB-714・SB-869の4棟であった。

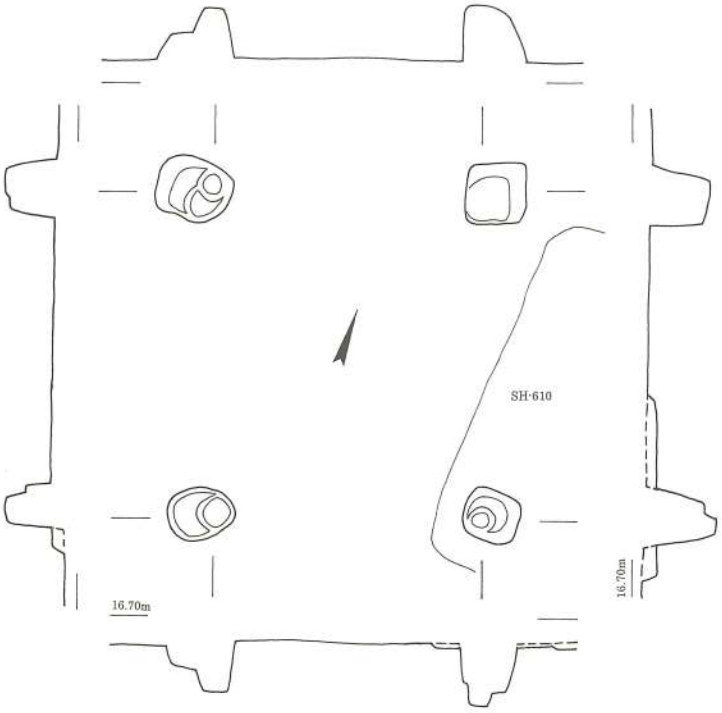
4区で検出されたSB-656・SB-662・SB-714の3棟は、いずれも平面形態が1間×1間と考えられる建物で、配置等から見てもある程度同一の目的で立てられたものと推測できる。SB-656は4区北東部のC-8Gr.で、SB-662は4区中央のE-10Gr.で、SB-714は4区西部のE-11Gr.でそれぞれ検出された。これら3棟の建物の柱穴の掘り方は、一辺60cm程度の方形を基調とし、深さ20～80cmほどのものがほとんどである。

また、5区の北西部M-21Gr.で検出されたSB-869は、調査区の西限に位置し2間×1間の柱穴が確認された。柱穴の掘り方は、20～50cm程度の円形を基調とし、深さはいずれも20cm弱と浅い。

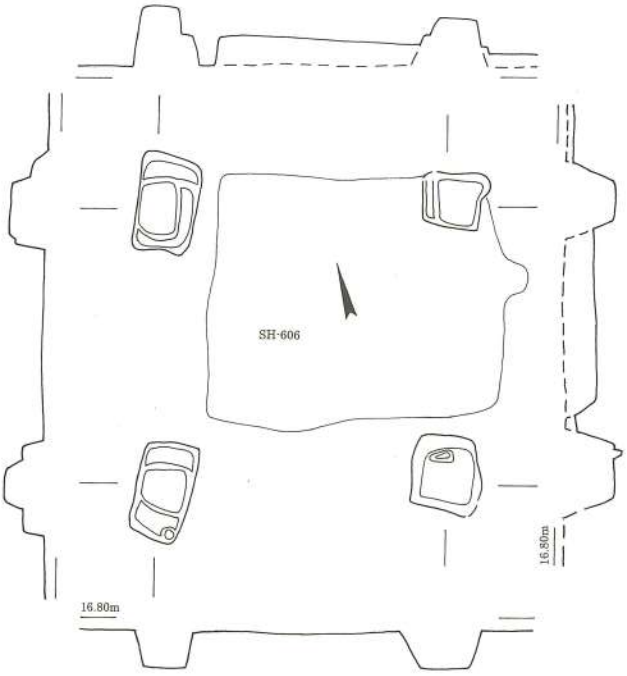
各建物の年代は、柱穴などから時期が特定できるような遺物の出土がなく断定はできないが、形態や規模などから住居址群と同様、弥生時代中期から後期の所産になるものと考えられる。

以下、法量などを一覧表にまとめ報告する。

SB-656



SB-662



0 4 m

Fig. 25 掘立柱建物址実測図(1) SB-656・SB-662 (1/80)

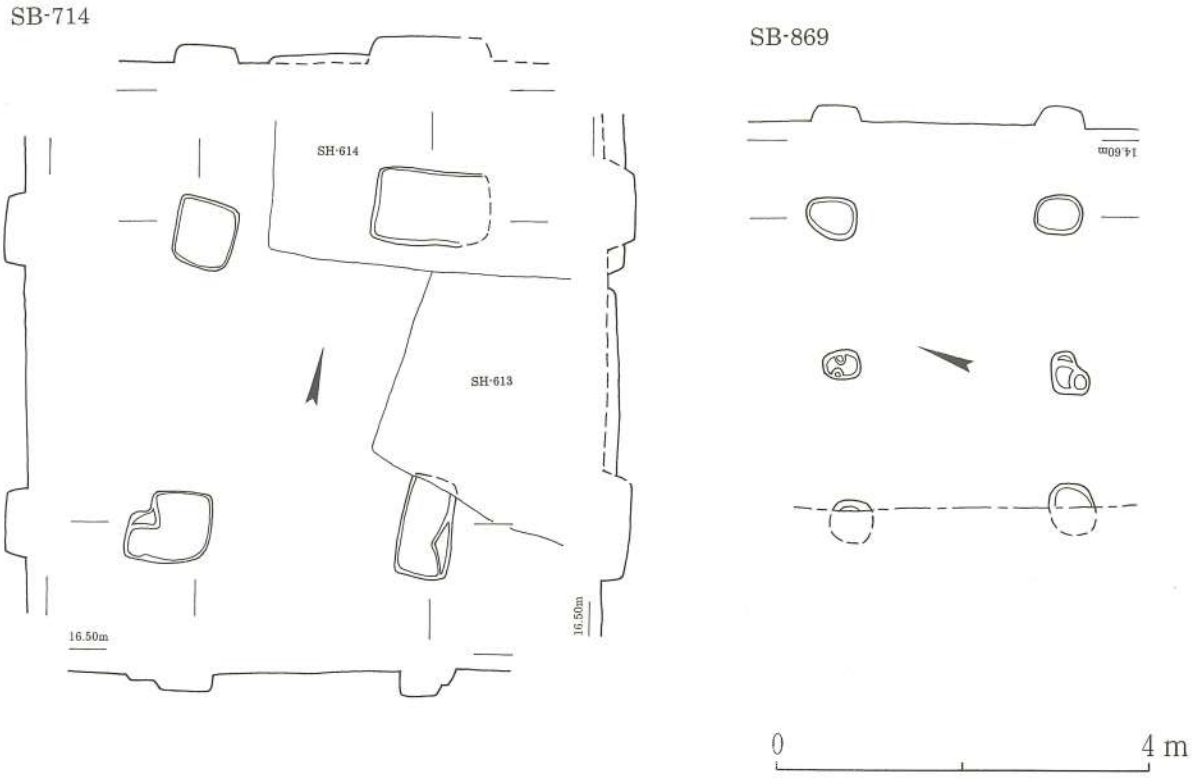


Fig. 26　掘立柱建物址実測図(2)　SB-714・SB-869（1/80）

Tab. 5　船石南遺跡3・4・5区出土掘立柱建物址一覧表

建物址番号	平面形態	規模（m、m²）				棟方向
		桁行	梁行	長さ×幅	面積	
SB-656	1×1	3.5	2.8	3.5×2.8	9.8	N-20°-W
SB-662	1×1	3.4	3.0	3.4×3.0	10.2	N-16°-E
SB-714	1×1	3.3	2.5	3.3×2.5	8.3	N-13°-W
SB-869	2×1	1.6	2.4	3.2×2.4	7.7	N-31°-E

(5) 土　壙（Fig. 4、27～31・PL. 32、33・Tab. 6）

今回の調査で一般の土壙として取り扱った遺構は55基であった。これらの土壙のうち、出土遺物などから時期が特定できる土壙は、刻み目凸帯文土器を出土した弥生時代前期のSK-619、SK-849、弥生時代中期の土器をもつSK-416、SK-507、SK-621、SK-622、SK-642、SK-643、SK-664、SK-800、SK-832、SK-861、SK-862、後期の土器をもつSK-827、SK-853などがあるが、その他の土壙は、まとまった遺物をもつものも少なく、時期を特定するまでには至らなかったが、ほとんどが弥生時代中期から後期前半までの範疇に収まるものと考えられる。

以下、各土壙を図示し、形態、法量等を一覧表にまとめ報告する。

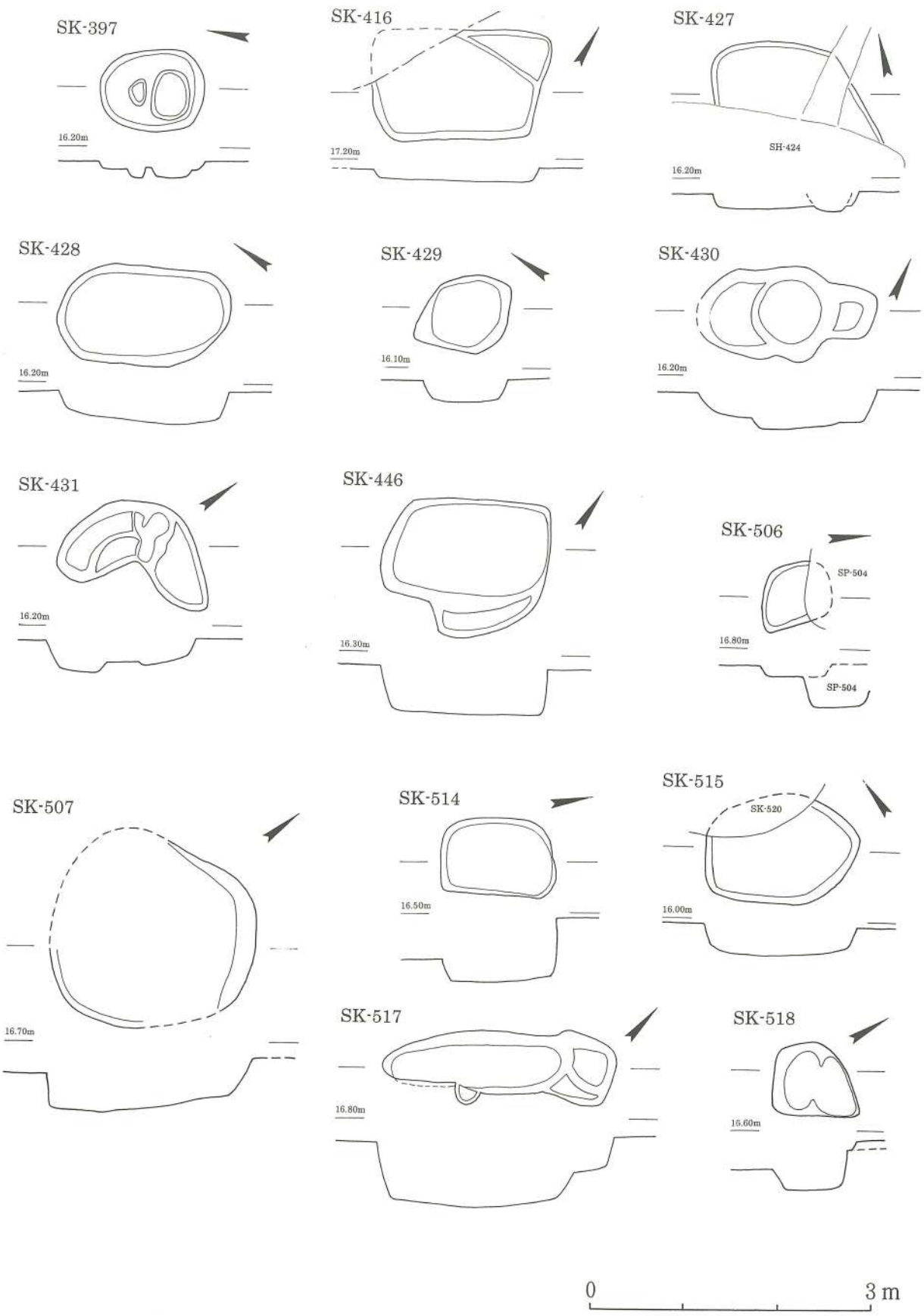


Fig. 27　土壙実測図(1)　SK-397・SK-416・SK-427～SK-431・SK-446・SK-506・SK-507・SK-514・SK-515・SK-517・SK-518（1/60）

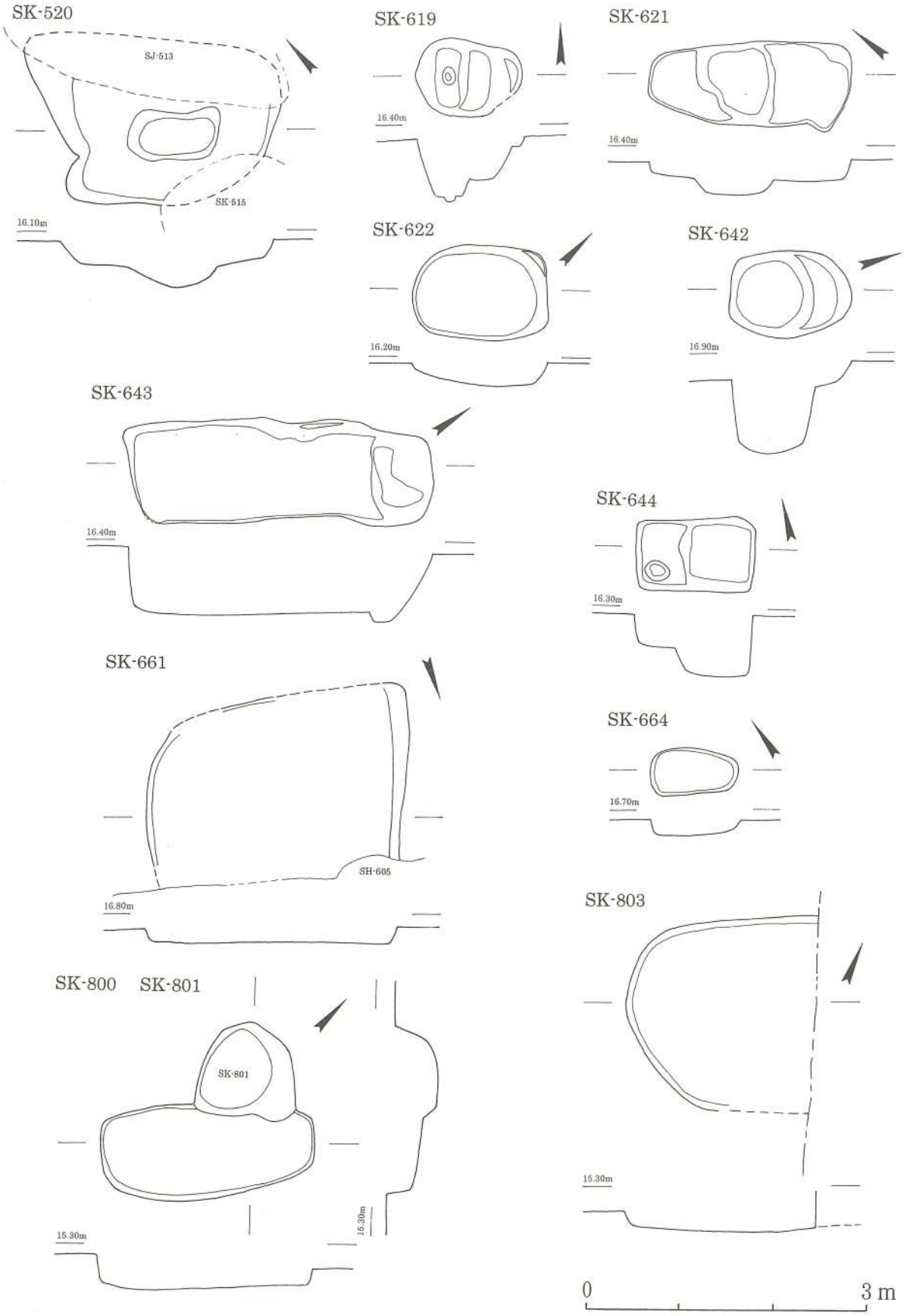


Fig. 28　土壙実測図(2)　SK-520・SK-619・SK-621・SK-622・SK-642～SK-644・SK-661・SK-664・SK-800・SK-801・SK-803（1/60）

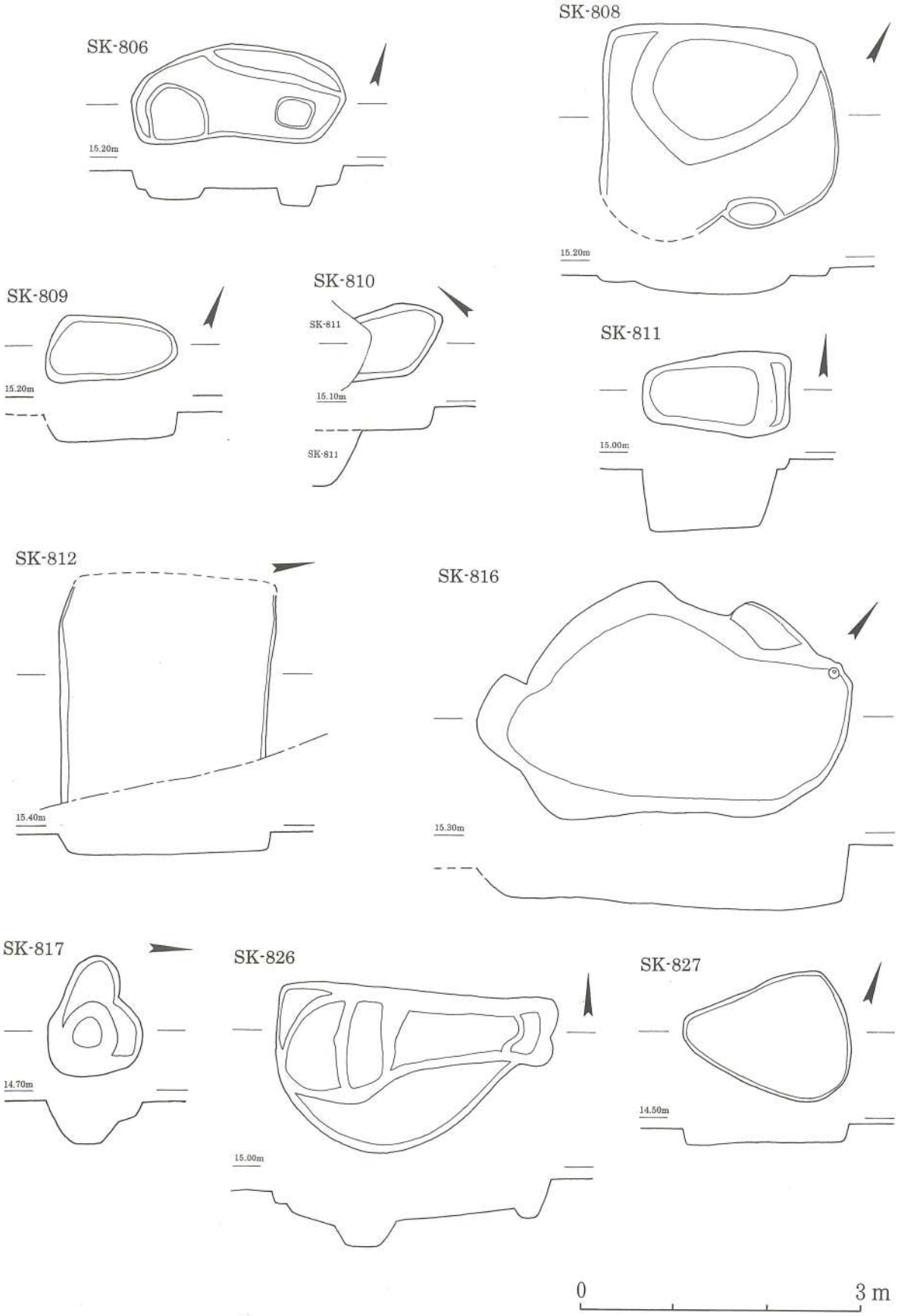


Fig. 29　土壙実測図(3)　SK-806・SK-808～SK-812・SK-816・SK-817・SK-826・SK-827（1/60）

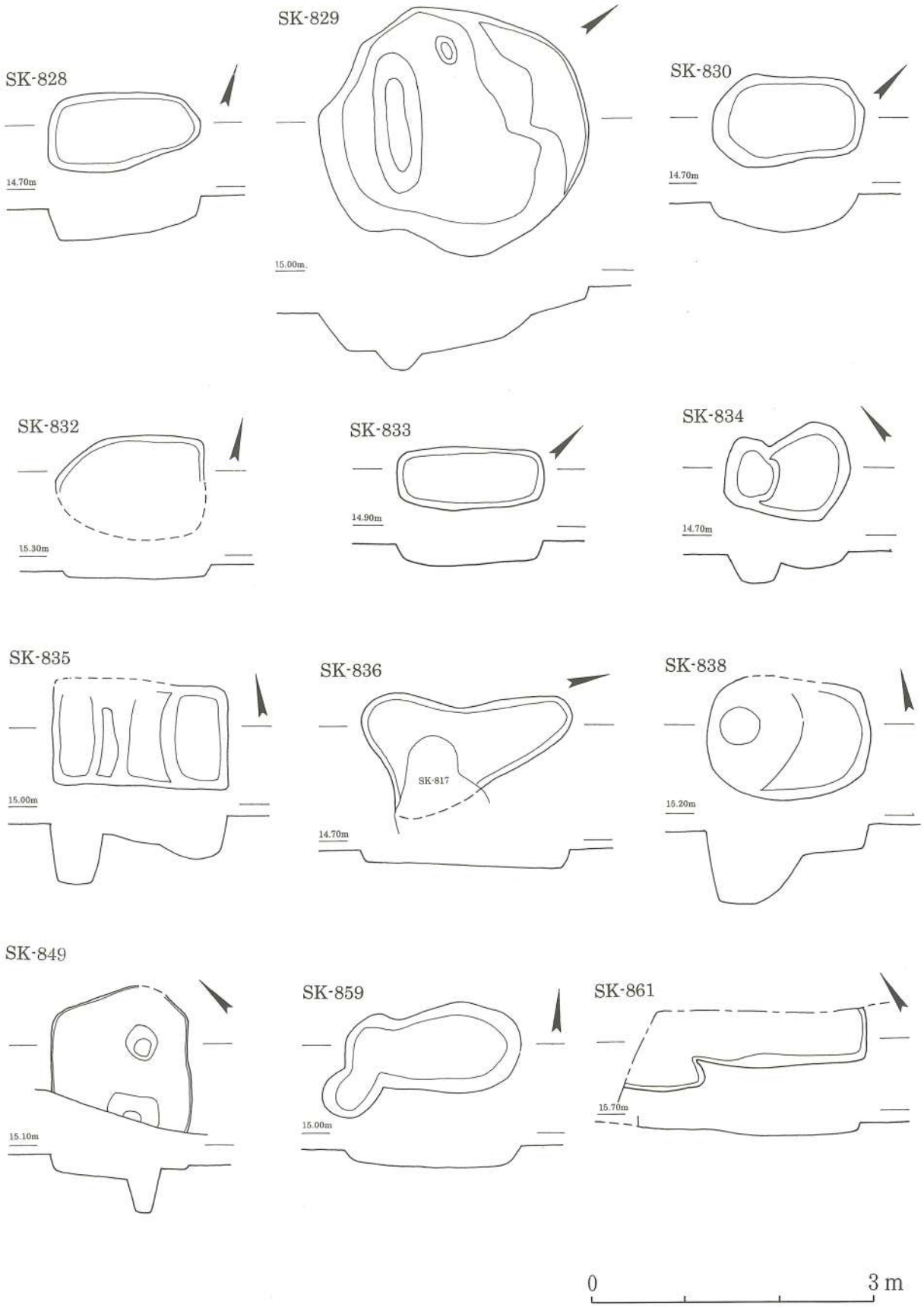


Fig. 30　土壙実測図(4)　SK-828～SK-830・SK-832～SK-836・SK-838・SK-849・SK-859・SK-861（1/60）

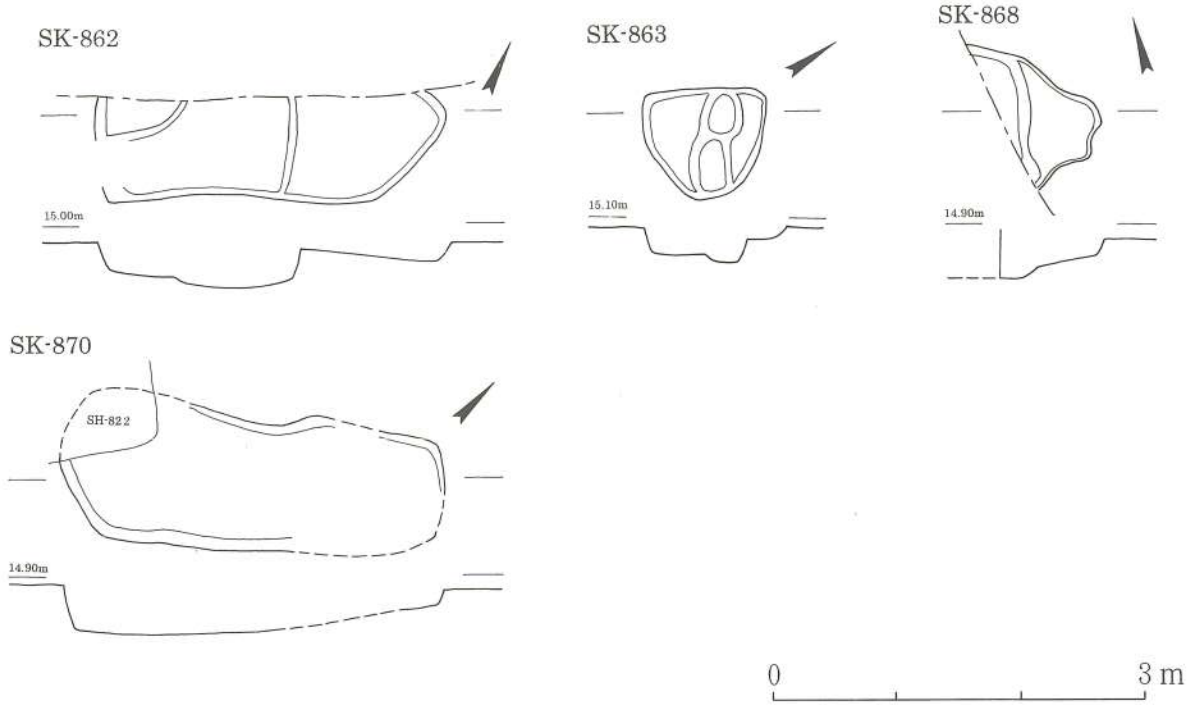


Fig. 31　土壙実測図(5)　SK-862・SK-863・SK-868・SK-870（1/60）

Tab. 6　船石南遺跡3・4・5区出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・m²)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備　考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-397	楕円形	1.12 0.94	0.86 0.74	0.07	0.6			
SK-416	不整方形	※1.76 ※1.65	1.16 1.08	0.09	※1.6		弥生式土器甕	
SK-427	不整形	(1.6) (1.4)	※0.77 ※0.72	0.11	※1.0			
SK-428	楕円形	1.87 1.70	1.05 0.84	0.21	1.2			
SK-429	不整円形	0.90 0.70	0.84 0.70	0.21	0.4			
SK-430	不整形	1.85 1.58	1.00 0.67	0.36	0.8			
SK-431	不整形	1.68 1.50	0.66 0.46	0.19	0.7			
SK-446	不整方形	1.78 1.58	1.45 1.30	0.45	1.6			
SK-477	不整形	※1.64 ※0.78	1.48 1.46	0.38	0.6			
SK-506	不整形	※0.44 ※0.41	0.64 0.52	0.08	※0.2			
SK-507	不整円形	2.18 1.88	(2.1) (2.0)	0.50	(2.8)		弥生式土器甕、壺、碗	
SK-514	隅丸長方形	1.22 1.11	0.82 0.70	0.38	0.6			
SK-515	不整楕円形	1.67 1.48	※1.10 ※0.90	0.26	※1.0			
SK-517	不整形	2.46 2.25	0.74 0.50	0.64	1.2			
SK-518	不整形	0.94 0.76	0.78 0.62	0.23	0.5			
SK-520	不整形	2.84 2.70	(2.6) (2.3)	0.25	4.8			
SK-562	不整円形	※0.86 ※0.83	1.11 1.06	0.26	※2.6			
SK-619	不整形	1.13 0.87	0.81 0.61	0.44	0.4		縄文式土器深鉢、石包丁	
SK-621	不整長方形	2.15 2.08	0.87 0.82	0.18	1.4		弥生式土器壺	

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・m²)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備　考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-622	隅丸長方形	1.42 1.25	0.98 0.84	0.13	0.9		弥生式土器甕、壺	
SK-642	不整形	1.30 1.06	0.94 0.69	0.73	0.6		弥生式土器壺	
SK-643	長方形	3.16 2.95	1.08 0.98	0.59	2.5		弥生式土器甕、壺、器台	
SK-644	長方形	1.28 1.14	0.77 0.54	0.61	0.6			
SK-661	不整方形	2.77 2.56	※1.90 ※1.86	0.10	※4.9			
SK-664	不整隅丸長方形	0.94 0.82	0.50 0.44	0.16	0.3		弥生式土器鉢、碗	
SK-800	不整隅丸長方形	2.28 2.22	1.02 0.90	0.24	1.7		弥生式土器甕、蓋、器台、支脚	
SK-801	不整円形	※0.90 ※0.82	1.00 0.70	0.43	※0.5			
SK-803	不整楕円形？	※2.00 ※1.93	(2.1) (1.9)	0.16	※3.0			
SK-806	不整形	2.25 2.13	0.98 0.88	0.20	1.6			
SK-808	不整形	2.48 2.39	2.17 1.97	0.21	(4.2)			
SK-809	不整隅丸長方形	1.40 1.28	0.66 0.54	0.23	1.2			
SK-810	不整形	※0.81 ※0.72	0.75 0.58	0.05	※0.8			
SK-811	不正長方形	1.55 1.44	0.85 0.61	0.68	0.6			
SK-812	長方形？	※2.36 ※2.36	2.30 2.24	0.19	※4.0			
SK-816	不整形	4.00 3.60	2.40 1.89	0.34	4.9			
SK-817	不整形	1.30 0.90	0.98 0.80	0.45	0.6			
SK-826	不整形	2.96 2.73	1.72 1.47	0.16	2.9			
SK-827	不整形	1.80 1.72	1.38 1.30	0.16	1.4		弥生式土器甕	
SK-828	不整形	1.60 1.45	0.80 0.63	0.31	0.8			
SK-829	不整円形	2.85 2.55	2.56 2.08	0.31	4.4			
SK-830	不整楕円形	1.59 1.31	0.97 0.76	0.28	0.8			
SK-832	不整形	1.56 1.45	※0.52 ※0.46	0.09	※0.5		弥生式土器甕	
SK-833	隅丸長方形	1.55 1.40	0.64 0.52	0.18	0.6			
SK-834	不整形	1.30 1.03	1.02 0.76	0.13	0.6			
SK-835	長方形	1.85 1.67	1.07 0.86	0.60	1.4		弥生式土器甕	
SK-836	不整形	2.15 2.00	1.22 1.10	0.15	※1.0			
SK-838	不整隅丸長方形	1.72 1.50	1.30 1.06	0.22	1.8			
SK-849	不整形	※1.95 ※1.92	1.49 1.45	0.24	※1.7		縄文式土器深鉢	
SK-859	不整形	2.14 1.81	0.93 0.65	0.16	1.0			
SK-861	不整形	※2.65 ※2.61	※0.84 ※0.79	0.10	※1.2		弥生式土器甕、碗	
SK-862	不整形	2.80 2.64	※0.84 ※0.79	0.27	※1.7		弥生式土器甕、壺	
SK-863	不整形	1.00 0.98	0.87 0.78	0.12	0.5			
SK-868	不整形	※1.29 ※1.20	※0.72 ※0.70	0.19	※0.5			
SK-870	不整長方形	3.10 2.95	1.16 1.00	0.33	(3.5)			

(6) **祭祀遺構**（Fig. 4 、32、33・PL. 34・Tab. 7）

今回の調査では、甕棺墓や土壙墓などの墳墓、住居址や建物址、土壙などとして取り扱った遺構のほか、祭祀に関連すると考えられる遺構も検出されている。今回、祭祀遺構として取り扱った遺構は、いわゆる周溝状遺構と呼ばれる遺構で、SX-576、SX-611、SX-858、SX-866の4基である。

SX-576は3区北部の墳墓群と4区の住居址群の中間の遺構の少ない区域に、SX-611は4区の調査区北限の住居群の中に位置し、SX-858は5区の南端部、SX-866は5区中央部の住居址群の中にそれぞれ位置している。

これらの中で、周溝内から弥生時代後期の土器がまとまって出土したSX-611は時期がある程度特定できるが、他はまとまった遺物もなく詳細な時期は不明である。

SX-576（Fig. 32・PL. 34）

SX-576は、3区と4区の境界付近F-9 Gr.で検出された。規模は、外径で4.1m×4.0mの円形を呈す。周溝は、幅が上面で25～65㎝、底面で15～50㎝、深さが20～35㎝のU字溝で、周溝内側のスペースの面積は7.1㎡程度で特別な施設などは認められなかった。

SX-611（Fig. 32・PL. 34）

SX-611は、4区の調査区北限付近C-10Gr.で検出された。全体の平面プランは、外周が不正な円形を呈し、規模は、南北長で6.5m、東西長で5.5m。周溝は、幅が上面で50～190㎝、底面で15～140㎝、深さが50～60㎝のU字溝。周溝内側のスペース部分は、円を3個組み合わせた三つ輪状のプランを呈し、面積は14.0㎡程度。周溝内側部分にてピットや溝が検出されているが、祭祀遺構の施設としての関連は不明である。

SX-858（Fig. 32・PL. 34）

SX-858は、5区の調査区南限付近Q-15Gr.で周溝の一部が検出された。全体の平面プランは、外周が三角形に近い不正な円形を呈すものと推定され、規模は、検出部分で南北長が3.1m、東西長が3.4m。周溝は、幅が上面で60～80㎝、底面で40～60㎝、深さが10～20㎝の浅いU字溝。周溝内側のスペース部分も外周と同様のプランを呈し、面積は検出部分で3.5㎡程度。周溝内側部分にて土壙状の掘り込みやピットが検出されているが、祭祀遺構の施設としての関連は不明である。

SX-866（Fig. 33・PL. 34）

SX-866は、5区の調査区中央付近O-19Gr.で検出された。規模は、外径で4.4m×4.3mの円形を呈す。周溝は、幅が上面で60～90㎝、底面で50～70㎝、深さが30～50㎝のU字溝。周溝内側のスペース部分の面積は6.6㎡程度。周溝内側部分にて土壙状の掘り込みやピットが検出されているが、祭祀遺構の施設としての関連は不明である。

Tab. 7　船石南遺跡3・4・5区出土祭祀遺構一覧表

遺構番号	平面形態	規模（上段：上面、下段：底面、単位m・㎡）				内部施設など	出土遺物	備　考
		全体 長さ・幅	周溝幅	周溝深さ	周溝内側 面積			
SX-576	円形	4.1・4.0	0.6～0.8 0.15～0.5	0.2～0.35	7.1			
SX-611	不整形 （三つ輪状）	6.5・5.5	0.5～1.9 0.15～1.4	0.5～0.6	14.0		弥生式土器甕、壺、鉢、高坏、碗	

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・m²)				内部施設など	出土遺物	備　考
		全体 長さ・幅	周溝幅	周溝深さ	周溝内側 面積			
SX-858	不整円形	※3.1・ ※3.4	0.6～0.8 0.4～0.6	0.1～0.2	※3.5			
SX-866	円形	4.4・4.3	0.6～09 0.5～0.7	0.3～0.5	6.6			

(7) **古　墳** (Fig. 4、33・PL. 34)

今回の調査では、甕棺墓や土壙墓などの墳墓が多数検出されたが、その中で古墳の石室の一部ではないかと推測される遺構が1基検出され、ST-676として取り扱った。

ST-676は、3区北東部のH-6 Gr.で、甕棺墓や土壙墓とともに検出された古墳。横穴式石室の一部と推測され、羨道部付近の石室掘り方および左袖の腰石と考えられる石材が1石遺存しているほかは、墳丘、石室、周溝などの施設は後世の耕作などにより削平され失われている。掘り方は、羨道部付近と考えられる部分で、幅が0.5m、延長が1.5mまで確認され、深さは入口付近と考えられる部分で30cm程度。腰石材が遺存している部分で50cm程度を測る。

副葬品と考えられる遺物は皆無で、腰石材付近の土砂の中から、叩き目をもつ須恵器甕の胴部破片が出土した。

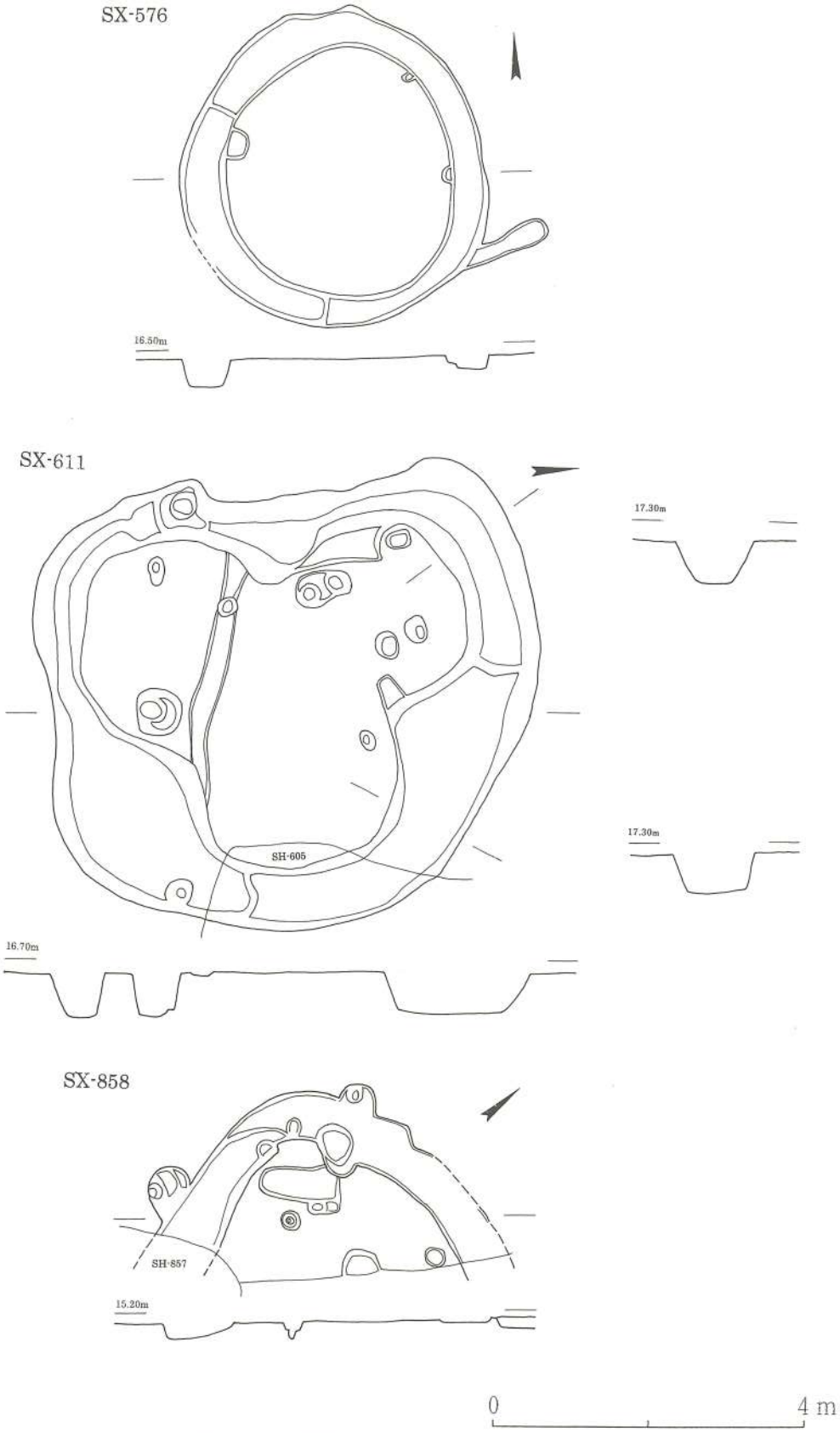
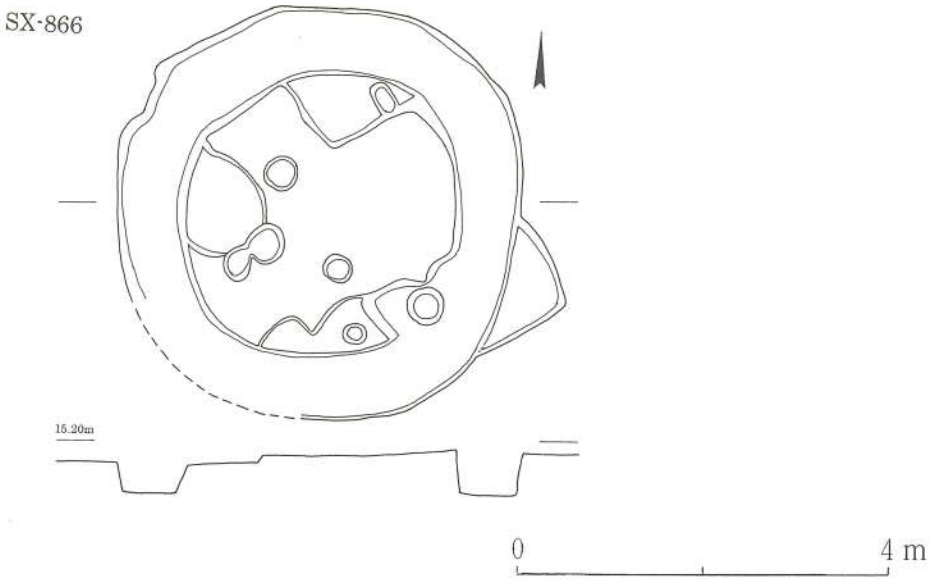


Fig. 32　祭祀遺構実測図(1)　SX-576・SX-611・SX-858（1/80）



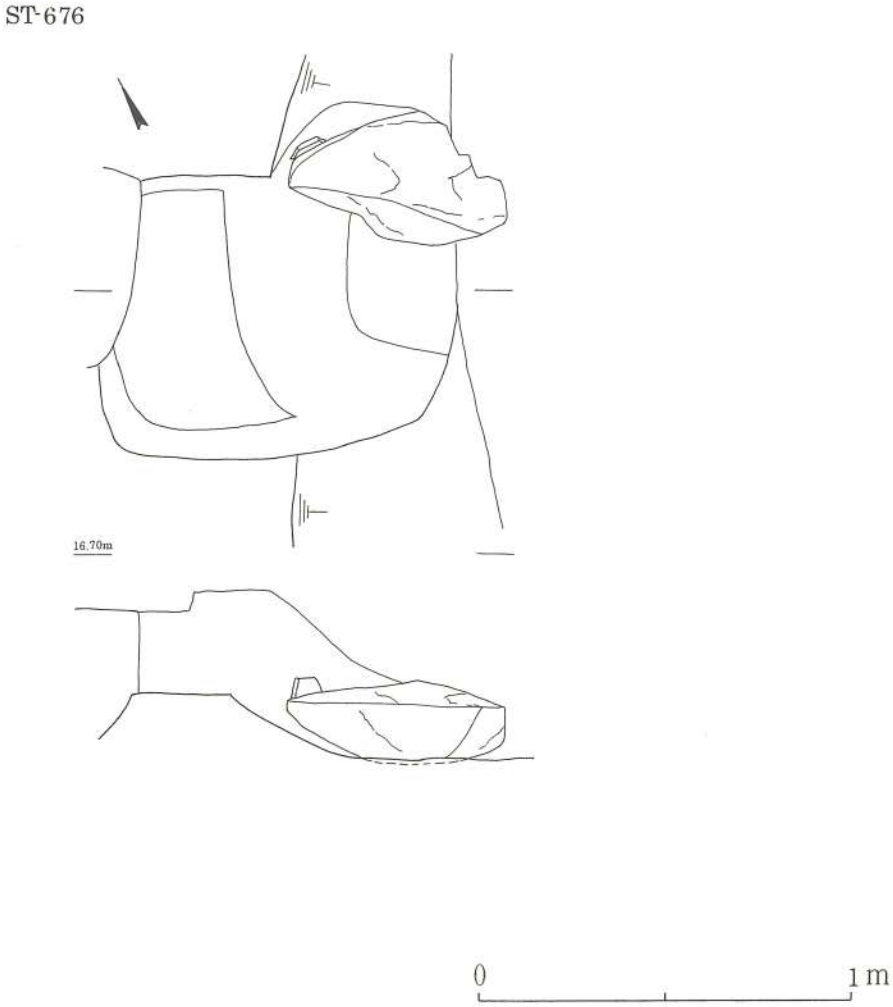


Fig. 33　祭祀遺構実測図(2)　SX-866（1/80）・古墳実測図 ST-676（1/20）

3．遺　物（Fig.40～55・PL. 4 ・41～43・Tab. 2）

今回の船石南遺跡３区～５区の調査で検出された遺構は、弥生時代前期末から後期に及ぶ甕棺墓105基、土壙墓20基の墳墓合計125基、これらに伴う祭祀遺構と考えられる周溝状遺構４基および弥生時代から奈良時代に及ぶ竪穴式住居址51軒、掘立柱建物址４棟、土壙等55基、古墳１基、その他ピットなどであった。そして、それぞれの遺構から各時期の土器、土製品、石器などの遺物が出土した。

また、甕棺墓からは、埋葬主体として使用された大小の土器が単独または上下２個体の組み合わせで出土している。しかし、これだけ多数の甕棺墓を調査したにもかかわらず、棺内から出土した副葬品として埋納された遺物は皆無であった。甕棺墓の墓壙覆土中からは、弥生式土器をはじめとする土器片、石器類の細片と思われるものも出土しており、甕棺墓以外の土壙墓についても、同様に墓壙覆土中から土器片などが少量出土している。

さらに住居址や土壙、祭祀遺構からも弥生式土器、土師器、須恵器などが出土している。

ここでは、(1)甕棺として使用された土器　(2)その他住居址や土壙、土壙墓、石棺墓、祭祀遺構等から出土した遺物に分けて報告したい。

(1) 甕　棺（Fig.34～36・Tab. 2）

本来ならここで、埋葬主体として用いられた土器について、個々に復元し、その形態、法量などについて詳述すべきであるが、その余裕がないので、ここでは、口縁部が良好に遺存するものの中から特徴的なものを抽出した24基について口縁断面を図示し報告としたい。なお、個々の甕棺の形態、法量については、Tab.2（本文ｐ14～ｐ17）に概略をまとめたので、そちらを参照いただきたい。

(2) その他の遺構出土遺物（Fig.37～47・PL.35～42）

本項では、住居址や土壙、甕棺墓以外の墳墓遺構、祭祀遺構等から出土した土器などについては遺構ごとに、また、土器類とともに出土した鉄製品・土製品・石器類については器種ごとにそれぞれ報告したい

SH-416出土遺物（Fig.37）

１は弥生式土器。逆「Ｌ」字形口縁の甕で、口縁下部に断面三角形の凸帯が１条めぐる。内外面ともにナデ。

SH-423出土遺物（Fig.37）

２は弥生式土器。袋状口縁の壺。内外面ともにナデ。

SH-424出土遺物（Fig.37）

３は土師器の甕。口縁がほぼ水平に外傾し開く。４は、須恵器壺の口縁。朝顔状に開く。

SH-502出土遺物（Fig.37）

５は、弥生式土器。逆「Ｌ」字形口縁の甕。口縁内部への張り出しが強い。内外面ともにナデ。

SP-503出土遺物（Fig.37・PL.35）

６、７は弥生式土器。６は小型の甕。裾がやや開いた円盤状の底部で胴部はやや内湾しながら開きそのまま口縁に至る。内外面ともにナデ。７は高坏の坏部。体部は深く口縁は外傾し大きく開く。内外面ともにナデ。いずれも土壙墓の墓壙内より出土しており、供献用に埋納されたものと考えられる。

SK-507出土遺物（Fig.37・PL.35）

８～16は弥生式土器。８・９、11、14～16は壺。８・９は広口壺で同一個体と考えられるが直接接合はできな

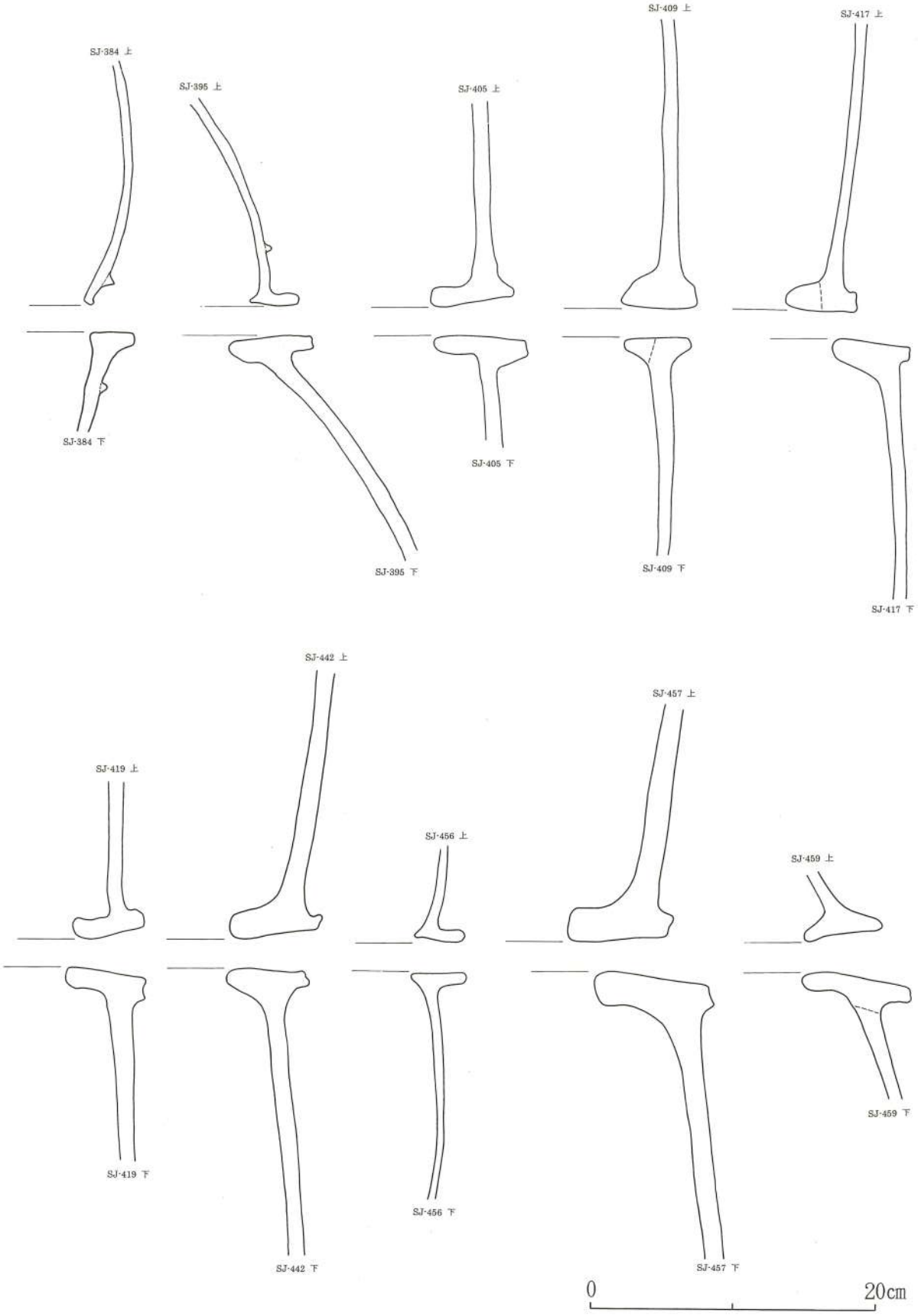


Fig. 34　甕棺口縁部実測図(1)　SJ-384・SJ-395・SJ-405・SJ-409・SJ-417・SJ-419・SJ-442・SJ-456・SJ-457・SJ-459（1/4）

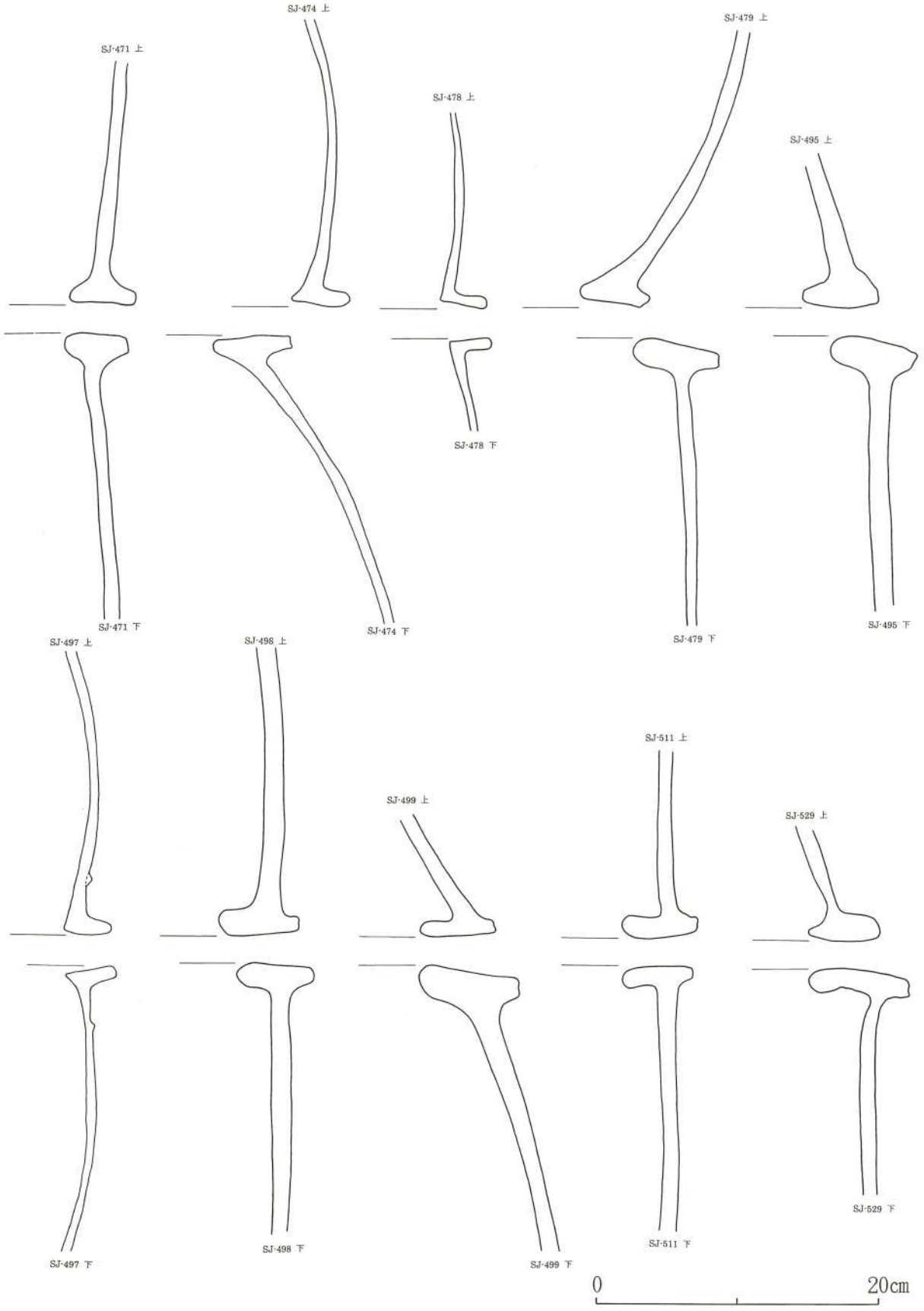


Fig. 35　甕棺口縁部実測図(2)　SJ-471・SJ-474・SJ-478・SJ-479・SJ-495・SJ-497～SJ-499・SJ-511・SJ-529（1/4）

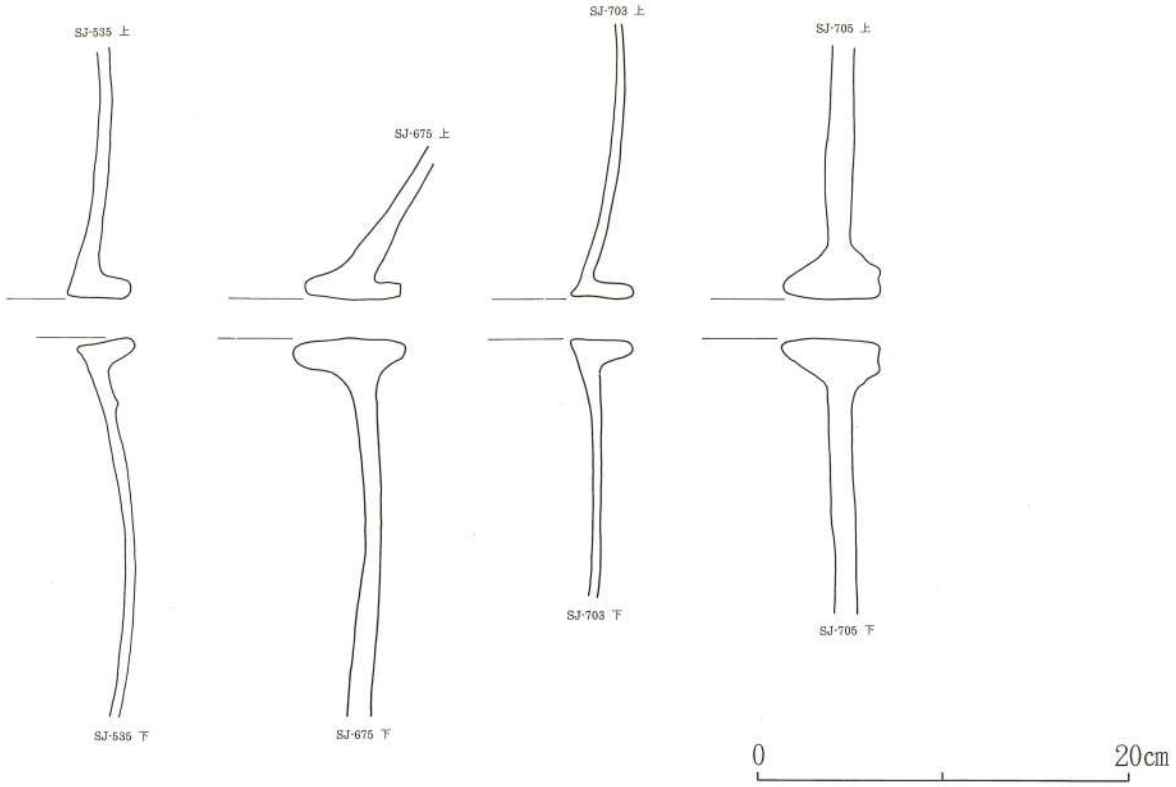


Fig. 36　甕棺口縁部実測図(3)　SJ-535・SJ-676・SJ-703・SJ-706（1/4）

かった。底部は平底に近い上底で胴部は逆玉葱形で肩が張り、頚部は「く」の字形にくびれ短い口縁が外反しながら外傾する。内外面ともにナデ。口縁以下底面を除き遺存部外面は赤色塗彩されている。11も広口壺か？口縁外面は赤色塗彩されている。14・15・16は鋤形口縁の壺。これも同一個体と推定されるが直接接合できなかった。底部は平底で胴部は逆玉葱形で肩が張り、口縁は大きく朝顔状に開く。肩部下位と胴部中位に断面が「m」字形に近い凸帯がそれぞれめぐる。内外面ともにナデ。10、13は逆「L」字形口縁の甕。10は口縁下部と直下に断面三角形の凸帯がそれぞれめぐる。内外面ともにナデ。13は胴の張りがなく、内面ナデ、外面ハケ目。12は小型の碗。底面は凹凸があり体部は内湾しながら立ち上がり口縁に至る。内外面ともにナデ。

SH-593出土遺物（Fig. 37、38・PL. 35）

17～22は弥生式土器。17～19はいずれも逆「L」字形口縁の甕で内外面ともにナデ。20は壺。底部は小さくやや上底で胴部は逆玉葱形を呈す。頚部以上を失っているが、割れ口は研磨整形され、無頚壺として二次利用されている。内外面ともにナデ。21は小型の碗。底部は小さく体部は内湾しながら立ち上がり、やや肥厚する口縁に至る。内外面ともにナデ。22は、手捏ねのミニチュア壺。胴部はやや方が張り、口縁は内湾し袋状を呈す。

SH-603出土遺物（Fig. 38）

23は弥生式土器の鉢。体部は球形に近く、内湾しながら立ち上がり口縁は内傾する。内外面ともにハケ目。

SH-605出土遺物（Fig. 38）

24～26は弥生式土器。24は壺で鋤形口縁をもつ。口縁外周に刻み目をもつ。内外面ともにナデ。25、26は甕。いずれも頚部が「く」の字形にくびれ口縁は外反し開く。26は内面ナデ、外面ハケ目。

SH-606出土遺物（Fig. 38）

27、28は土師器。27は甕で頸部が「く」の字形にくびれ口縁が外反しながら開く。内面ヘラケズリ、外面ハケ目。28は皿。底部は平坦で広く外傾し開く口縁は端部で小さく外反する。内外面ともにナデ。

SH-607出土遺物（Fig. 38）

29、30は土師器。28高坏の坏部口縁？口縁はやや外傾し端部が小さく外に張る。内外面ともにナデ。30は甕。頸部が「く」の字形にくびれ口縁が外傾しやや外反しながら開く。口縁内外面にハケ目を残す。

SX-611出土遺物（Fig. 38）

31～37は弥生式土器。31は広口壺。球形の胴部に外反外傾しやや開く短い口縁がつく。胴部内面上部にハケ目を残すが、他の部位は内外面ともにナデ。32は高坏の坏部。体部は張りがなく開き外反する。口縁はほぼ水平に開く。内外面ともにナデ。33は鉢。球形の胴部が内湾しながらそのまま口縁に至る。内外面ともにハケ目。34は小型の碗。口縁端が小さく内湾する。内外面ともにナデ。35～37は甕。35は無頸で内湾する胴部がそのまま立ち上がり口縁に至る。内外面ともにハケ目。36、37は頸部が「く」の字形にくびれ外傾する口縁がつく。36は内外面ともにナデ。37は内外面ともにハケ目。

SH-612出土遺物（Fig. 38）

38、39は弥生式土器の甕。38は口縁が外傾し開く。内面ナデ、外面ハケ目。39は胴部中位に最大径をもち、口縁は外傾しやや開く。内外面ともにハケ目。

SH-613・SH-616出土遺物（Fig. 38、39・PL. 36）

40～57は弥生式土器。40、42・43・44、50は壺。40は袋状口縁の壺で頸部が朝顔状に水平近くまで開き、内湾内傾する口縁をもつ。内外面ともにナデ。42・43・44は大型の壺で同一個体と推定されるが直接接合できなかった。胴部は球形に近く胴部中位に断面「コ」の字形の凸帯が1条、肩部上位に断面三角形の凸帯が3条めぐる。口縁は水平に開き、遺存部の口縁上面に径3㎝弱の円形浮文2単位をもつ。50は広口壺。やや扁平な球形の胴部に外反外傾しながら短く開く口縁をもつ。内外面ともにナデ。41、45、52～57は甕。口縁の形態に差異はあるものの、いずれも胴部がやや張りをもち頸部が「く」の字形にくびれ、外反外傾する口縁が開く。57の内面ハケ目、外面ナデの他は内外面ともにハケ目。46は手捏ねのミニチュアの碗。47、48は碗。47は手捏ね。指頭による調整痕を残す。48は小さい平底で体部が直線的に開き口縁に至る。内面ナデ、外面ハケ目。49は蓋。上面中央につまみが作り出され、体部は傘状を呈し裾部がやや広がる。内外面ともにナデ。51は鉢。内湾しながら立ち上がる胴部が頸部で「く」の字形に屈折し、口縁が直線的に外傾し開く。内外面ともにナデ。

註

SH-613とSH-616の出土遺物は、取り上げ時のミスによって、SH-613の遺物の一部とSH-616の遺物が判別できなくなってしまった。ここに報告した40～45はSH-613の出土遺物であり、46～57については両遺構の出土遺物が混在していることをお断りし、貴重な資料の価値を損なう結果となったことをお詫びします。

SH-614出土遺物（Fig. 40）

58～66は弥生式土器。58は手捏ねのミニチュアの碗。59は碗。平底で体部はやや内湾しながら開き口縁端部が小さく内側につままれている。内面ハケ目、外面ナデ。60は鼓形の器台の受け部。内外面ともにナデ。61は受け部が袋状を呈す支脚。受け部上面に焼成前に穿孔された径4㎝の孔をもつ。内外面ともにナデ。62は壺。頸部は垂直に立ち上り上端部を大きく外反させることによって口縁を作り出している。内外面ともにナデ。63は鉢または高坏の坏部。体部は深く半球形を呈し、やや外反する口縁がほぼ水平に大きく開く。体部は内外面ともにハケ

目。64～66は甕。64は逆「L」字形口縁の甕。口縁の外への張り出しは小さく、口縁下部に断面三角形の鈍い凸帯がめぐる。65、66はいずれも胴部がやや張りをもち頸部が「く」の字形にくびれ、外反外傾する口縁が開く。

SH-615出土遺物（Fig.40・PL.36）

67、70は弥生式土器。67は手捏ねのミニチュアの碗。70は鉢。内湾しながら立ち上がる胴部に外反外傾する口縁がつく。

68、69は縄文式土器。いずれも刻み目凸帯文土器の深鉢。

SH-618出土遺物（Fig.40・PL.37）

71～76は弥生式土器。71、72は甕。71は平底で胴部上位に最大径をもつ。頸部は「く」の字形にくびれ口縁が直線的に外傾し開く。内外面ともにハケ目。72は頸部が「く」の字形にくびれ口縁はやや外反外傾し開く。内外面ともにハケ目。73は鉢または高坏の坏部。体部は半球形を呈し、口縁が直線的に水平近くまで大きく開く。74～76は手捏ねのミニチュア土器。74は壺、底面に植物の茎状の直線的な圧痕をもつ。75、76は碗。

SK-619出土遺物（Fig.41・PL.37）

77は縄文式土器。刻み目凸帯文土器の深鉢。

SK-621出土遺物（Fig.41・PL.37）

78は弥生式土器でミニチュアの無頸広口壺。底部はやや上底で胴部は逆玉葱形を呈す。内外面ともにナデ。

SK-622出土遺物（Fig.41・PL.37）

79～81は弥生式土器。79は壺。頸部が垂直に立ち上り上端部を外反させ口縁を作り出している。内外面ともにナデ。80は逆「L」字形口縁の鉢。口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。内外面ともにナデ。81は甕。頸部が「く」の字形にくびれ、直線的な口縁が外傾し開く。内外面ともにハケ目。

SK-624出土遺物（Fig.41）

82・83・84は弥生式土器の壺。同一個体と推定されるが直接接合できなかった。底部はやや上底、胴部中位に断面が「m」字状の凸帯がめぐる。頸部は朝顔状に開き鋤形口縁をもつ。内外面ともにナデ。

SK-643出土遺物（Fig.41、42・PL.37、38）

85～95は弥生式土器。85、86は壺。85は広口壺で底部は小さくやや上底で胴部は逆玉葱形を呈す。頸部は「く」の字形にくびれ短い口縁が外傾し開く。口縁には焼成前に穿孔された2個1組の小孔を両側に1対ずつもち、縄などを通し把手としたものと考えられる。内外面ともにナデ。86は鋤形口縁をもつ壺で内外面ともにナデ。88は鼓形の器台。内面は裾部のハケ目以外ナデ、外面ハケ目。87、89～95はいずれも逆「L」字形口縁の甕。87、90は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。内外面ともにナデ。89、91～95は内面ナデ、外面ハケ目。

SK-664出土遺物（Fig.42・PL.38）

96、97は弥生式土器。96は鉢。平底で胴部が内湾しながら立ち上がりそのまま直立する口縁に至る。内面ナデ、外面ハケ目。97は碗。丸底で体部は直線的に開き上端を内傾させることによって口縁としている。内外面ともにナデ。

SK-800出土遺物（Fig.42、43・PL.39）

98～102は弥生式土器。98、99は鼓形の器台。いずれも内面ナデ、外面ハケ目。100は支脚。円柱形の粘土柱で外面には指頭による調整痕を残す。101は甕。底部はやや上底で台状を呈し、胴部は内湾しながら立ち上がりそのまま口縁に至る。内外面ともにナデ。102は蓋。体部は傘状に外反し開き口縁に至る。内外面ともにハケ目。

SH-815出土遺物（Fig. 43・PL. 39）

103は土師器？の高坏。体部は浅く外傾する口縁がつく。内外面ともにナデ。104は縄文式土器の深鉢。口縁上端に細い棒状工具の刺突による列点文が、口縁内外面には押し引きによる横線文が施文されている。

SH-818出土遺物（Fig. 43・PL. 37）

105～108は弥生式土器。105～107は甕。105は平底で胴部は内湾しながら立ち上がりそのまま口縁に至る。内外面ともにハケ目。106、107は逆「L」字形口縁をもつ甕。106は内面ナデ、外面ハケ目。107は胴部上位が内傾し口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。内外面ともにナデ。108は丸底壺。体部は球形に近く頸部が「く」の字形にくびれ、口縁はやや外反し開く。内外面ともにナデ。

SH-820出土遺物（Fig. 43）

109～111は弥生式土器。109は鼓形の器台。裾端部が小さく外反する。内外面ともにナデ。外面には指頭による調整痕を残す。110は高坏などの口縁部か？やや外反する口縁をもつ内外面ともにナデ。111は高坏の坏部。体部は浅い半球形で鋤形口縁をもつ。

SH-821出土遺物（Fig. 43）

112、113は須恵器の坏蓋。天井部はやや丸みを帯び口縁に至る。

SH-822出土遺物（Fig. 43・PL. 39、40）

114、115は土師器の甕。114は頸部がややくびれ口縁は大きく外反し開く。内面ヘラケズリ、外面ハケ目。115は小型の甕、頸部が「く」の字形に屈曲し、小さい口縁が開く。内外面ともにハケ目。

SH-824出土遺物（Fig. 43・PL. 37）

116は縄文式土器。深鉢の胴部破片で、外面に条痕文をもつ。

SH-825出土遺物（Fig. 43、44・PL. 40）

117～122は弥生式土器。117は手捏ねのミニチュア無頸壺。指頭による調整痕を残す。118は杓子？手捏ねで体部は浅い半球形を呈すものと思われ、これに短い柄がつく。119は鉢？体部はやや深く内湾しながら立ち上がり口縁は短く直立する。内外面ともにナデ。120は鼓形の器台受け部。内外面ともにナデ。121は高坏の坏部。口縁鋤形口縁をもつ。内外面ともにナデ。122は逆「L」字形口縁の甕。胴部上位は内傾する。内外面ともにナデ。

SK-827出土遺物（Fig. 44）

123は弥生式土器。頸部が「く」の字形にくびれ口縁は直線的に外傾し開く。内外面ともにナデ。

SK-832出土遺物（Fig. 44）

124、125は弥生式土器。いずれも逆「L」字形口縁をもつ甕。124は胴部に張りがなく、内外面ともにナデ。125は胴部上位が内傾し口縁に至る。口縁外周には刻み目をもち、口縁下部に断面三角形の凸帯がめぐる。内面ナデ、外面ハケ目。

SK-835出土遺物（Fig. 44）

126～128は弥生式土器。126、127は甕。頸部が「く」の字形にくびれ、直線的な口縁が外傾し開く。内外面ともにナデ。127は頸部のくびれは緩やかで口縁が外反し開く。内面ナデ、外面ハケ目。128は広口壺。底部は平底に近く、胴部は逆玉葱形を呈し、やや外反外傾する口縁をもつ。内外面ともにナデ。

SH-837出土遺物（Fig. 44）

129は弥生式土器の甕。頸部が「く」の字形にくびれ、直線的な口縁が外傾し開く。内面ハケ目、外面ナデ。

SK-832出土遺物（Fig. 44）

130、131は弥生式土器。130は碗、体部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁はやや肥厚する。内外面ともにナデ。131は逆「L」字形口縁の甕。口縁外周に刻み目をもつ。内外面ともにナデ。

SH-839出土遺物（Fig. 44・PL. 40）

132～135は弥生式土器。132は器台？受け部。外面に断面三角形の短い粘土が斜目に貼り付けられている。内外面ともにナデ。133は広口壺。胴部上位は内傾し頚部は「く」の字形にくびれ、小さく短い口縁が開く。内面ヘラケズリ、外面ナデ。134は碗。底部は底面がやや盛り上がり不安定で体部が外傾し大きく開き口縁に至る。内外面ともにナデ。135は逆「L」字形口縁の甕。口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。内外面ともにナデ。

SH-840出土遺物（Fig. 44、45・PL. 40、41）

136～143は弥生式土器。136、139、140、141は甕。136は底部が円盤状の平底で胴部は内湾しながら立上る。頚部ほとんどくびれることなく口縁が小さく外反する。内外面ともにハケ目。139は小さな底部で底面はやや盛り上がる。胴部は長く、頚部が「く」の字形にくびれ、直線的な口縁が外傾し開く。胴部内面はナデ、口縁内面および外面はハケ目。140は底部は小さく胴部は楕円形を呈す。口縁は朝顔状に開く。口縁部はナデ、胴部は内外面ともにハケ目。肩部内面には指頭圧痕が残る。141は平底で胴部は張りがなく立ち上がり、やや外反し開く口縁に至る。内外面ともにナデ。137、142は壺。137は広口壺。底部は丸底と推定され、胴部下位の腰の張りが強く口縁はわずかに外傾する。内外面ともにナデ。142は袋状口縁をもつ。口縁直下に断面三角形の凸帯が1条めぐる。138は甑。底部は尖底で径1㎝程の焼成前に穿孔された孔が貫通している。胴部上位が緩やかに内湾しやや内傾する口縁に至る。内外面ともにハケ目。縄などを通し把手としたものか、口縁下部に径5㎜程の孔が約3㎝の間隔で焼成後に穿孔されている。143は高坏の脚部。裾が開き始める部位に径8㎜ほどの円形の透かしをもつ。内外面ともにナデ。

SH-842出土遺物（Fig. 45）

144～146は弥生式土器。144は高坏の坏部。体部は浅く内湾しながら開きさらに口縁が外反しながら大きく開く。内外面ともにナデ。145は甕。胴部上位が直立し、口縁および口縁下部に断面三角形の凸帯がそれぞれめぐる。内外面ともにナデ。146は広口壺。頚部がくびれ口縁はやや外反し開く。内外面ともにナデ。

SH-843出土遺物（Fig. 45）

147～150は弥生式土器。147、149は逆「L」字形口縁の甕。147は内外面ともにナデ。149は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。148、150は壺。148は口縁が外反し朝顔状に開く。内外面ともにナデ。150は口縁が直線的に外傾し端部が小さく外反し開く。口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。内外面ともにナデ。

SK-849出土遺物（Fig. 46）

151～154は縄文式土器。151～153は刻み目凸帯文をもつ深鉢。151は口縁がやや外傾し口縁端部外側に凸帯が1条めぐる。152は胴部上位が内傾し口縁端部よりやや下がった位置および口縁下部に1条ずつ凸帯がめぐる。153は胴部片で遺存部に凸帯が1条めぐる。154は浅鉢？体部は算盤球状を呈すものと推定され、直立する短い口縁がつく。内外面ともにナデ。

SH-851出土遺物（Fig. 46・PL. 41）

155、156は土師器。155は甑。底部は焼成前に穿孔され、胴部はほとんど張りをもたずに開き口縁に至る。胴部中位側面には把手をもつ。内面ヘラケズリ、外面ナデ。156は甕。胴部は丸みを帯び、口縁は外反外傾し開く。

内外面ともにナデ。157、158は須恵器。157は坏。丸底で体部は浅く、口縁の外への張り出しも鈍く内傾する受けがつく。底面にはヘラ描きによる数条の円弧状の符号をもつ。158は瓶の口縁部？朝顔状に開く頸部と口縁の境界に段をもつ。

SH-852出土遺物（Fig. 46）

159は縄文式土器の深鉢。遺存部に「S」字の一部のような曲線状の隆線文をもつ。160～162は弥生式土器。160は甕。胴はやや張りをもち、「く」の字形にくびれる頸部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。口縁はやや外反し開く。内面ナデ、外面ハケ目。161、162は碗。161は小さな平底の底部で体部は厚く内湾しながら立ち上がり、口縁に至る。内外面ともにハケ目。162は体部が大きく開く。内外面ともにナデ。

SH-853出土遺物（Fig. 46）

852は弥生式土器の甕。逆「L」字形口縁をもつ。内外面ともにナデ。

SH-855出土遺物（Fig. 46・PL. 41）

164、165は土師器の甕。164は小型の甕。平底で体部は張りをもつことなく立ち上がり、口縁が「く」の字形に外傾し開く。内外面ともにナデ。165は頸部がくびれ、口縁は外反しながら開く。内外面ともにナデ。

SH-856出土遺物（Fig. 46）

166～168は弥生式土器。166は逆「L」字形口縁の甕。内面ハケ目、外面ナデ。167は甑。底部は焼成前に穿孔され、胴部はほとんど張りをもたずに開く。内面ナデ、外面ハケ目。168は碗。平底で体部が肥厚内湾しながら口縁に至る。内外面ともにナデ。

SH-857出土遺物（Fig. 47）

169は弥生式土器の甕。逆「L」字形口縁をもつ。内外面ともにナデ。

SK-861出土遺物（Fig. 47）

170は碗。体部が大きく開く。内外面ともにナデ。171は逆「L」字形口縁をもつ甕。内外面ともにナデ。

SK-862出土遺物（Fig. 47・PL. 42）

172～174は弥生式土器。172、173は逆「L」字形口縁をもつ甕。172は内外面ともにナデ。173は内面ナデ、外面ハケ目。174は壺。やや扁平な球形の胴部で、口縁は直立し上部で外反し開く。内外面ともにナデ。

SH-864出土遺物（Fig. 47）

175は弥生式土器の甕。逆「L」字形口縁をもつ。内外面ともにナデ。

その他の遺物（PL. 42・Tab. 8）

今回の調査では、土器類以外の鉄製品、土製品、石器類も少量ではあるが出土している。以下、種別ごとに報告する。

鉄製品（PL. 42）

176は鉄剣の身の部分かと思われる鉄製品。錆びのため身の断面の形状などは不明。遺存部の法量は、長さが7.4cm、身の幅は2.5cmほど。厚みは0.3cm程度。SH-842出土。

鉄製品（PL. 42）

177は土弾。ラグビーボール形を呈す。長さ3.5cm、直径2.2cm、重量14.0g。SH-605出土。

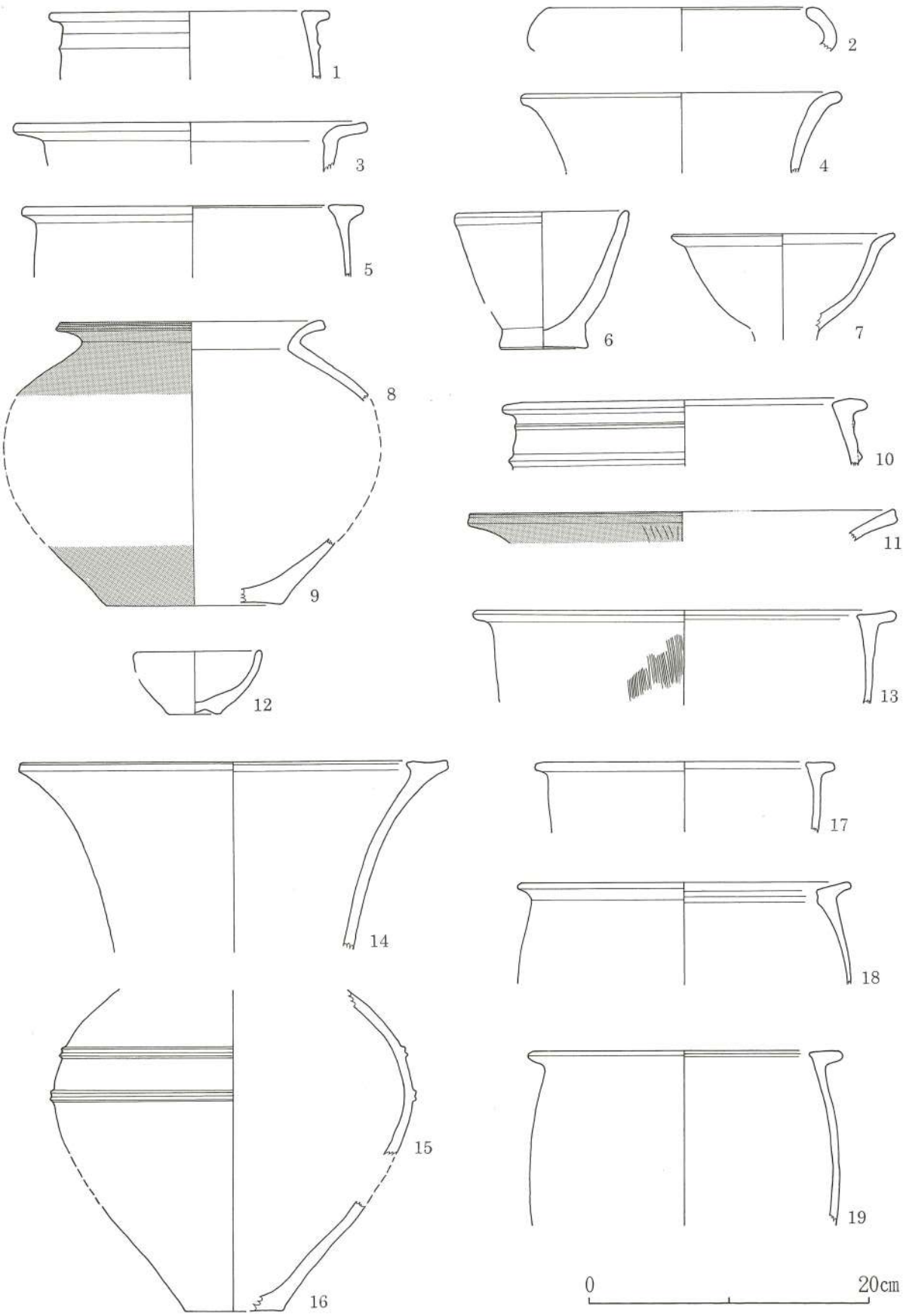


Fig. 37　出土遺物実測図(1)（1／4）

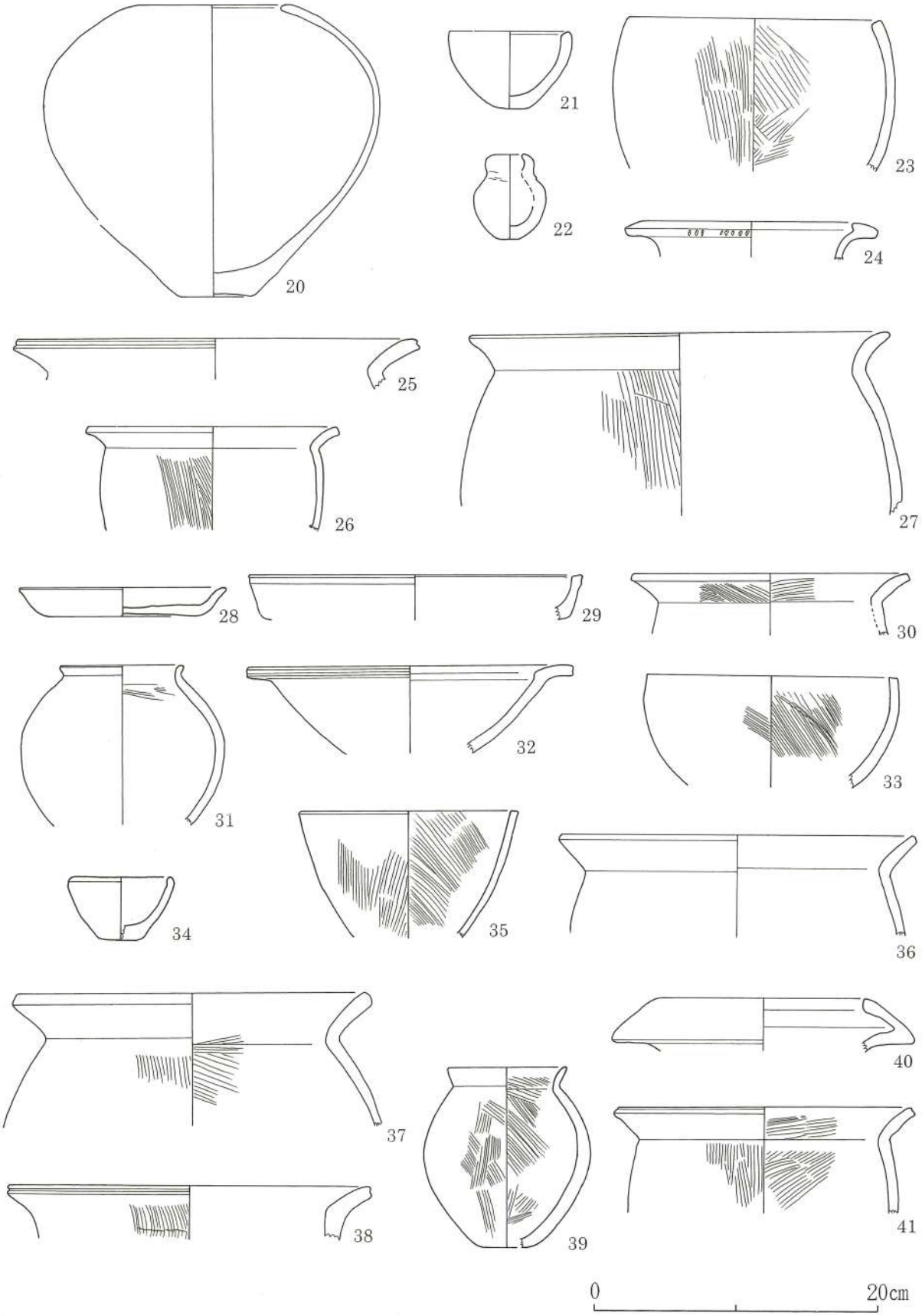


Fig. 38　出土遺物実測図(2)（1／4）

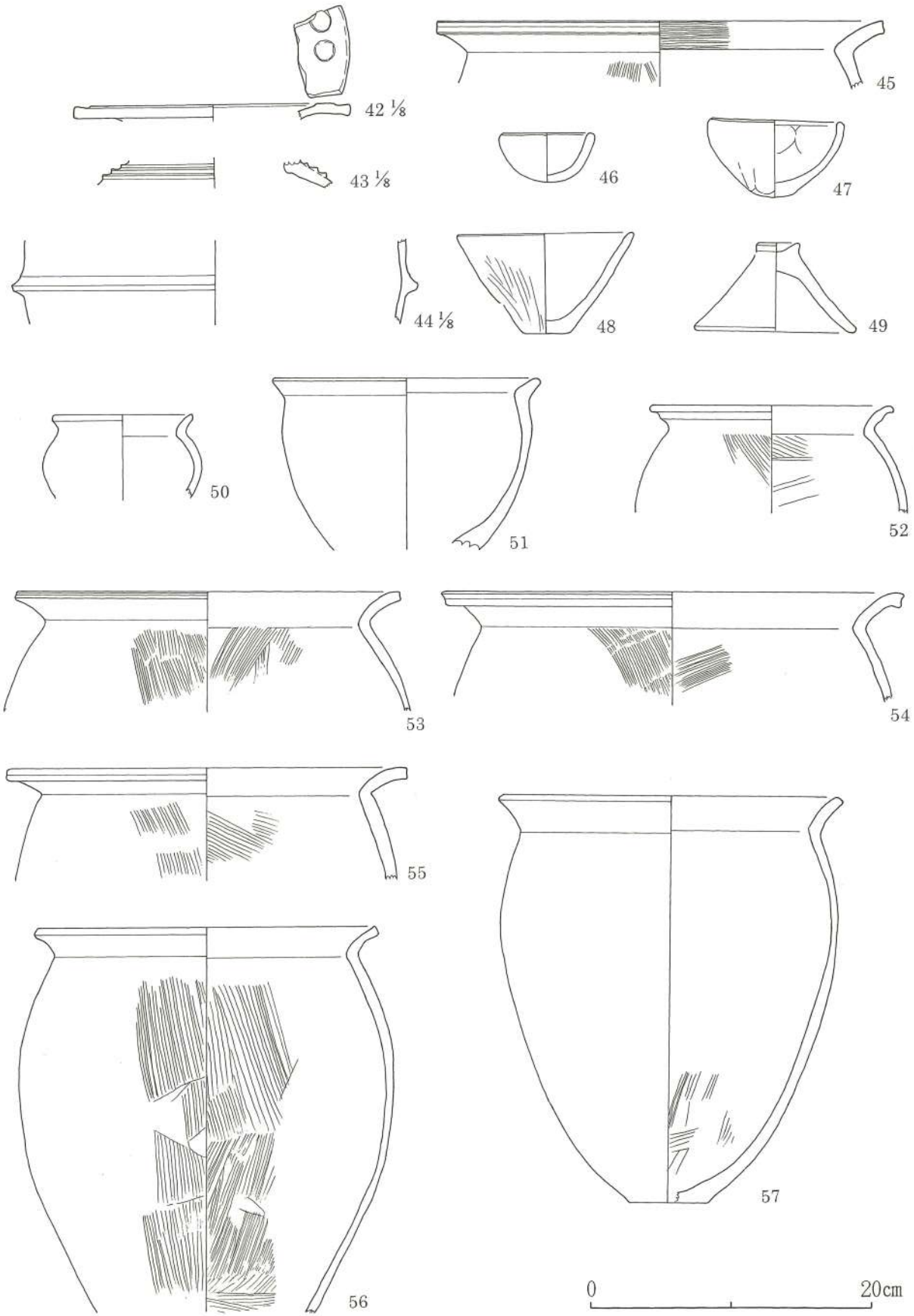


Fig. 39　出土遺物実測図(3)（1／4）

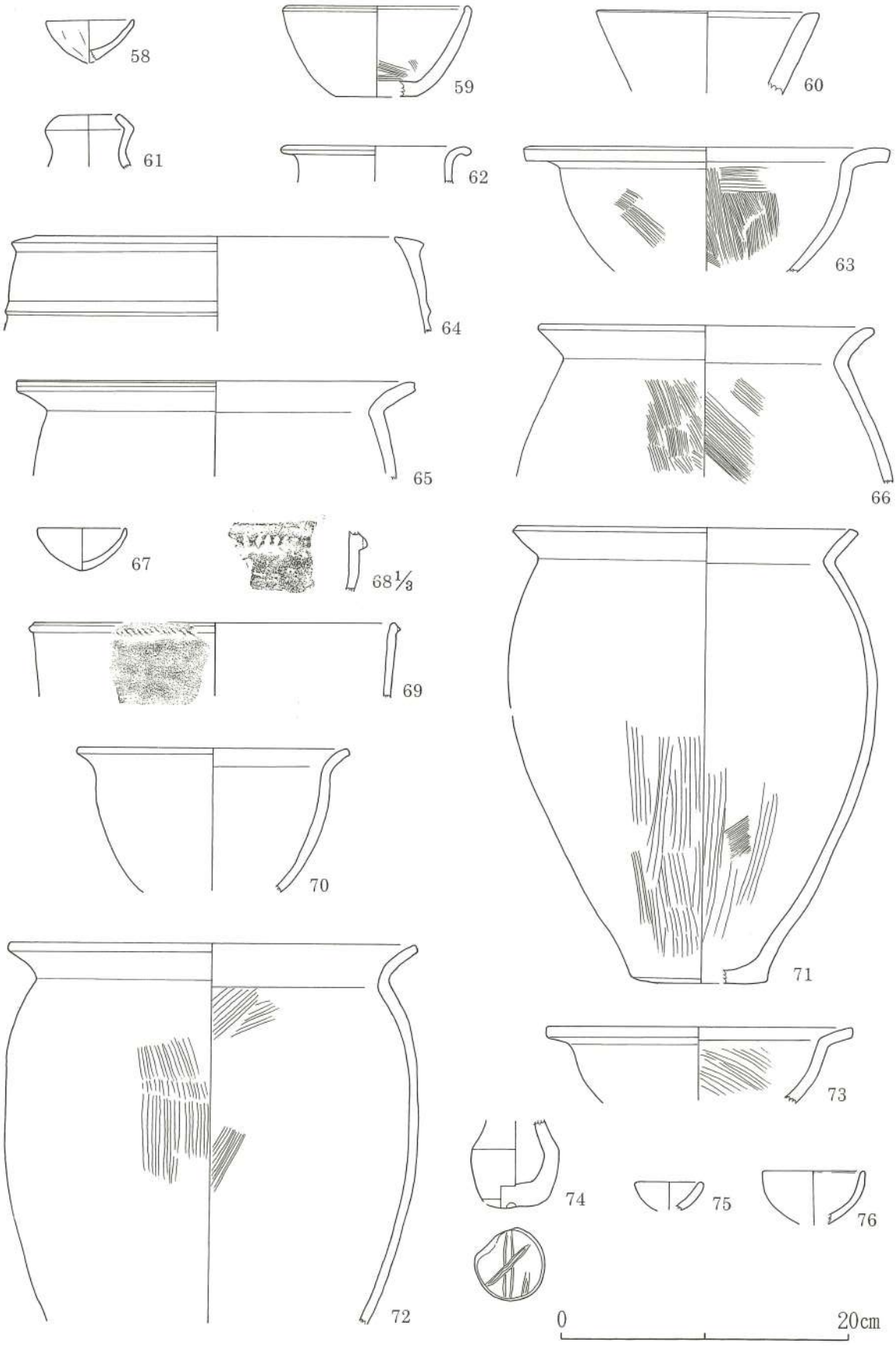


Fig. 40　出土遺物実測図(4)（1／4）

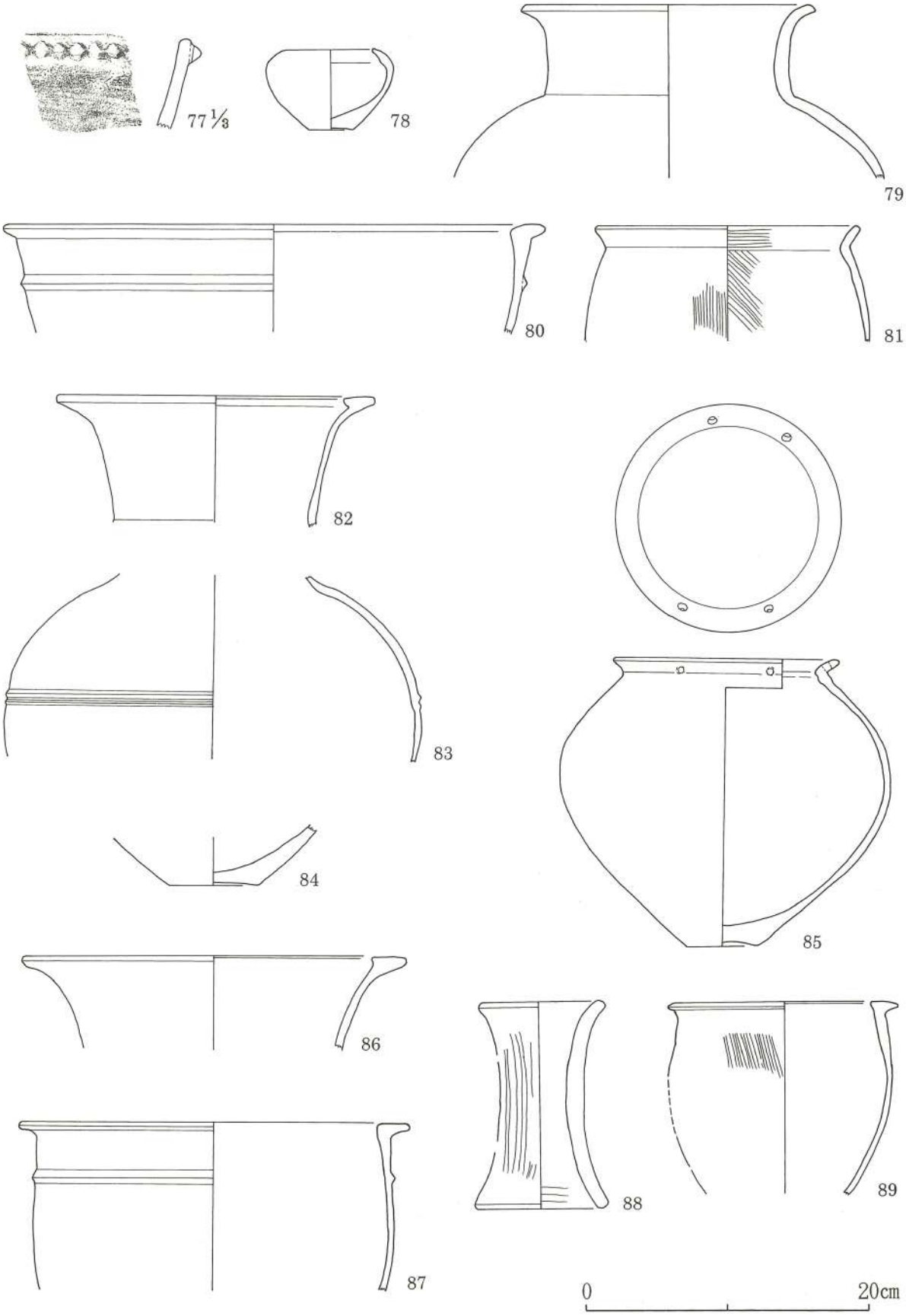


Fig. 41　出土遺物実測図(5)（1／4）

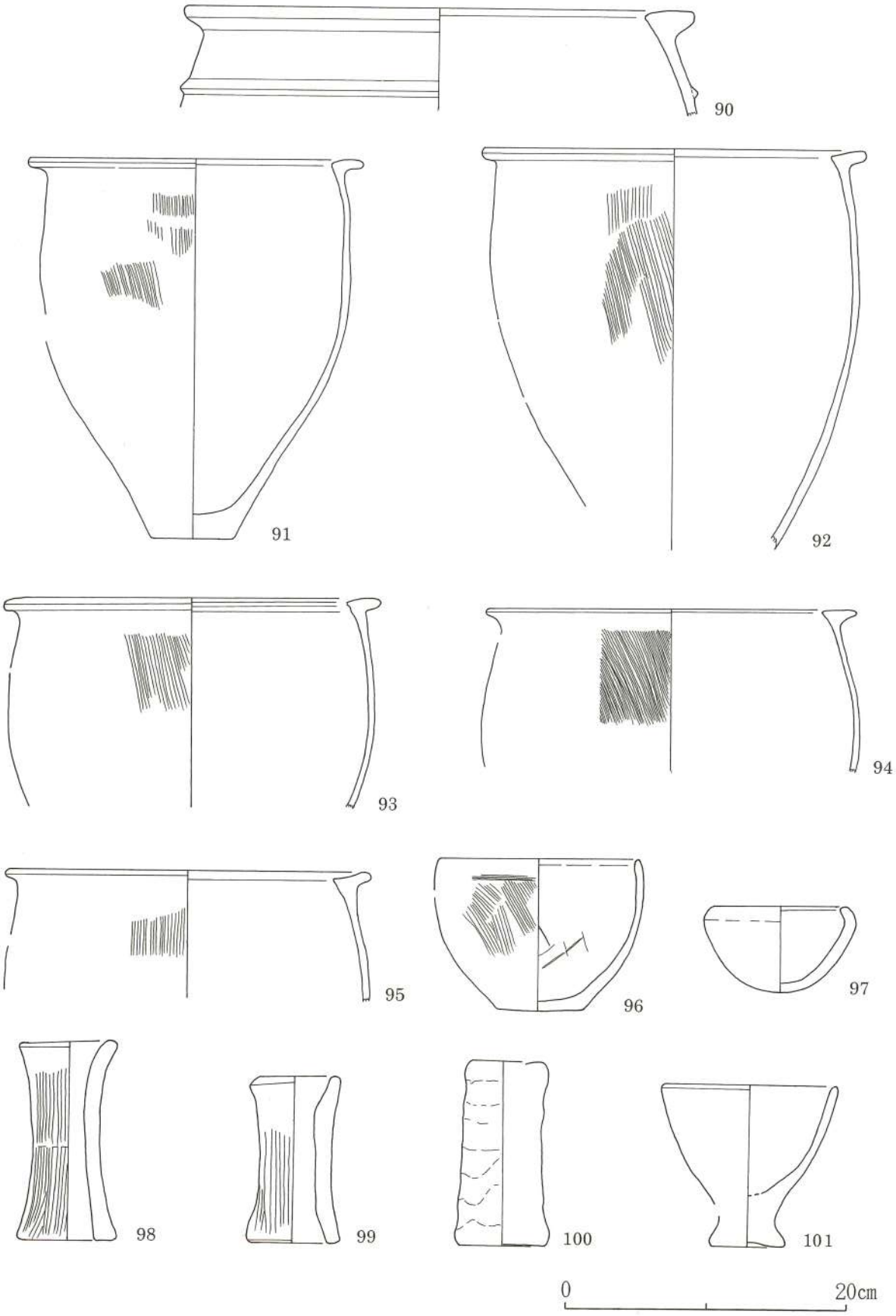


Fig. 42　出土遺物実測図(6)（1／4）

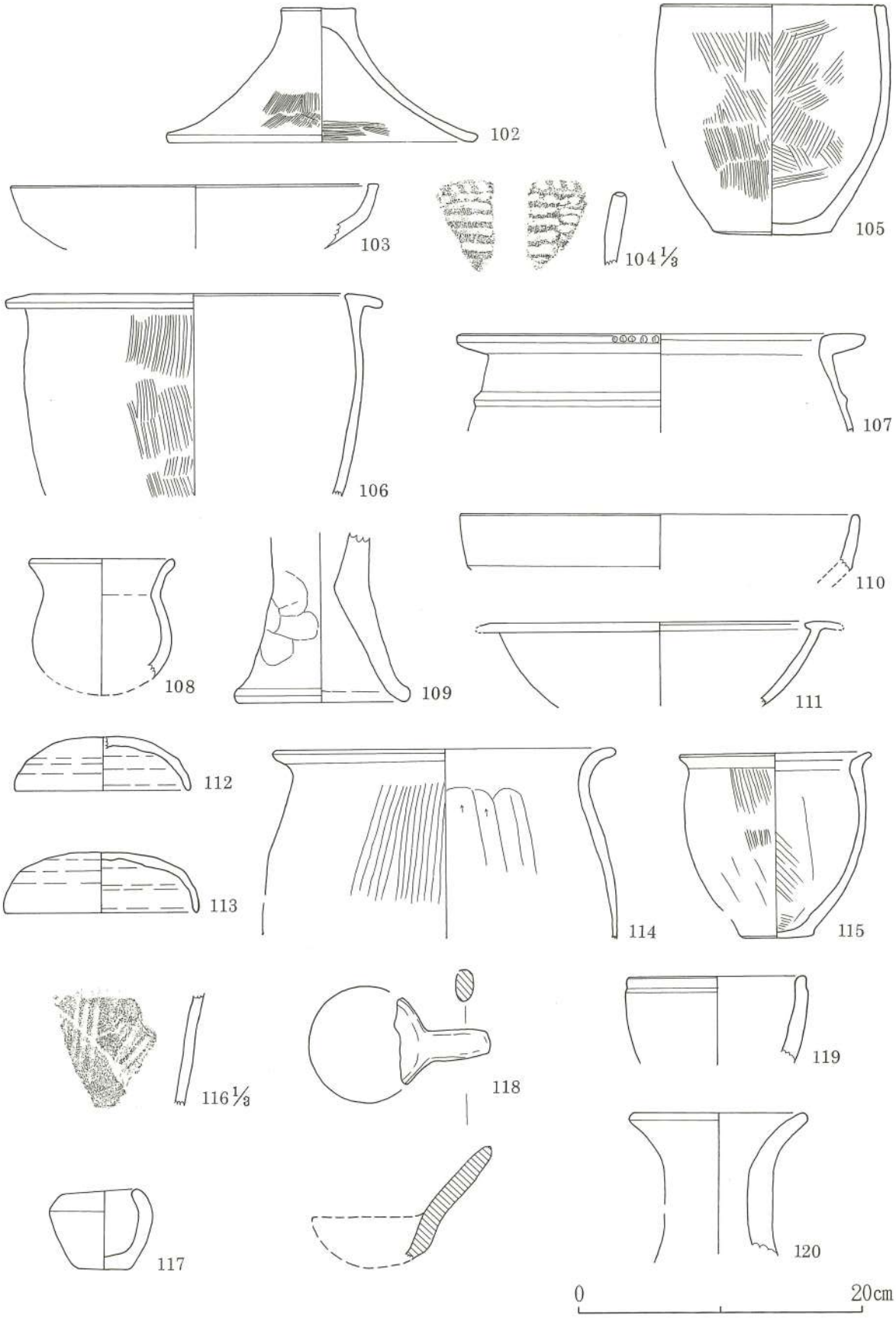


Fig. 43　出土遺物実測図(7)（1／4）

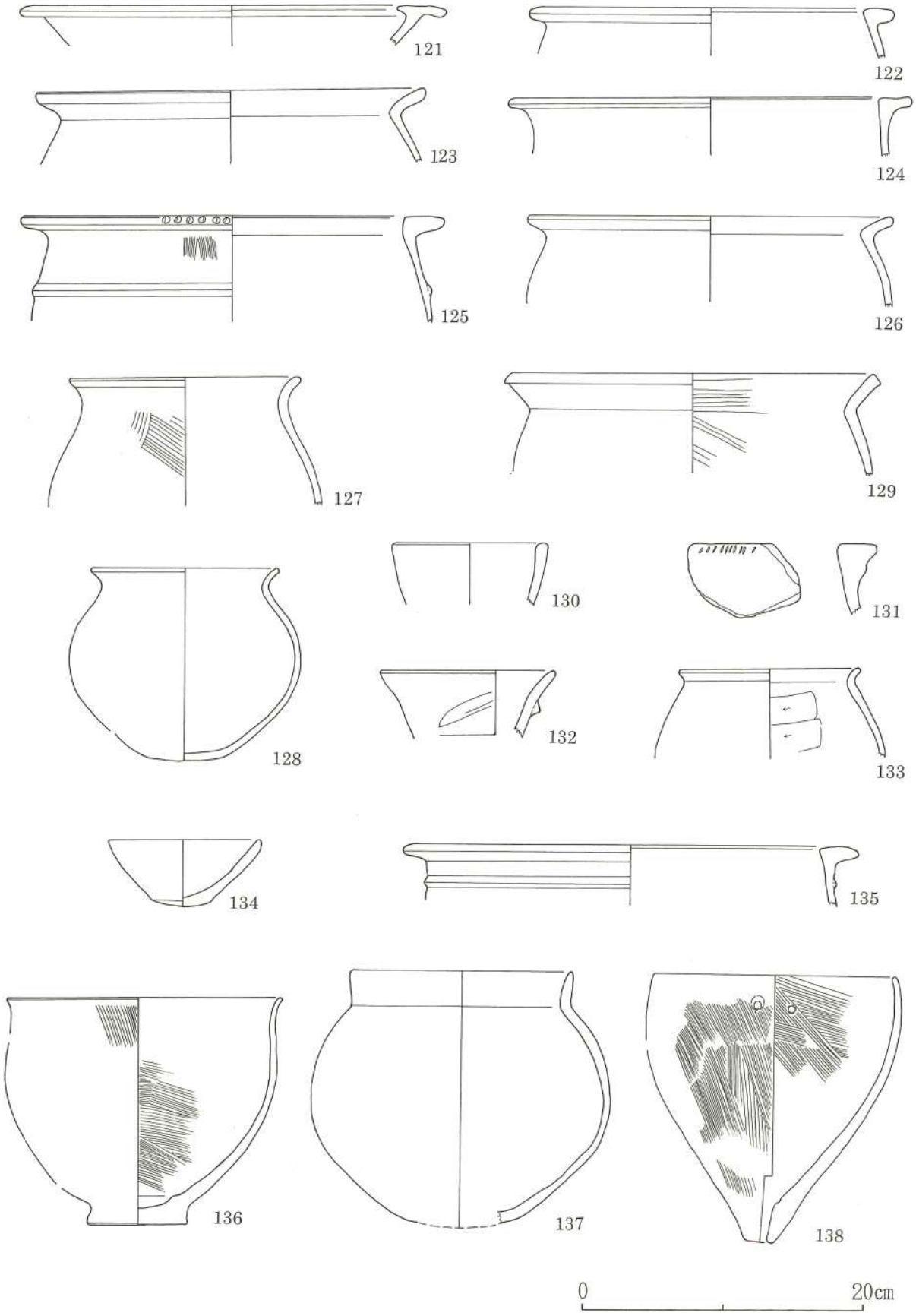


Fig. 44　出土遺物実測図(8)（1／4）

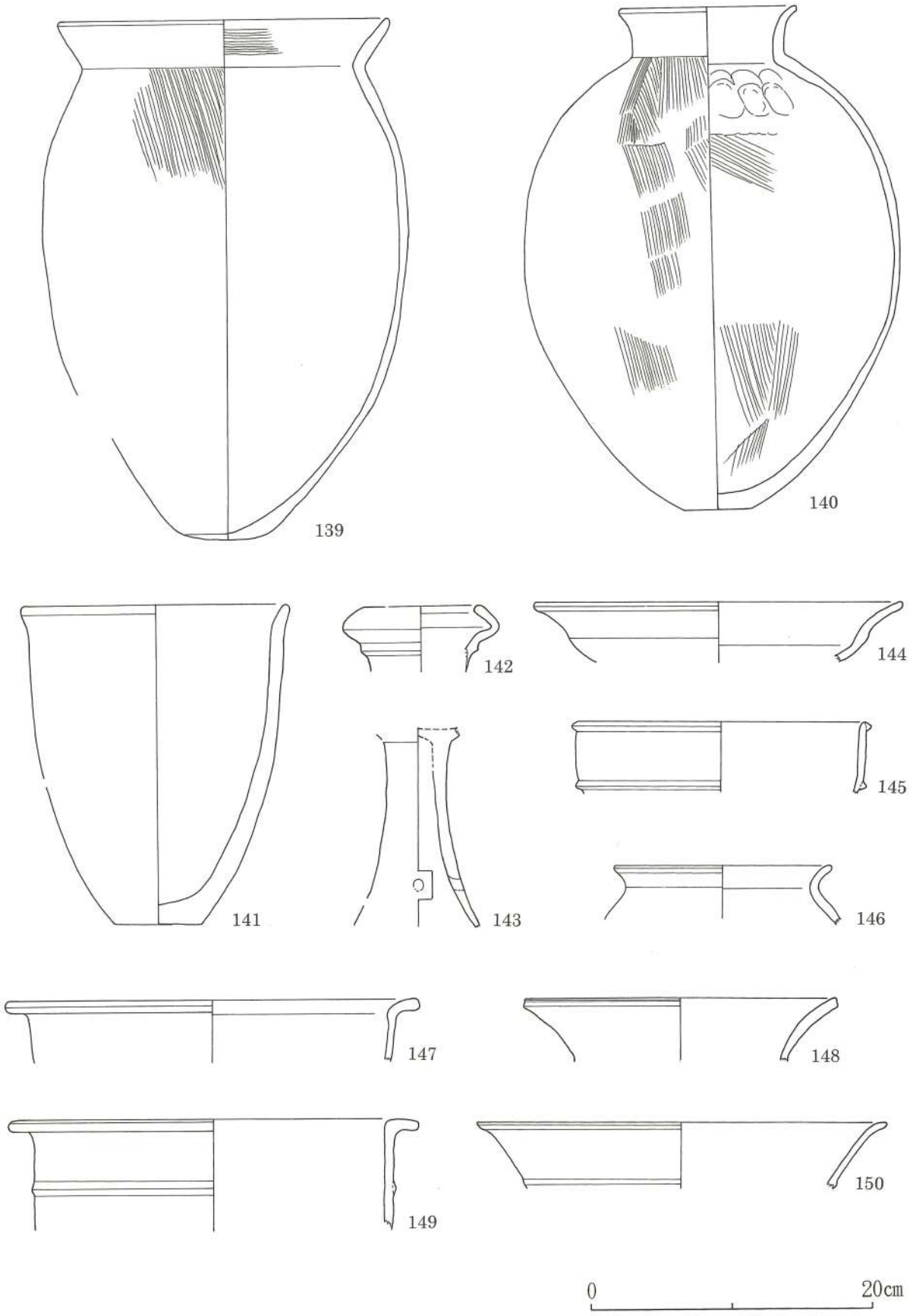


Fig. 45　出土遺物実測図(9)（1／4）

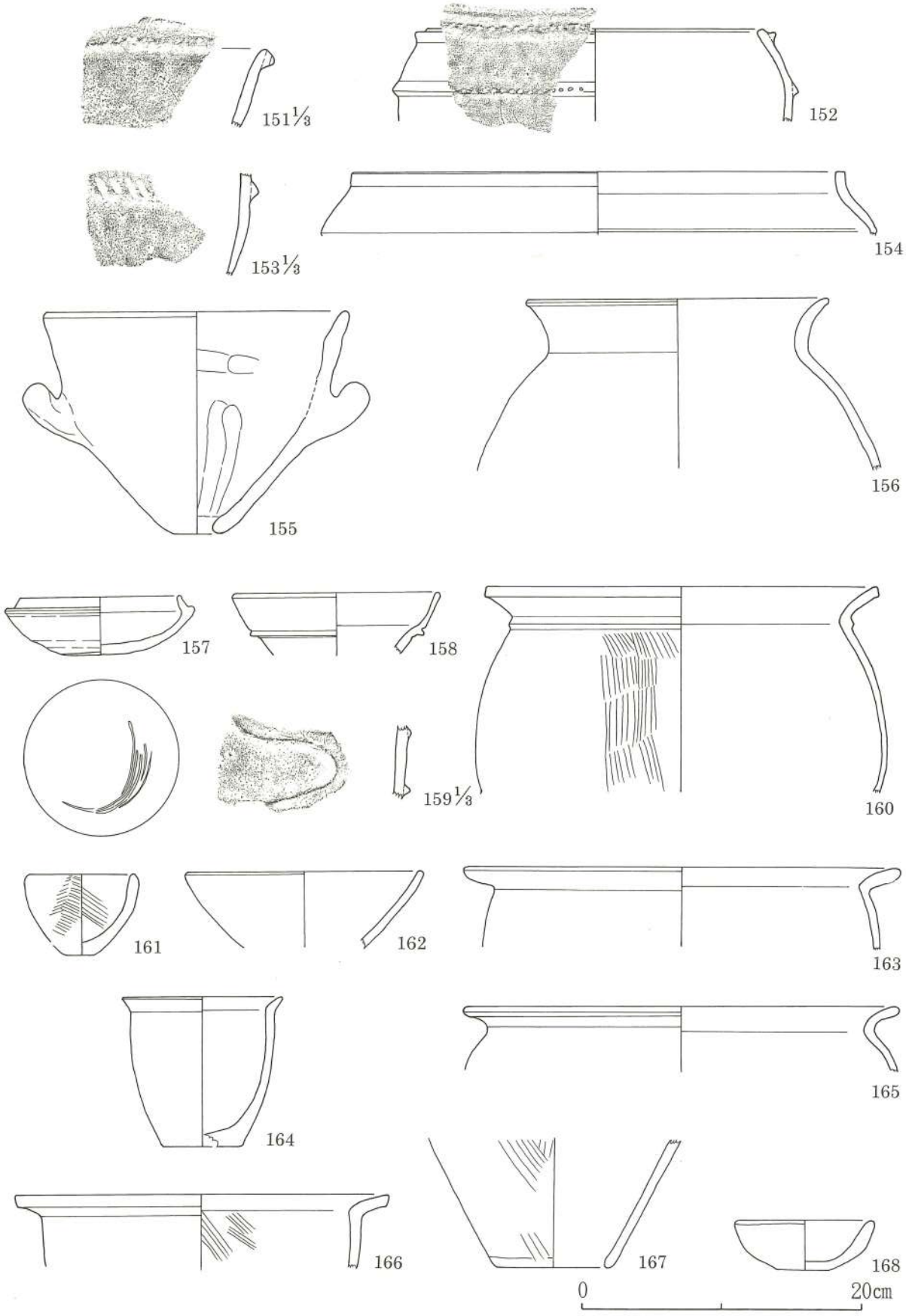


Fig. 46　出土遺物実測図(10)（1／4）

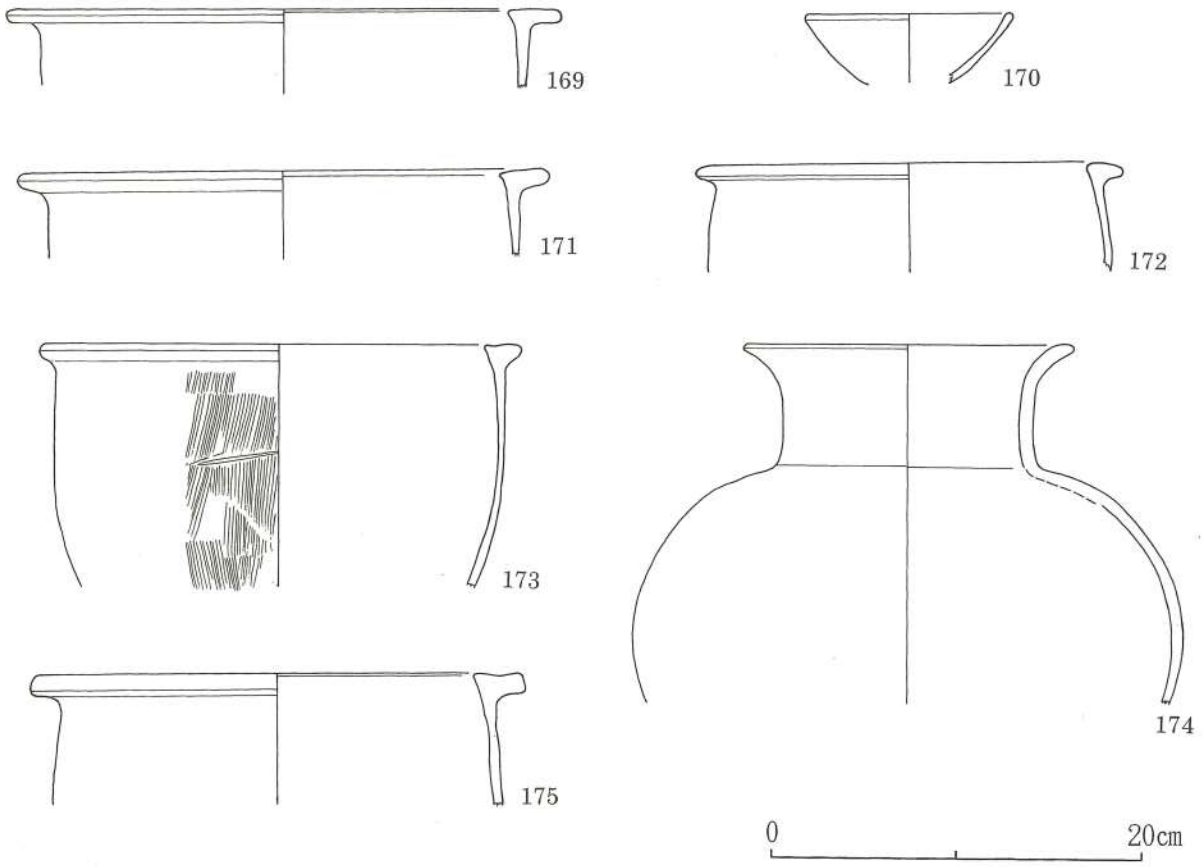


Fig. 47　出土遺物実測図（11）（1/4）

石器類（PL. 42）

178は砥石。砂岩質の石材で、写真両側片が使用されている。断面は長方形を呈し、長さ8.4cm、幅は写真上部で4.2cm、下部で2.4cm。厚さは、2.0cm。SH-820出土。

179～184は石包丁。いずれも両刃で、半月形を基調とし、背に近い部分の中央に2ヶ所、紐を通すための孔が両側面より穿孔されている。石材は粘板岩、泥岩などが使用されている。180、184は背が湾曲している。182は写真右側の刃部が直線状に延びている。

Tab. 8　船石南遺跡3・4・5区出土鉄製品・土製品・石器一覧表

遺物番号	種　類	出土遺構	法　量（cm・g）				材　質	備　考
			長　さ	幅	厚　さ	重　量		
176	鉄剣？	SH-842	※7.4	(2.5)	(0.3)	※79.4	鉄	
177	土弾	SH-605	3.5	2.2		14.0	土製	
178	砥石	SH-820	※8.4	4.6・2.4	2.2	※102.7	砂岩	
179	石包丁	SH-605	※8.3	4.3	0.4	※25.8	蛇文岩	
180	石包丁	SH-614	10.7	4.5	0.5	43.0	粘板岩	
181	石包丁	SH-616	12.6	4.7	0.6	58.7	粘板岩	
182	石包丁	SH-617	13.0	4.7	0.8	70.3	泥岩	
183	石包丁	SH-617	11.3	5.3	0.6	59.1	泥岩	
184	石包丁	SK-619	11.4	5.1	0.6	56.3	泥岩	

Ⅳ. ま と め

昭和60年度の船石南遺跡３区～５区の調査で検出された遺構は、弥生時代中期前半から中葉に及ぶ甕棺墓105基、土壙墓20基の墳墓合計125基、祭祀遺構と考えられる周溝状遺構４基および弥生時代から奈良時代に及ぶ竪穴式住居址51軒、掘立柱建物址４棟、土壙等55基、古墳１基、その他ピットなどであった。そして、これらの遺構の中で最も数多く検出され、遺跡の主体をなすものは弥生時代の遺構群である。弥生時代の遺構についてみると、住居址、土壙などの生活遺構が分布するいわゆる居住範囲と甕棺墓などが集中して営まれた墓域が明確に区分された形で検出されたといえる。また、これらの遺構に伴い、弥生式土器、石器類、土師器、須恵器などの遺物が出土している。以下、調査の所見を簡単に列記し、まとめとしたい。

甕棺墓の時期と配置について

甕棺墓は全体で105基出土したが、３区の北部で101基および５区の中南部Q-17Gr.付近で４基であった。３区の甕棺墓集中部分と５区で甕棺墓が検出された部分との調査区域外の部分は、100mほど隔たっており、両者が連続して営まれているものか、あるいは個々に別途営まれているものかについては現時点では判断できない。

これらの甕棺墓が営まれた時期については、甕棺として使用されている土器の特徴などから、ほとんどが弥生時代中期前半から中葉にかけての時期に営まれたものと考えられる。

さらに、これらの分布をみると、G-８Gr.からI-６Gr.にかけて分布する成人棺SJ-472、SJ-471、SJ-461、SJ-679、SJ-498、SJ-499、SJ-700、SJ-694、SJ-411などは、頭位がN－60°－EとN－120°－W前後を採り、列埋葬の意図がうかがえる。また、これらとほぼ直行するH-６、I-６Gr.のSJ-367、SJ-409なども同一規制の中で営まれた可能性が大きいといえる。

ここ船石南遺跡の墳墓群を営んだ集団は、今回の調査で４、５区において検出された住居を残した集団及び本遺跡の北に広がる船石丘陵上に集落跡を残した船石遺跡の集団が想定できよう。ところが、今回の調査も含めて、両遺跡からは弥生時代後期の遺構、遺物もこれまでの調査において少なからず検出されている。にもかかわらず、今回検出された甕棺墓のように中期中葉の段階で激減することは、単に土壙墓・石棺墓への墓制の交代だけでは十分に説明できない。このようなことから、墓域の容量を超えた時点で、墓域の他への移動も考えなければならない課題であろう。本遺跡の東側は船石工業団地として比較的早い時期に造成されているが、当時ここでも多数の甕棺墓が出土したと言われており、このような隣接または周辺の地域への墓域の移動あるいは拡大がなされた可能性も高いと考えられる。

副葬品について

今回の調査では、125基の甕棺墓はじめとする墳墓が検出されたが、明らかに副葬品としてあるいは土壙墓の墓壙内に埋納されたと考えられる遺物は皆無であった。本遺跡の西を緩やかに蛇行しながら南流する切通川の対岸（西岸）には、二塚山丘陵と呼称する洪積世丘陵が北部の山麓部から国道34号線の南まで南北に延びており、こちらも二塚山遺跡、切通遺跡など弥生時代を通じての著名な墳墓中心とした遺跡が分布している。この二塚山丘陵上では、これまでの発掘調査などによって豊富な副葬品をもつ甕棺墓など、当時の墳墓群の存在が報じられている。これに対して船石丘陵側の墳墓群では副葬の例はほとんどなく、本地域の中で好対照となっている。

祭祀関連の遺構について

今回の調査で、祭祀遺構として報告した遺構は、周溝状遺構 SX-576・SX-611・SX-858・SX-866の4基であった。これらのほかに、H-8 Gr. で検出された SK-607は甕棺墓の限られた墓域の中にありながら、他の甕棺墓ともほとんど重複することなく営まれており、周囲の甕棺墓などをみると、あたかも SK-607を囲むように円形の配置となっている。これが意図的なものか、偶然結果的にこのような状況になったものかは即断できないが、甕棺墓の多くが重複して営まれているにもかかわらず、この土壙と重複した墳墓が少ないことも特徴的である。言い換えれば、この土壙は墳墓の配置に何らかの規制を与えていたものと考えられる。この規制が本遺跡特有なものか、あるいは普遍的に見られるものかの判断は今後調査例を検証して判断することとしたい。

以上、簡単ではあるが、今回の調査を通しての所見、疑問などを列記しまとめとしたい。今回、ここで報告すべきことがらで、諸般の都合で報告できなかったことは非常に多い。調査に携わったもの責として今後も何らかの形で公表していきたいと考えている。

なお、本書に収録した Tab. 2　出土甕棺墓一覧表、Tab. 9　甕棺墓・土壙墓出土位置一覧表ついては、別途データの形で配信したいと考えている。

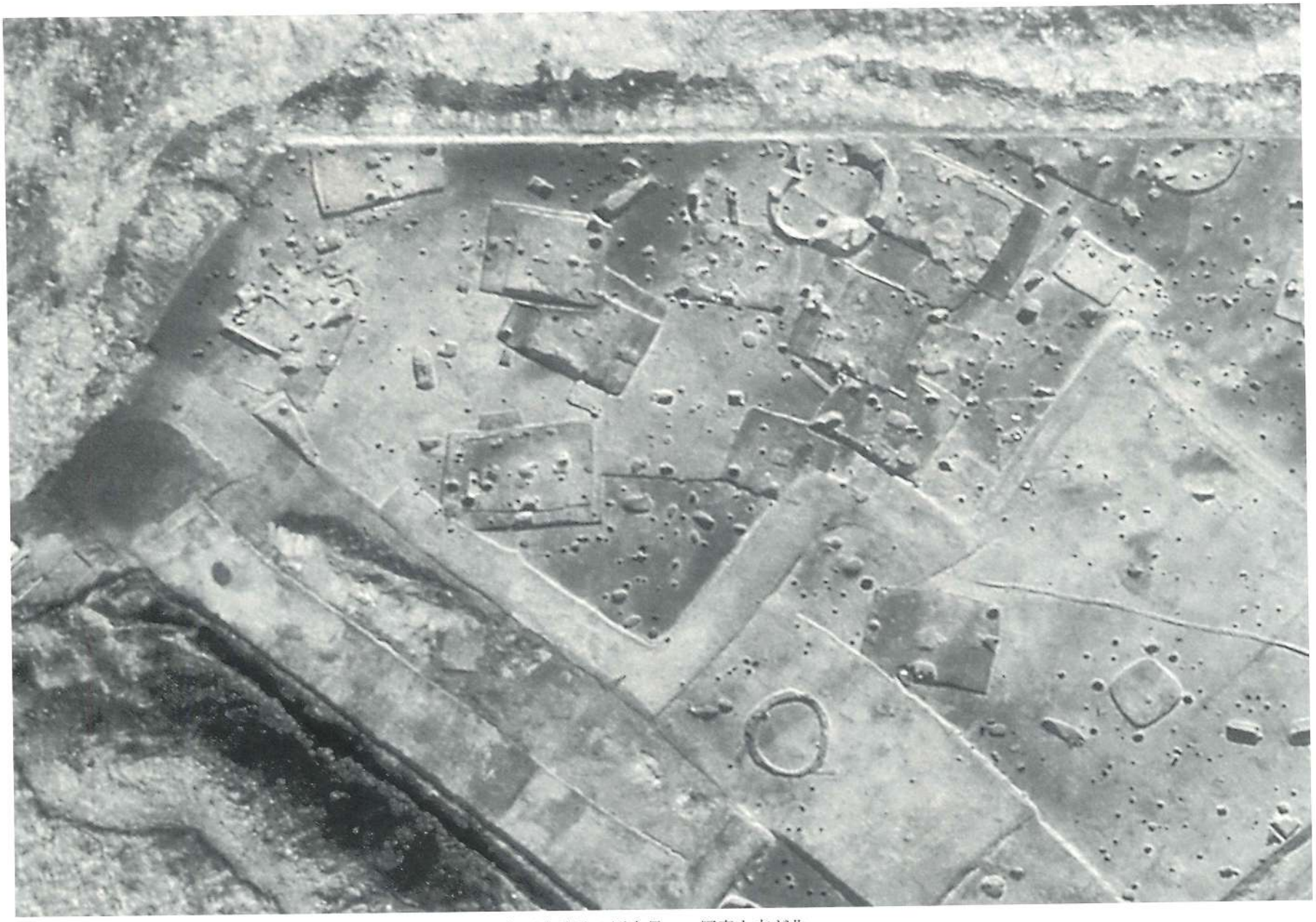
Tab. 9　船石南遺跡３・４・５区甕棺墓・土壙墓出土位置一覧表

遺構No	グリッド	E-W	N-S	遺構No	グリッド	E-W	N-S	遺構No	グリッド	E-W	N-S
SJ-363	H-6	2.8	2.6	SJ-464	H-7	4.9	4.6	SJ-709	H-8	5.5	5.6
SJ-364	H-6	1.6	2.6	SJ-467	H-7	5.9	4.0	SJ-845	Q-17	7.0	4.6
SJ-366	H-6	0.9	3.6	SJ-468	H-7	7.1	5.6	SJ-846	Q-17	5.5	4.5
SJ-367	H-6	0.7	5.0	SJ-469	H-8	0.1	5.1	SJ-847	Q-17	5.7	4.0
SJ-369	H-5	7.8	3.6	SJ-470	H-7	7.9	4.0	SJ-848	Q-17	5.7	5.2
SJ-384	J-7	4.2	2.8	SJ-471	H-7	6.8	1.0				
SJ-385	H-6	1.2	1.9	SJ-472	G-8	2.3	7.6				
SJ-387	H-5	7.3	5.1	SJ-473	G-8	3.2	7.7				
SJ-388	H-6	0.3	6.8	SJ-474	H-8	4.2	0.6				
SJ-389	H-6	2.0	6.5	SJ-475	G-8	5.5	6.4				
SJ-390	H-5	7.9	7.0	SJ-476	G-8	7.3	7.5	SP-386	H-6	2.6	4.4
SJ-393	I-9	4.2	4.8	SJ-478	H-8	5.2	1.9	SP-399	I-7	7.8	3.3
SJ-394	I-9	2.2	3.0	SJ-479	H-8	6.3	2.9	SP-441	J-6	3.6	5.1
SJ-395	I-9	0.4	2.4	SJ-480	H-8	2.1	2.6	SP-443	J-6	5.5	6.8
SJ-396	I-9	4.3	1.2	SJ-481	H-8	1.0	3.7	SP-444	J-6	6.2	5.9
SJ-398	I-8	0.3	5.6	SJ-482	H-8	1.5	4.5	SP-445	J-6	5.5	5.5
SJ-400	H-6	0.7	7.8	SJ-483	H-8	2.3	5.6	SP-455	I-8	3.8	1.1
SJ-401	I-6	1.2	0.3	SJ-484	I-8	1.0	0.9	SP-462	H-7	2.1	3.5
SJ-402	I-6	0.3	0.3	SJ-488	H-7	7.5	7.6	SP-496	H-8	7.2	7.5
SJ-403	I-6	0.5	0.8	SJ-495	I-8	7.0	0.9	SP-503	H-8	3.3	6.0
SJ-404	H-6	2.0	7.6	SJ-497	H-8	6.6	1.9	SP-504	H-8	6.3	6.3
SJ-405	I-5	7.8	0.4	SJ-498	H-7	4.1	5.1	SP-505	H-8	5.2	6.7
SJ-406	H-6	4.0	3.4	SJ-499	H-7	4.3	6.4	SP-516	H-8	6.1	4.5
SJ-407	H-6	3.9	4.1	SJ-500	H-7	5.3	7.3	SP-534	H-8	3.1	1.5
SJ-408	H-6	2.8	1.7	SJ-501	H-7	4.9	6.9	SP-536	H-6	1.6	1.5
SJ-409	I-6	3.1	1.5	SJ-510	H-8	7.1	2.8	SP-674	H-6	4.6	1.5
SJ-410	I-6	1.4	1.7	SJ-511	G-9	1.7	37.4	SP-690	I-7	4.5	2.5
SJ-411	I-6	1.5	3.1	SJ-512	H-9	3.2	1.7	SP-691	I-7	4.0	2.0
SJ-412	I-6	4.5	1.2	SJ-513	H-9	2.9	5.5	SP-699	I-7	2.0	0.5
SJ-413	I-6	5.2	1.8	SJ-521	H-8	3.5	6.8	SP-704	I-7	6.4	5.7
SJ-414	I-6	5.7	0.3	SJ-528	G-7	6.1	4.4				
SJ-415	I-6	6.0	1.2	SJ-529	G-7	6.8	6.1				
SJ-417	I-7	2.3	7.2	SJ-530	H-7	1.6	0.8				
SJ-418	J-6	6.0	0.6	SJ-535	G-8	1.9	6.7				
SJ-419	J-6	4.7	1.4	SJ-597	H-7	1.1	5.7				
SJ-432	J-7	1.2	4.9	SJ-598	-	-	-				
SJ-433	J-7	0.0	5.4	SJ-675	H-6	6.9	2.1				
SJ-440	J-6	3.5	4.2	SJ-677	H-6	7.3	2.8				
SJ-442	J-6	6.0	3.0	SJ-678	H-6	7.8	4.1				
SJ-451B	I-7	6.6	2.1	SJ-679	H-6	6.9	5.0				
SJ-452	I-8	0.2	2.5	SJ-680	H-7	0.3	5.5				
SJ-453	I-8	2.2	2.6	SJ-687	H-9	7.0	1.7				
SJ-454	I-8	3.1	2.2	SJ-694	I-6	6.6	0.3				
SJ-456	I-8	4.2	1.9	SJ-695	H-6	7.4	7.8				
SJ-457	H-8	4.1	7.4	SJ-696	I-7	0.0	0.0				
SJ-458	H-7	1.8	6.3	SJ-697	H-7	0.3	5.9				
SJ-459	H-7	1.5	5.1	SJ-698	I-7	1.5	0.0				
SJ-460	H-7	0.6	3.4	SJ-700	I-7	3.5	0.8				
SJ-461	H-7	2.5	3.0	SJ-703	I-7	4.7	5.5				
SJ-463	H-7	3.3	4.6	SJ-705	H-7	0.4	7.5				

図　　版

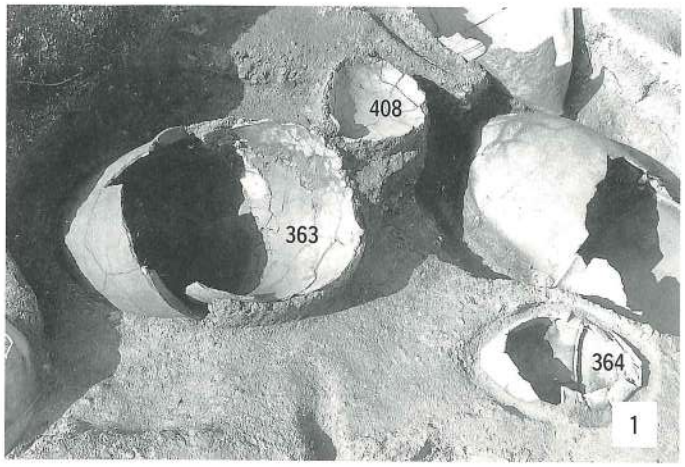
船石南遺跡全景　―南西より―

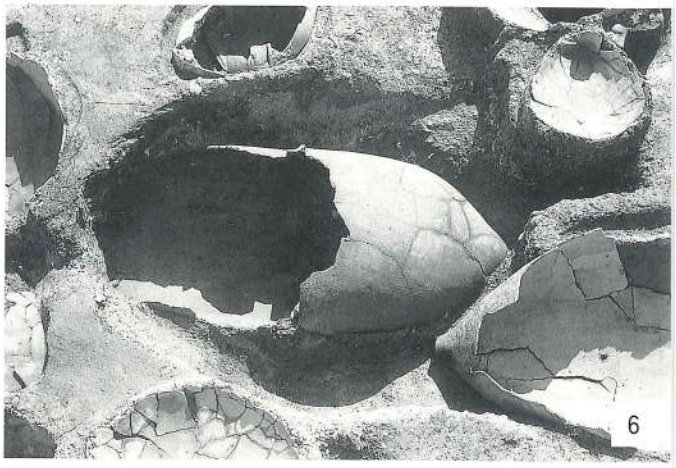
船石南遺跡３・４区全景　―南東より　写真手前が３区―

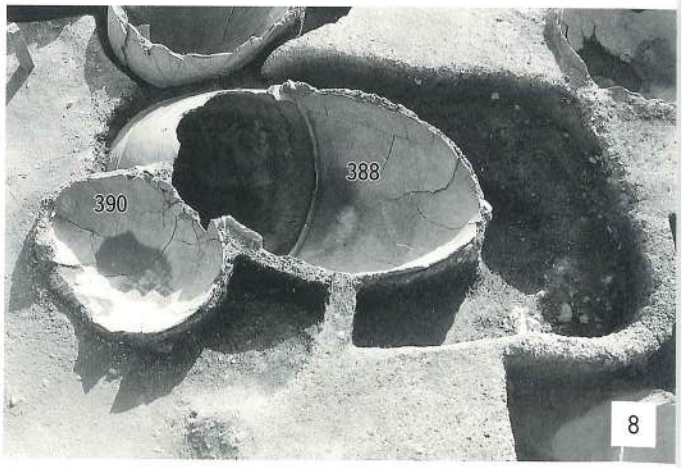


船石南遺跡４区全景　―写真上方が北―

船石南遺跡５区全景　―写真上方が北―







1　左）SJ-363・右前）SJ-364・中奥）SJ-408　―南より―

2　SJ-366　―南より―

3　SJ-367　―南東より―

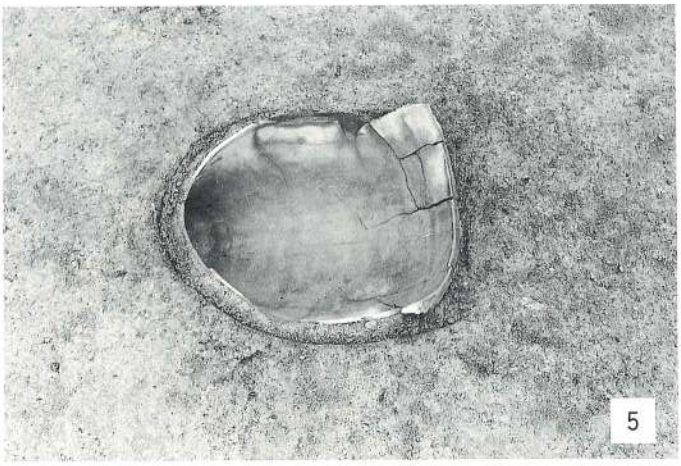
4　SJ-369　―北東より―

5　SJ-384　―北東より―

6　SJ-385　―北東より―

7　SJ-387　―南より―

8　中）SJ-388・左）SJ-390　―北東より―



1　SJ-389　―南より―

2　SJ-393　―北西より―

3　SJ-394　―北東より―

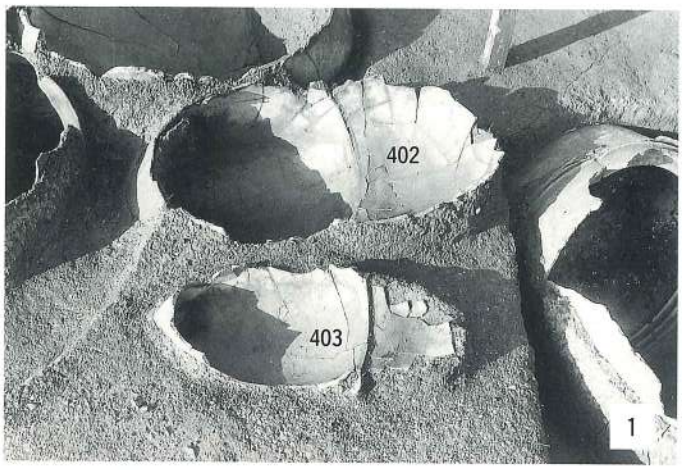
4　SJ-395　―南西より―

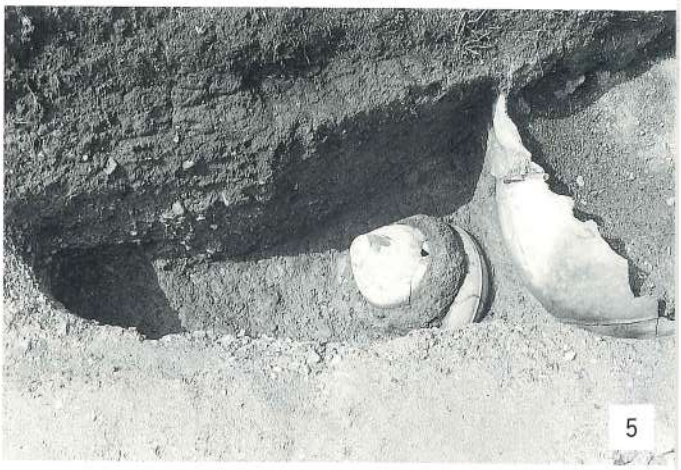
5　SJ-396　―南より―

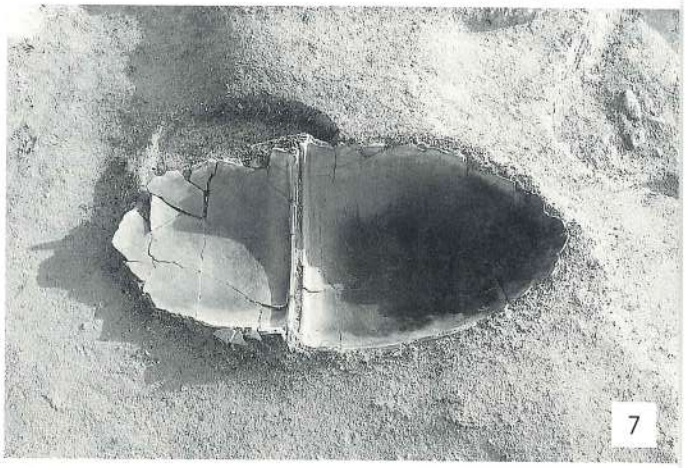
6　SJ-398　―北東より―

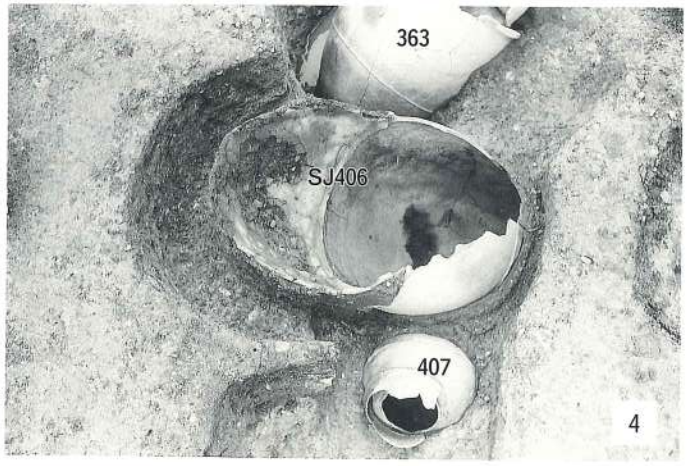
7　中）SJ-400・右奥）SJ-401・左奥）SJ-402　―北より―

8　SJ-401　―東より―









1　奥）SJ-402・前）SJ-403　―南より―

2　SJ-404　―東より―

3　SJ-405　―東より―

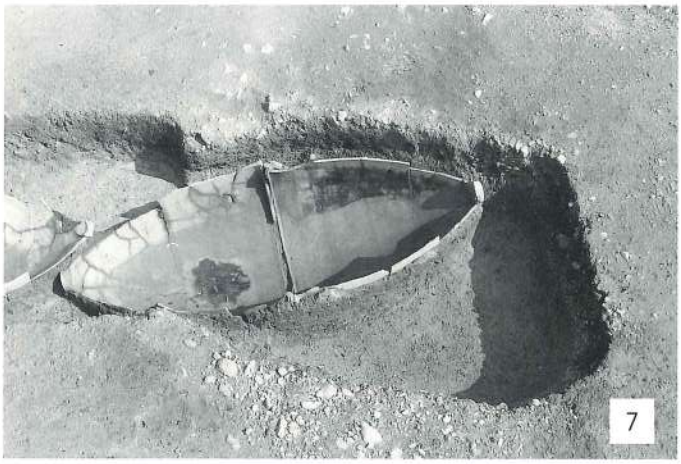
4　中）SJ-406・前）SJ-407　―南より―

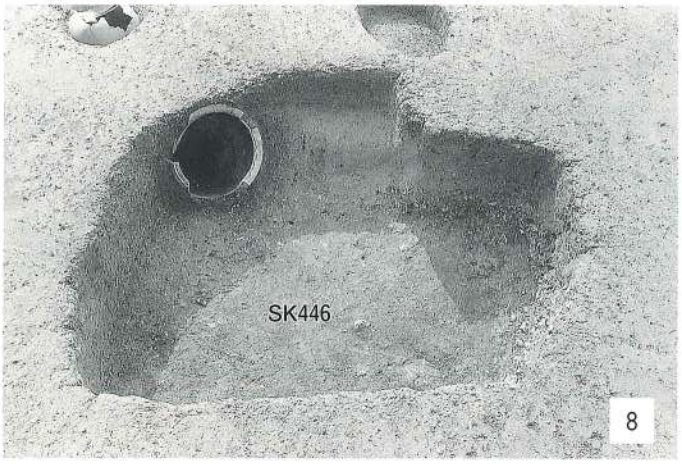
5　SJ-407　―東より―

6　SJ-409　―東より―

7　SJ-410　―北より―

8　SJ-411　―北東より―





1　SJ-412　―南より―

2　SJ-413　―南西より―

3　SJ-414　―北東より―

4　SJ-415　―南より―

5　SJ-417　―南西より―

6　SJ-418　―南西より―

7　SJ-419　―南西より―

8　左奥）SJ-432・前）SK-446　―北西より―

1　SJ-433　―北東より―

2　SJ-440　―北東より―

3　SJ-442　―北東より―

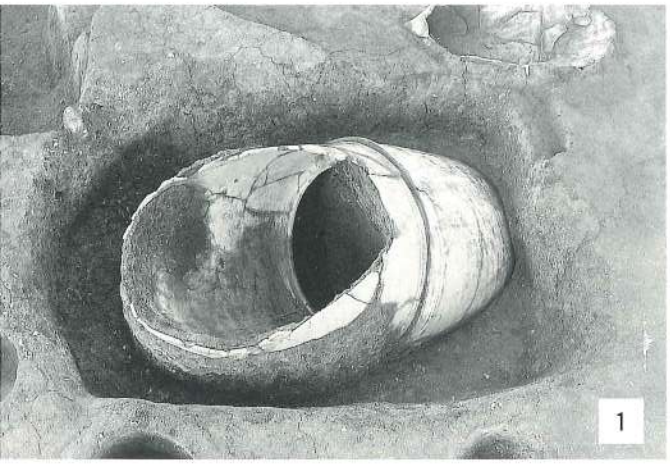
4　SJ-541B　―北より―

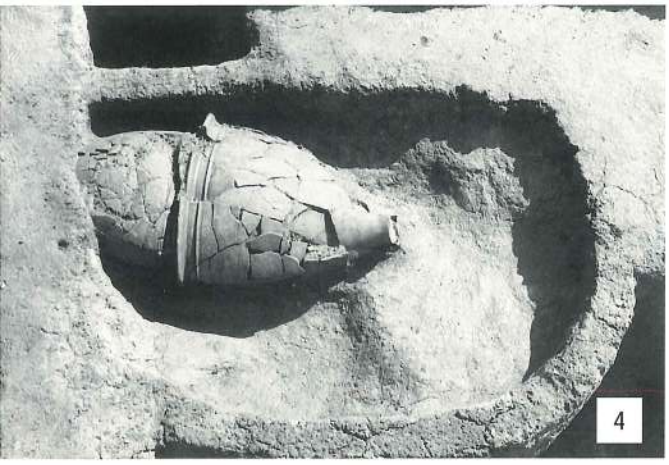
5　SJ-452　―北より―

6　SJ-453　―北東より―

7　SJ-454　―西より―

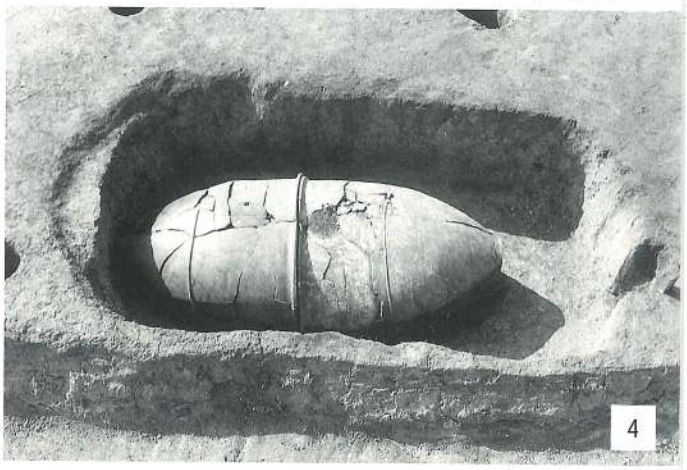
8　SJ-456　―北より―





1　SJ-457　―南より―
2　SJ-458　―北東より―
3　SJ-459　―北東より―
4　SJ-460　―西より―

5　SJ-461　―南西より―
6　SJ-463　―北東より―
7　SJ-464　―北東より―
8　SJ-467　―北東より―



1　SJ-468　―北より―

2　SJ-469　―北より―

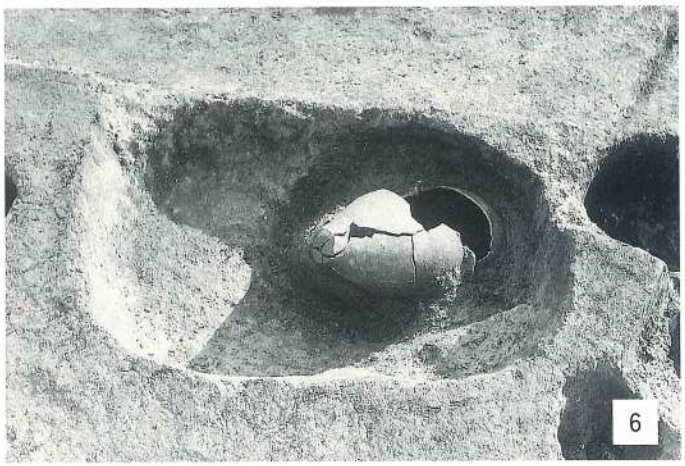
3　SJ-470　―北より―

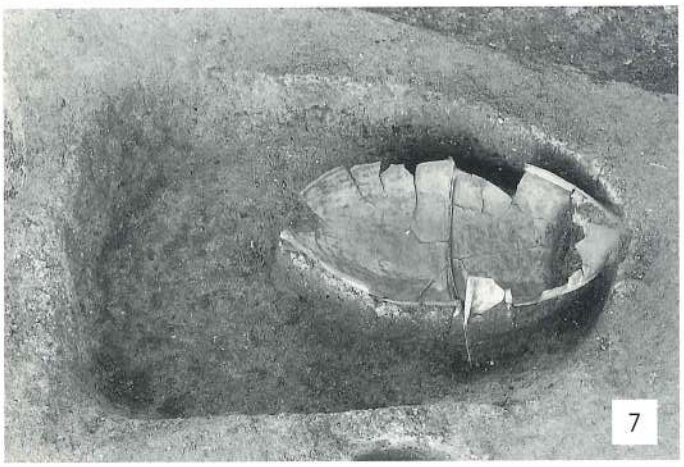
4　SJ-471　―北東より―

5　前）SJ-472・奥）SJ-473　―北より―

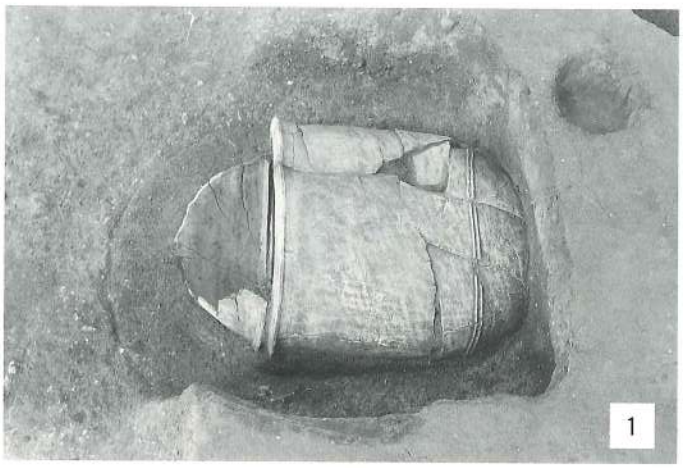
6　SJ-474　―北より―

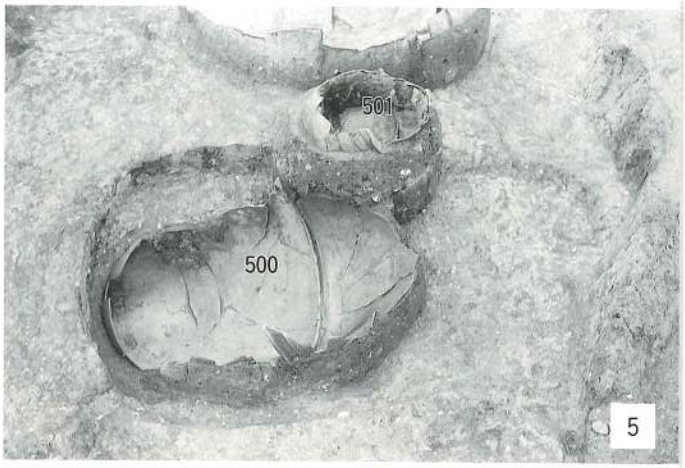
7　SJ-475　―南より―

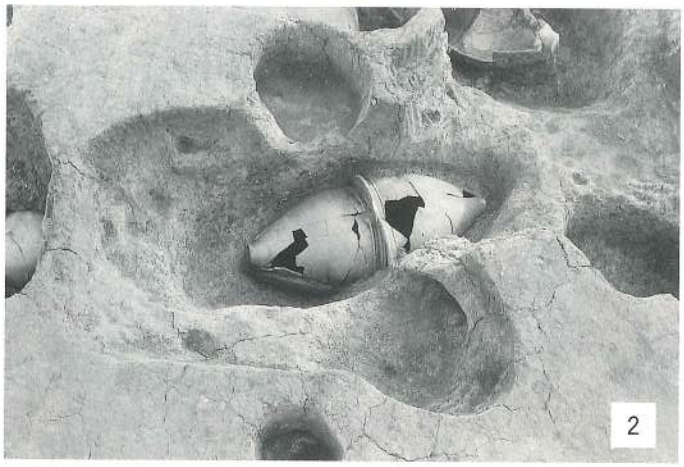


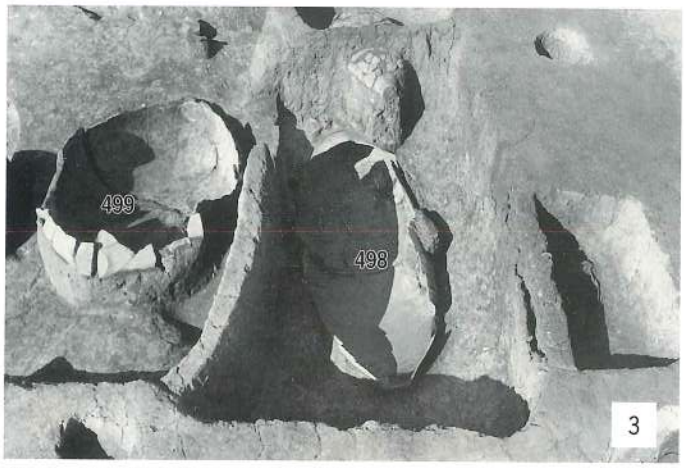


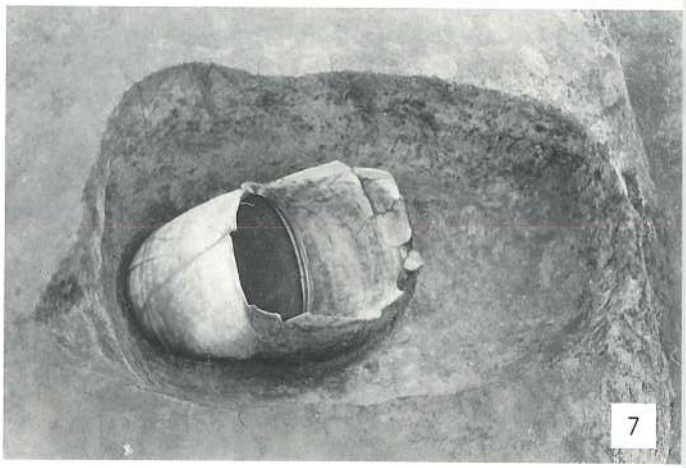
1　SJ-478　—南より—
2　SJ-479　—西より—
3　SJ-480　—北より—
4　SJ-481　—北東より—
5　SJ-482　—北東より—
6　SJ-483　—北より—
7　SJ-484　—南西より—
8　SJ-488　—北東より—

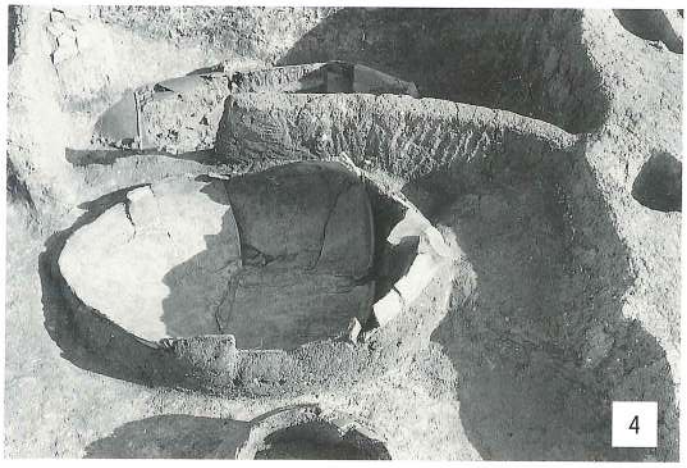












1　SJ-495　―南西より―

2　SJ-497　―北より―

3　SJ-498　―南東より―

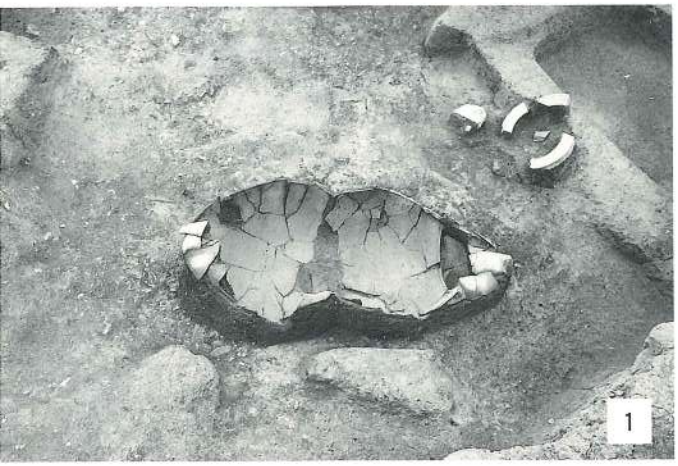
4　SJ-499　―南西より―

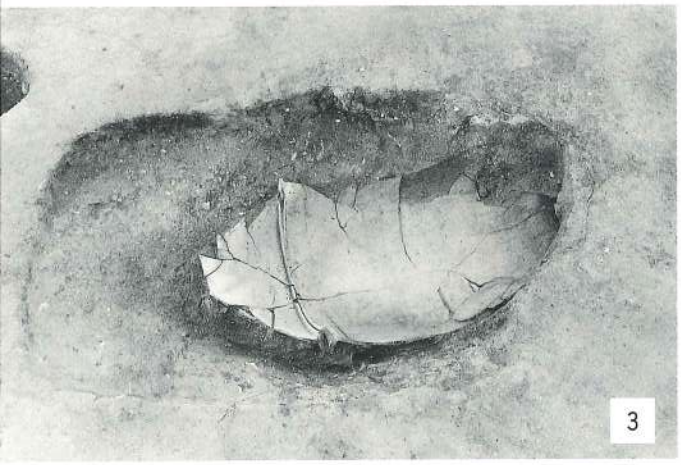
5　前）SJ-500・奥）SJ-501　―南西より―

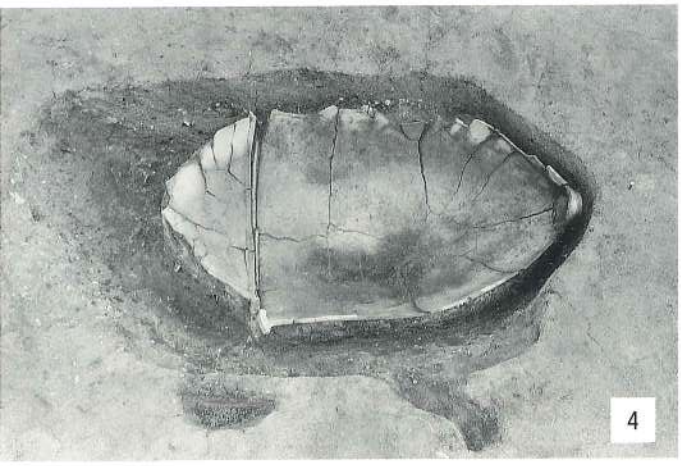
6　SJ-510　―北東より―

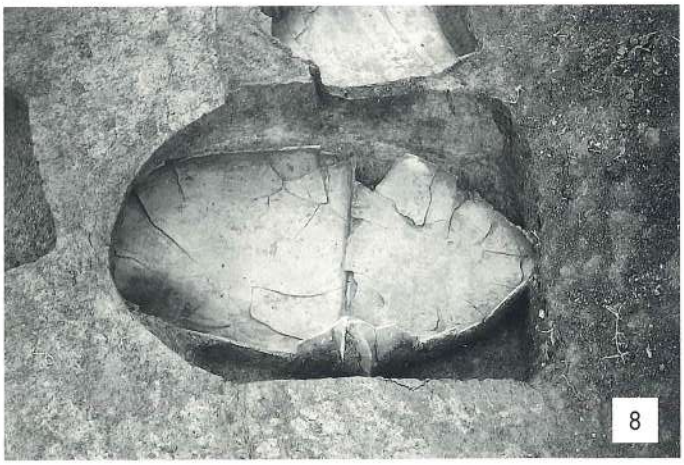
7　SJ-511　―北東より―

8　SJ-512　―北東より―









1　SJ-513　―北東より―

2　SJ-521　―北東より―

3　SJ-528　―北東より―

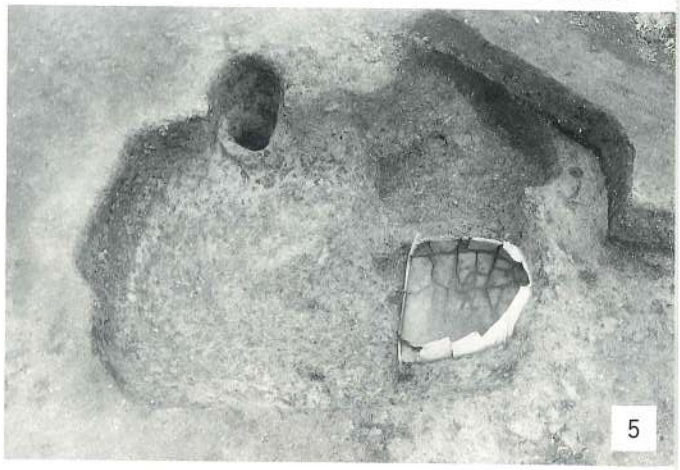
4　SJ-529　―北東より―

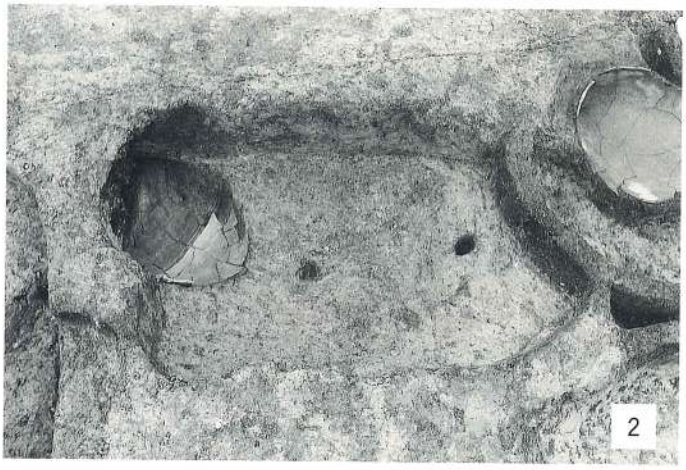
5　右）SJ-530・左）SK-562　―北より―

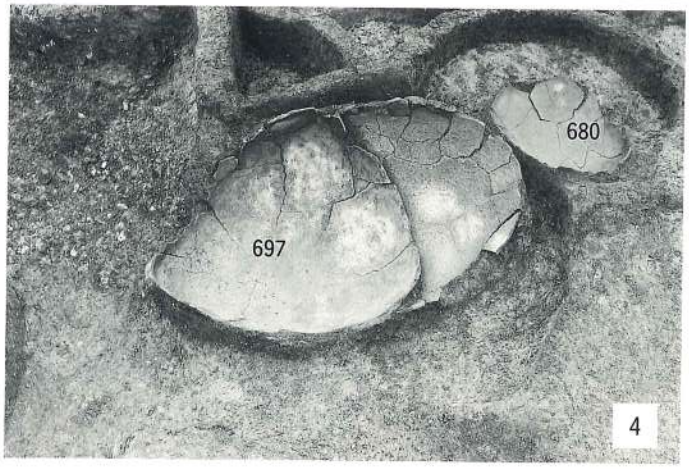
6　SJ-535　―北東より―

7　SJ-597　―北より―

8　SJ-675　―北より―







1　SJ-677　―北より―

2　SJ-678　―西より―

3　SJ-679　―北より―

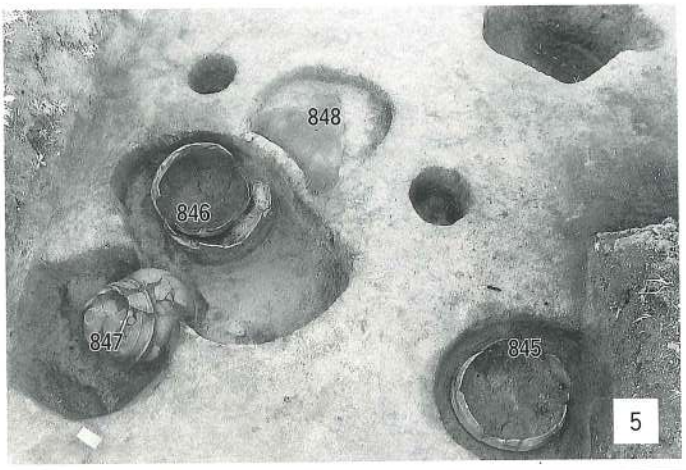
4　中）SJ-680・左）SJ-697　―東より―

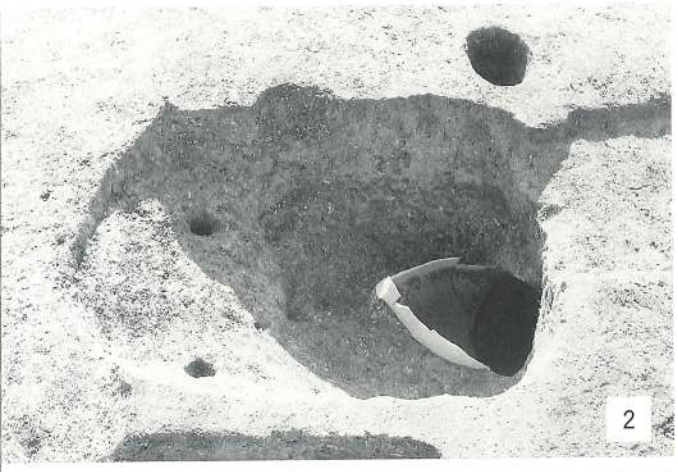
5　SJ-687　―北より―

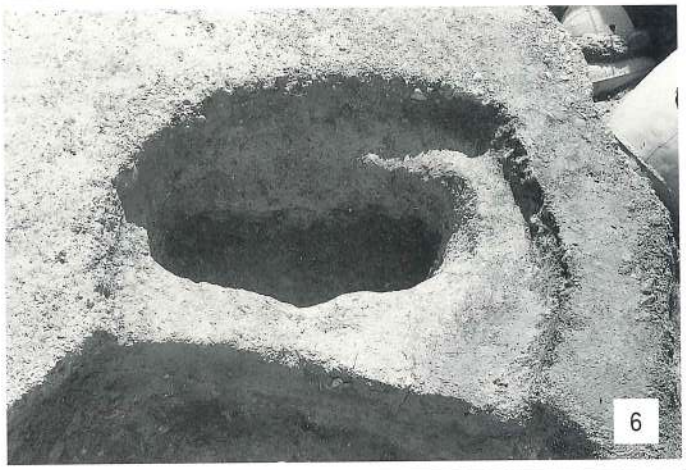
6　SJ-694　―北より―

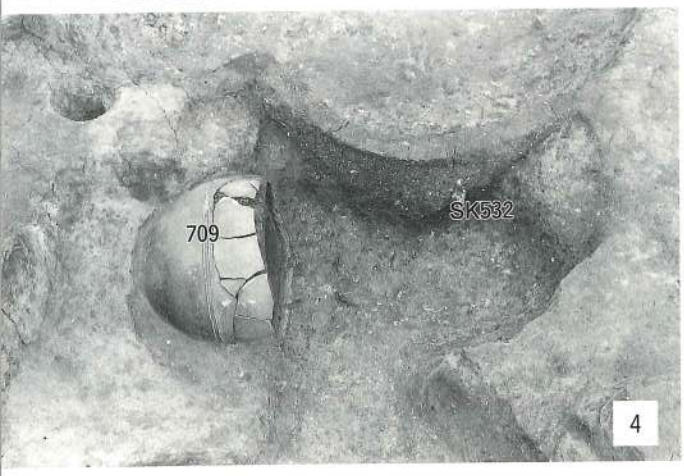
7　SJ-695　―東より―

8　SJ-696　―東より―









1　SJ-698　―南西より―

2　SJ-700　―北より―

3　SJ-703　―北より―

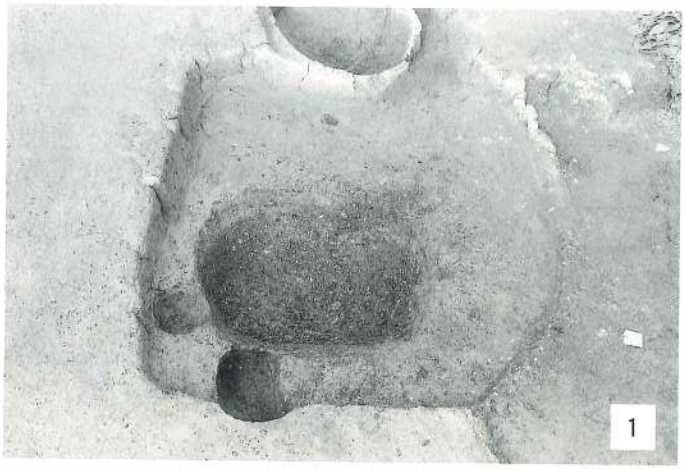
4　左）SJ-709・右）SK-532　―南西より―

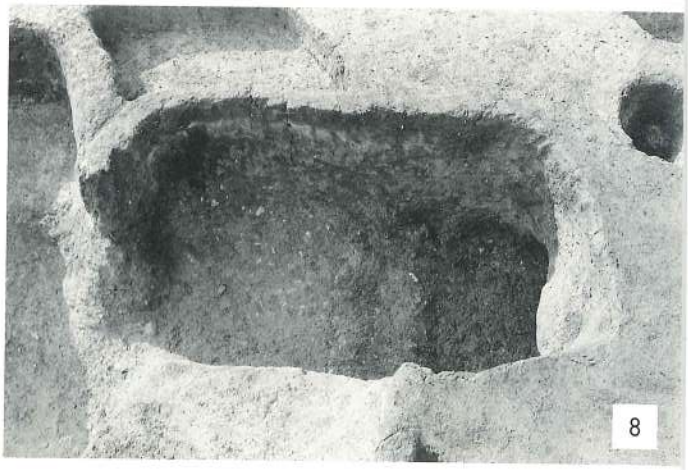
5　右）SJ-845・左中）SJ-846・左前）SJ-847・奥）SJ-848　―北より―

6　SP-386　―北東より―

7　SP-399　―北西より―

8　SP-441　―北東より―





1　SP-441　―南より―

2　SP-443　―東より―

3　SP-444　―北東より―

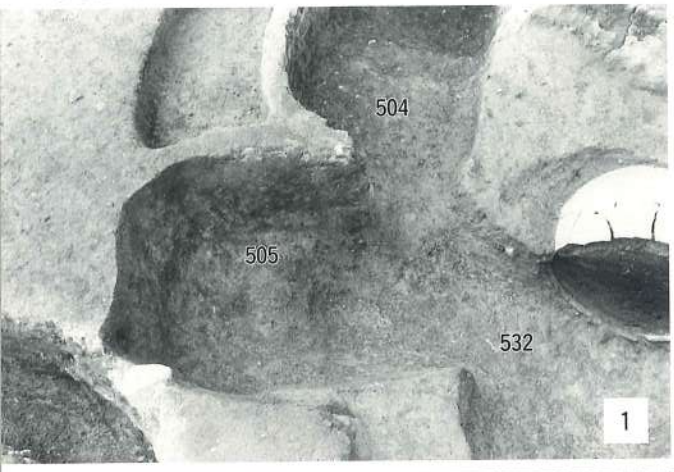
4　SP-445　―南より―

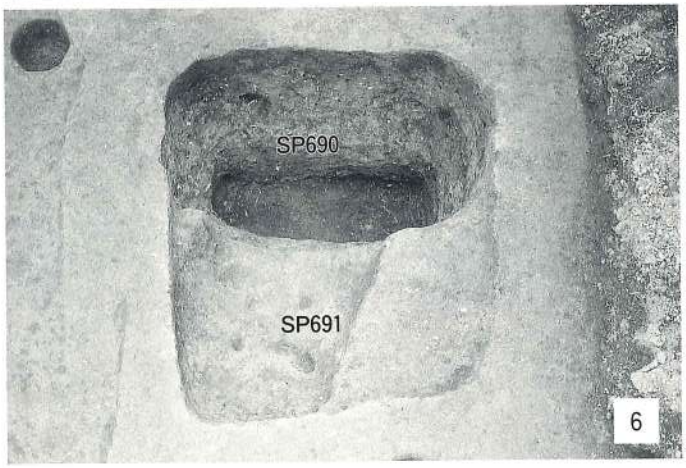
5　SP-445　―南より―

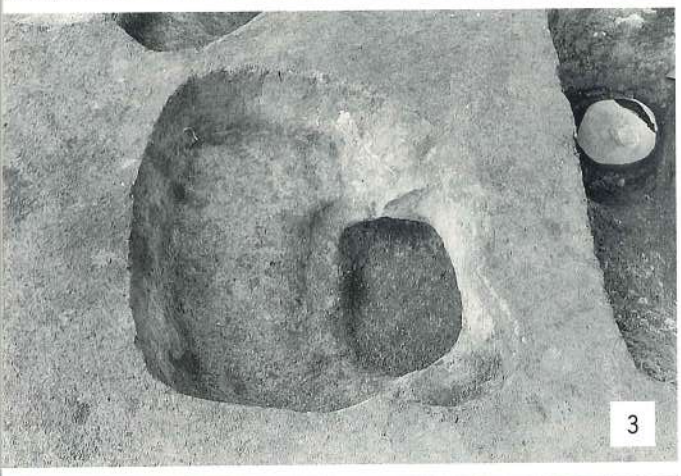
6　SP-496　―西より―

7　SP-503　―北西より―

8　SP-504　―北より―







1　SP-505　―東より―

2　SP-516　―南より―

3　SP-534　―南東より―

4　SP-536　―南東より―

5　SP-674　―南東より―

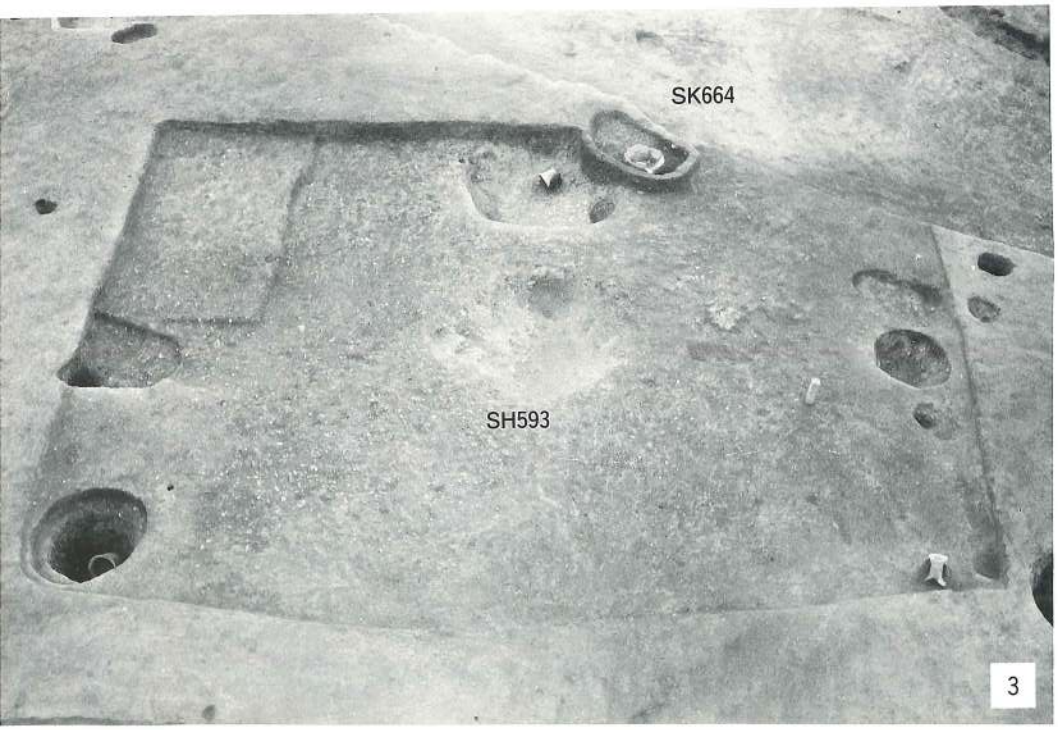
6　奥）SP-690・前）SP-691　―北東より―

7　SP-704　―東より―

1　SH-383　―北より―

2　SH-423　―南東より―

3　SH-424　―北より―



1　SH-425　―北より―

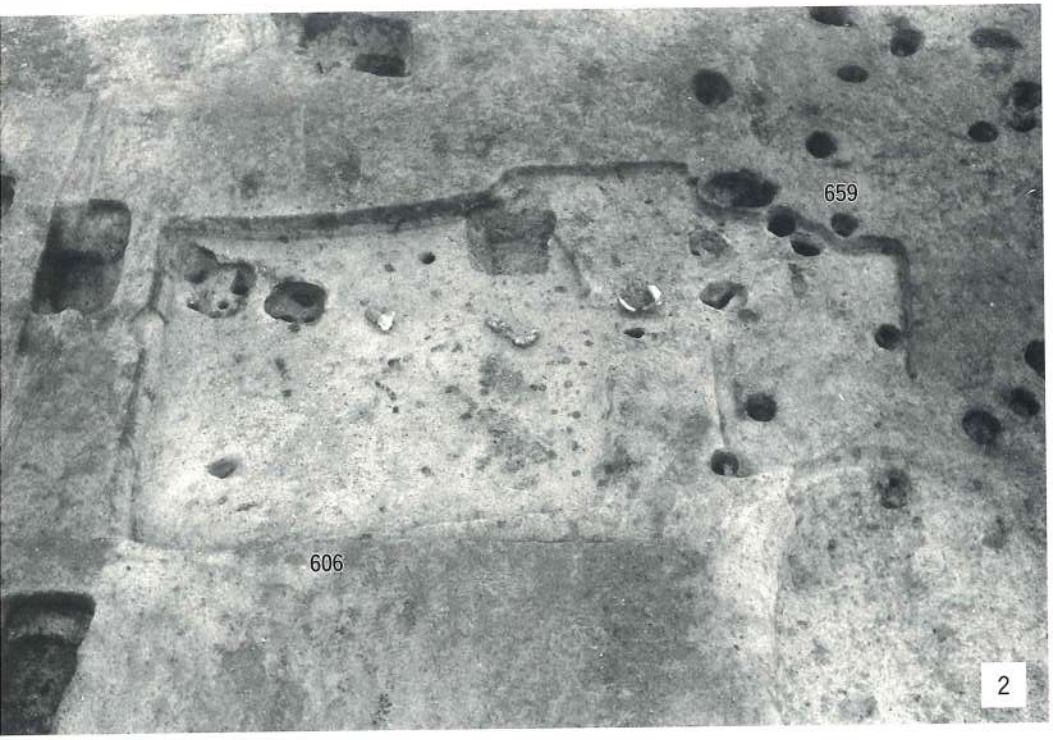
2　SH-502　―南東より―

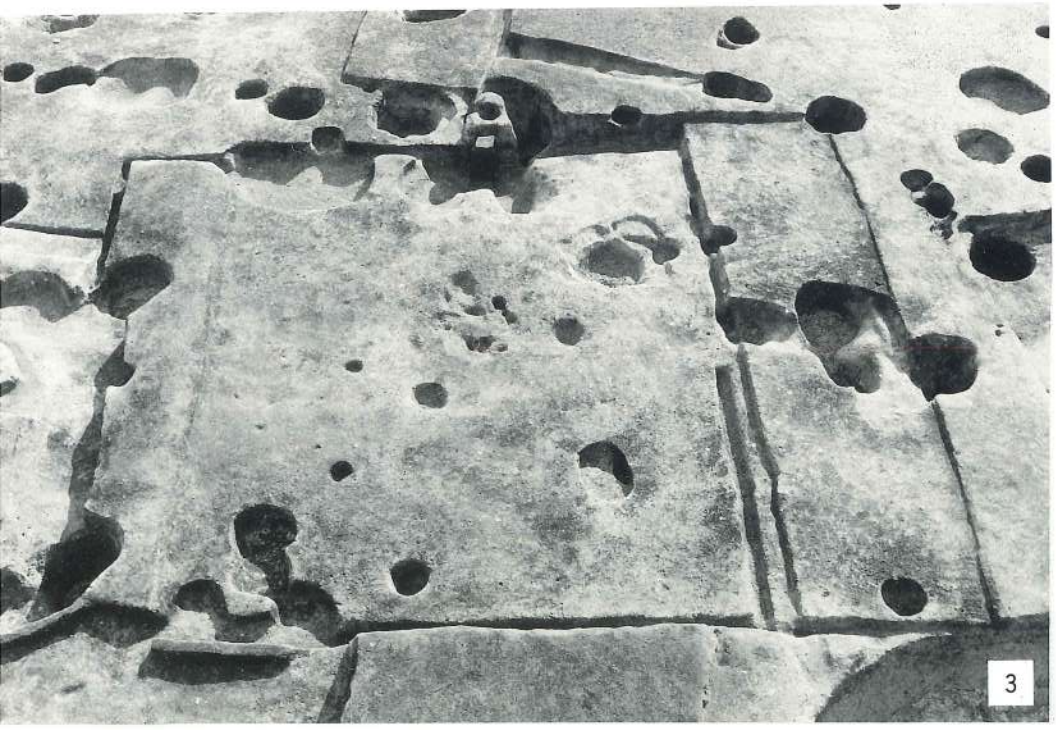
3　SH-593・SK-664　―北より―

1　SH-594　—東より—

2　SH-603　—東より—

3　SH-604　—東より—

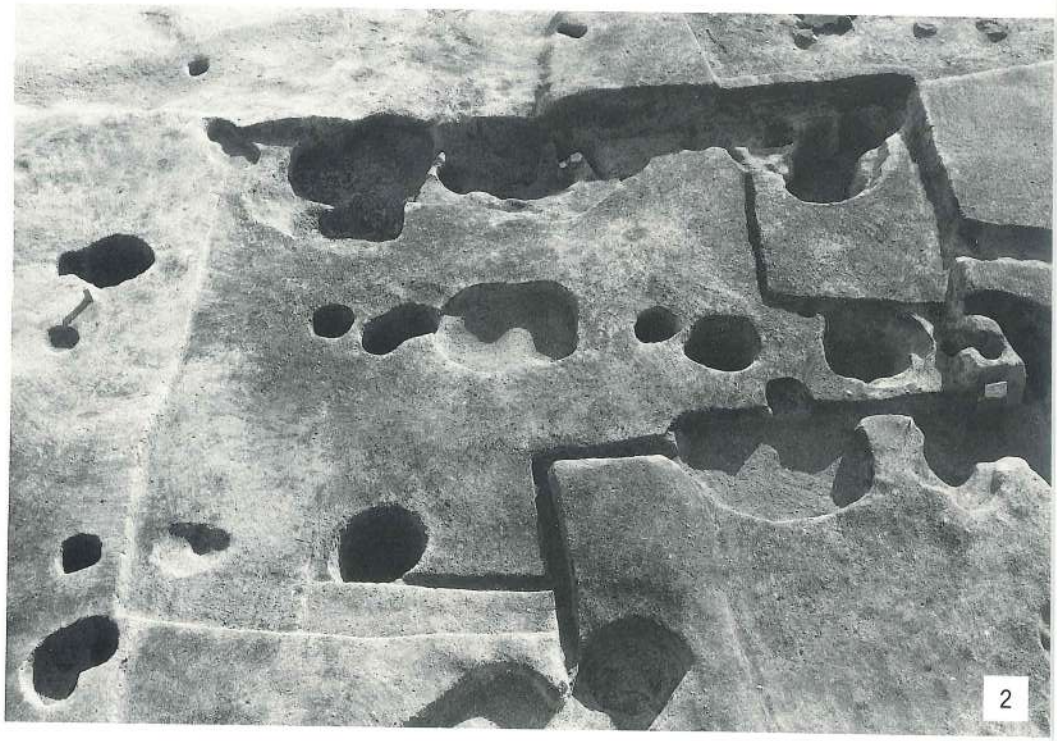




1　SH-605　―南より―

2　SH-606・SH-659　―南より―

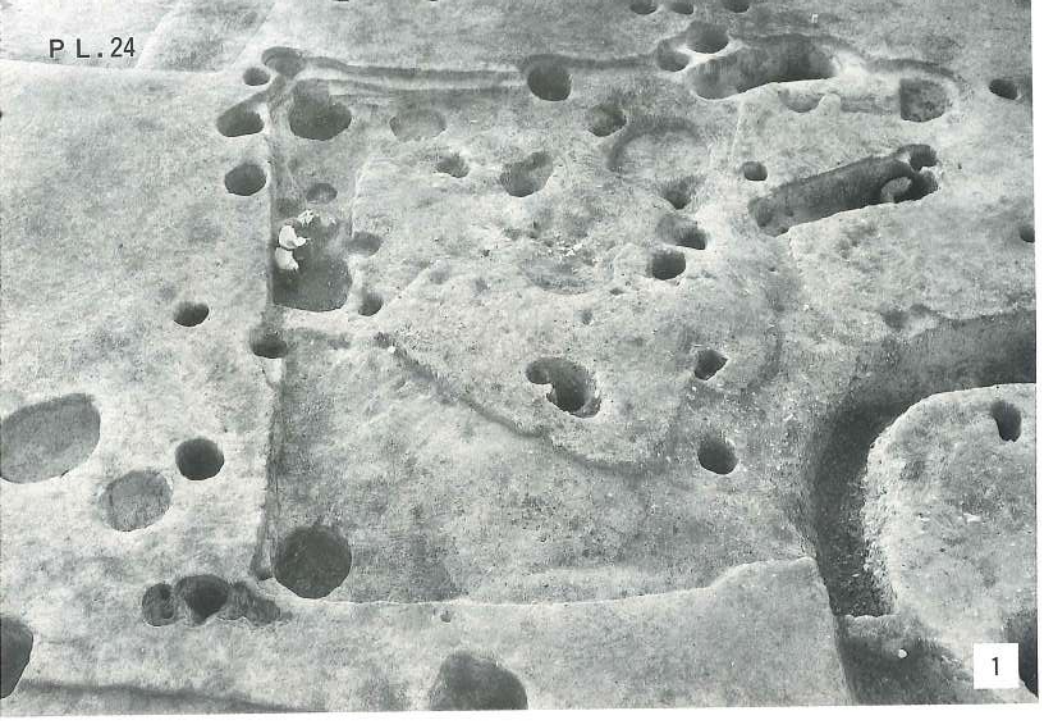
3　SH-607　―北より―

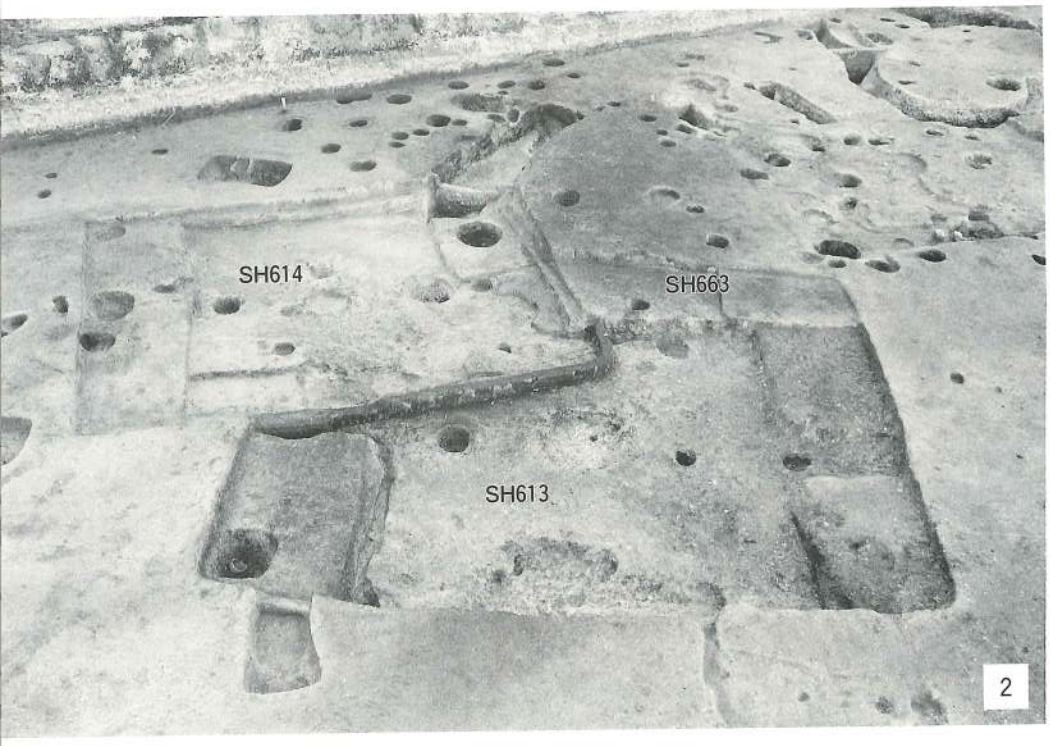


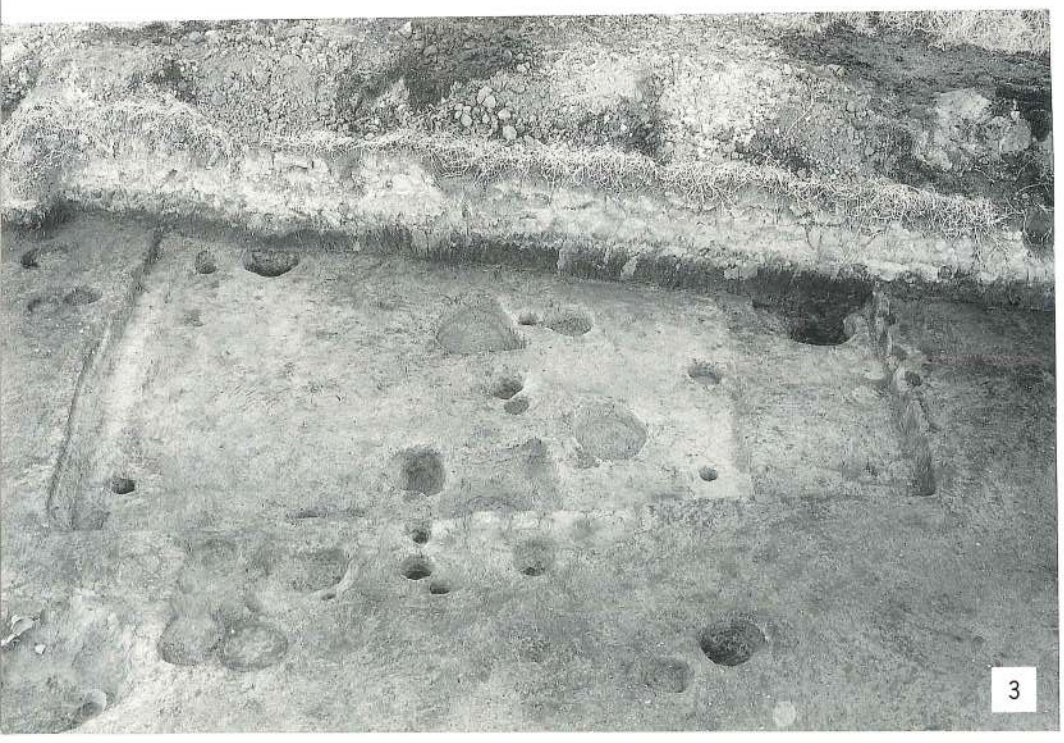
1　SH-608　―西より―

2　SH-609　―北より―

3　SH-610　―北より―



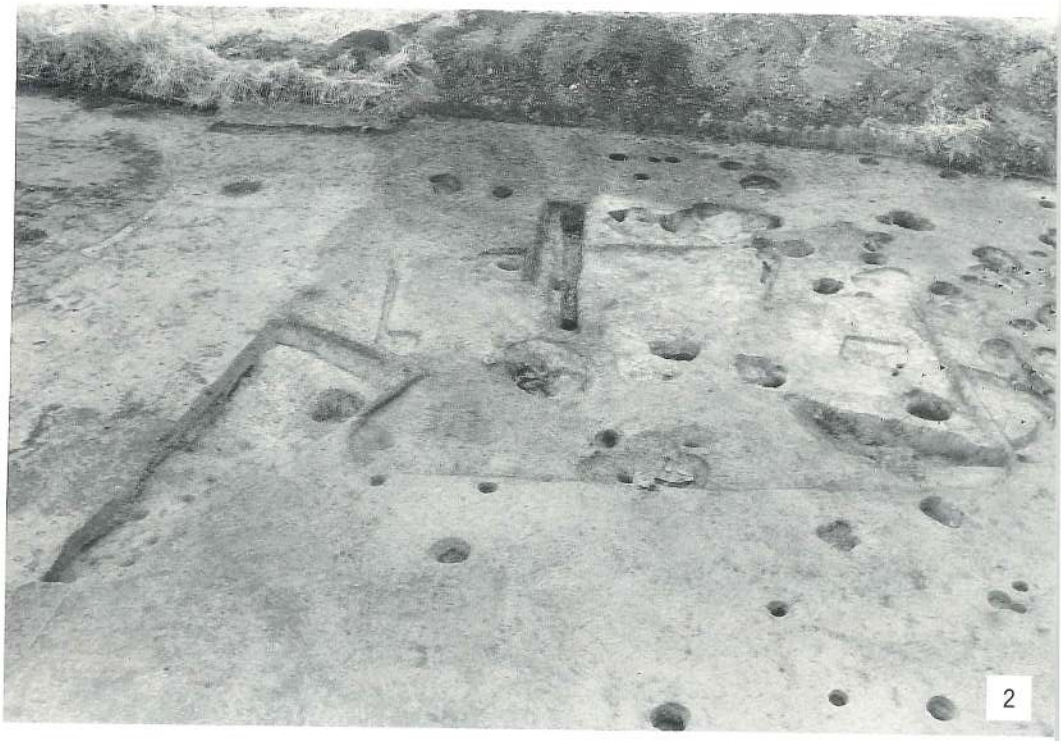


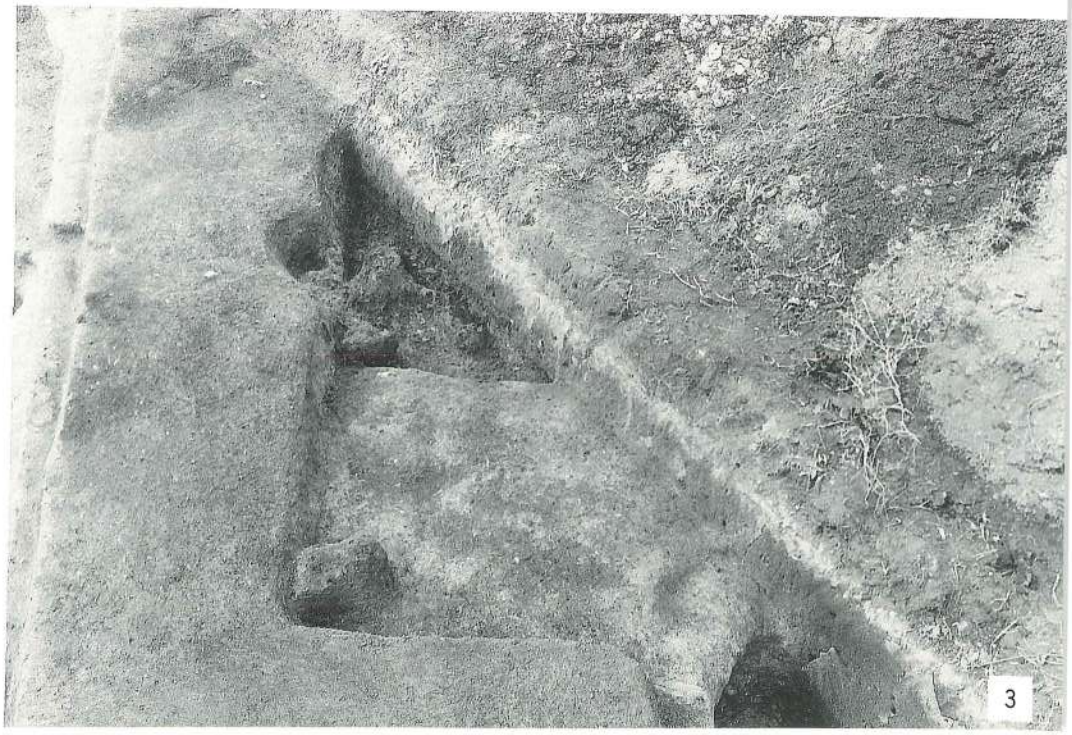


1　SH-612　―東より―

2　SH-613・SH-614・SH-663
　―南より―

3　SH-615　―南より―

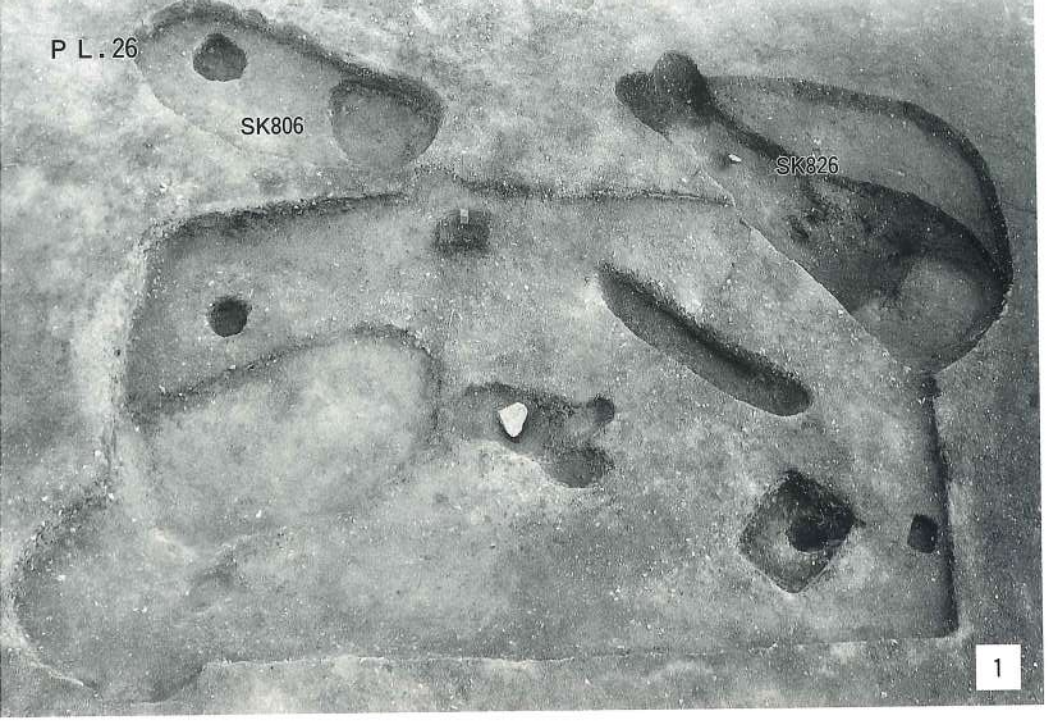




1　SH-616・SH-617　―南東より―

2　SH-618　―東より―

3　SH-660　―東より―



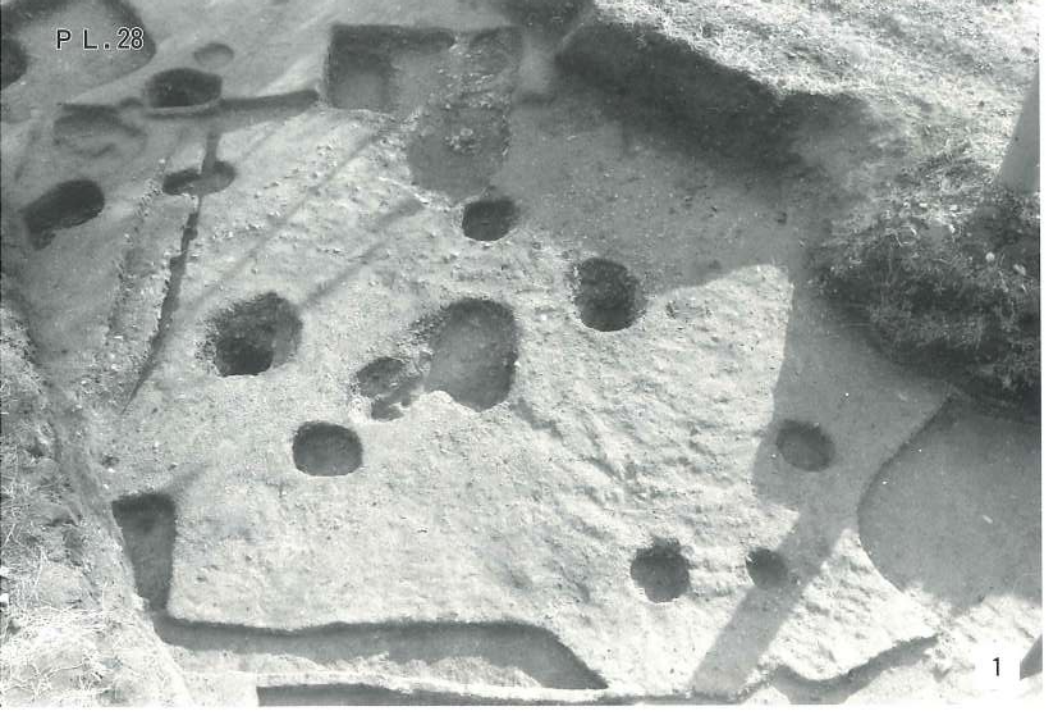
1　SH-802・SK-806・SK-826
　—西より—

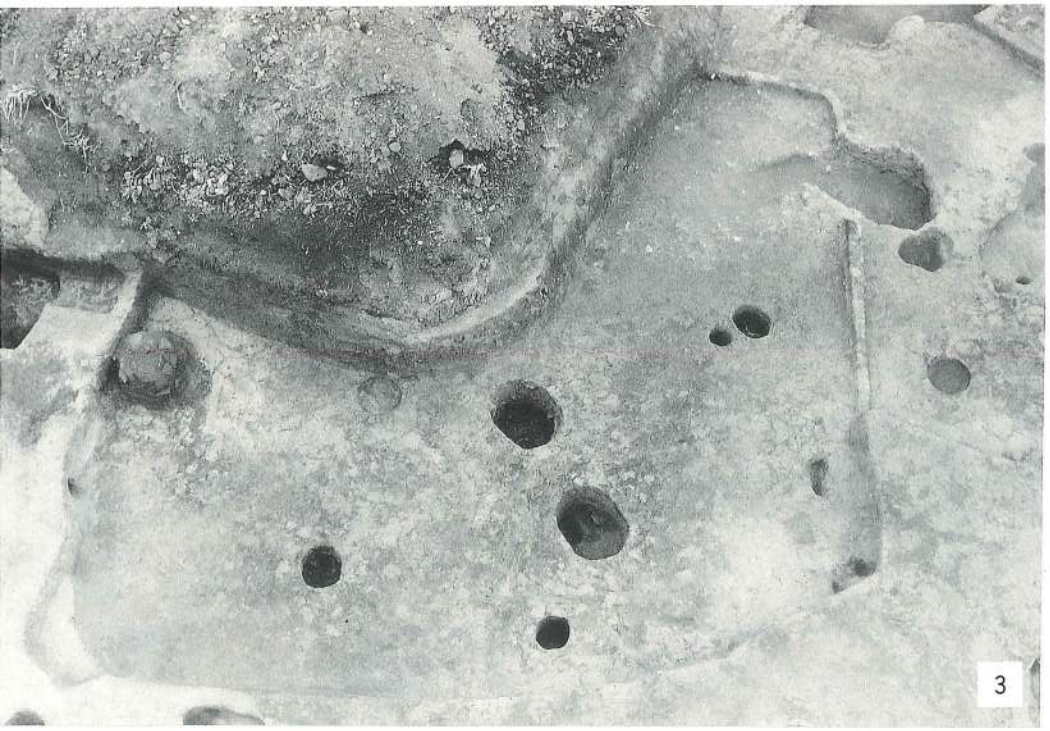
2　SH-807　—西より—

1　SH-815　―北より―

2　SH-818　―西より―

3　SH-824　―東より―





1　SH-837　—北より—

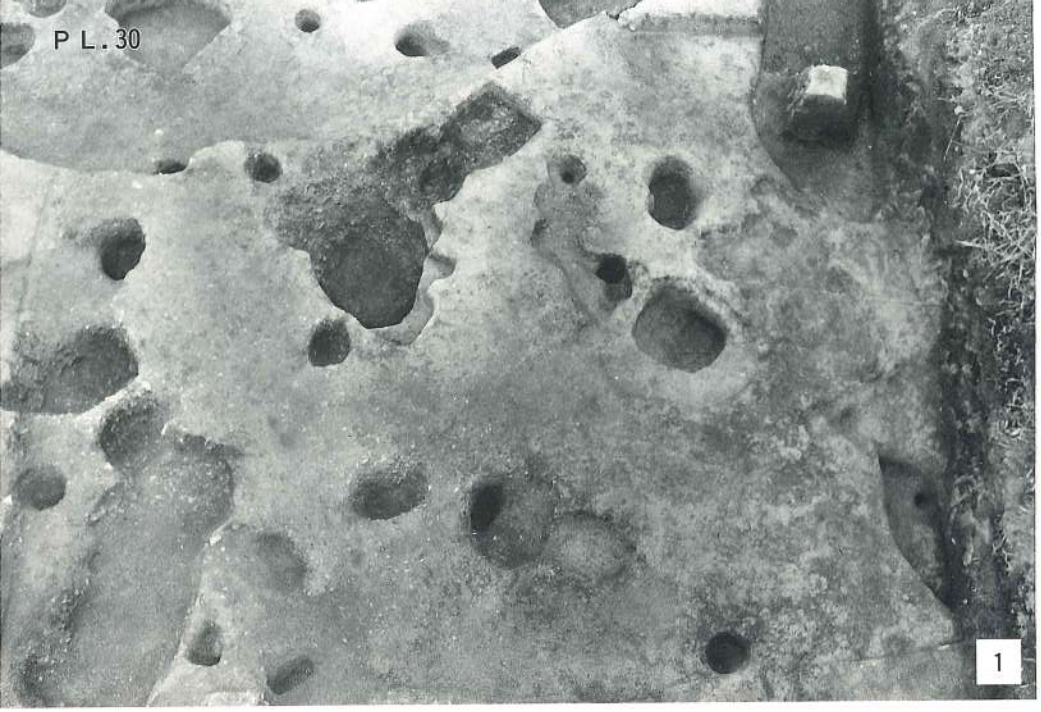
2　SH-842　—西より—

3　SH-851　—南西より—

1　SH-852　―南より―

2　SH-853・SH-854　―南西より―

3　SH-855　―南東より―



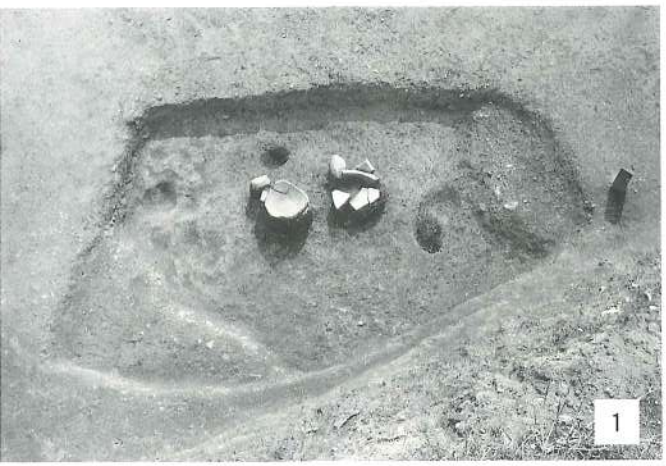
1　SH-856　―北東より―

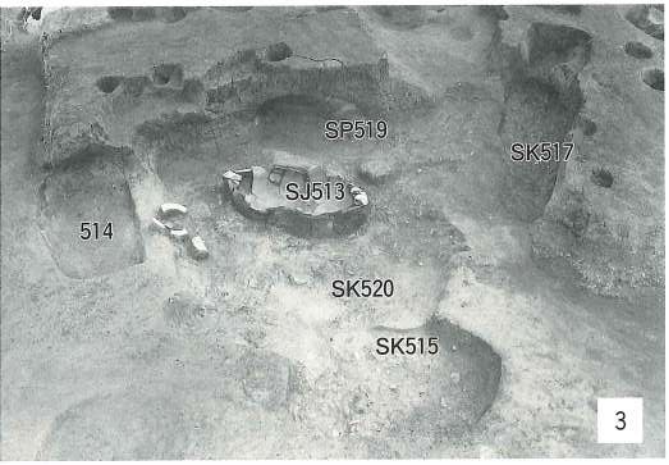
2　SH-857　―西より―

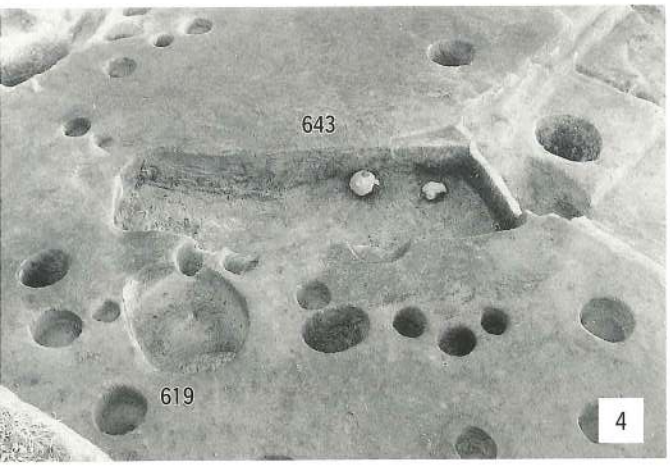
3　SB-656　―南西より―

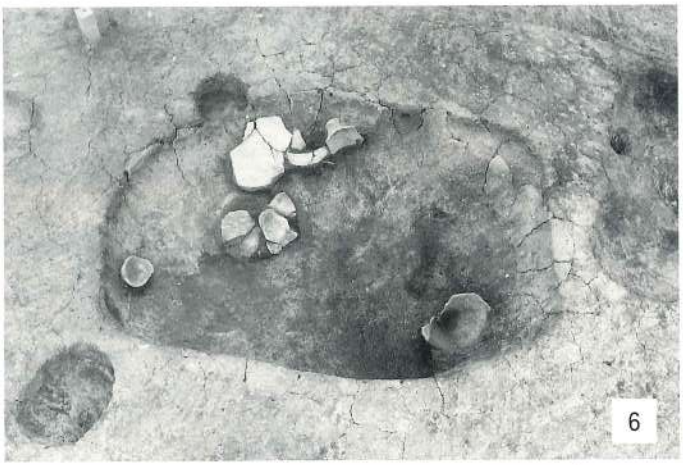
1　SB-662　―西より―

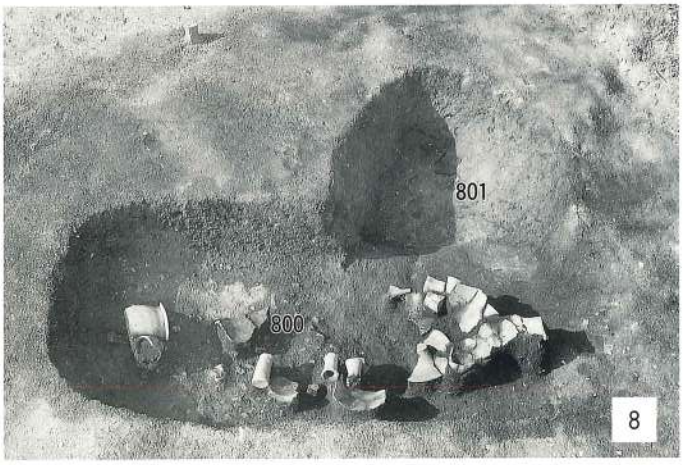
2　SB-714　―南より―











1　SK-416　―北より―

2　SK-507　―北東より―

3　左）SK-514・右前）SK-515・右奥）SK-517・中）SK-520・SJ-513・SP-519　―南西より―

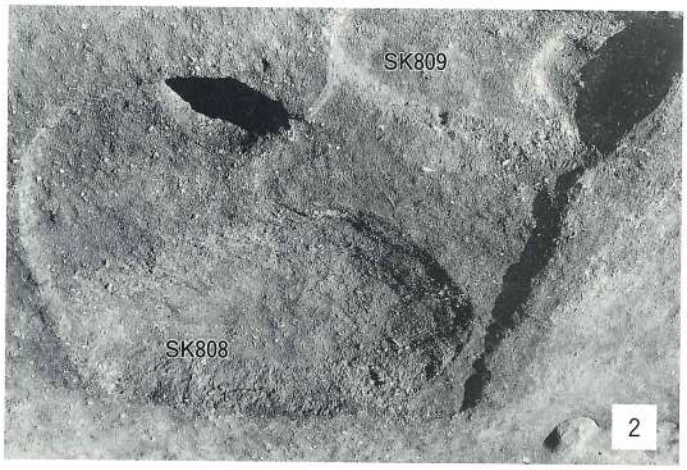
4　左前）SK-619・中）SK-643　―北西より―

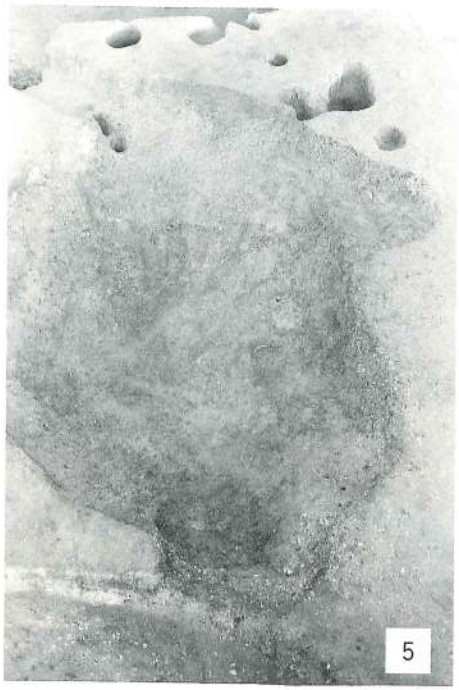
5　SK-621　―東より―

6　SK-622　―南より―

7　SK-644　―北東より―

8　前）SK-800・右奥）SK-801　―東より―





1　SK-803　―北より―

2　前）SK-808・右奥）SK-809　―北より―

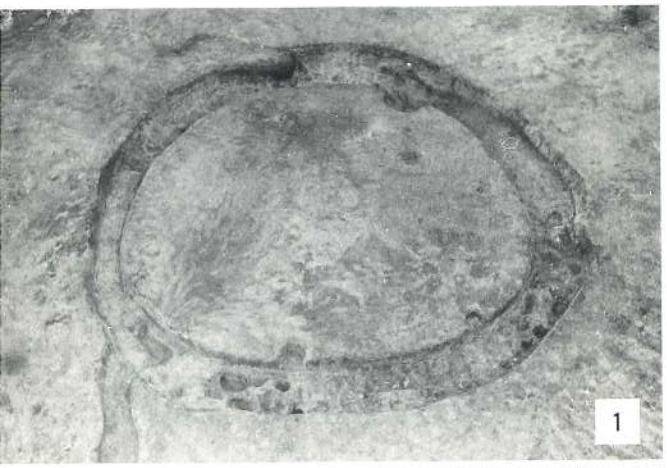
3　左奥）SK-810・前）SK-811　―北より―

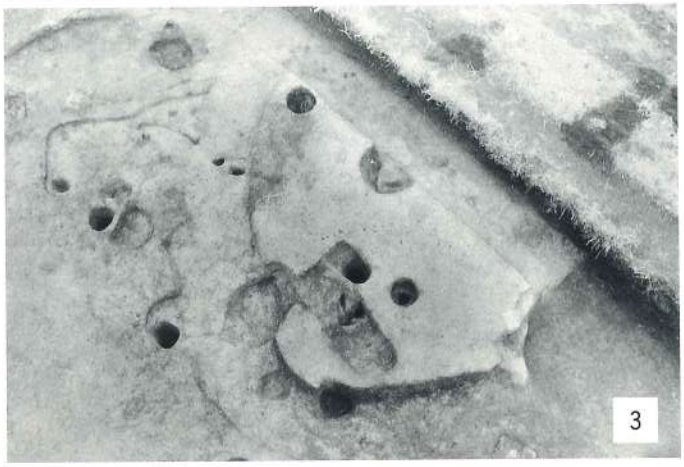
4　SK-812　―西より―

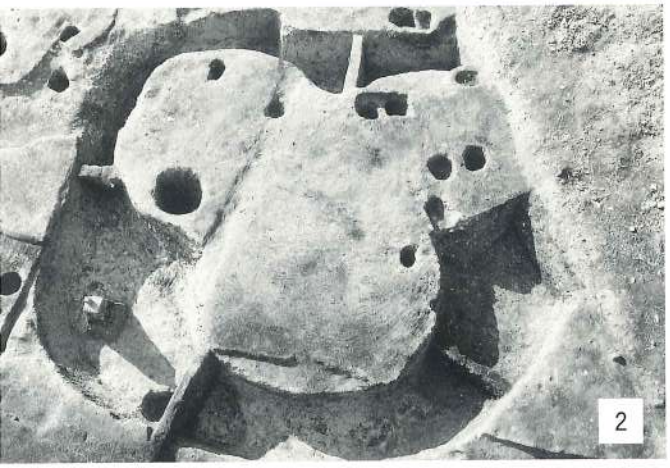
5　SK-816　―西より―

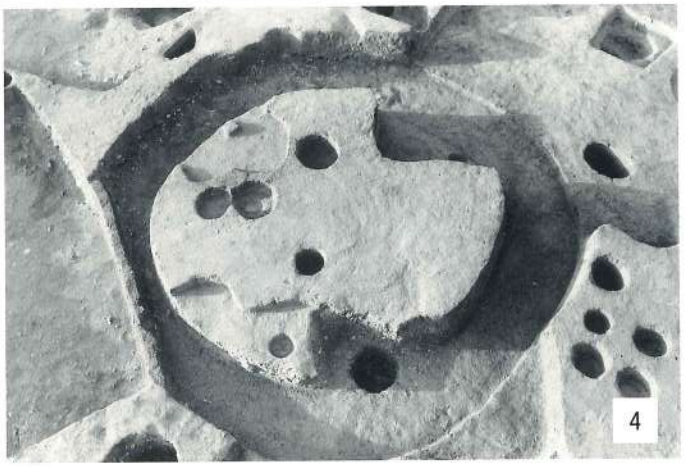
6　SK-829　―西より―

7　中）SK-833・左）SK-834　―北より―









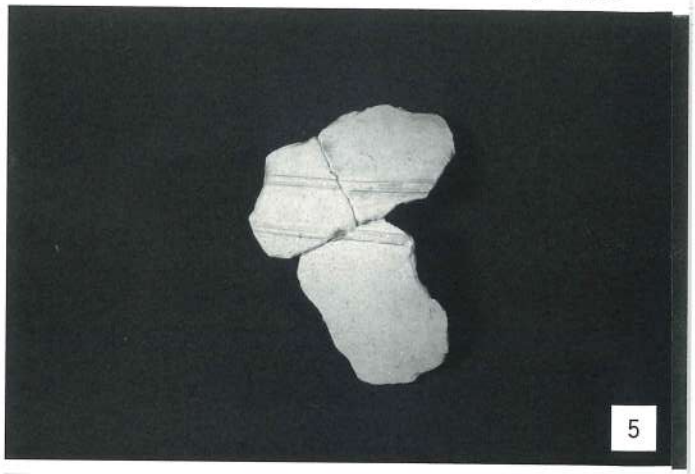
1　SX-576　—東より—

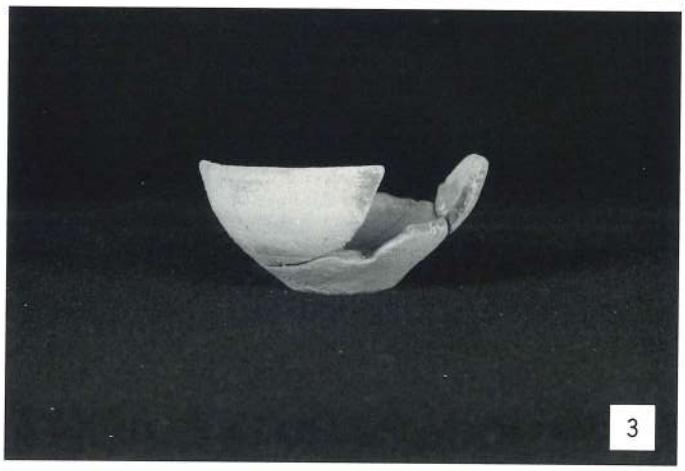
2　SX-611　—東より—

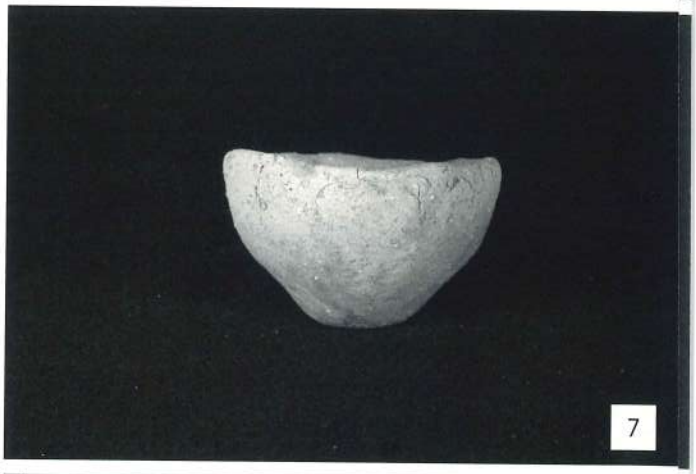
5　ST-676　—南西より—

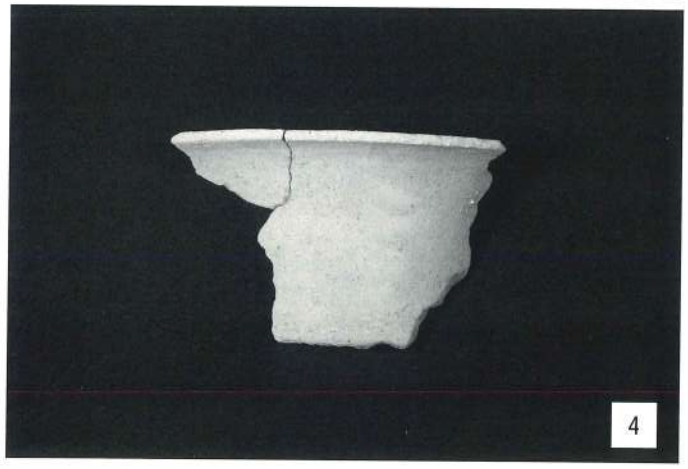
3　SX-858　—西より—

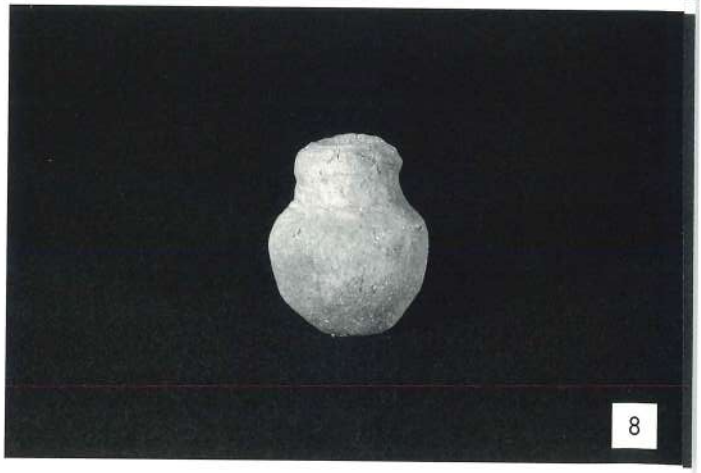
4　SX-866　—西より—



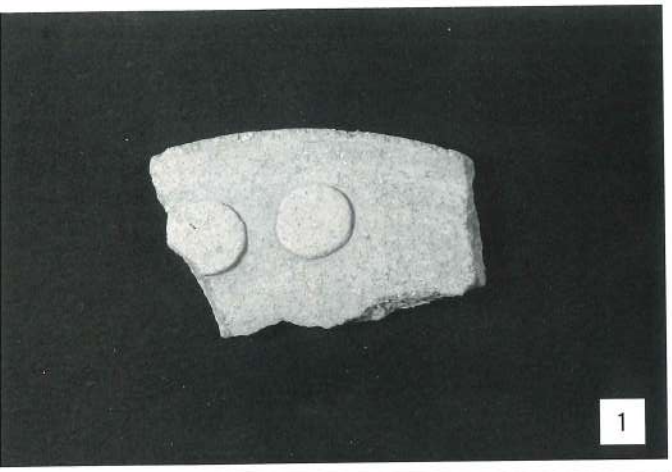


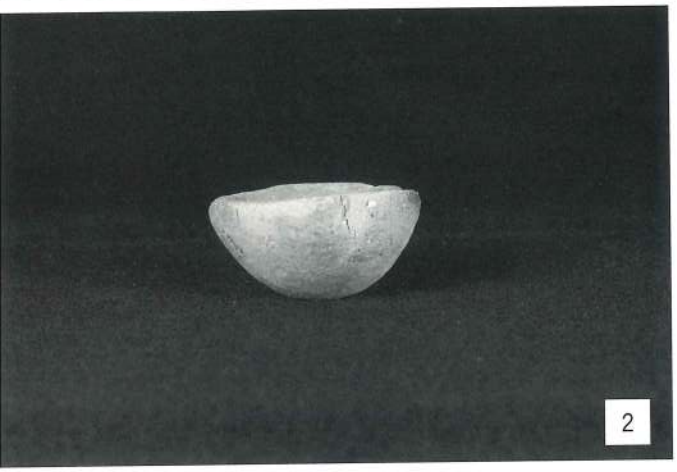


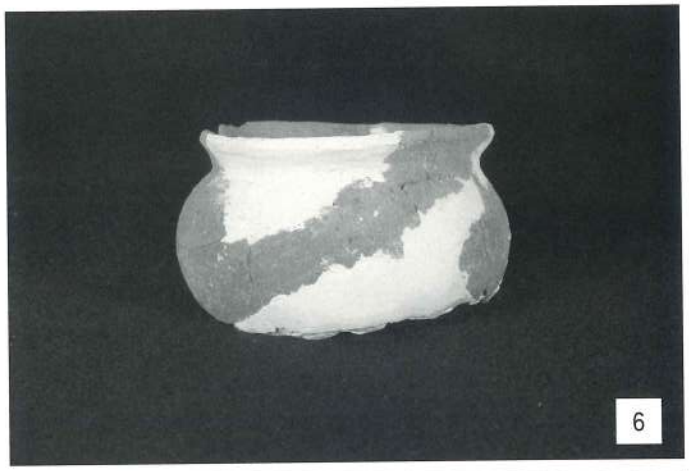


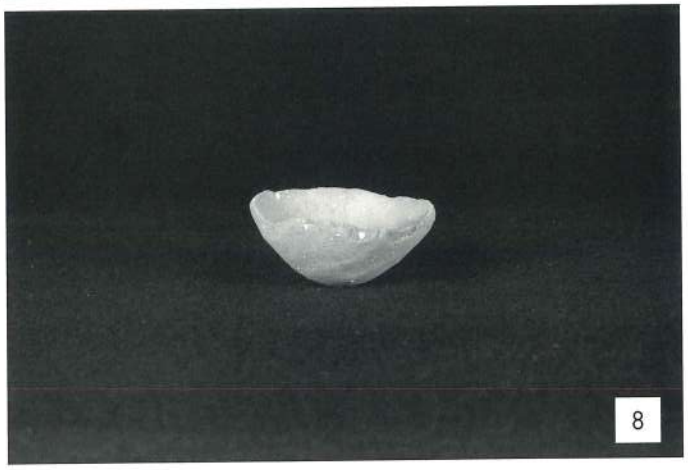


1　6　SP-503出土
2　7　SP-503出土
3　12　SK-507出土
4　14　SK-507出土
5　15　SK-507出土
6　20　SH-593出土
7　21　SH-593出土
8　22　SH-593出土









1　42　SH-613出土

2　46　SH-613・SH-616出土

3　47　SH-613・SH-616出土

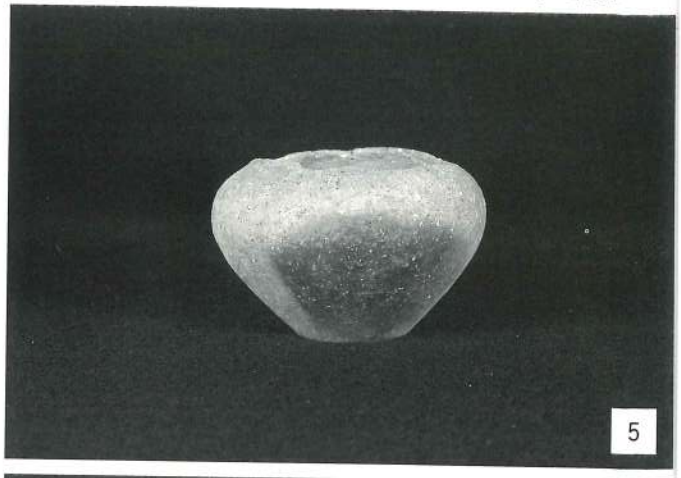
4　48　SH-613・SH-616出土

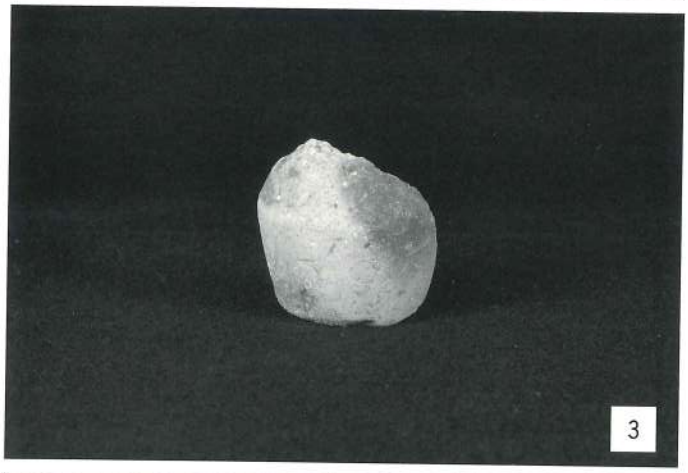
5　49　SH-613・SH-616出土

6　50　SH-613・SH-616出土

7　56　SH-613・SH-616出土

8　67　SH-615出土





1　71　SH-618出土

2　72　SH-618出土

3　74　SH-618出土

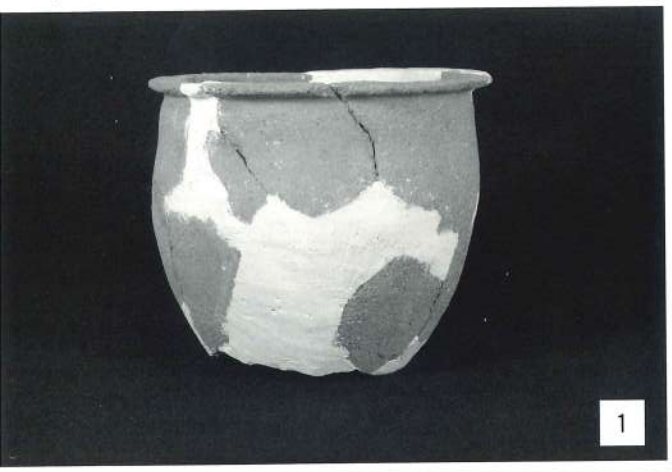
4　左）77　SH-619出土・中）104　SH-815出土・
　　右）116　SH-824出土

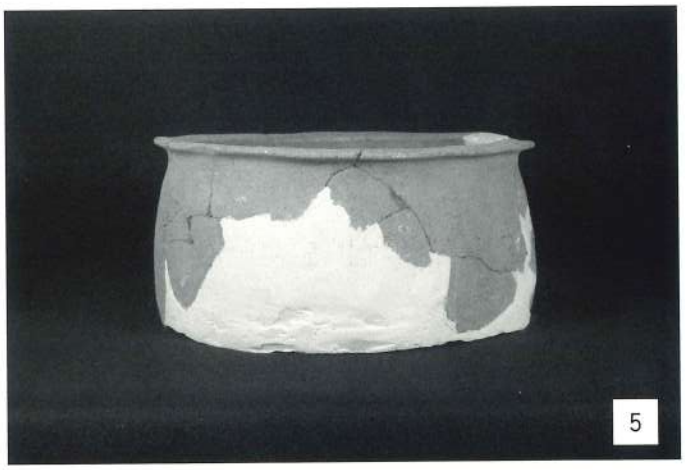
5　78　SK-621出土

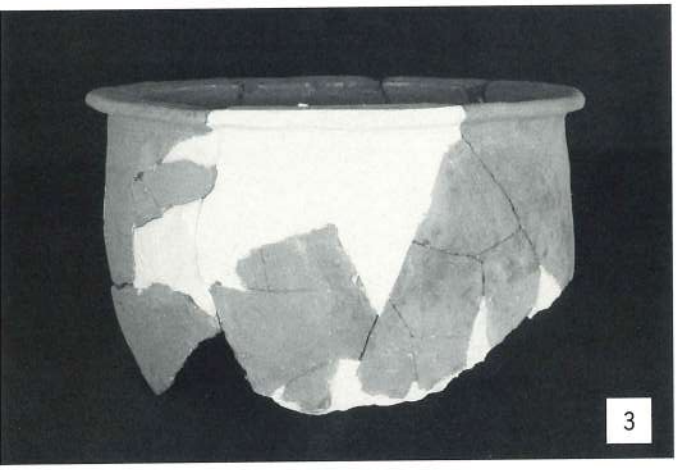
6　79　SK-622出土

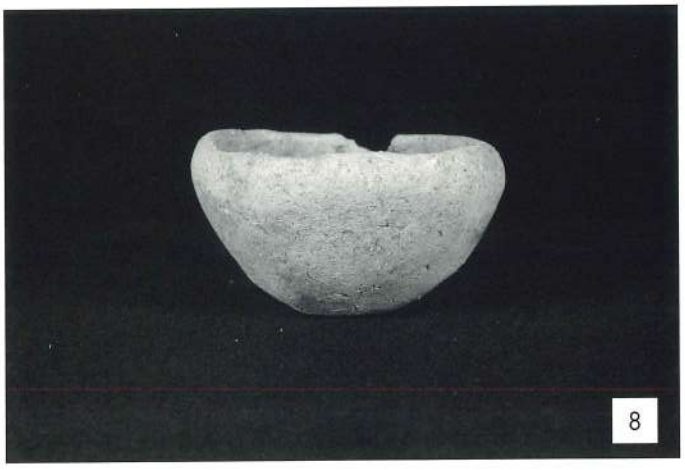
7　80　SK-622出土

8　85　SK-643出土

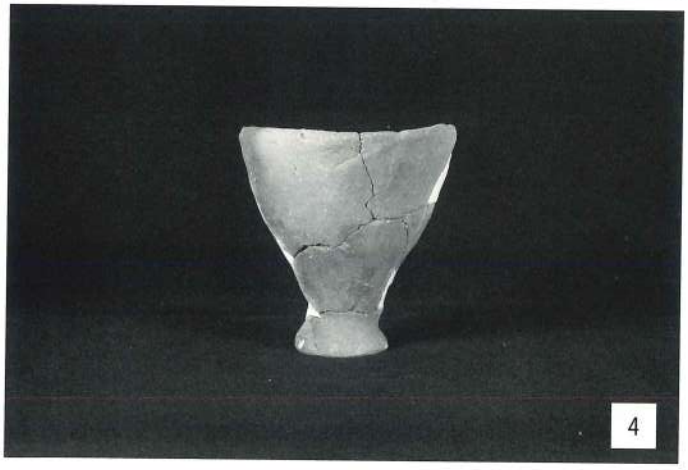








1　89　SK-643出土
2　91　SK-643出土
3　92　SK-643出土
4　93　SK-643出土
5　94　SK-643出土
6　95　SK-643出土
7　96　SK-664出土
8　97　SK-664出土



1　98　SK-800出土

2　99　SK-800出土

3　100　SK-800出土

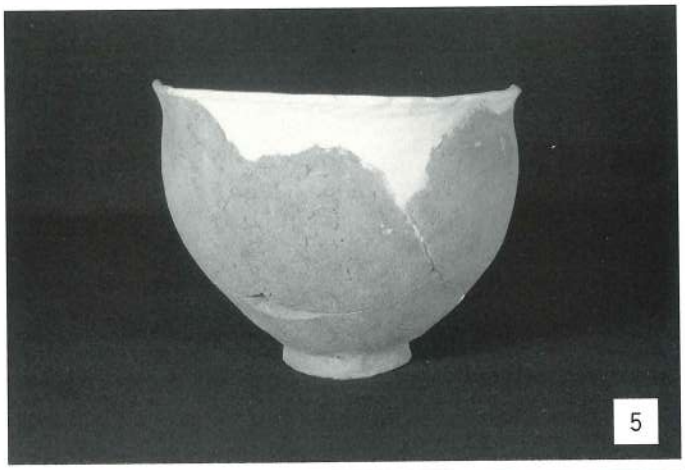
4　101　SK-800出土

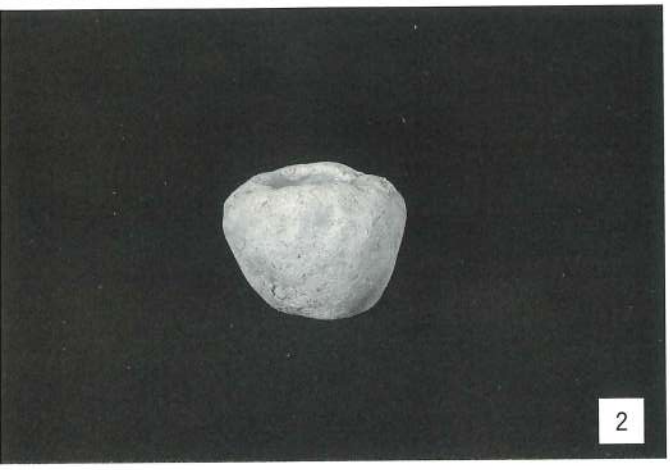
5　102　SK-800出土

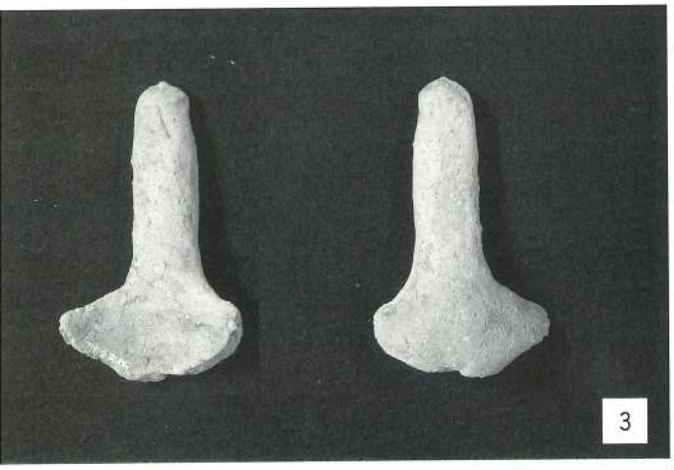
6　105　SH-818出土

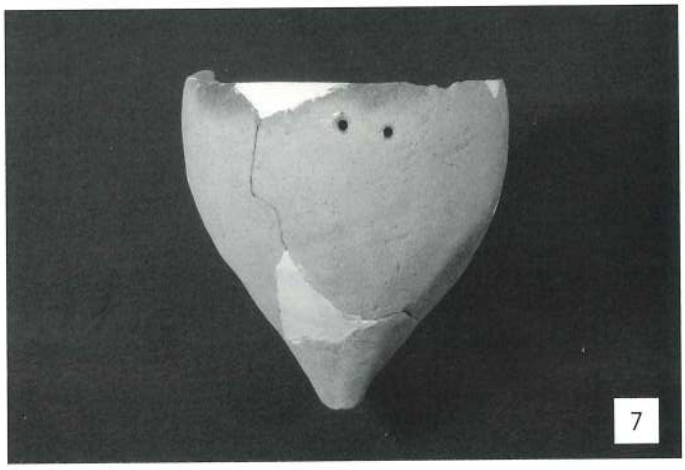
7　106　SH-818出土

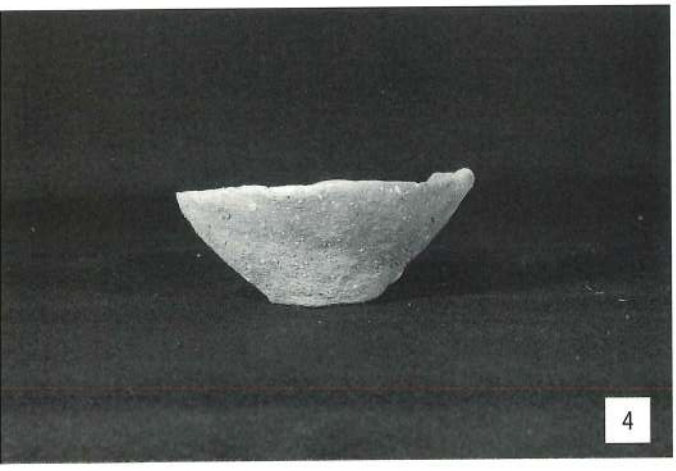
8　114　SH-822出土

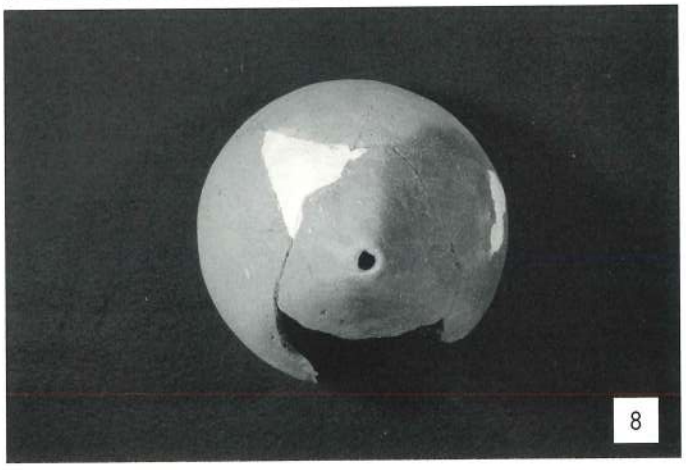






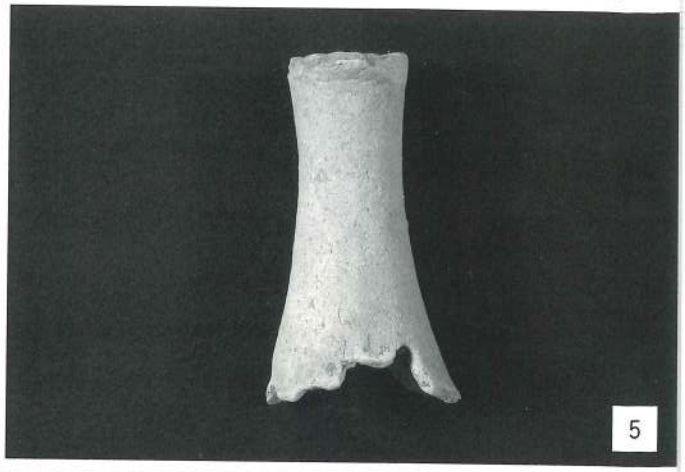


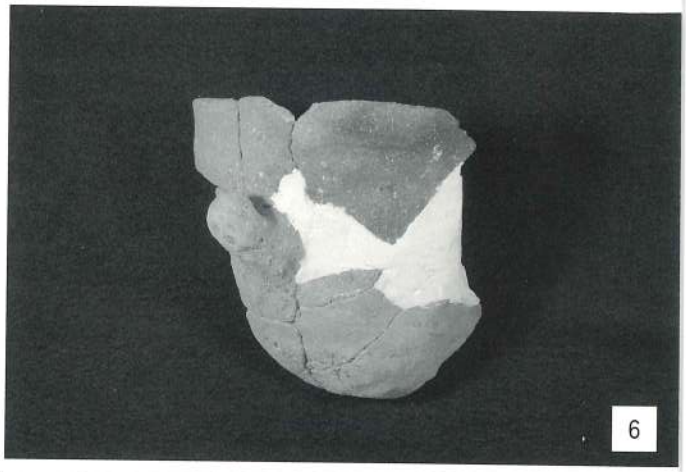


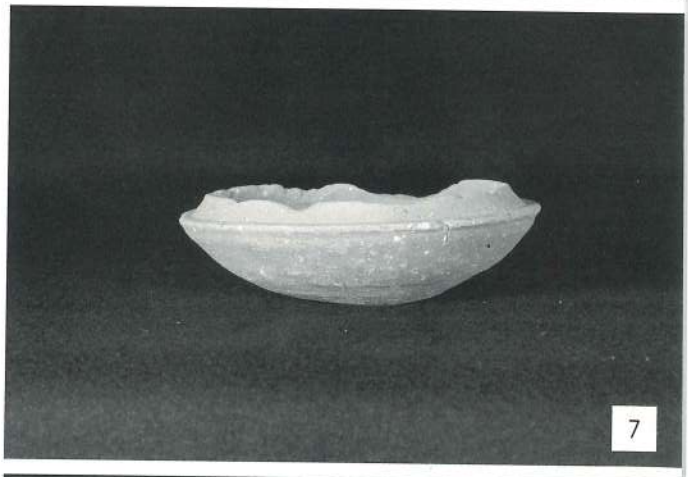


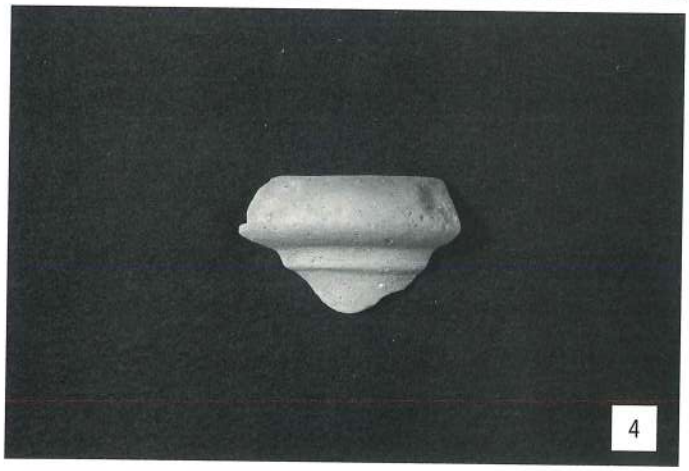
1　115　SH-822出土
2　117　SH-825出土
3　118　SH-825出土
4　134　SH-839出土

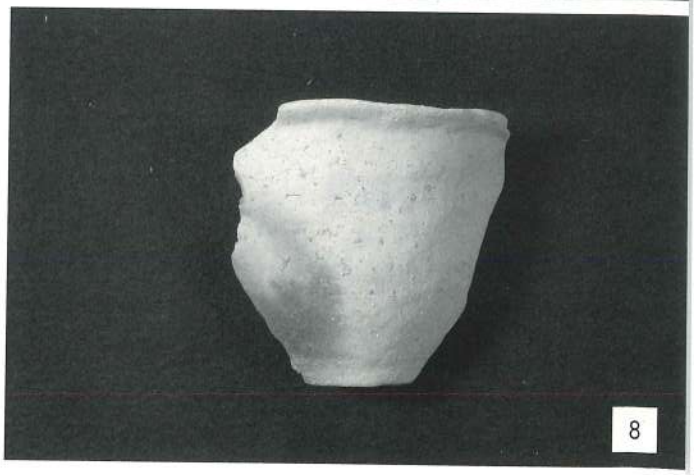
5　136　SH-840出土
6　137　SH-840出土
7　138　SH-840出土
8　138　SH-840出土





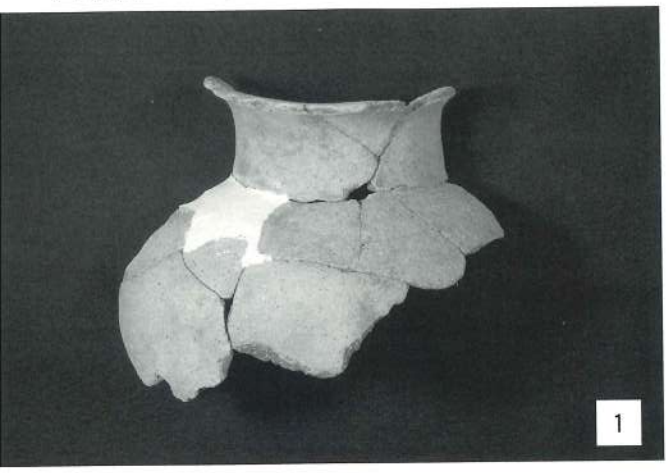


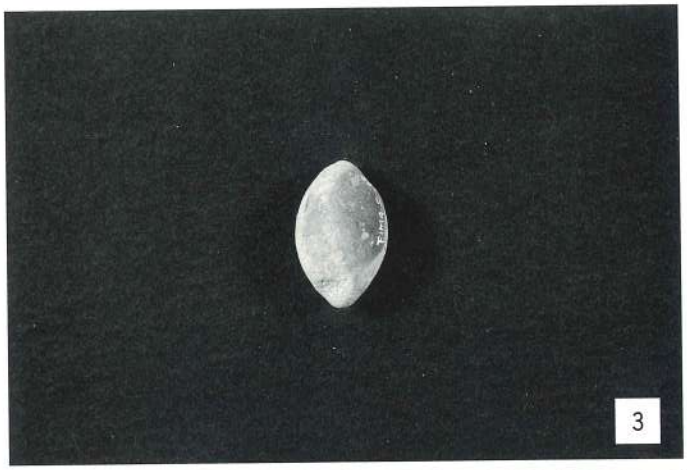


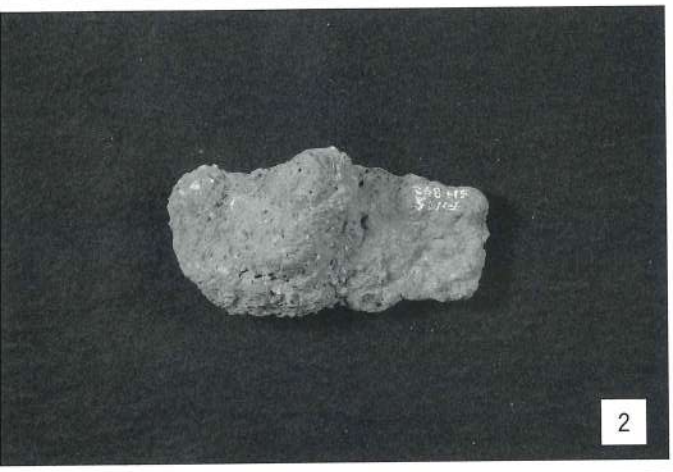


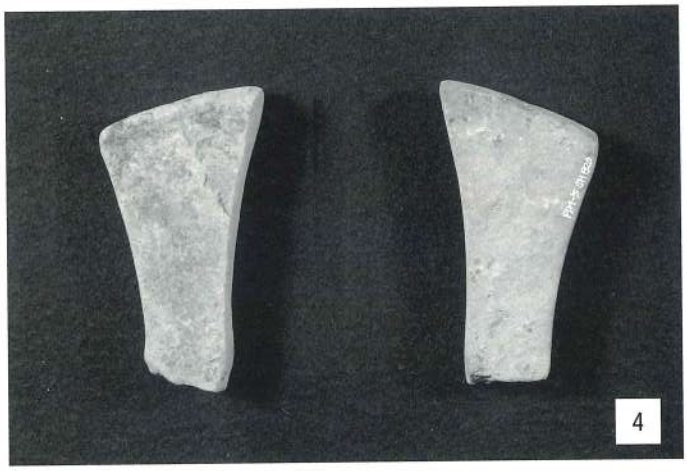
1　139　SH-840出土
2　140　SH-840出土
3　141　SH-840出土
4　142　SH-840出土

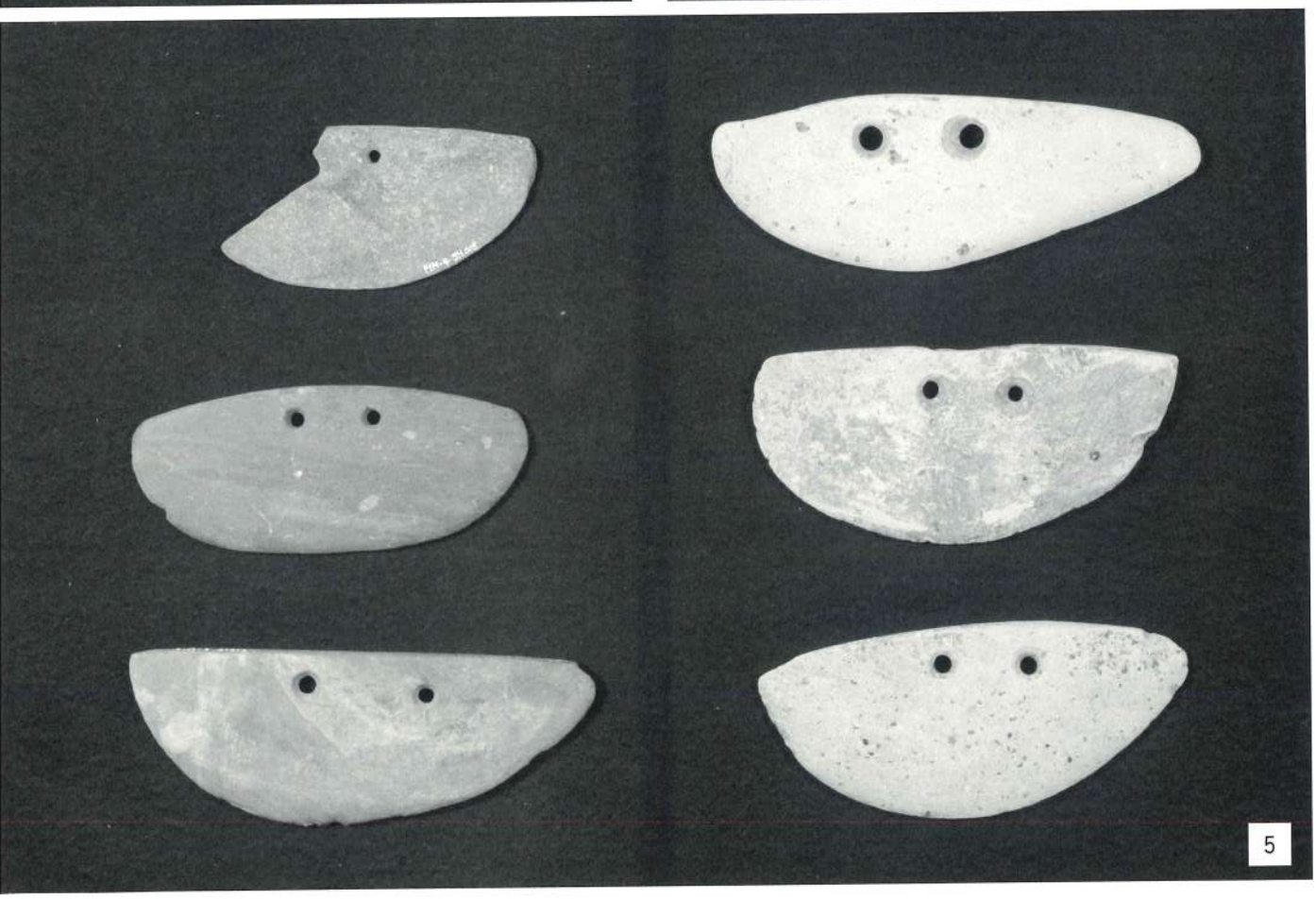
5　143　SH-840出土
6　155　SH-851出土
7　157　SH-851出土
8　164　SH-855出土











1　174　SK-862出土

2　176　鉄剣　SH-842出土

3　177　土弾　SH-605出土

4　178　砥石　SH-820出土

5　石包丁

左上）179　SH-605出土・右上）182　SH-617出土

左中）180　SH-614出土・右中）183　SH-617出土

左下）181　SH-616出土・右下）184　SK-619出土

報告書抄録

ふりがな	ふないしみなみいせきⅡ
書名	船石南遺跡Ⅱ
副書名	昭和60年度佐賀県農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	上峰町文化財調査報告書
シリーズ番号	第22集
編著者名	原田　大介
編集機関	上峰町教育委員会
所在地	〒849-0123　佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4　上峰町民センター内　Tel／Fax0952-52-3833
発行年月日	2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
船石南遺跡 (ふないしみなみいせき)	佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本谷 (さがけんみやきぐんかみみねちょうおおあざつつみあざいっぽんだに)	41345	2010	33°20′20″	130°25′36″	1985.5.27 ～ 1986.1.31	4,500m²	農業基盤整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船石南遺跡	集落跡 墳墓跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代	甕棺墓　105基 土壙墓　20基 竪穴式住居址　51軒 掘立柱建物址　4棟 土壙等　55基 祭祀遺構　4基 古墳　1基	弥生式土器 土師器・須恵器 鉄製品 土製品 石器類	

上峰町文化財調査報告書　第22集

船石南遺跡 Ⅱ

平成14年３月20日　印　刷
平成14年３月29日　発　行

編　集
発　行　上峰町教育委員会
佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4

印　刷　㈱ 昭和堂 佐賀支店
佐賀県佐賀市高木瀬西４丁目12-1